群馬県文化財総合調査報告書第一集

群馬県教育委員会編

利根・沼田の文化財

群馬県文化財総合調査報告書第一集

群馬県教育委員会編

利根・沼田の文化財

序

群馬県内には沢山の文化財があります。ドライブや散策で思いがけず、路傍の石仏や山寺で阿弥陀様に逢ったりするのは楽しいものです。

こうした文化財には祖先達の生活が感じられ、セカセカ生きている私達に新鮮な驚きや潤いを与えてくれます。

しかし、文化財にとって現在は受難の時のようです。生活形態が変ったり、娯楽や信仰も一変したりして次々と破壊、消滅、散逸していき、このまま行けば気がついたら文化財は何もなくなってしまうという事態にもなりかねません。

群馬県教育委員会では県内の文化財を保護する為に、どこにどういう文化財があるのかという基礎的な資料を収集する、文化財総合調査を五カ年計画で実施しています。

昭和四十七年度に利根・沼田地区を調査し、この度報告書がまとまりましたので公刊します。

利根・沼田地区は谷川、尾瀬、白根山、三国山、赤城山などの山々に囲まれ、利根川、片品川、赤谷川などの川筋に沿って開けた地方で、沼田盆地がその中心になっています。

この地方は古くから開けており、平安時代初期に編纂された「和名類聚抄」に渭田（ヌマタ）、男信（ナマシナ）、笠科（カサシナ）、呉桃（ナクルミ）の四郷が利根郡にあげられ、その後利根荘、土出荘の荘園が設置されています。戦国時代に武田、北条、上杉の戦国大名の争乱の渦中にまきこまれ、真田氏が支配するようになったが、茂左衛門一揆などにより改易され、本多、黒田、土岐氏がその後支配しています。

この地方にはこうした歴史から生み出された建造物、彫刻、絵画、古文書をはじめ、秩父古生層以後の地質現象、山間部の動物、植物、雪国独特の生活用具などが豊富に残されています。

本書が沢山の方に有意義に利用されることを期待いたします。

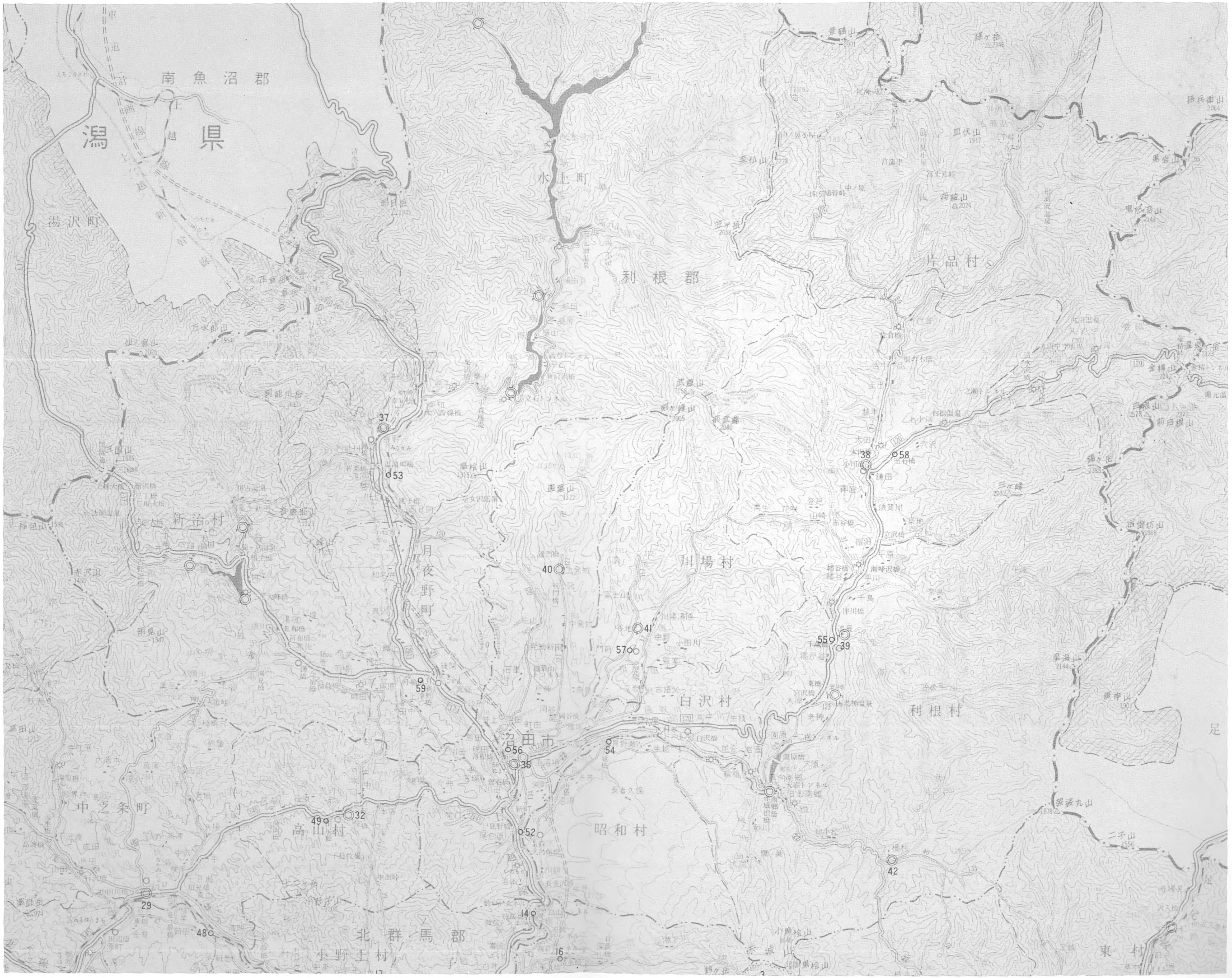
末筆ながら調査および報告書作成にご協力いただいた方々に厚く感謝の意を表します。

昭和四十九年　三　月　二十五　日

群馬県教育委員会

教育長　山　川　武　正

利根・沼田全図


南魚沼郡
潟県
湯沢町
水上町
利根郡
片品村
新治村
月夜野町
川場村
白沢村
利根村
沼田市
中之条町
高山村
昭和村
北群馬郡
小野上村
東村
足
37
53
38
58
40
41
57
55
39
59
56
36
54
32
49
52
42
29
48
14
16

利根・沼田の文化財　目次

序
利根・沼田地区地図
目　次
調査の経過……一
一、文化財総合調査実施要綱……一
二、絵画彫刻調査要綱……二
三、建造物調査要綱……二
四、石造美術品調査要綱……二
五、有形民俗資料調査要綱……三
六、民俗芸能調査要綱……三
七、古文書調査要綱……四
八、記念物調査要綱……五
九、調　査　員……六
十、地区調査員……六
絵　画……七
はじめに……七
沼田市……八
筆者不詳　閻魔十王と地蔵菩薩図（八）、北村明道筆　稚児礼賛図、野沢蓼洲筆　山水図（九）、同　秋景図、渡辺華山筆　韓信堪忍図、金井烏洲筆　羅漢図（一〇）、岡本豊彦筆　仙客囲棋図、青木翠山筆　寒江桐落図（一一）、結城素明筆　柳下高士図、北村明道筆　弘誓稚児図、岡田晴峰筆　山水図（一二）、野沢蓼洲筆　子持山秋色図、橋本香坡筆　春景山水図（一三）、筆者不詳　五大尊図、青木蓼山筆　花卉図、筆者不詳　不動明王図（一四）、伝俵屋宗達筆　四季百花図、筆者不詳　関羽図、新井洞巌筆　疎松溪泉図、同　天地無塵図（一五）、青木翠山筆　竹林七賢人図（一六）、筆者未詳　猛虎図、北村明道筆　木花開耶姫図、同　静御前図（一七）、同　吉野山の静御前、同　人物図、同　騎馬合戦図、岸浪柳溪筆　和靖愛鶴図、狩野常信筆　鳩鳥居木図（一八）、狩野探信筆　船中月見布袋図（一九）
白沢村……一九
新井洞巌筆　山水図（一九）、同　梅溪山水図、生方清逸筆　四季花友図、豊洲筆　人物画、角田静竹筆　菊花図（二〇）、上野探雲筆　竹林七賢人と人物図、金陵筆　六曲屏風（二一）
利根村……二三
谷文晁筆　琴棋書画図、伊東深水筆　楓下美人図（二二）、荒木寛畝筆　老松牡丹孔雀図、荒木十畝筆　牡丹図、吉川霊華筆　観音図、武市半平太筆　美人図（二三）、青柳琴僊筆　十六羅漢図、燕恪筆　帰去来図と人物図（二四）、尚信筆　枯木練鵲図（二五）
片品村……二五
青木翠山筆　関羽図（二五）、生方清逸筆　徳川十六騎図、同　風神雷神図（二六）、同　風竹群雀図、伝狩野探幽筆　岩上鷹図、青柳琴僊筆　蘭亭曲水図、青木翠山筆　松下双鶴図、林青山筆　高士観瀑図、赤山筆　牡丹唐獅子図（二七）
川場村……二八
筆者不詳　十六善神図、同　観音図、上野探雲筆　釈尊降誕図（二八）、三村春如筆　釈尊涅槃図、祖観筆　釈迦達磨維摩図（二九）、探雲斉筆　五祖像図（三〇）、上野探雲筆　人物花鳥図、谷文晁筆　山

水図、金井烏洲筆　秋山訪友図（三一）、上野探雲筆　春冬山水図、青木翠山筆　夜雨朝霽図（三二）、円山応挙筆　秋山懸瀑図、上野探雲筆　竜図、狩野英信筆　郭子儀図、高久隆古筆　農耕図（三三）、明田梅渓筆　梅花図、関武嶽筆　西園雅集図（三四）、豊沢筆　人物図、福田半香筆　秋江漁遊図（三五）
月夜野町……三五
椿椿山筆　花鳥図、佐久間象山筆　山水図（三五）、青柳琴儔筆　美人琴棋書画図、同　西園雅集図（三六）、狩野永真筆　寒山子図、同　楼閣山水図（三七）、狩野周信筆　春秋耕作図（三八）、同　夏冬山水図、谷文晁筆　人物図、狩野探雪筆　枯木群鴉図、奥原晴湖筆　江山梅花図（三九）、菅井梅関筆　山水図、青木翠山筆　楠公父子図（四〇）、青木南湖筆　山水図、青柳琴儔筆　前赤壁図（四一）、同　秋景山水図、井上無蓋筆　万歳図、児玉果亭筆　人物図（四二）、滝和亭筆　双鶏図、同　一品当朝図（四三）、児玉果亭筆　富士山図、青柳琴儔筆　玉堂富貴図、林青山筆　西園雅集図（四四）、同　人物図、同　波に鯉図、菅井梅関筆　月夜雪梅図、狩野柳伯筆　松下高士図（四五）、青木翠山画　城光同句書、利根川月海筆　鐘馗図、小栗十洲筆　白竜図（四六）
新治村……四七
狩野洞春筆　牡丹図、筆者不詳　十六善神図（四八）、金井烏洲筆　雪樹双鴉図、滝和亭筆　富貴万年図、林豊山筆　月夜梅花図、同　梅花図（四九）、林青山筆　韓信出胯下図、木内晋斎筆　菅公図（四九）、同　蓬莱山水図、同　山水図、観応道察筆　達磨図（五〇）
昭和村……五一
上野探雲筆　夏冬山水図、筆者不詳　黒龍図（五一）、生方清逸筆　梅花群雀図、燕恪筆　寿老双鶴図（五二）
彫刻……五四
役ノ行者像（白沢村観音寺）、毘沙門天立像（同村雲谷寺）、地蔵菩薩半跏像（同寺）、菩薩立像（片品村大御堂）（五四）、薬師如来坐像および月光菩薩立像（川場村武尊神社）（五五）、仏種慧済禅師像（同村吉祥寺）、広円明鑑禅師像（同寺）、大日如来坐像（同村大日堂）（五六）、聖観音坐像（月夜野町明徳寺）（五七）
建造物……五八
はじめに……五八
調査報告……五八
諏訪大明神社殿（沼田市）（五八）、戸鹿野八幡宮本殿（同市）（六一）、虚空蔵菩薩堂（同市）（六二）、観音寺観音堂（白沢村）（六四）、同寺護摩堂（六五）、諏訪神社（利根村）（六六）、薬師堂（同村）（六八）、武尊神社（片品村）（六九）、清雲寺楼門（昭和村）（七二）、吉祥寺（七三）、薬師堂、太右衛門翁の道場、湯原薬師堂（七四）、桂昌寺本堂、延命院本堂、生品堂、武尊神社舞殿（以上川場村）（七五）、八幡宮、諏訪神社（七六）、武尊神社、観音堂、富士浅間神社、菅原神社、大峯神社（七七）、建明寺（以上水上町）、諏訪神社、神明神社、日枝神社舞台（七八）、熊野神社、駒形観音堂、野々宮神社、荒沢不動堂（以上新治村）、三峰神社（七九）、龍谷寺本堂、下師の観音堂、増田一統観音堂（八〇）、弘法大師堂、天理教沼田分教会、神道一心流源武場、蚕影山二十三夜堂、常恩院本堂（八一）、牧野神社本殿、小持神社本殿、木之根不動堂、法泉寺庫裡、武尊神社本殿、小川神社本殿、お駒供養堂（八二）、嶽林寺、月夜野神社本殿、村主八幡宮本殿（八三）、馬廻り堂、如意寺本堂、中之神社（八四）、若宮八幡宮本殿、八幡宮本殿（以上月夜野町）（八五）
石造美術品……八六
はじめに……八六
宝篋印塔……八七
東光寺塔（沼田市）（八七）、綱子の塔（水上町）（八八）、上久屋の塔（沼田市）、延命院の塔（川場村）（八九）、根利の塔（利根村）（九〇）
五輪塔……九一
雲谷寺塔（白沢村）（九一）、新治の塔（九二）

無縫塔……九二
延命院無縫塔（川場村）
板碑……九三
石仏……九六
十王仏（白沢村雲谷寺）（九六）、磨崖仏（川場村）（九七）
層塔式庚申塔……九八
信州高遠石工の作品……九九
調査日乗……九九
民俗芸能……一〇一
はじめに……一〇一
調査報告……一〇二
神楽……一〇三
太々神楽（新治村）、同（利根村）（一〇二）、小川神社神楽（月夜野町）（一〇三）、箱根権現神楽（昭和村）、河内神楽（沼田市）（一〇四）
獅子舞……一〇四
獅子舞（利根村追貝）（一〇四）、同（同村穴原）（一〇五）、同（同村根利）（一〇六）、同（川場村萩室）（一〇七）
その他……一一四
沼田仲町祭囃子（沼田市）（一一四）、高平の祭囃子（白沢村）、念仏（川場村）（一一五）、ヤッサ祭（一一六）、浦安の舞、古馬牧人形芝居（以上月夜野町）（一一七）、ヤーヤーどり（白沢村）（一一八）、かつぎ万燈（一一九）、百万遍（以上昭和村）、お天気祭り（川場村）（一二〇）、猿追い祭り（片品村）（一二一）、春駒（川場村）（一二三）、あめうり唄（白沢村）（一二四）、民謡（片品村）（一二五）
古文書……一二六
はじめに……一二六
調査報告……一二八
沼田市川田村概況……一二八
深津静夫家（一二九）、平井靖二家、塩野文太郎家、生方満太郎家、屋形原区有（一三〇）、下川田区有、岩本区有、上川田区有（一三一）
沼田市池田地区……一三二
奈良村区有、石田恒太家、左部賢家、松井利雄家（一三二）
白沢村概況……一三三
小野芳夫家（一三三）、小林進次家、小林敏雄家、小林久豊家、小林精一家（一三四）、佐藤民衛家、椎原大三郎家、岩室区有、岡村作次郎家、小暮六蔵家（一三五）、生方伊雄家、禅定院、宮田福松家、鶴渕工家、雲谷寺、松井弘家、松井清家、高平公益社、松井福一郎家、鳥山鳴家、小野良太郎家（一三六）、中村輔家（一三七）、中村辰雄家、中村重勝家（一三八）
利根村概況……一三八
星野泰宏家（一三九）、金子満利家、星野優家、星野正幹家、星野靖家、高戸谷共有事務所、金子弥五郎家、金子武男家、平川区有（一四〇）、大揚区有、大原区有（一四一）、昌龍寺、小林広家、金子家茂家、穴原区有、園原区有、桑原勉家、多那区有、郷原石松家、根利区有（一四二）、柿平区有、吉野勇家、鈴木接雄家、鈴木順一家（一四三）
片品村概況……一四三
松浦志夫家（一四三）、入沢傑治家（一四四）、東小川区有、御座入区有、星野利家（一四五）、星野辰雄家、高橋安次家（一四六）、桑原邦二家、第二区区有（一四七）、第三区区有（一四八）
川場村概況……一四九
関吉計家（一四九）、立岩区有、天神区有（一五〇）、新井伸一家、門前区有（一五一）
古馬牧村概況……一五二
増田昌寿家、後閑区有、櫛渕辰男家、櫛渕和男家（一五三）、大沼区有、上牧区有、吉平組、下牧区有、真庭区有（一五四）
桃野地区概況……一五四
石倉区有、月夜野町組区有、小川島区有、竹改戸区有、赤見岱一

家、後閑祐次家（一五五）
水上町概況……一五五
藤原中区有（一五五）、林寿美二家、粟沢区有（一五六）、湯原区有、阿部留吉家、谷川区有、阿能川区有（一五六）、小仁田区有、小日向区有（一五八）
新治村概況……一五八
原沢祐次家、森下金衛家、梅沢真一家（一五九）、阿部家、笛木四郎右衛門家、笛木二郎家（一六〇）、見城武重家、河合三郎家、原沢佐太雄家、林佐治衛家、林正明家、高橋勇家、東峯須川区有、河合茂雄家、綿貫武一家、入須川区有、本多起三郎家、布施区有、原沢直八郎家、原沢賢治家（一六一）
昭和村概況……一六一
橡久保区有（一六二）、林厚一家、角田勝美家（一六三）、川額区有、入原区有（一六四）、高橋勉家、真下伊知藏家（一六五）、真下一久家（一六六）、昭和村立南中学校、昭和村役場（一六七）、林謙蔵家、横坂権之助家、林成一家（一六八）
資料編……一七〇
1　天文二十一年三月十三日　武田氏朱印状……一七〇
2　天正六年五月二十三日　武田勝頼定……一七〇
3　天正八年四月二十八日　宗誉蔵状……一七〇
4　庚辰（天正八年）五月六日　真田昌幸感状……一七一
5　天正八年六月二十七日　真田昌幸奉書……一七一
6　天正九年十月十二日　寺領安堵状……一七一
7　天正十年十二月十二日　朱印状……一七一
8　天正十七年十一月二十一日　伊奈熊蔵朱印状……一七一
9　壬極月二十日　北条氏邦朱印状……一七二
10　欠年　北条氏邦感状……一七二
11　二月十五日　北条氏邦感状……一七二
12　壬十二月五日　丸山土佐守奉書……一七三
13　天正十八年八月二十五日　下河田検地帳……一七三
14　慶長五年二月十二日　朱印状……一八六
15　慶長八年九月七日　後閑山支配等に付き札……一八六
16　慶長十三年十二月朔日　新田町之事……一八六
17　午十月二十七日　朱印状……一八六
18　元和三年三月五日　新巻布施河原新田立之事……一八六
19　元和五年十二月二日　知行安堵状……一八七
20　元和六年四月　伝馬朱印状……一八七
21　酉九月朔日　須川山に付き掟……一八七
22　午十月二十日　須川山に付き定……一八七
23　卯十月二日　郷中支配に付き札……一八七
24　丑九月四日　新田立に付き定……一八八
25　丑九月四日　須川山に付き定……一八八
26　極月三日　酉之年貢受領覚……一八八
27　辰十一月十九日　借銭に付き札……一八八
28　未二月十六日　勿木之儀に付き証文……一八八
29　未二月十六日　諸役に付き証文……一八八
30　子卯月二日　竹木等に付き定……一八九
31　寛永八年三月四日　徳川家光朱印状……一八九
32　寛永十三年二月十二日　跡式譲渡証文……一八九
33　寛永十六年四月　依馬役に付き訴状……一八九
34　万治三年霜月朔日　山越古道守備に付き定……一九〇
35　延宝七年正月　屋敷田畑譲渡手形……一九〇
36　天和元年十二月二十三日　借米願……一九〇
37　貞享元年三月　検地御条目写帳……一九一
38　貞享元年九月十二日　検地終了に付き一札……一九三
39　貞享三年九月　御検地道定帳……一九三
40　欠年　阿部家系図……一九五
41　元禄十六年五月　古切支丹類族死失存命帳……一九六
42　正徳年間　掟……一九七

43　寛延元年九月　定免御請証文……一九七
44　寛政六年五月　博奕制禁に付き議定証文……一九八
45　天保八年八月　村中議定連印帳……一九八
46　嘉永四年二月二十七日　藤原山稼に付き申上書……一九八
47　慶応四年五月二十四日　書簡……一九九
48　慶応四年五月二十八日　書簡……一九九
49　慶応四年五月　官軍諸藩出兵器械兵粮運送等人馬継立賃銭割立……二〇〇

植物……二〇一
はじめに……二〇一
調査報告……二〇一
名木・巨樹・老木の類……二〇一
馬かくれ杉、篠尾神社の欅、同公孫樹、砥石神社の杉、下川田の桜、琴平神社の五葉松（二〇二）、原形原の紅梅（以上沼田市）、笛代桜（白沢村）、経塚の一本松、内楽の桜、塚原の大槻、不動様の杉並木、十二の一位、山妻有大明神の桜、高戸谷の杉（以上利根村）、谷地のしゃくなげ、愛宕神社の杉、谷地の大杉、清岸院の樫、鎮守の欅、生品の五葉松（以上川場村）、大峰山のなつつばき（二〇三）、竹改戸八幡の大欅、同大杉、滝沢家の大杉、如意寺のさつきつつじ、下の桜、後閑山の多行松、原沢家の黒松（以上月夜野町）、国道の大欅、永井の大山桜、同なつつばき、同とちのき（二〇三）、雨見山のこなら、永井のおにつるうめもどき、殿林の樅、十二神社の赤松、天神の下り松、雨の宮の大欅、山王様の藤、林家のなつぐみ、相俣のいざり松、猿ケ京の高野槇、永井分校の梨、河合家の梨（以上新治村）（二〇四）
湿原・低木叢・森林・高山植物帯の類……二〇五
玉原湿原（二〇五）、白樺湿原（以上沼田市）、大沼湿原（月夜野町）、大峰山のシャクナゲ群落（水上町）、永井西川岸天然林、香才の湿地（二〇六）、川手山の天然林、駒形山の天然林、西標山の築庭、同岳樺林、三国山のあかみのイヌツゲ群生地、太源太山のアカモノ群生地、三国山のサラサドウダン群生地、三国山中段のお花畑、くぐつが橋の植物群落、大盤若の森（以上新治村）（二〇七）
あとがき……二〇八

動物……二一四
モリアオガエル繁殖地、ヤマネ生息地、キセルガイ類生息地（二一四）、モリアオガエル繁殖地（以上月夜野町）、コウモリ穴（二一三）、モリアオガエル繁殖地（以上新治村）、同（水上町）（二一三）
後記……二一一
地質鉱物……二一三
利根沼田地区の地質鉱物の概要……二一三
中生代植物化石（白沢村岩室）（二一三）、中世代貝化石（片品村戸倉）（二一三）、象歯化石（川場村富士山）（二一九）、中世代貝化石（水上町奥利根）、新第三紀有孔虫化石（新治村永井）（二一六）、ズニ石（新治村入須川）（二一七）、ワイラケ沸石（新治村月瀬）（二一六）
有形民俗資料……二五七
はじめに……二五七
I　衣食住……二五五
A　衣……二五五
婦人の労働着、ソデナシ、ユキバカマ、モモヒキ（二五五）、ミノ、メーミノ、コシミノ、ハバキ（二五四）、ゾウリ・ワラジ、ウソ・ウソグツ、ナガグツ（二五三）、カンジキ（二五三）
B　食……二五三
ケシネビツ、ミソオケ（二五三）、箱膳、ハンギリ、銘銘皿、ミソコシザル（二五二）、ヤゲン、キバチ、クチキバチ・コブキバチ（二五一）、ニガストリ、味噌ふみハッキリとしゃもじ
C　住……二四九
上棟餅入俵、炉端と火吹き竹（二四九）、ハネツルベ、勝手の棚、ヒダナ、ヒウチバコ（二四八）、ひで鉢、トウガイ、ショクダイ、屋根

葺用具（二四七）、コザレイ、箒鋏み、やぐら時計（二四六）

II 生産生業……二四五

脱穀用杵、ボウチボウ・クルリ（二四五）、田舟、オオアシ、ズカス、カンナ、センバコキ（二四四）、桶、トズカリ、ノメシ、バッタリ（二四三）、ウサギッチリ、豆腐製造用具（二四二）、するす（二四一）、漆かき、ネコのイジメ（二四〇）、箸けずり、種子入れ、コキバコ、炭焼き用具（二三九）、熊とり槍、わな、籾ぶるい・フルイ（二三八）、木鉢製作具一式（二三七）、キコリ道具、まぶし織り機（二三六）、ヒョウグチ、コナウス・トウフウス・石臼、コシゴ・ド・ビク・ブッテイ、煙草刻機、油搾機、コクビツ（二三四）、ワラビコ沈澱桶

III 交通・運輸・通信……二三三

背負梯子と背中あて（二三三）、タガラ、フゴ、ショイビク（二三二）、柳行李・竹行李、ザマカゴ、クメケイ・ザル（二三一）、ハケゴ、ニナイ、ジゴロ

IV 社会生活……二三〇

竜吐水、ホカイ、ホケイと容器

V 信仰……二二九

稲荷様、ウシッコサマ、天神様、藁人形、カミノハチ

VI 民俗知識……二二八

日時計、繭桝、トマス、マス、一斗マス

VII 人の一生……二二六

ウブユダライ、ウブギ、安産守り、力綱、ひっかけ着物、イジメ、ハナモチ型、ニグラ、銚子

VIII 年中行事……二二四

わらわん

調査の経過

一、文化財総合調査実施要綱

1　趣　旨

諸開発事業の進展、生活様式・意識の激変により、文化財は急速に散逸、消滅しつつあり、現段階で文化財を掌握する必要に迫られている。文化財全般について総合的に所在および現状を調査し、記録保存のうえ今後の保存計画の資料とする。

2　対象地域

利根教育事務所管内　一市二町六村

沼田市　利根郡片品村　利根村　白沢村　昭和村

川場村　水上町　新治村　月夜野町

3　期　間

昭和四十七年四月一日～昭和四十八年三月三十一日

4　調査主体者

群馬県教育委員会

5　調査協力機関

沼田市教育委員会・片品村教育委員会・利根村教育委員会・白沢村教育委員会・昭和村教育委員会・川場村教育委員会・水上町教育委員会・新治村教育委員会・月夜野町教育委員会

6　対象文化財

絵画　彫刻　建造物（民家は除く）　石造美術品　有形民俗資料

民俗芸能　古文書　記念物（動物、植物、地質鉱物）（国および県指定文化財は除く）

7　調査組織

(1)　総　務　班

調査の円滑な運営と総括を行なう

各市町村教育委員会教育長および担当職員

利根教育事務所長および担当職員

各調査班主任調査員

県教育委員会事務局文化財保護室長および担当職員

(2)　絵画彫刻班（4名）

(3)　建造物班（2名）

(4)　石造美術品班（2名）

(5)　有形民俗資料班（2名）

(6)　民俗芸能班（2名）

(7)　古文書班（9名）

(8)　記念物班（4名）　合計　25名

県文化財専門委員、その他から調査員を委嘱する。

(9)　地区調査員

調査の円滑な運営、所在調査（第一次調査）および第二次調査時の調査員の補助をするため次のうちから各市町村内から、委嘱する。

a　当該市町村文化財調査員

b　小・中・高校教諭　　c　その他　合計63名

8　調査方法

第一次調査

各市町村段階で、地区調査員により、各文化財の所在調査を行ない、調査カードに記入する。

絵画・彫刻・建造物・石造美術品・記念物および有形民俗資料については、写真撮影を行なう。

第二次調査

重要性、緊急性により記録作成を要するものを選定のうえ調査員による調査を行なう。

古文書については、目録作成を要するもの、記録作成を要するものに選別のうえ、調査を行なう。
民俗芸能については八㎜フィルムにより記録作成を行なう。

まとめ
次年度に「群馬県文化財総合調査報告書」Ⅰとして刊行する。

内容
(1) 第二次調査報告（調査員執筆）
種目別に概観および代表的文化財調査報告
(2) 文化財所在地一覧
種目別に調査カードをもとにした一覧（個々の文化財の内容にも触れる。）

二、絵画彫刻調査要綱

対象絵画・彫刻
明治時代までの絵画・彫刻
美術品として価値の高いもの、絵画・彫刻史上意義のあるもの、および当該地方の文化史上意義のあるものに重点をおく。

調査方法
(1) 所在地の確認および写真撮影　第一次調査
(2) 調査員による現地調査　第二次調査

調査上留意点（特に絵画について）
(1) 寺院・神社等で大切に保存されているもの
(2) 地元作家のもの
(3) 次の系譜（省略）にのっている作家のもの
(4) 地区調査員がすぐれていると判断したものを選び、調査カードに記入する

調査カード記入上の留意点
(1) 区分・№欄は記入しない
(2) 法量は、表装を含めず画面そのものの法量を㎝で記入する。

三、建造物調査要綱

対象建造物
堂塔　社殿　その他（民家は除く）
意匠・技術的に優秀なもの、歴史的に意義のあるもの、および地方的特色を示すものに重点を置く。

調査方法
(1) 所在確認および写真撮影　第一次調査
(2) 調査員による現地調査　第二次調査

調査カード記入上の留意点
(1) なるべく多くの建造物について記入する。
(2) 「伝承」欄には、現在の信仰の内容についても記入する。
(3) 平面図は大まかなものでよい。
(4) 写真は正面、側面、柱の上の部分、その他特色のある部分が撮影できたら、添付する。

四、石造美術品調査要綱

対象石造美術品
五輪塔　宝篋印塔　宝塔　石幢　板碑　庚申塔　金工芸（鰐口、釣鐘など）　その他で、中世以前のもの、および近世以後のもので特殊なもの（重要な事件の記念碑、特にすぐれたもの等）

調査方法
(1) 所在確認および写真撮影　第一次調査
(2) 調査員による現地調査　第二次調査

調査上留意点
(1) 重要なものの銘文については拓本をとる。

(2) 信州高遠の者の作になるものは調査をする。
(3) 沼田地方には庚申塔に特色のあるものが多いので調査をする。

五、有形民俗資料調査要綱

対象有形民俗資料
庶民の生活　生産　信仰等に使用していた有形民俗資料全般
当該地区独特のもの、および全県・全国に共通なものについて調査する。

調査方法
一市町村内で特に豊富に有形民俗資料を保存している家を選定し、有形民俗資料全てについて調査する。

選定基準
(1) 豊富に有形民俗資料を保存している家
(2) 収集したものでなく、その場所で使用したものを保存している家
(3) 過去に使用したことがあるのみでなく、現在使用中のものでもよい。
(4) 調査カード（属紙）には、特色のある民俗資料一点ずつ記入する。

六、民俗芸能調査要綱

対象民俗芸能
神楽　祭囃子（屋台囃子）　獅子舞　地方歌舞伎　人形芝居　民謡
和讃（念仏）　義太夫　奇祭　その他
伝統芸能としてすぐれたもの　伝統保持度の高いもの　地方的特色を示すものに重点を置く。

調査方法
(1) 現在上演可能のもの　およびかつて上演していたものの所在確認　第一次調査
(2) 調査員による現地調査　第二次調査

調査上の留意点
(1) 歌詞・楽譜は第一次調査でも可能なかぎり収集する。
(2) 関連する道具・衣装・舞台・古文書についても調査する。
(3) 重要なものについては、録音および八㎜フイルムにより記録保存する。
(4) 民謡としては次のようなものがある。
木びき唄　きやり唄　木出し唄　さ流し唄　ど入れ唄　筏流し唄　草刈唄　追分節　桑つみ唄　蚕あげ唄　蚕祝唄　糸ひき唄　糸あげ唄　はたおり唄　田植唄　すもう甚句　お伊勢参り唄　する臼びき唄　石臼びき唄　大津絵節　投げ節（ひやかし節）　麦打唄　地形唄（胴づき唄・地づき唄）　古い盆踊唄　四つ足甚句　口説節　石投踊（石投音頭）　新潟口説　豊年踊　万作踊　八木節　ごぜ唄　春駒　祭文　ちょぼくれ　子もり唄　その他
(5) 次のような方が民謡を知っていると思われる。
うたの好きな人　うた（民謡）の上手な人　昔、音頭とりをしたことのある人（盆踊り歌なども知っている）　木びきをしたことのある人（木びき唄など山の唄を知っている）　山で木出しをした人（さ流し唄、ど入れ唄、鉄砲流し、一本流しを知っている）　川で筏をくんで材木を出した人（筏乗り唄を知っている）　とび職人、大工さん（木やりなど沢山知っている）　はたおりをした人（糸ひき唄、糸あげ唄、はたおり唄を知っている）　養蚕をした人（桑つみ唄、桑もぎ唄、蚕あげ唄、蚕祝唄など知っている）　麦打をした人（麦打唄、そば打唄、大豆打唄など知っている）　石臼・する臼びきをした人（石臼びき唄、する臼びき唄などを知っている）　子もりをした人（子もり唄などを知っている）
その他、かつてそうした職業にたずさわったことのある人が、その職業に関係のある唄を知っている。

調査カード記入上の留意点

(1) 「上演期日」欄は毎年定期的にやっている場合は、その月日を記入する。祭り等でやる場合には「―神社　春祭り」とも記入する。

(2) 「附帯目的」欄には「悪魔払い」「豊年祈願」等とその芸能の目的を記入する。

(3) 「附帯物」欄には、その芸能に附帯する物（獅子頭、太鼓、笛等）を記入する。

(4) 「附帯音楽」欄には、義太夫、囃子、唄等が附帯する場合記入する。

(5) 楽譜、文献があれば、添付する。その№を「添付楽譜№」「添付文献№」欄に記入する。

七、古文書調査要綱

対象古文書

明治二十年以前の古文書・記録・絵図・写真・版本（教科書・往来物・文学作品・儒学関係書籍・明治以後の令達類・規約・新聞・政社・会社規約等を含む）・巻子本（系図・武道、芸道免許等）その他所有者の家柄に関連する武器・衣類・旗じるし（拝領の品等）・桝（伊賀桝等）等の物件

調査方法

(1) 所在場所の確認とその概要調査　第一次調査

(2) 調査員による現地調査　第二次調査

調査上の留意点

(1) 文書の所在、所有者を洩れなく明確にする。

(2) 文書の保存状況、目録作成の有無、文書利用の有無等を明らかにする。

(3) 主な文書の目録を作成し、できれば全体の目録をとる。

(4) 下記事項に基づき、目録作成・筆写・写真撮影を行なう。

調査の重点及び基準

	目録	筆写	写真
① 戦国期の文書・記録	○	△	
② 慶長以後天和以前（真田改易）の文書及び記録	○	△	○
③ 沼田藩主側文書及び記録	○		○
④ キリシタン関係文書	○	○	○
⑤ 村年代記及び各家の系図	○	○	○
⑥ 村明細帳	○		○
⑦ 検地帳・年貢割付状・皆済目録・人別帳・五人組帳	○		
⑧ 見取騒動及び一揆関係文書	○		
⑨ 戸倉戦争、三国戦争関係文書記録	○		
⑩ 三国街道、会津街道交通関係文書	○		
⑪ 関所関係文書	○		
⑫ 入会・境論・山林・筏関係文書	○		
⑬ 農書・農業日誌・養蚕糸業・煙草・細見関係文書	○		
⑭ 明治以後法令・新聞・規約	○		
⑮ 年中行事・普請帳等民俗関係資料	○		
⑯ 村絵図・城絵図・交通絵図	○		○
⑰ 間引き、養育関係文書及び間引き絵馬	○		

調査カード記入上の留意点

(1) 住所欄には所有者が転居した場合は旧住所を、また町村合併以前の地名を記入する。

(2) 家柄欄は旧名主とか旧家臣とか御用商人とか記入する。

(3) 戦国文書以下の欄は点数を冊子になつたもの（例えば検地帳など）及び書状の形になつたもの（例えば年貢割付状など）に区分して数量を記入する。

(4) 摘要欄には区分ごとにまとめて何の関係文書（例えば関所関係文書）というようにその種別がわかるように記入する。

(5) 保存状況欄にはたとえば保存良とか、村誌等の時整理分類ずみとか、早急に保護を要するとか、現状と保存の要否を記入する。

(6) 参考文献欄には村誌に記載ずみとか、どの区分のものはどの報告書にあるとか、全体を早急に整理する必要ありとか、意見も加えて記入する。

(7) カードの裏面欄には一所有者ごとに所有文書のうち主なもの（基準参照）についてその年代（年月日）表題（冊子の場合は表紙の名、書状の場合は内容）を記入する。備考欄にはその文書の内容の説明を要するものについて記入する。一枚に記入しきれぬ場合は表面は№だけ同番号を記入して別のカードに書きついでもよい。

(8) 形状欄には一紙文書は「状」、冊子物のうち竪帳は「竪」、横帳は「横」、半横帳は「半横」、絵図等は規模をcmで記入する。

八、記念物調査要綱

対象記念物

1 動物

本県特有 または特有の産ではないが著名の動物およびその棲息地 その他

2 植物

名木 巨樹 老木 原始林・高山植物帯 珍奇な水草・藻・蘚苔類等の生ずる地帯 著しい植物分布の限界地 著しい栽培植物の自生地 その他

3 地質鉱物

岩石・鉱物及び化石の産出状態 地層の整合及び不整合・褶曲及び衝上 生物の働きによる地質現象 地層断層など地塊運動に関する現象 洞穴 岩石の組織 温泉・並びにその沈澱物 風化及び侵蝕に関する現象 硫気孔・及び火山活動によるもの 氷霜雪の営力による現象 貴重な岩石・鉱物及び化石の標本 その他

調査方法

(1) 所在地の確認 および写真撮影 第一次調査

(2) 調査員による現地調査 第二次調査

調査上留意点（植物について）

1 一般的留意点

(1) 従来記念物というと 名木・巨樹・老木・珍種のごとく、個体的なものが対象とされる傾向が強かった。今後は普通のものでも群落として価値あるものにまで視野をひろげて検討する。

(2) 急激な勢いで開発が進んでいる折から、原始林（厳密な意味ではもはや日本にはない。天然林程度と解釈してよいと思う）は勿論のこと、人工林でも将来価値あるものと考えられるもの（例えば ヶヤキ純林・天然に近い低山帯広葉樹林など）は一応検討する。

(3) 開花期をのがせない花・珍種・景観など、写真にとつておく。（出来ればカラーにして）

2 次の各対象物は特に注意する。

沼田市 ブナ林（迦葉山周辺）。湿原（玉原・白樺湿原）。シャクナゲ群落（佐山奥）。サクラソウ自生地（三峰？）。

片品村 低山帯 亜高山帯（丸沼～菅沼）の境界帯。クリンソウ自生地（武尊牧場）。

利根村 マツハダ天然林（利根奥？）。

川場村 高山植物群落（武尊山綾線）。亜高山帯針葉樹林（武尊山）。ヒカゲツツジ北限地（赤倉山）。トクサ群落（武尊山麓）。ザゼンソウ群落（武尊山麓？）。

水上町 蛇紋岩植物群落（谷川岳・朝日岳）。ブナ林（湯ノ小屋奥・水源地帯）。アスナロ天然林（宝川）。湿原（朝日岳～清水峠）。ヒメアオキ群落（青木沢奥）。ミズバショウ群落（上ノ原）。湿原（武尊山裏側）。

新治村 オオシラビソ残存木（平標）。高山植物群落（平標～仙ノ倉（三国峠～三国山）。ヒカゲツツジ（入須川）

月夜野町・水上町・新治村。

シヤクナゲ群落（吾妻耶山）。なお附近に　ニオイコブシ多数あり。

九、調　査　員

		（担当分野）
飯島　勇	県文化財専門委員	絵画
岸　大洞	沼田市文化財審議委員	絵画
細野正信	東京国立博物館美術課文部技官	絵画
永井信一	県文化財専門委員	彫刻
持田照夫	県文化財専門委員	建造物
桑原　稔	県立前橋工業高等学校教諭	建造物
金子規矩雄	県文化財専門委員	石造美術品
丸山知良	県議会図書室長	石造美術品
都丸十九一	県文化財専門委員	有形民俗資料
池田秀夫	県立博物館長	有形民俗資料
酒井正保	前橋市中央公民館社教主事	民俗芸能
福田　稔	下仁田町立東中学校教諭	民俗芸能
山田武麿	群馬大学教授	古文書
渋谷　浩	県立利根農林高等学校教諭	古文書
唐沢定市	県立吾妻高等学校教諭	古文書
中島　明	県立前橋工業高等学校教諭	古文書
淡路博和	新島学園高等学校教諭	古文書
井上定幸	県立養護学校教頭	古文書
長谷川清	前橋市立敷島小学校教諭	古文書
田島国明	群馬大学附属小学校教諭	古文書
駒形義夫	群馬大学附属小学校教諭	古文書
五味礼夫	県文化財専門委員	動物
栗田秀男	県立沼田高等学校教諭	動物
木崎喜雄	県文化財専門委員	地質
宮前俊男	県立中之条高等学校教諭	植物

十、地区調査員

沼田市　菊地慶四郎　水田稔　小野祐己　星野直也　高橋安治
白沢村　高橋武親　生方伊雄　桑原順澄　左貫悦雄
利根村　金子武男　桑原　勉　横坂金衛
片品村　星野義規　桑原才重郎　小林正二　萩原召司　梅沢千代松　坂西恒喜　入沢傑治　吉野由彦　笠原長治　左部小三郎　萩原正男　芝崎文夫　倉田寅尾　須藤幹一　星野佐助　千明　実　星野美雄　星野幸市　星野利夫
川場村　吉野八万夫　戸部織衛　高山広純
月夜野町　高柳武夫　増田清三　真庭唯芳　小野　勝　坂西賢光　石井周治　高井富二　真庭正二
水上町　須藤英夫　木村好次　石坂吉寿　中島米次郎　林　義明　阿部国之輔　中島一郎　阿部信雄
新治村　原沢宣也　河合洪太郎　高橋寿夫　岡村隆造　笛木弥一郎　片野一司　本多和善　三浦浅一郎
昭和村　中村一雄　林　成一　松井　清　山口重雄　島田民夫

（敬称略、順不同）

各市長村教育委員会、教育長および事務局職員、利根教育事務所長および職員の方に協力をいただいた。

絵　画

はじめに

絵画の部は、市町村教育委員会地区調査員が調査して、提出されたカードの総数四百四枚、それに添付された写真は三百六十一枚であった。そのうち書のカードが百三枚（添付写真百一枚）その他三枚（写真一枚）あり、絵画のカードは二百九十八枚（添付写真二百五十九枚）で、市町村別内訳は次の通り。カッコ内数字は写真の枚数。水上町は無提出。

市町村	絵　画	書	その他	合　計
沼　田	一一（一）	—	—	一一（一）
白　沢	四四（五二）	三一（三七）	—	七五（九〇）
利　根	五（五）	—	一（一）	六（六）
片　品	三七（二六）	—	—	三七（二六）
川　場	七五（四八）	九（八）	一（一）	八五（五六）
月夜野	六七（七六）	三三（三七）	—	一〇〇（一一三）
新・治	四五（三九）	二三（一五）	一（一）	六九（五四）
昭　和	一四（一二）	七（四）	—	二一（一六）
合　計	二九八（二五九）	一〇三（一〇一）	三（一）	四〇四（三六一）

カード数が示すように白沢、片品、川場、月夜野、新治の各町村では綿密な調査をされ、地区調査員の努力のほどがうかがえる。

このカードを参考にして、飯島、細野両先生と共に、八月二十三日から三日間にわたり、月夜野町、新治、川場、昭和村と沼田市（三カ所だけ）を各町村教委職員の案内で調査した。

郷土の画家、書家の作品は後日調査にゆずったが、点数が多かったため時間を要し、川場村の一部と沼田、白沢、利根、片品、水上の調査は出来なかった。これらの市町村は、四十八年十一月までの間に、単独調査をしたが、なお未調査の絵画が多くある。

往時からの旧家、代々名主を勤めたという家や富裕の家、書画愛好者の家には、豪華な表装と巨匠の落款にまどわされて書画屋に多額の金を払って買ったり、買わされたと思われる軸や、屏風が愛蔵されていた。

狩野派が断然多く、真偽はさておいて探幽、尚信、安信、常信、探信、栄川などの落款もの、それに南画系では谷文晁、渡辺華山らの落款あるものが多数あった。

城下町だった沼田には、藩主土岐家へ金子を献納した代償にもらったと伝えるもの、廃藩の際に払い下げた絵もあり、狩野派の画が多い。明治維新の際混乱した江戸で、著名巨匠の絵などを大量に買って来たという秘蔵ものもある。

当然ながら各寺院には仏画があったが、とくに秀れた閻魔十王図（地獄変相図）が沼田にあった。

県内の画家では上野探雲、金井烏洲、近代～現代になるが新井洞巌ら、地元沼田の生方鼎斉、青木翠山、橋本香坡、林青山、それに青柳琴僊ら、いずれも南画で立派な作品、とくに六曲屏風に代表作が見られた。

このほか僧や土地の画人の絵も多く保存されていた。これらは絵画美術文化財としての価値はどうであれ、風土から生れた拙なくもささやか

な文化の片影である。山間地で、絵筆紙墨も容易に入手しにくかった時代と環境の中で、手近な絵を模倣したり、楽しみながら独習し、里の人に望まれれば喜んで贈ったものが雪深い山村庶民の生活の煙りを吸いながら、長い歳月の間、愛観秘蔵されて来た軸や襖を見せられて、非常な親しみを覚えた。（岸　大洞）

沼田市

筆者不詳　閻魔十王と地蔵菩薩図

十一幅　絹本着色　丈九八　幅四二・五センチ（正覚寺蔵）

室町時代の作であろう。伝承によると、天正十八年沼田城主となった真田信幸の夫人、大蓮院が正覚寺へ寄進したもの。また大蓮院は同寺に葬られ、その供養のため徳川か本多が寄進したものともいう。（寺は災禍で諸記録焼失）

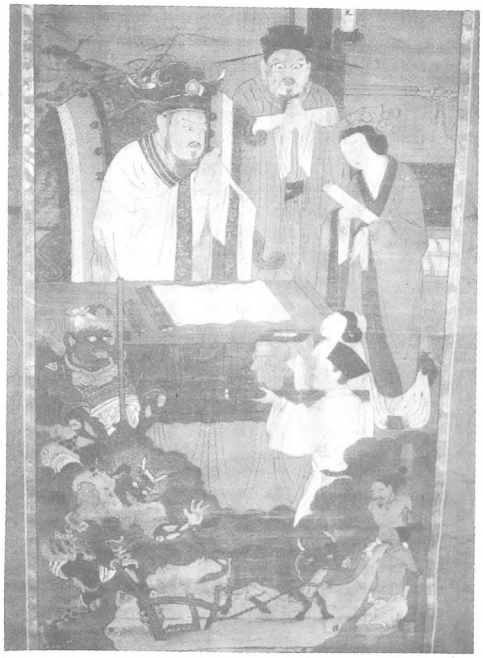
閻魔十王図（正覚寺蔵）

大蓮院は徳川家康の外曾孫である。本多忠勝の娘で名は小松姫。それを家康は養女にして信幸に嫁がせ、翌年信幸を沼田城主に据えたのであった。

本図は地蔵菩薩を中心に、左右五幅相対の構図に画き分け、各幅の上部に閻魔の名称を書いている。秀れた描線、筆格も高く、色彩も鮮かである。

各図とも閻魔の庁で閻魔帳を開いて亡者生前の罪業を審判する閻魔王を描き、下部には鬼卒に苛責され、また血の池、針の山、火の車、剣の谷に追い込まれ、舌を抜かれ、首かせさせられるなどの拷問懲罰をうけ、文字通り地獄の責苦の恐ろしい様相が描写されている。

名仏画師の筆になるもので、とくに地獄変相の部分の鮮烈な彩色は凄気を帯びている。各図の閻魔王の後には墨画の衝立を画いているが、北宋画で別人の筆とも見られる。利根沼田の絵画中、時代も古く、最高のものであろう。



閻魔十王図（正覚寺蔵）

保存は良いが、岩絵具の部分が絹と裏打紙を侵しており、補修が望まれる。

北村明道筆　稚児礼賛図

紙本着色　丈一〇三・五　幅一四三センチ（正覚寺蔵）

日展出品作。明道が沼田在住中に制作した最大の傑作である。題名は未詳のため仮りに稚児礼賛とした。

図は浄土宗祖の法然上人がまだ稚児の時、比叡山の僧兵が、双手で頭上高くさし上げている姿である。

法然は美作国（現岡山県東北部）の小役人の子に生れ、八歳の時に父がやみ討ちされ、亡くなる際に「刃で仇を討ってはならぬ」と訓された。そこで母を国に残し比叡山へ登って稚児になり、修行を重ね、二十歳で山を下り、黒谷でさらに修行、ついに浄土宗を開いた。

明道は高崎市に生れ、上京して初め蔦谷竜岬、のち児玉希望に師事した。画学生時代は婦人用の下駄の鼻緒、羽子板絵など画いて苦しい生活をつづけた。

北村明道筆　稚児礼賛図（正覚寺蔵）

年の暮の寒い夕方、いつもの問屋へ画いた鼻緒を届けに行く途中落してしまった。側に石の地蔵さんが立っていたので「どうしてくれる」と文句を言ったっけーと酔えば語る明道だった。

風景も描いたが人物画を得意とし、帝展、日展に十余回入選。しかし名利にうとい性格のため、画壇的には恵まれなかったけれども、歴史画家としては群馬県出身中の白眉である。

戦時中沼田へ疎開し、大作を幾点か残して東京へ帰り、豊島区長崎町に住み、去る三十七年六十四歳で没した。

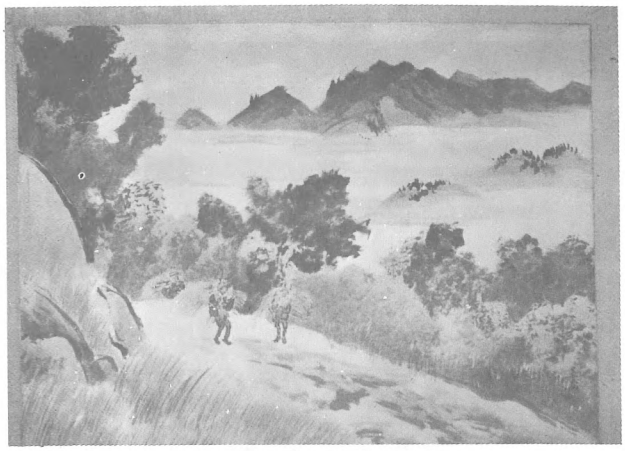
野沢蓼洲筆　山水図

絹本着色　丈五〇・五　幅一七七センチ（正覚寺蔵）

野沢蓼洲筆　山水図（正覚寺蔵）

蓼洲は正覚寺の一室に仮住居していたが、その間、同寺の広間へ掲げる扁額用に製作したもの。昭和二十四己丑年春日と落款してあり、時に五十九歳で画境円熟に入り、しかも意欲充実し、得意の筆致で一気に完成した作品である。

近景の松林の墨気の秀潤、蓼洲が好んで描いた三峰山に似る中景の山の鮮かな彩色、二条の懸瀑、雲煙の深さなど、無塵の清趣が画面いっぱいに満ちている。



野沢蓼洲筆　秋景図（正覚寺蔵）

渡辺崋山筆　韓信堪忍図（長寿院蔵）

渡辺崋山筆　韓信堪忍図

紙本着色　丈五八・五　幅一〇九センチ（長寿院蔵）

落款は「華山樵者登写」とあり、筆力、彩色ともに秀れた絵である。旺文社刊行の「学芸百科事典」（十九巻）に収録される。

図は、十八史略「韓信出胯下」を題材としたもの。家貧しく空腹ながら長剣を帯び、淮陰の城下で老姿から飯を恵まれる韓信を見た無頼の小人が、侮るのを耐え、韓信が膝をつき、小人の股の下をくぐらんとする場面で、小人ら四人、見守る旅商人、老人らの顔表情も姿も冴えた筆致で描かれている。とくに韓信の顔には、他日漢の高祖高帝に仕え、遂に項羽を滅し、その功で楚王になり、そして老婆に千金の礼を贈り、股をくぐらせた男を部将にとりたてたという英傑の風貌が見られる。

野沢蓼洲筆　秋景図

紙本着色　丈八五・五　幅一一五センチ（正覚寺蔵）

満目黄葉の秋の山路を、草を背負って帰る人物二人、雲煙の上に頂を現わしている峰々、澄み切った景観がよく表現されている。蓼洲は紙本でもドウサを引き、一気に線描をして彩色する。樹木の葉を描く際は水刷毛をひいて水墨をかけるが、その技法の巧みなこと、独特な趣きを随所に出した。

沼田で不遇な七十四歳の生涯を閉じたが、豪放明朗な性格がこの絵にも出ている。

金井烏洲筆　羅漢図

絹本墨画　丈一四五　幅八七・五センチ（長寿院蔵）

烏洲の傑作中の一点であろう。筆格高く墨気秀潤な山水画と全く異なる筆法である。

あらゆる惑いを断ち、三界（慾、色、無色界）を超越、知断の功徳を具足する覚者という羅漢の、顔と半身の描線の鋭さ、片肌ぬいだ羅衣の筆勢の烈しさ、卓越した烏洲の筆力の非凡なるを知る好作品である。

金井烏洲筆　羅漢図（長寿院蔵）

岡本豊彦筆　仙客囲棋図

絹本着色　丈一三六・七　幅八四センチ（長寿院蔵）

豊彦は備前の人で松村呉春（月渓）に師事し、四条派を学び京都に住み、画法を研鑽、ついに一家を成して画名をあげ、弘化二年六十八歳（一説七一歳）で没した。荘村、鯉斎、澄神斎の号も用いた。とくに山水画に秀いで、人物、花卉も能くした。

この作品は壮年か初老期の画か、主山に懸瀑、中景に老松三本、その下で棋を囲む二人、それを見る一人、茶湯をわかしている童、魚籠を提えて行く童など巧みな構図で、筆致に風格がある。空に二羽の鶴を舞わせ、棋客の傍にも一羽の鶴を遊ばせ、処々に多くの梅花を描いてあるが、人物の一人は林和靖とも思える。

青木翠山筆　寒江楓落図

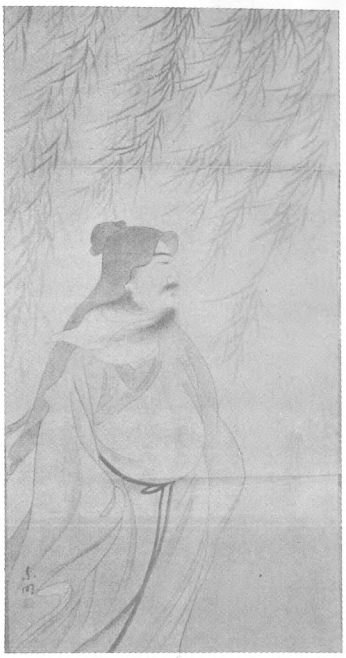
紙本墨画　丈一七八・五　幅九五・五センチ（長寿院蔵）

落款に「擬文江米華筆意甲申仲冬日翠山々樵」とあり、明治十七年十一月、四十四歳の作である。

翠山すでに片眼光を失いながらも大成の域に達し、なお己の画境を広めるために、先人の画に接するや、その筆意を擬した。巧みな構図、温雅な筆致で広々とした寒江と、画幅いっぱいの空に施した淡墨が、画仙紙に滲み、雪をかむった山々を、一層清浄化している。

岡本豊彦筆　仙客囲棋図（長寿院蔵）

青木翠山筆　寒江楓落図（長寿院蔵）



結城素明筆　柳下高士図（長寿院蔵）

結城素明筆　柳下高士図

絹本着色　丈一二〇　幅五〇・五センチ（長寿院蔵）

風に数条の枝を払われる柳の下、髯も道衣も共に吹きまくられて立つ人物は、屈原ならずや。柳の葉はまだ緑だが、壮士の表情の厳しさ「風粛々として易水寒し」の句を思わせる。壮士まさに去らんとする姿を彷彿させている。素明の初期の作であろう。

北村明道筆　弘誓稚児図

絹本着色　丈一四四　幅七一六センチ（長寿院蔵）

日展出品作品である。題材は伝教大師発願「四弘誓願」で、端然優雅な稚児姿を描いている。

明道が沼田で精魂傾けた大作中の一点で、疎開生活からのがれ、東京へ帰るべく、己れの画業に対する誓願の情が感じられる。それは制作中の画室を度々訪れて観た故であろうか。

典麗な顔、漆黒の髪の毛描きの筆致、衣紋の模様の端正なこと、一線もゆるがせにせぬ謹厳な志趣が画品を一段と高めている。

上部に「衆生無辺誓願度、煩悩無尽誓願断、法門無量誓願学、仏道無上誓願成」と四弘願文を書いているが書体も格調も秀れている。

北村明道筆　弘誓稚児図（長寿院蔵）

岡田晴峰筆　山水図（長寿院蔵）

岡田晴峰筆　山水図

絹本墨画　丈一三一　幅八六・五センチ（長寿院蔵）

辛酉夏日写於紫雪堂上　晴峰山人の落款があり、大正十年の作である。展覧会出品作品であろう。

晴峰は桐生市生れ。小室翠雲に師事し、文展で特選になった「刀水渕源図」は代表作の一つであるが、この山水図はそれより以前の作だが、力作である。

山の皺法、筆致は翠雲に似ているが、図組、遠近の墨の濃淡、雲煙のきり方も秀れ、高邁幽邃の仙境が描き出されている。

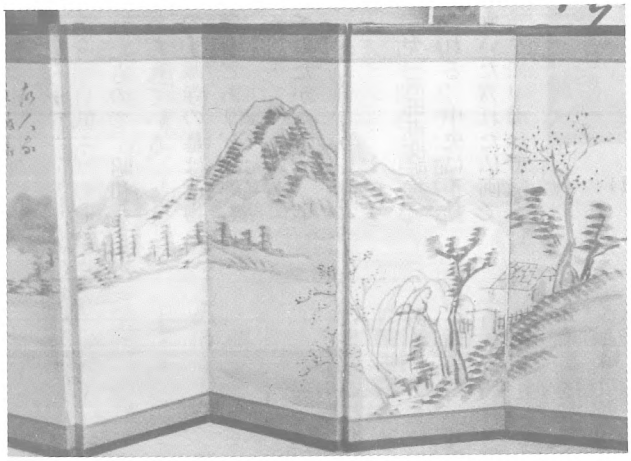
近代南画の息吹きが画面にみなぎっている。

野沢蓼洲筆　子持山秋色図

紙本着色　丈八七　幅一一三センチ（長寿院蔵）

蓼洲の沼田に於ける力作のうちの一点である。

野沢蓼洲筆　子持山秋色図（長寿院蔵）



橋本香坡筆　春景山水図（了源寺蔵）

蓼洲は埼玉県生れ、川合玉堂に師事し、文展に二回入選、病気のため医師から大作を控えるよう言い渡され、以来文展出品を断念した。戦争で沼田へ疎開し、製作をつづけ、北村明道と共に沼田の画人を語らい利根美術協会を結成、年二―四回の展覧会を主宰した。また群馬県美術協会組織に参画、積極的に活動した。

性来豪放快活、潔癖で名利を追わず、酒を好み、利根沼田の山河を写生し、それを作品にした。

水上町で大壁画を制作中脳出血でたおれた、ために半身不自由になったが、彩管を揮いつづけ、昭和三十九年、七十四歳で没した。

橋本香坡筆　春景山水図

紙本墨画　丈四〇・八　幅一〇〇・五センチ

（了源寺蔵）

六曲雛壇用屏風で、文久二年、伊丹に居た香坡が、後妻との間に生れた長女延（のぶ）の桃の節供に当たり、描いたもの。

題に「故人家在桃華岸、道到門前渓水流」文久壬戌上巳前二日燈下走筆為小女延、毛山人の落款がある。まさに文人画というべき筆意である。

香坡は沼田藩主土岐氏の家臣、紋右衛門の長子で文化六年生れ。十五歳の時に父が大坂蔵屋敷詰になり一家転住した。幼年のころから母に五経を教えられ好学心に燃え、篠崎小竹に学ぶ。近衛忠熙に請われて三十一歳から伊丹明倫堂で教鞭をとり、熟頭となる。

四十九歳で辞任、長州～九州を歴遊、後大坂へ住み、藤井藍田や勤王の志士と交わり、幕府の長州討伐を非難するなど、遂に慶応元年五月二十六日、京都守護職の手に捕えられ、一度釈放された

が再び投獄され、遠島になる直前、同年十月十日大坂の獄中で憤死。五十七歳。大正六年従五位を贈られた。

辞世ともいうべき絶命詞「棒声暫息夜凄々　憂国傷身頭自低…」の七言律詩は有名だが、特に西遊詩画帖、晩年の詩は秀れたもので、昭和九年に豊国覚堂が刊行した「橋本香坡遺稿」の中に収められている。

香坡の遺骸は獄吏が処置し、伊丹と菩提寺の沼田の了源寺の墓は遺物を埋葬したもの。了源寺には遺族から寄せられた詩書などあり、詩碑も建ててある。

なお旧伯爵田中光顕は多くの香坡の詩書を所蔵していたが、帝室、早大、明治記念館、青山文庫ほかへ寄贈した。

筆者不詳　五大尊図

絹本着色　丈一三〇　幅七二センチ（沼田市役所蔵）

室町時代末期～江戸初期、京都の画師の作と推定される。中央に不動明王、上下に降三世、軍荼利、大威徳、金剛夜叉を画いた秀れた仏画である。

筆者不詳　五大尊図（沼田市役所蔵）

箱書に「寛保元辛酉年九月廿八日　不動院法印真恭建立之」とある。当時京都所司代であった土岐丹後守頼稔が、寛保二年七月、老中となり、沼田藩主（三万五千石）となり、持ち来たり、改めて沼田城址の一隅に不動院を建て、これを納めていた。

明治の廃藩に際して、明治二年五月、沼田下之町青木吉右衛門、同坊新田町唐沢直七らが組織していた、御岳普寛信心講へ譲渡して保存され、先年市へ寄附したもの。

青木翠山筆　花卉図

絹本着色　丈一四二　幅五七センチ（中島貞二氏蔵）

椿山風の作品、梅、牡丹、蓮、芍薬、海棠、菊など（十友か）巧みな構図で、繊細な線描きと、附立て、没骨描法を調和させ、静趣な色彩を施し、風格ある絵である。

落題に「乙酉春於雲林堂翠山写」とあり、四十四歳の筆である。

筆者不詳　不動明王図

紙本着色　丈九五　幅三九センチ（実相院蔵）

青木翠山筆　花卉図　中島貞二氏蔵）

徳川初期か室町時代末期の作で筆意、補彩もよく仏画師の筆であろう。惜しいことに画面がくすみ、紙折れがある。

伝俵屋宗達筆　四季百花図

六曲屏風一双　丈一二五　幅二八二センチ（実相院蔵）

一双十二面とも個々の構図で、各面いっぱいに多くの花を描いている。宗達は狩野永徳、また狩野安信の門というが、写生風の画で佳品である。

実相院は伝承によれば、延暦元年（七八二）勝道上人が子持山麓の此の地を愛でて杖を止め、草庵を結び、観音像を刻みしばらく滞在したのが創まりという。その観音像（高さ八センチ）を伝えているが、京都の仁和寺の末寺で、往時は住職も往来し、仁和寺御用札や御室御所ご用札が保存されている。

筆者不詳　関羽図

麻布着色　丈九六　幅六〇・五センチ（実相院蔵）

室町時代の作とみられる。右側に幅細い同質の麻布を張り合わせ、それに「時直政」と落款らしい銘文がある。

鉄線描法で彩色を施しているが、関羽の顔、武装姿も、左手に描いた馬も強い筆致で、画家の筆になる作品である。時代も古く保存も良くないため、くすんでいる。

新井洞巌筆　疎松渓泉図

紙本淡彩　丈一三八・五　幅三四センチ（岸　大洞蔵）

「自得安心法悠然水石間」と題し「昭和戊寅（十三年）」の作で松の幹と葉、石などにわずか彩色している。

洞巌は慶応二年、吾妻郡原町に生れた。名は信吉、幼時母を亡くし、八歳で長井雲坪に、十六歳で四谷延陵に南画を、漢学を貫名海に学んだ。さきに兄を、また十九歳で父に死別。翌年上京し菅原白竜、ついで高森砕巌に師事し、初め白雲、のち洞巌と号した。

三十一歳故郷百里の外の遊歴に出て東北、北海道、北陸、西国、九州、韓国、台湾、中国を廻ること十八年間、大正二年東京に居を定めた。同七年中央美術社の懇望で「南画の描き方」が無印税で出版され、五版を重ねた。多くの画家が展覧会に関係、出品作と名を世に問う時代だが、それを好まず「知己を百年の後にまつ」と、美術団体会員にと奨めに来る人々に断わっていた。

ある宮家で、画を教えに来るようと使者が訪れると「学びたいならお出かけ願いたい」と辞退したこともある。

戦火を避けて郷里へ移住し、昭和二十三年五月八十三歳、独往の生涯を閉じた。

夜、酒五勺、火鉢の縁にひじをのせ、微吟しつつ詩校し、やがて冊子に筆を走らせたが、詩篇二千数百首。また「私は悪筆」と語ったが、その書は超俗曲雅、巧まざる風格恬淡な妙趣を蔵している。

新井洞巌筆　天地無塵図

絹本墨画　丈一四〇　幅三四・五センチ（岸　大洞蔵）

昭和七年の作。「天地無塵事江河有篆文」の対句を題したように、一片の俗塵も無い雪景山水である。門弟であった所蔵者が、習作を持って訪問した日、この絵を完成された。感歎していると「手本にしたまえ」と即座に与えてくれた。

洞巌の雪景山水画は少ない。雪に覆われた秀峻な山岳、凛然と立つ樹林、清澄な空、厳冬ながら渓間には淡靄が漂い、肌を刺す酷寒を感じないのは、豊かな詩情と人格が反映している故であろう。

新井洞巌筆　疎松渓泉図
（岸　大洞蔵）

新井洞巌筆　天地無塵図
（岸　大洞蔵）

かつて吉川英治氏を洞巌に紹介したが、氏が「真の南画家であり、日本の南画は師の筆が最後であろう」と評された。気韻縹渺、筆意脱俗、墨色温潤、緻密な構図、格調の清高、近代南画中の白眉で、群馬の生んだ南画壇のかくれた高峰であろう。

新井洞巌筆・楊柳観音図・紙本墨画・小雅仙半折（岸大洞蔵）
同夏景山水図・紙本墨画・小雅仙半折（同）のほかに四君子・山水画手本（小雅仙八ツ切）など約百枚がある。

青木翠山筆　竹林七賢人図（林　まご氏蔵）

青木翠山筆　竹林七賢人図
（六曲屏風）
紙本墨画　丈一七八
幅三六〇センチ
（林まご氏蔵）

明治庚寅春翠山樵者写と落款があり、明治二十三年、四十九歳の作である。両眼失明以前の最も練熟したころの筆で、得意の竹林に阮籍、稽康、山濤、向秀、劉伶、王戎、阮咸の七賢人を巧みに配し、筆意に清趣があり、格調高く、沼田で生涯を閉じた画家の筆とは思われない絵である。保存もよい。

翠山は利根沼田生れの画家中第一人者である。天保十三年（一八四二）沼田原新町に生れ、名は翠治。幼時から絵を好み、同町平等寺住職井上無蓋に習い、家が貧しかったので羽子板、紙だこ絵を描いて家計を助けた。藩主土岐頼之は孝心を賞して扶持を与えた。やがて江戸へ出て南画山水の名手といわれた福田半香に師事。蓬斎ついで翠山と号した。

師友の椿椿山。山本琴石を訪れ、滝和亭、田崎草雲、福島柳圃、松本楓湖らと交遊して画境を高めた。三十歳で眼病、片眼失明したが日本勧業博覧会や米国シカゴの万国博に出品受賞、真価を認められた。

山水、花卉、人物いずれも能くし、特に水墨竹林水図など、多くの傑

筆者未詳　猛虎図（林　まご氏蔵）

北村明道筆　人物図（林　まご氏蔵）

作がある。両眼失明してからも墨竹など描き、明治二十九年十二月、五十五歳で没した。

菩提寺の平等寺庭に顕彰碑が建てられたが、館林方面遊歴中に、小室翠雲も翠山に学び、建碑に参画した。門人には田村豪湖、角田静竹、生方清逸、林自然らがいる。

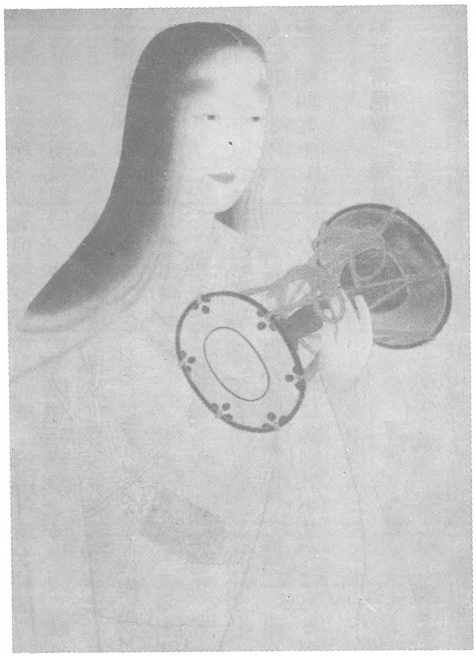
筆者未詳　猛虎図

二曲屏風　紙本墨画　丈一五八・五　幅一五八センチ（林　まご氏蔵）

明治中期以前の作であろう。南画の筆致で、風雨渦まく竹林から現われた猛虎を巧みに描いている。筆力もあり構図も良い。雅印二つ、関防印だけで落款がない。関防印は朱文で「墨樵」とあり、雅印は不鮮明で白文に「〇直〇野〇〇」朱文に「登高望遠閃〇」の文字が判読出来るが、筆者は後日の調査にまつほかない。

林家にはこのほか、北村明道筆「釈迦図」絹本着色（丈一七〇、幅五三センチ）同明道筆「人物図」絹本着色（丈四三、幅五一センチ）軸装。野沢蓼洲筆「赤城山初雪図」絹本着色（丈三五、幅一四二センチ）額装。狩野派の画軸などがある。

北村明道筆　木花開耶姫図
（佐々木弘男氏蔵）



北村明道筆　静御前図（佐々木弘男氏蔵）

北村明道筆　木花開耶姫図

絹本着色　丈一二一　幅四一センチ（佐々木弘男氏蔵）

紅蓮の炎と黒煙の渦巻きの描写の巧みさ、灼熱の中に凛乎として赤子を捧げている木花開耶姫の神々しさを描きあげたもの。明道が戦時中沼田に疎開し、敗戦に悄然とする市民の中に居て感じたものは何か。この絵は歴史画家明道が、戦禍の中から新しい日本の誕生を心に映じて、それを絵としたのであろう。大作ではないが傑作中の一点で、類形のない異色の作品であり、明道の画想の深さをまざまざとみせている。

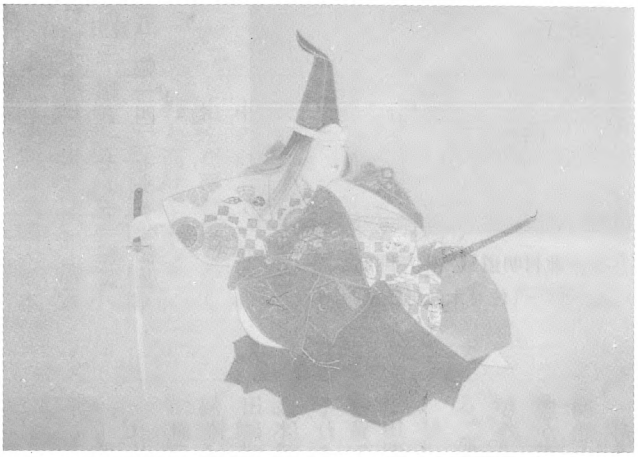
北村明道筆　静御前図

絹本着色　丈一七〇　幅一八一センチ（佐々木弘男氏蔵）

二曲屏風で右面に、左手で鼓を持ちすっと立つ静御前の姿を描いたもの。裾の端は左面の下に垂れ、全面に吹き散る雪片を飛ばし、漆黒の豊かな髪の描法、着物には繊細な模様を描いているが華やかさはなく、凛然とした気配が画面を包んでいる。

静の精が、義経の夢の中に現われたとも見られる図で、傑作の一つ

北村明道筆　吉野山の静御前（佐々木弘男氏蔵）



北村明道筆　人物図（舞う静御前）（佐々木弘男氏蔵）

である。

北村明道筆　吉野山の静御前

絹本着色　丈四二　幅一二八センチ（佐々木弘男氏蔵）

歴史画家明道の面目を見る作品である。吉野山の雪の中に義経と別れて立つ静御前の華麗な姿、それを捕えんと荒法師三人が迫る光景を、見事な筆致と彩色で描きあげている。額装にしてあるが惜しくも画面が少しいたんでいる。

北村明道筆　人物図（舞う静御前）

絹本着色　丈五一　幅五七センチ（佐々木弘男氏蔵）

静御前の舞いでもあろうか、女おもてを付けて烏帽子をかぶり、刀をさげたポーズ、鮮やかな描線としっとりとした色彩、高雅な気品ある、さすがは明道の筆と感歎される作品である。

北村明道筆　騎馬合戦図

絹本着色　丈一二九　幅四二センチ（佐々木弘男氏蔵）

「合戦図」と題しているが、明道は双幅か、あるいは屏風絵にと描いたものであろう。構図から見てそのように思われる。疾走する馬、騎上の武士の甲冑、弓、飛来する矢、いずれの描線、色彩も鮮やかである。群馬県出身の人物画家明道の作風を示す作品の一つである。

このほか佐々木氏は明道の色紙、桐箱絵などを愛蔵している。

岸浪柳渓筆　和靖愛鶴図

絹本着色　丈一四三　幅五一センチ（佐々木弘男氏蔵）

温雅な筆意で情趣がある。エサをついばむ双鶴を見る和靖の顔、童の表情もよく、画面もすっきりした構図である。大正癸亥秋日柳渓老人の落款があり、大正十二年の作。柳渓は関東大震災で東京の家を焼失したので遊歴し、沼田にしばらく滞在し、求められるにまかせて多くの作品を残した。そのうち長寿院蔵の閻魔大王の図や、この絵は秀作といえるもの。

なお佐々木氏方には、平福百穂筆「松林帰牧図」（絹本着色、丈一一八・五、幅四一・五センチ）。小川千甕筆「天保九如図」（紙本着色、丈一三七、幅三四センチ）。同「神農図」ほか藤田嗣治筆「猫図」（絹本着色、丈三四、幅四九センチ）などがある。特に猫図は小品ではあるが秀作である。

狩野常信筆　鳩鳥居木図

双幅　絹本墨画　丈一八三　幅五〇センチ（横山鉄司氏蔵）

「文久三年極月五日　沼田藩主土岐山城守より頂戴　横山東四郎信晋」

との箱書がある。保存、表装もよい。同家は当時は城下屈指の財力者で、藩の御用金を度々仰せ付けられていたので、このほか大名ものの絵を代償に与えられている。

岸浪柳渓筆　和靖愛鶴図
（佐々木弘男氏蔵）

北村明道筆　騎馬合戦図（佐々木弘男氏蔵）

狩野探信筆　船中月見布袋図

紙本墨画　丈一五八　幅三〇センチ（横山鉄司氏蔵）

上に「これでこそ南閻浮提の月夜かな　嵐雪」の賛句がある。南閻浮提（なんえんぶたい）即ち閻浮提州＝須弥山の南にあるといい、人間世界の拘束のない自由なという意にかけて、水上に浮べた舟で布袋が月を観ている図に賛句を添えたもの。画句ともに秀れた作品である。

横山氏はこのほかに、沼田藩主土岐氏から拝領したと伝える狩野探幽筆山水図（丈七〇、幅七〇センチ）守信名の獅子図（丈一八三、幅六三センチ）野々山正頊筆、「昔噺図」（絹本着色、丈二一〇、幅六四センチ）ほかの絵画を保存している。

沼田市で秀れた絵画を多く所蔵されているのは深津静夫氏である。

谷文晁筆　高士観瀑図。森狙仙筆　梅花に猿図。酒井抱一筆　紅葉小禽図。柴田是真筆　傀儡師図。住吉広尚筆　対幅汐汲と富岳図。頼山陽筆　寒林図。葛飾北斎筆　老人画きの戯画。鈴木春信筆　福神餅搗図。友禅筆　画帖をはじめ、謝蕪村の曲水流觴図。円山応挙の林和靖図。渡辺華山の閑人墨付け遊戯図。田崎草雲の花鳥図。尾形光琳の菊図。伝能阿弥の寒山拾得図。伝土佐光起の扇面。伊藤若沖の軍鶏図。熊斐の梅花水仙菊図。滝和亭。名画手鑑。沖冠岳筆画帖などがある。

ほかにも沼田には多くの古画があるが省略する。

白沢村

新井洞巌筆　山水図

絹本着色　丈一五四　幅四五センチ（小野芳夫氏蔵）

高遠と深遠を融合させた絶妙の構図である。渓をはさんで両岸を樹間に配した橋で結び、杖を曳いた高士を点景として近景に清趣をただよわせ、中景の懸瀑と樹林家屋、中央に聳ゆる主嶺をめぐる衆山、密画ながら煩雑なく、雲煙は遠近を隔て、雄大な景観を描いている。山々の頂上

生方清逸筆　四季花友図（戸部健二郎氏蔵）

新井洞巌筆　梅溪山水図
（生方伊雄氏蔵）

新井洞巌筆　山水図
（小野芳夫氏蔵）

はとがっているが、温雅な皺法筆致で、格調を一段と高めた秀作である。洞巌は絹本にドウサは用いず、張板に糊張りして、乾いた時に剝がして揮毫した。

この絵は、夫人の縁類小野家に懇望されて贈ったものである。

新井洞巌筆　梅溪山水図

紙本着色　丈一三四　幅三三センチ（生方伊雄氏蔵）

自異乾坤山重水復惟見万梅中有茅屋　戊申冬日併題洞巌仙史の題落款があり、明治四十一年、四十三歳、遊歴を終えた頃の作か。

近景は崖から伸びた満開の梅樹、中景は梅林茅屋、煙靄の彼方にそそり立つ主峰の秀姿で構成した図組みの妙趣は、洞巌の画境の豊かさを示している。しかし山の皺法は、晩年の超俗高雅な筆致と異なり、若さが見られ、また題詩にもそれが感じられる。

生方清逸筆　四季花友図

絹本着色　丈一二〇　幅五一センチ（戸部健二郎氏蔵）

大正九年の作。牡丹の花の附立彩色の手法は鮮やかである。梅花の筆意はよいが、枝の筆致と墨気は冴えていない。

豊洲筆　人物画（六曲屏風）

紙本着色　丈九五　幅二八八センチ（中村勝氏蔵）

この絵は画人の作とは見られないが、中村家には他に七、八十本の軸があるという。大阪の親類が所蔵していたのを贈られたもので、なかには秀作の絵があるという。

角田静竹筆　菊花図

絹本着色　丈一三七　幅四五センチ（増田正男氏蔵）

静竹は花卉を得意とし、多くの作品を残した。ほかに同家には牡丹図（紙本着色小雅仙半折）があるが、親類なので贈ったもの。晩年を沼田で終ったが、東京に永く住み、地方画家臭はなく、男性のような性格が、画に現われており、利根沼田で只一人の女流南画家である。

明治十二年沼田の石墨町俳人角田双嶽の長女に生れ、九歳で青木翠山に画を習い、十二歳で全国博覧会に牡丹図を出品。英国コンノート殿下の買い上げになり。十六歳で日本美術展に出品。一等賞で宮内省買い上げになる。

翌明治二十八年翠山の勧めで上京し、滝和亭に師事。日本画会出品作はチリの公使ビクナ氏の買い上げとなる。ついで東洋美術共進会、全国共進会、揆画会、日本美術協会展など優等、一、二等に入賞した。

明治三十八年麹町女学校の嘱託教師となり、夫を迎えたが離別、昭和三年沼田へ帰り、制作をつづけ、無欲恬淡、数人の少年に教え、二十八年七十四歳で没した。

角田静竹筆　菊花図（増田正男氏蔵）

上野探雲筆　竹林七賢人と人物図（六曲屏風一双）

紙本墨画　丈一四五　幅三〇〇センチ（樋口三之助氏蔵）

探雲の筆としては特に秀作ではない。晩年円熟期の作ではあるまい。

金陵筆　紙本墨画　六曲屏風一双

一面丈一三三　幅四八センチ（中村輔氏蔵）

草画というかいずれも簡素な構図で、三～四本の竹を描いたもの。しかし墨気も筆意も秀れている。

金陵筆　紙本墨画（中村輔氏蔵）

上野探雲筆　六曲屏風一双　竹林七賢人と人物図
（樋口三之助氏蔵）

なお白沢村教委から提出されたカードには永徳、竹田、文晁、翠雲、直亭などの落款ある多くの絵画があげられているが省略する。

利根村

谷文晁筆　琴棋書画図（中沢三蔵氏蔵）

谷文晁筆
琴棋書画図
絹本着色　丈一四六幅八〇センチ
（中沢三蔵氏蔵）

落款は「文晁写」印は瓢形で朱文「文晁」密画の大幅である。松の枝幹、岩、笹などの筆致雄勁で、机上に琴を置いて対坐する人物の描線は、洗練された豊かな筆意をふくみ、高雅な人間像を表現している。とくに気品高い顔、繊細ながら一糸乱れず櫛けずったような毛描き線の巧みさ、しかも筆勢があり、非凡な筆力で画面を構成、その上に配色の妙を加え、清趣ただよう大作である。

伊東深水筆　楓下美人画
絹本着色　丈一一七・五　幅四一センチ（中沢三蔵氏蔵）

「初時雨」と題したいような図である。ひとしきりの時雨がやみ、蛇の目傘をすぼめた麗人が、一葉二葉しずくと共に舞い散る紅葉を、背景にした麗人を描いている。

伊東深水筆　楓下美人図（中沢三蔵氏蔵）

荒木寛畝筆　老松牡丹孔雀図（中沢三蔵氏蔵）

優雅な容姿に気品があるが、ほのかに脂粉の香りがにおうような、婉然たる面ざしは、深水美人画の魅惑であろう。右上部にひろがる一枝の楓と、地上に落ちた数葉の、紅の色彩が情趣を深くしている。軸装、

保存も良い。

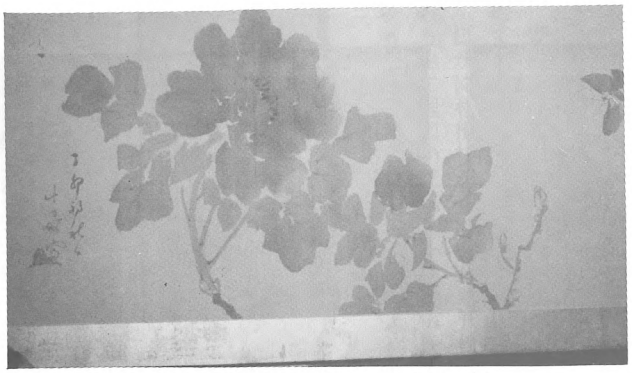
深水は鏑木清方に師事、芸術院会員で、昭和四十七年七十四歳で没した。

荒木寛畝筆　老松牡丹孔雀図

絹本着色　丈一四五　幅八五・五センチ（中沢三蔵氏蔵）

「明治丁亥首春写寛畝」の落款あり、明治二十年の作。昭和二年荒木十畝が中沢家を訪れた際に鑑定、箱書している。

雌雄の孔雀の絢爛な彩色、白と緋色しぼりの牡丹の婉然たる附立て描きの鮮かさ。豪華な南画花鳥画の逸品である。表装も保存も良い。



荒木十畝筆　牡丹図（中沢三蔵氏蔵）

寛畝は、江戸の無名画家田中永周の第三子に生れ、荒木寛快の嗣となる。寛快は江崎寛斎の門で一格を成した。寛畝は両父に学び、さらに北画の技法を加えて一家を成し、特に花鳥画の名手。美術学校の教授、帝室技芸員、文展審査員となり、正五位に叙され、大正四年八十五歳で没した。

荒木十畝筆　牡丹図

絹本墨画　丈四一　幅一〇七センチ（中沢三蔵氏蔵）

額装で「丁卯初秋日十畝写」の落款で朱で花押している。水墨で牡丹に一羽の蝶を描いたもので、昭和二年中沢家の新築直後、丸沼温泉へ行く途次に宿泊しての作である。

十畝は本姓乾氏。明治五年肥前大村に生れ、名は悌二郎。上京して荒木寛畝に学び、師家を嗣いだ。花鳥画の名手で、文展審査員となり、昭和十五年六十三歳で没した。

吉川霊華筆　観音図（中沢三蔵氏蔵）

吉川霊華筆　観音図

絹本着色　丈一三〇　幅四二センチ（中沢三蔵氏蔵）

よく描かれる趺坐している観音の姿で、右手に楊柳らしい小枝を持っており、楊柳観音か。細い描線の筆致に格調があり、優美な観音像である。

左上部に般若心経全文を書いている。巧緻な書ではないが、画を損せず、空間に作意を添えている。自署の箱書し、二重箱で保存もよい。

霊華は明治八年東京生れ。父は幕臣で澹斎と号し、霊華は第三子で名は準。狩野良信、松原佐久に学び、古土佐派の画法も習った。一格を成し人物画を能くし、帝展審査員となり、昭和四年没した。年五十五。

武市半平太筆　美人図

紙本着色　丈一〇七　幅四五センチ（中沢三蔵氏蔵）

武市半平太筆　美人図（中沢三蔵氏蔵）

青柳琴僊筆　十六羅漢図（中沢三蔵氏蔵）

大武の落款で白文の印が左下隅にある。立姿で羽子板を持ち、裾に白い小犬が戯れ、まつわりついている浮世絵風の図柄。髪の毛描き、顔、着物の描線も筆勢があり、画人の作を思わせる。とくに帯と下着の緋色の彩色は鮮かである。「大武」の絵は初めて見たので、真偽は不詳だが、落款の位置とその墨色に時代的な疑念がもたれる。しかし絵は秀作である。

青柳琴僊筆　十六羅漢図

絹本着色　丈一四七　幅四一センチ（中沢三蔵氏蔵）

落款に丙辰孟夏とあり大正五年、五十歳の作。師児玉果亭の筆致に似ているが、琴僊らしい筆意で、羅漢の集団を巧みな構図で、一気に描きあげている。

筆勢があり、各羅漢の面貌の描写には、琴僊の気宇が感じられる。中には人間臭い顔をした、ほほえましい表情の羅漢もいる。

燕恪筆　帰去来図と人物図

紙本着色　六曲屏風一双　丈一五一　幅三三八センチ（中沢三蔵氏蔵）

燕恪の画名は知られないが、この人物画は紙面の広さを利して、硬直に過ぎる筆意が、却って人物を劃然と表現し得た作である。

燕恪筆　帰去未図（中沢三蔵氏蔵）

筆者未詳　屏風図（中沢三蔵氏蔵）

半双は陶淵明の帰去来辞を主題としたもの。松菊猶存す辺りの柴門に、淵明を迎える妻幼児の歓喜の様を描いてある。半双は人物を配置よく描いているが、筆格もある。

なお中沢家には土佐派系無落款ながら、極彩色の六曲屏風一双（丈一五八、幅三四〇センチ）がある。平安時代の公卿従僕を箔張りの上に、多く描き込んだもので、筆致も色彩も鮮かで、名ある画人の作であろう。箔がさびて黒ずんでいるが、保存よく、画面は汚れていない。

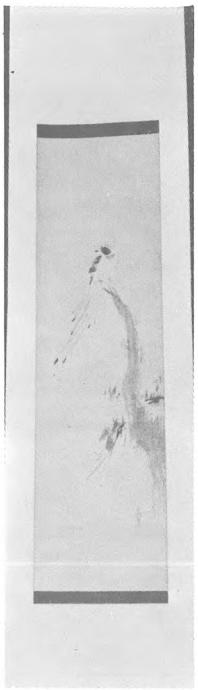
中沢家には、ほかに寺崎広業の落款ある紙本墨画　ざくろの図。細木原青起筆の鱒飛滝の図。近衛文麿書ほか知名人顕官、画人ら染筆の画帖五冊が保存されている。

尚信筆　枯木練鵲図

紙本墨画（金子弥五郎氏蔵）

安政二年五月、沼田藩主土岐山城守頼之から頂戴したという。枯淡な絵であるが、鳥は練鵲または山鵲であろう。

ほかに利根村から出された五枚のカードによれば、狩野法眼の落款のある滝に鯉図の双幅（小林勘市氏蔵）直入の落款ある山水図（金子武男氏蔵）華山の落款ある山水図（笹原信義氏蔵）などがある。



尚信筆　枯木練鵲図
（金子弥五郎氏蔵）

片品村

青木翠山筆　関羽図

絹本着色　丈一四七　幅五七センチ（星野　楙氏蔵）

翠山は山水、花卉、人物画といずれもよくしたが、多くは伝統的南画の筆法で描いている。しかし土佐派様の花、歴史画のような人物画も描いた。

この絵は翠山の人物画中の代表作である。落款の書体に若さが見られる。明治四年に三十歳で眼疾を患い、次第に片眼の視力を失ったというが、それ以前の作と思われる。

画を構成する細密な描線は正確で、弾力を秘めた筆致を損せぬ彩色は、画品を高めている。中国の武神と仰がれた関羽の面貌、表情に威厳があり、加えて、文字通りの関羽ヒゲの見事な毛描き、馬のたて髪の筆勢など、利根沼田で見た人物画の秀作である。

青木翠山筆　関羽図（星野　楙氏蔵）

生方清逸筆　徳川十六騎図
（星野　楙氏蔵）

生方清逸筆　徳川十六騎図

絹本着色　丈一三〇　幅五三センチ（星野　楙氏蔵）

南画家清逸の青壮年時代の人物画の傑作である。星野家の先々代が村医者で風雅を好み、清逸を三カ月も滞在させて描かせたうちの一作という。

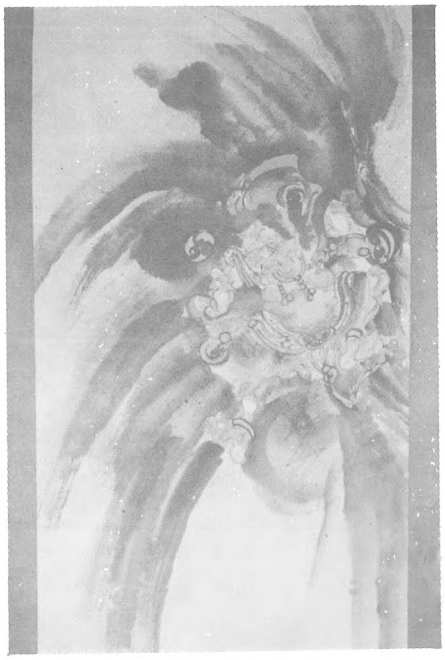
将軍家康を上座に、烏帽子直垂姿の十六騎を、それぞれの位置に配した見事な構図。袖には定紋を描き、各人物を表現して、顔の表情にも特色を出し、徳川の代を築く礎となって活躍した武将の面影を、歴史画的筆法で巧みに描き、極彩を施している。清逸の絵としては異色のもので、その画技を改めて評価すべき作品である。

生方清逸筆　風神雷神図

紙本黒画　丈一三六　幅五二・五センチ（星野　楙氏蔵）

対幅のうちの雷神図である。画仙紙のにじむ特質を利し、墨気を活かした作品。異様な形相の雷神を濃淡墨で描き、淡彩を施し、やや濃い水墨をふくませた太筆で、雷神を中心に円曲する線を一気に放毫し、豪快な筆意を見せている。

風神図は、大きな風袋をかつぎ、天空を飛降下する風神の姿で、淡墨の太い線を左上から右下へ、斜めに引きおろし、豪放な筆致で構成している。双幅とも、黄朱色の細い線を稲妻形に走らせ、奇想の図柄である。



生方清逸筆　風神雷神図（星野　楙氏蔵）

生方清逸筆　風竹群雀図（三浦三之助氏蔵）

同家には、清逸筆の出山釈迦図、竹に雀、梅に鶯図の双幅（絹本着色）がある。大正四年、制作したものである。

生方清逸筆　風竹群雀図

絹本淡彩　丈一二五　幅五一センチ（三浦三之助氏蔵）

三幅対のうちの主幅で、大正四年、清逸六十一歳の作である。側幅は幅一六センチ、右は喜古春魁（紅梅鶯）左は瑞鳥老松図。

群雀図は清逸の得意としたものであるが、すでに還暦で画境円熟に達し、風にそよぐ竹の葉の墨気も鮮かなもの。群れさわぐ雀の描写の巧みさ、今も「清逸の千羽雀」と郷土の人が呼び伝えているが、清逸独特の雀の絵は、数多く残っている。七十七歳の生涯中に幾千羽もの雀を描いたであろう。

伝狩野探幽筆　岩上鷹図

紙本墨画　丈一二四　幅五三センチ（星野　利氏蔵）

探幽行年六十三歳筆と落款がある。東都の国学者桃井可堂という人から譲りうけたと伝えている。真偽は別として狩野派伝統の雄勁な筆意で岩、滝、波が描かれ、獲物を狙う鷹の鋭い姿形、羽描きの巧みさ、格調の高い絵である。

伝狩野探幽筆　岩上鷹図（星野　利氏蔵）

青柳琴僊筆　蘭亭曲水図

絹本着色　丈一三八　幅四九センチ（笠原一成氏蔵）

落款によれば昭和十八年、七十七歳の作。琴僊の山水図は密画が多い。この作品も佳作である。

青木翠山筆　松下双鶴図

絹本着色　丈一二一　幅三〇センチ（笠原一成氏蔵）

明治十八年、四十四歳の作品、半眼光りを失ってからの筆ながら、構図も整然とし、松の葉の墨気、筆意とも温潤、双鶴を手なれた描写で描いている。

林青山筆　高士観瀑図

絹本淡彩　丈一二一　幅四二センチ（笠原一成氏蔵）

制作年代は不詳だが、青山の秀作にあげらる山水画で、図中の高士は李白でもあろうか。温雅な筆意で、俗気のない作品である。

なお同家では池上秀畝筆の対幅（絹本着色、丈一三二、幅四八・五センチ）など多くの画を秘蔵している。

赤山筆　牡丹唐獅子図

紙本着色　丈一三六　幅五三センチ（星野明宏氏蔵）

六曲屏風絵のうちの一面。他の五面は紅梅と鶴、南天と鶏、柳と金鶏、人物図（二面）である。赤山斉船雲の画名は聞きもせず、知られてもいないが、装飾的な筆法と彩色も鮮やかで、構図も巧みであり、各所に見る名家の落款入りの粗画や、詩趣もなく俗気の多い絵よりも、風格をもっている。

青木翠山筆　春景山水図　紙本墨画　丈一三九　幅七六センチ（星野増雄氏蔵）をはじめ、新井一男、桑原久雄、笠原佐次郎、星野栄氏らが多くの絵図を所蔵している。

赤山筆　牡丹唐獅子図（星野明宏氏蔵）

川場村

筆者不詳　十六善神図

絹本着色　丈一二六　幅六一・五センチ（吉祥寺蔵）

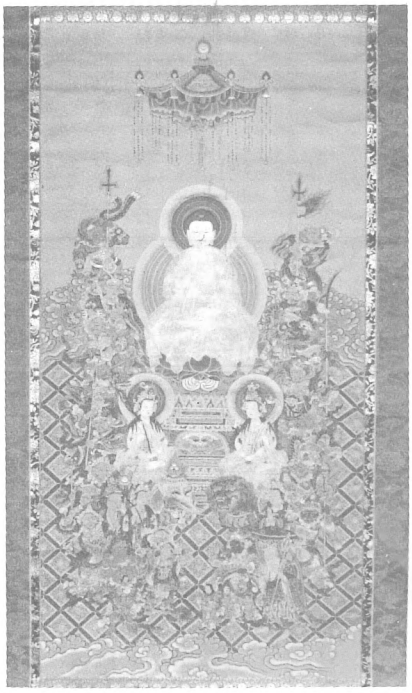
釈迦を上部に大きく、文珠、普賢両菩薩を、その左右を十六善神が護っている極彩色の密画である。

通例の図柄だが、江戸時代初期の作、あるいは桃山時代の作か、巧緻な筆法、色彩の鮮やかさ、利根沼田では第一級の絵である。

筆者不詳　観音図

絹本着色　丈一五一・五　幅八四・三センチ（吉祥寺蔵）

明時代（桃山）の作か。日本の仏画ではあるまい。観音の姿、描法、彩色など宋画に似ており、松井田町補陀寺蔵「文珠菩薩図」と同じ画風である。前述のように吉祥寺は、南北朝時に大友氏が創建し、名僧円月が開基となった名刹。天正十四年本堂ほか戦火（北条氏直の沼田城攻撃）で炎上はしたが、災禍を免かれて保存されたものか、その後に寺の什物として得たものかは不明だが、稀に見る絵である。



筆者不詳　十六善神図（吉祥寺蔵）

筆者不詳　観音図（吉祥寺蔵）

上野探雲筆　釈尊降誕図

絹本着色　丈二一〇　幅一四三センチ（吉祥寺蔵）

制作年代は不明だが、名刹吉祥寺の委嘱を快諾し、精魂を注いで完成

上野探雲筆　釈迦尊降誕図（吉祥寺蔵）

させたものであろう。利根沼田にある探雲の軸物の絵では最高の傑作である。惜しいことに軸装が破損し、改装の必要がある。

仏教の開祖となる釈迦が、西紀前五六五年四月八日、中印度の浄飯王、摩耶の王子として生誕した時の、王城百官百畜欣喜の様と、瑞祥の紫雲に乗った天人天女の姿を幅面いっぱいに描いている。精緻の描線と鮮やかな彩色は、さすが法眼探雲と驚歎するばかりである。

三村春如筆　釈尊涅槃図

紙本着色　丈一五〇　幅一一六センチ（吉祥寺蔵）

画面右下隅に「三村氏春如書」と落款があるが、後に別人が書いたものではないかとも見える。箱書に一涅槃像一幅、竜山常住　維時享保元丙申十月吉祥日　桂巌代　施主宇敷右衛門」とある。その年（一七一六）製作したとしても二百五十七年を経ており、表装も破損し至急改装を要する。春如の画名は知られないが、洗練された描線で釈迦の入寂を悲しむ人々、鳥獣の様相を巧みに描いている。ただ僧形を除いて、人々の衣裳に奇異を感ずる。

三村春如筆　釈尊涅槃図（吉祥寺蔵）

祖観筆　釈迦　達磨　維摩図

紙本墨画　丈一〇四　幅四七センチ（吉祥寺蔵）

三幅対で、江戸初期～中期の作か。出山の釈迦の図は虫食い、水汚れ

祖観筆　達磨図（吉祥寺蔵）

祖観筆　釈迦図（吉祥寺蔵）

がある。

それぞれの筆意、筆法が違っている。維摩は狩野、達磨は雪舟風に、釈迦は顔のほか衣文は岫雲点描法に似た略筆で描き、三図三様である。

祖観筆と伝えているが、祖観の画名はあまり知られていない。画人ではなく沙門道人の描いたものか。一人の作とすれば、三図の筆法を変えたのは、仏教の祖釈迦、弁才知恵秀れた維摩、中国嵩山で面壁九年禅宗の祖となった達磨を表現する作意によるものか。でなければ別人の作とも見られる。

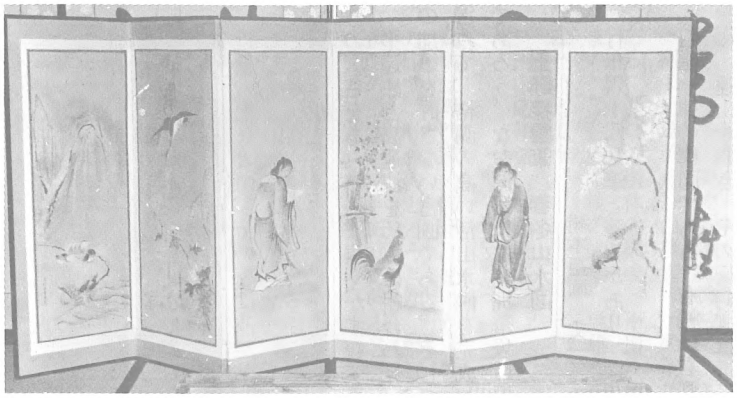
探幽斎筆　五祖像図（吉祥寺蔵）

祖観筆　維摩図（吉祥寺蔵）

探幽斎筆　五祖像図

紙本墨画　丈一一九　幅五〇センチ（吉祥寺蔵）

枯淡な格調ある筆意、真偽はともかく能品といえる絵である。同寺の什物帳に「正徳三年十月十九日、地頭（沼田藩主）本多遠江守当寺へ御



上野探雲筆　人物花鳥図（吉祥寺蔵）

成り、江戸御帰りの後、山僧参府の節、五祖演禅師の絵像探幽斎筆一幅、国守より直かに賜う。依って当山後代の省に什宝に記し置く者也」と記してあるのは、本画であろう。

上野探雲筆　人物花鳥図

六曲屏風　紙本着色　各丈一二八　幅六二～五二センチ（吉祥寺蔵）

花鳥画が四面、人物画が二面。春は雉子に桜、夏は雞、秋は雁、冬は鴛鴦。探雲の花鳥画は、利根には稀である。鳥は丹念に描いている。人物は寒山拾得子か。伝統の筆法で、道衣に淡墨をかけ、花鳥との調和をとり、六面の構成をまとめている。画面に水のしみがあり惜しまれる。

谷文晁筆　山水図

絹本着色　軸丈一九八　幅一〇四センチ（関　りょう氏蔵）

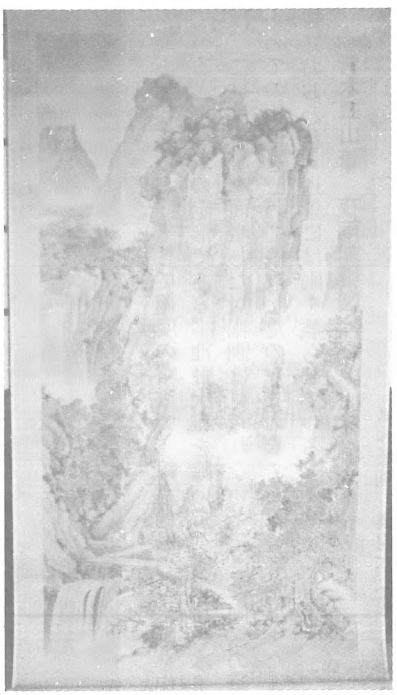
文政戊子六月念六、文晁写、と落款がある極密画である。文晁は江戸の詩画人麓谷の子。通称文五郎、初号は文朝。写山楼、画学斎、一如、無二の別号も用いた。

初め狩野周信門人の加藤文麗、鈴木英蓉に学び、のち漢画の名手北山寒巌に就いて明、清人の画風を修め、さらに宋の牧渓、また雪舟、探幽の筆意を汲み、遂に一家を成し、徳川田安家の画師となり、法眼に叙せられた。山水、人物、花鳥、虫魚いずれも能くし、特に水墨山水は妙品といわれた。集古十種、名山図絵、本朝画纂などを著したが、門人中から二十数人の名手を出している。

晩年髪を剃って文阿弥と号し、天保十二年（一八四一）十二月、七十八歳で没す。

この絵は文政十一年（一八二八）文晁六十五歳の作である。南宋、北宋派を折衷した文晁独特の雄勁な筆法、いわゆる文晁派の特徴が現われている。

画面中央の大半を占め、雲煙を巻いて聳え立つ巨大な主山、それを囲み擁立する衆山樹林、遠山の中に打ち込んだ文晁の気迫が、空間にまで流れており、威圧感さえ与えている。



谷文晁筆　山水画（関　りょう氏蔵）

金井烏洲筆　秋山訪友図

紙本墨画　軸丈二一〇　幅一一〇・五センチ（関　りょう氏蔵）

嘉永四年、烏洲五十六歳の大作で、巨幅いっぱいに秀潤の墨気が滲み、

金井烏洲筆　秋山訪友図（関　りょう氏蔵）

昨日描き上げた水墨画を、水でぬらしたようなうるおいと、気品が漂っている。

近景の樹林と山、その下に渾然として隠見する草屋、俗塵を払ってそそり立つ主山の中腹にかかる一条の滝、悠然とそびゆる遠山、まことに高邁な図組である。しかも左側をゆるやかな江水にして橋を描き、画面外の広さをあらわし、遠くかすむ淡墨の山で天際を区切った。

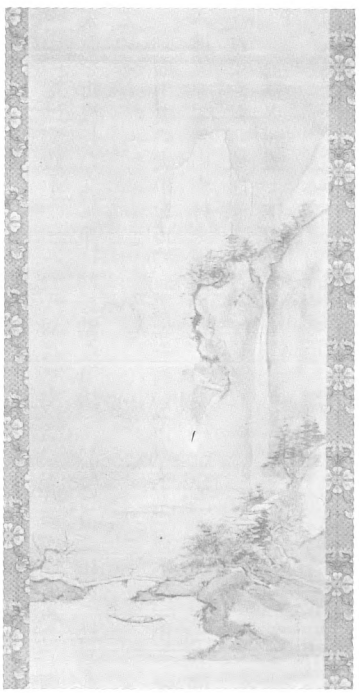
平遠法と高遠法を巧みに組合わせ、妙趣無限の構図で、あと一点一画の加筆を許さない密画である。そして脱俗の皺法筆意、濃淡墨の点苔の滲みで、格調の高い活山水画を完成した烏洲の、非凡な画境を示す逸品であろう。なお同家には烏洲筆袋戸棚四枚（絹本着色）がある。

上野探雲筆　春冬山水図

絹本墨画　丈一三一・五　幅五〇センチ（小林善作氏蔵）

行年六十八歳筆と落款があり、探雲が描きまくったうちの双幅であろう。

百幅一律の構図である。右幅は右側に、左幅は左側に、山、樹、家屋、懸瀑、遠山を画き、その反対側は近景に江水を、そして橋、小舟、点景人物を配している。そして極度の略筆で、線描補彩の山水画を作りあげている。狩野派の定形である。池野大雅を除いて、南宋派の水墨山水には、これほど筆を簡略した対幅画は見られない。そこに両派の筆意をふくめての相違を改めて観取したのがこの絵である。春景はまだ遠山が白雪におおわれ、近景には雨を煙らせている。



上野探雲筆　春山図（小林善作氏蔵）

上野探雲筆　冬山図（小林善作氏蔵）

青木翠山筆　夜雨朝霽図

紙本墨画　襖四本（関　りょう氏蔵）

糸入り紙で二間半四本の襖絵である。

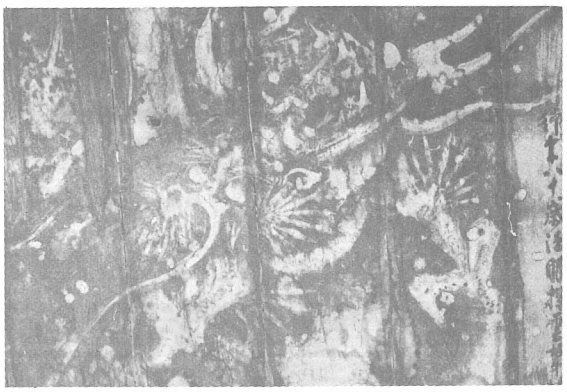
「擬米元暉筆意翠山樵者写」の落款があるが、広い画面に巧みな構図である。近景の樹林の構成、平坦な中景、家屋の配置、主山遠山のたたずまい、墨色の濃淡の妙趣、温雅な小米点法山水画の作例を示したような絵といえよう。

円山応挙筆　秋山懸瀑図

絹本着色　軸丈一八九　幅五四センチ（関　りょう氏蔵）

真偽は専門家の鑑定にまつが「安政巳年（四年）桂月」とある。密画の力作で、懸瀑のとどろきが、鮮紅の紅葉に伝わり、清澄の気韻が満ちた秋山の景観を描きあげている名画である。

青木翠山筆　夜雨朝霽図（関　りょう氏蔵）



上野探雲筆　竜図（武尊宮の天井絵）

上野探雲筆　竜図

墨画、川場湯原　武尊宮の天井絵

行年八十歳法眼探雲筆とあり、寛政十年の作。筆意雄勁、高齢ながら気魄あふるる傑作である。惜しいかな板の継ぎ目の部分が地塗りの胡粉ごと落ちている。保存の手を打つべきである。

狩野英信筆　郭子儀図

絹本着色　軸丈二五一　幅八二センチ（関　りょう氏蔵）

多くの童に囲まれた郭子儀を描いたものだが、真偽はともかく、秀れた筆致で格調も高く狩野派の人物画として評価される絵である。保存もよく、画面もさびずきれいだ。

英信は主信の次男で、狩野家十世憲信（永真）に養われ、十一世を嗣いだ。徳川家治の優遇をうけ、法眼に叙せられた。通称源七郎、如適斎と号し、のち祐清と改め、宝暦十三年（一七六三）四十七歳で没した。

高久隆古筆　農耕図

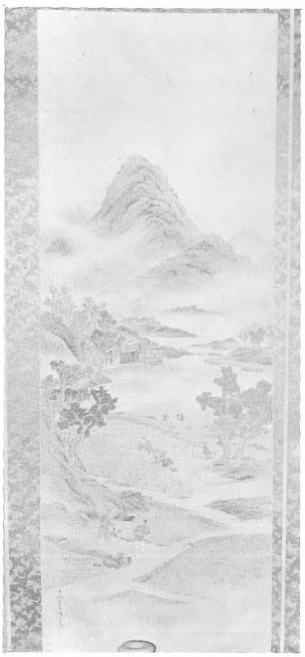
絹本着色　三幅対　丈一一七　幅五一センチ

（桑原栄重郎氏蔵）

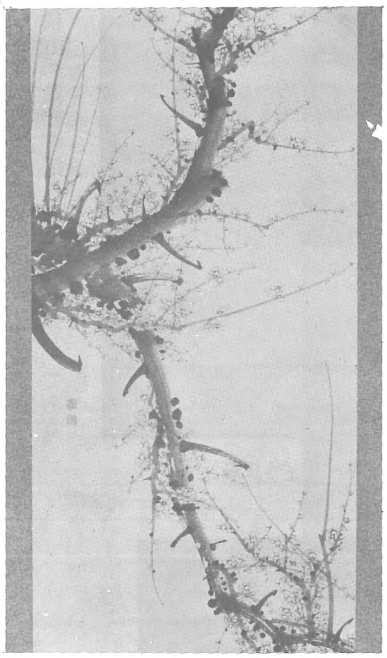
甲寅冬十一月於羽生邨寓舎　亦迂道在隆古の落款あり、安政元年の作。

隆古は秦氏、また川勝氏。名は迂、通称斧四郎。下野の人ではじめ南画家高久靄崖の養子となり、のち離別。依田竹谷、渡辺周渓、浮田一蕙に師事し、遂に精緻の画風で一家を成した。安政六年江戸で没した。年五十九歳。

この絵は五十四歳の作で、三幅とも一幅ごと田園と主山、雲煙で平和な風景を描き、稲作に励む人物を巧みな筆致で点景に配している。特に樹木は南画の描法で、清趣を高めている。



高久隆古筆　農耕図
（桑原栄重郎氏蔵）



明田梅溪筆　梅花図（関　元雄氏蔵）

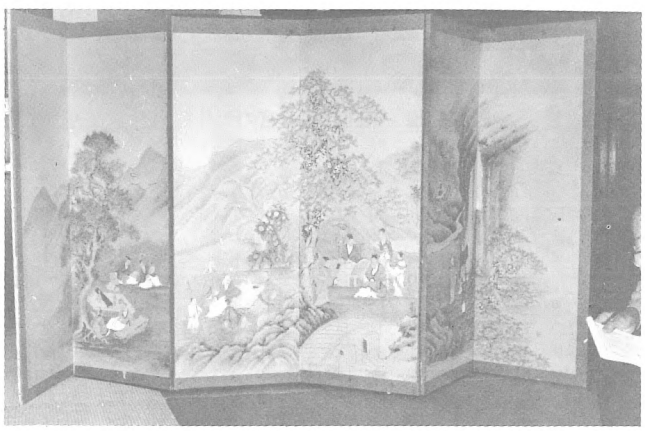
明田梅溪筆　梅花図

紙本墨画　丈一三五　幅五九・八センチ（関元雄氏蔵）

梅溪は川場村門前の人。同村湯原の今井芳川に南面を学び、各地を遊歴して画技を高め、明治五年に家で没した。没年不明。

岷斎の別号があり、近隣に数人の門弟があった。描くところは殆ど墨梅図で、その巧みさは名ある南画家の梅図に劣らない。多くの作を残しており、この絵は落款を入れず、梅溪の印を捺しており、彼としては不出来としたものであろう。

太い筆に充分墨を含ませて、太い幹を一筆で描き、丸みと生き生きとした樹勢を見事に表現している。伸々とした枝、香るが如き花の向背のさま、点芯の筆意もよい。枯淡な筆意の梅図には見られない生木の味いがある。



関武嶽筆　西園雅集図（関　輝政氏蔵）

関武嶽筆　西園雅集図

紙本着色　六曲屏風　各丈一三一・五　幅五〇・五センチ（関　輝政氏蔵）

武嶽は画号で名は関金平、文政六年（一八二三）川場村谷地に生れ、青年時代金井烏洲に師事した。別号武山また鎮勇と称した。山水、人物、花鳥も能く描き、多芸で、俳句を作り、三味線、笛、鼓をも楽しんだという。谷地の小学校の訓導となり子弟の教育にも尽くし、明治三十一年七十六歳で没した。

この屏風絵は中四面だけで構成し、両側の二面は無用の観がある。人物の描法、樹木の筆意にも見るべきものがあるのに、図組みを失敗したのは惜しい。絵画的水準はともかく、郷土人の作として保存すべであろう。

豊沢筆　人物図（今井与兵衛氏蔵）

豊沢筆　人物図
紙本墨画　丈一二四　幅五四センチ
（今井与兵衛氏蔵）
落款に「豊沢処士斎　建明」藤印実明の印があり、筆致もよいが画名は知られていない。

福田半香筆　秋江漁遊図
紙本墨画　丈一二四、幅五九センチ
（今井与兵衛氏蔵）
沼田の青木翠山は半香に師事し、また今井家の先々代芳川は画を学んでいたので入手したものであろうが、半香の作としては秀れた絵ではない。しかし真蹟ではある。

月夜野町

椿椿山筆　花鳥図
絹本着色　丈一四一　幅八四センチ（内海文之助氏蔵）
甲辰春正月人日写　椿山外史」の落款があり、弘化元年（一八四四）四十四歳の作である。さすがの椿山も「山」の字を書き落したのか「椿」の字の木扁の下に小さく書き入れている。
鮮やかな色彩で雌雄の軍鶏、ほう仙花を描き、近代南宋派花卉鳥虫の名手といわれる椿山の面目をみせている絵である。
椿山は幕府の槍組同心で、金子金陵、渡辺華山に学び、琢華堂、また羅溪の別号も用いた。安政元年五十四歳で没した。

椿椿山筆　花鳥図（内海文之助氏蔵）

佐久間象山筆　山水図
絹本淡彩　丈一四〇　幅五六センチ（内海文之助氏蔵）
墨色の濃淡を問わず、温雅な筆致で、自ずから画人の画と異なる格調の高さを秘め、清趣に富んだ名品である。
近景の三本の老松の姿と、聳え立つ主山の形、その中腹から落下し、淙々と響く滝のあたりに象山の風貌が表われている。制作年代は不詳だが、小舟で釣糸を垂れている点景人物に托した七言絶句に、心境の一端がうかがわれる。
象山は信州松代藩士。出府して佐藤一斎に学び、星巌、華山、東湖、磐溪と交わり、江川太郎左衛門に砲術を学び、洋式の産業開発と軍備充実を唱えた。藩主真田幸貫が老中となるや象山は海防係顧問となり、鎖国攘夷の風潮の中で開国論を力説、元治元年七月、京都で攘夷党の刃に斃れた。五十四歳。生前幕臣勝海舟、坂本竜馬、吉田松陰ら多くの志士が教えを乞い、その強い影響力が維新の幕を開く原動力となったともい

える。

内海氏はこのほかに沈南蘋筆、絹本着色双幅、松竹梅椿図（乾隆戊申＝五十三年＝天明八年作）。高橋草坪筆、紙本墨画（丈四四、幅二一センチ）小品。帆足杏雨筆、冬景図、紙本墨画（丈一三八、幅六三センチ）。林良筆、芦雁小禽図、紙本墨画（丈一六九、幅八一センチ）。黄檗独立筆、富岳図、紙本墨画（丈三八、幅五五センチ）。菅原白竜筆、秋景山水図。江川坦庵筆、竹石図。狩野永徳筆、鯉図（墨画）や多くの絵画、書軸を秘蔵している。

佐久間象山筆　山水図（内海文之助氏蔵）

青柳琴僊筆　美人琴棋書画図

六曲屏風　紙本着色　丈一三二　幅三三六センチ（高橋正忠氏蔵）

西園雅集図の対屏風として、翌年八十四歳の高齢精魂を傾けて完成させた好一対の傑作である。

右一面下部の前景が、西園雅集図とやや似ているほか構図は変り、遠近があり、題名の如く、流暢な描線で均整のとれた優雅な美人十九人を、中央四面の適所に配している。一叢の竹、平地の終る処の右上部に懸瀑を、左上に江水をひらき、左隅には石堤を浸す水を流動的に描いたが、一筆もゆるがせにせず、加えて豁然とした構想はまさに非凡である。洗練された独特の筆意と格調とをあますところなく現わした名品、清秀の趣が広い画面いっぱいにただよっている。

青柳琴僊筆　美人琴棋書画図（高橋正忠氏蔵）

同上　部分

なお高橋氏方には襖十枚、色紙十二枚、扁額などが秘蔵されている。

青柳琴僊筆　西園雅集図

六曲屏風　紙本着色　丈一三二　幅三三六センチ（高橋正忠氏蔵）

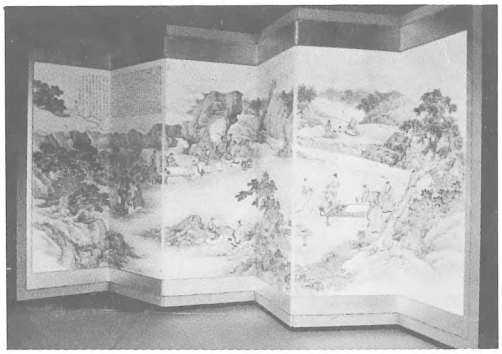
昭和二十四年、八十三歳の作。八年間構想を練って描きあげたというが、琴僊の代表的作品である。

琴僊は慶応三年月夜野町に生れた。名は琴之助。十四歳で同町の南画家林青山に学び、十九歳の時、わらじをはいて腰弁当で草津白根―渋峠を越し、長野県渋温泉の南画家児玉果亭の門をたたいた。以来二十余年間おなじ道を通い、明治四十四年、四十五歳の時渋温泉に移った。昭和

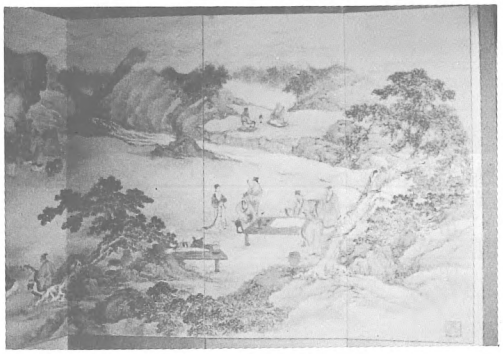
十七年帰郷し、自宅に画室「玉兎山房」を建て制作をつづけ、西園雅集図と対双になる「美人琴棋書画図」を完成した後、中風を病んだが恢復し、画筆を揮い、去る三十七年二月、九十五歳の天寿を閉じた。果亭の筆致に似たが次第に独自の境地を開き、独特の筆法を完成し、山水、花卉、神仙人物画を能くした。

利根沼田の画人中、青木翠山は第一人者であるが、琴僊もまた秀れた南画家で、彩管をにぎって八十年間、長い生涯に多くの傑作を遺した。

本図は構図もよく、独特の個性的な強い筆致で、右寄り中央から三面の下部に近景の山裾、老松、常緑樹を描き、左一面から中央上部に山裾を、中間に平地を淡墨で、右上部に清流を隔て小段丘を描いて、三々五々雅人を配した。上部全面に祥雲を線描きして左端二面に「李白時效唐小李将軍為著色泉石雲物草木花卉皆絶妙……」と長文の題字を書いている。



青柳琴僊筆　西園雅集図（高橋正忠氏蔵）



同上　部分

狩野永真筆　寒山子図

紙本水墨　丈一一四　幅三七・五センチ（阿部卓蔵氏蔵）

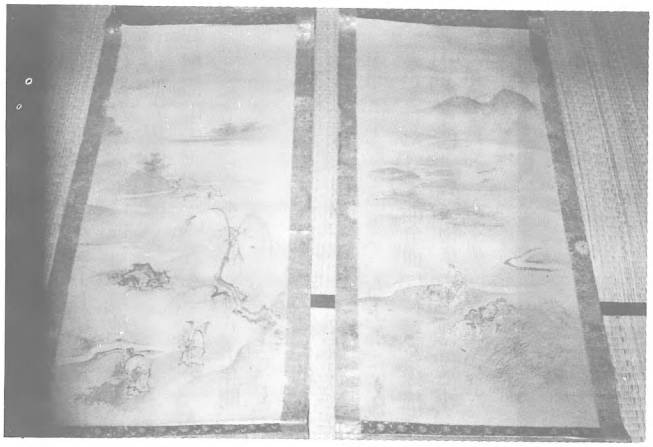
拾得子図と対幅だったものであろう。寒山拾得は、南北両宋画人が好んで描いた題材で、多くは奇異な表情をしているが、この作品の横顔には、一点の邪念も誇張も見られない。童顔ではないが拾得子と談笑している表情が好ましい。練達した髪の描法、濃淡微妙、流暢な衣文の描線、とくに濃墨の線には、狩野派の硬さがなく、上衣に施した淡墨は空間の中にその存在を示し、軟らかな格調を添えている。

永真狩野安信は孝信の第三子で兄探幽、尚信に学んだ。法眼に叙せられ、寛文三年紫宸殿聖賢障子を画いて有名。貞信没後宗家を嗣ぎ、江戸中橋狩野と称された。貞享二年（一六八五）没した。年七十また七十三歳ともいう。狩野氏八世で多くの門弟がある。

狩野永真筆　楼閣山水図

絹本着色　丈七七　幅三六センチ（高柳武夫氏蔵）

狩野永真筆　寒山子図（阿部卓蔵氏蔵）



狩野周信筆　春秋耕作図（真庭和男氏蔵）

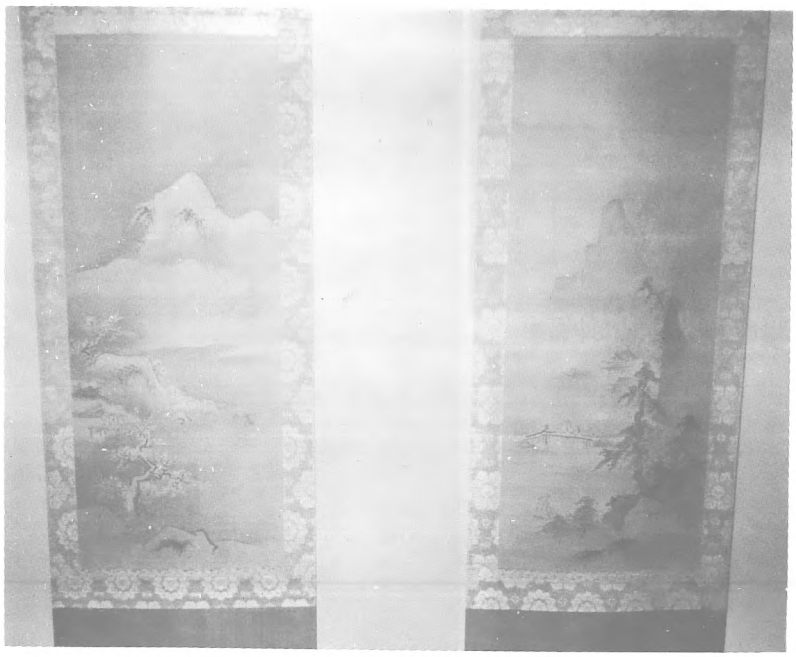
狩野永真筆　楼閣山水図
（高柳武夫氏蔵）

狩野派の格調ある筆法で山岳、樹林、中景に懸瀑、山々の間に多くの楼閣を描いた逸品である。画面の右側は大海で、波の動きをあらわした線の巧なこと、壮年期の作と思われるが、さすが法眼安信の面目を見せている。この絵は沼田藩主土岐氏が旧蔵していたが、明治の廃藩の際、高柳氏の先々代が一両二分で求めたもので「蓬萊山」の図と伝えている。

狩野周信筆　春秋耕作図

対幅　紙本着色　丈九四　幅四二センチ（真庭和男氏蔵）

周信は常信の長男、中務卿法眼に叙せられ、木挽町狩野の第三世で、名手といわれた。享保十三年（一七二八）正月、六十九歳で没した。右幅は中景やや上部に牛耕、左幅は稲の刈取り風景を近景に描き、筆



狩野周信筆　夏冬山水図（櫛渕達男氏蔵）

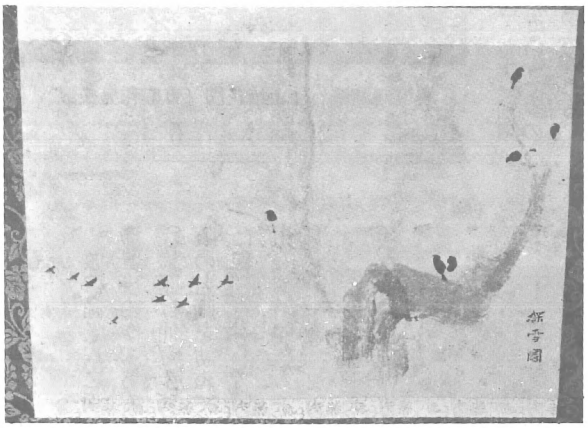
意、構図、淡彩の配色も、名手の気品を備えた作品である。同じ周信筆でも山水画は狩野派（北宗画）のゴツゴツした伝統的な千篇一律のものを感ずるが、この耕作図は平遠法構図で雲煙模糊、田園の風趣を巧みに漂わせ、写生的な作風を示している。

狩野周信筆　夏冬山水図

対幅　絹本墨画　丈九六　幅三八・五センチ（楠渕達男氏蔵）

対幅にふさわしい構図。伝統の筆法で夏景は直幹の老松と数本の松を濃墨で描き、雲煙の彼方に主山を置いて画面を構成。冬景は主山を幅いっぱいに大きく据え、凍った江水と空を淡墨で鮮やかに塗り、寒気をみなぎらせている。

谷文晁筆　人物図（楠渕達男氏蔵）



狩野探雪筆　枯木群鴉図（鈴木一朗氏蔵）

狩野派の山水画に多く見られる図組であるが、かく少ない筆で、粗略に見えず、雄大な景を出現させているのは、さすがである。

楠渕家は旧家で、明治廃藩の時、沼田藩主から購入したものという。

谷文晁筆　人物図

絹本着色　丈三一　幅四四・五センチ（楠渕達男氏蔵）

利根沼田ではあまり見ない図柄。一枝の梅花に短冊を四、五枚さげ、烏帽子、頭巾をかむった飄逸な人物、その片手をひく女童の顔の形と表情、新春の目出度さを招き入れようとする人間の心を描写した絵である。文晁の筆とは思えない穏雅な筆意が、画面の余白に春のなごやかな気配を漂わせている。

狩野探雪筆　枯木群鴉図

丈三一　幅四七センチ（鈴木一朗氏蔵）

探雪は探幽の次子で名は守定。号は孟隣斎。父に学び正徳四年（一七一四）没した。年六十歳。

右に没骨法で一本の枯木を淡墨で一気に描き、六羽の鴉を濃墨で要所にとまらせたが、中央にのばした細い枝の一羽は画面の点晴となり、右上部の三羽の配置も絶妙で、あと一羽を加える隙もなく、紙の上部を切断するを許さない。左側下方に寒風の中を飛び去る九羽の鴉の配列もよく、広い空間を描かずして現わし、枯淡で気品高い作品である。

奥原晴湖筆　江山梅花図

絹本着色　丈一四二　幅七〇・五センチ

（真庭和男氏蔵）

奥原晴湖筆　江山梅花図（真庭和男氏蔵）

晴湖の画は、利根沼田で数点見ているが、多くは晩年に近いころの豪放無滞、縦横走筆のものだったが、この作品は伝統的な描法である。近景に江を隔てて梅林書屋、それをつなぐ橋を渡る高士、中景右寄りの崖にも梅林を描き、それに対する主山の位置もよいが、江上に映ずる主山の影を、やや濃い墨で写実風に描いたあたり、晴湖の大胆、非凡さが見られる。

なお遠山の濃い墨気は、遙かな天際を鮮やかに区切っている。五言絶句の題詩に晴湖詩画と落款しただけで、制作年代は不明だが青壮年期の画であろう。地方にある晴湖の秀作中の一点といえよう。

晴湖は下総古河藩士、初め福田半香に学び、密画を能くし、後に清人魏胎に就いて筆法を問い画風一変、また鄭板橋に私淑したともいう。女流南宋派の名家で、晩年埼玉県熊谷在に隠棲、大正二年七十六歳で没した。

菅井梅関筆　山水図

紙本墨画　丈一三六　幅六二センチ（阿部卓蔵氏蔵）

倣稼圃老人之画法　梅関岳の落款だけで制作年代は不詳だが、長崎滞留後の作である。

梅関は仙台生れで初め根本常南、のち文晁に学び、東斉と号した。京阪の名画を訪ねて模写研修、たまたま清人江稼圃の画を見て感歎し、長崎に稼圃を尋ねて師事すること十余年。その間、墨梅に妙を得て梅関と号し、南宋画の蘊奥を極め山水画にも長じた。天保十五年（一八四四）正月六十一歳（また六十二）で没した。

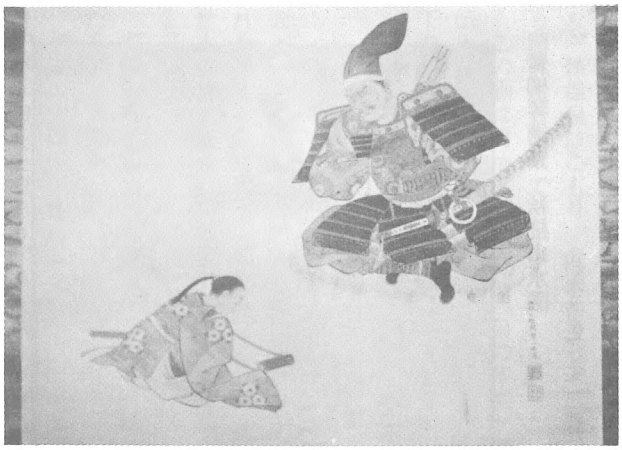
この絵は稼圃の画法に倣うとあるが、岩の描法、山の皺法、点苔、樹法など、稼圃の筆致を会得した上に、清秀な気韻が感じられる。

菅井梅関筆　山水図（阿部卓蔵氏蔵）

青木翠山筆　楠公父子図

絹本着色　丈一三八　幅八〇センチ（後閑祐次氏蔵）

落款に「明治十八年二月……土佐光起図翠山樵写」とあるので、南画家翠山の人物画かとうなづけるが「翠山写」、だけだったら、南画家の描



青木翠山筆　楠公父子図（後閑祐次氏蔵）

いた歴史人物画とは思えない。四十四歳の作だが当時片眼は失明していたのに、土佐派の筆意を見事に模写している。ほかにも土佐派の花卉人物の彩色画とまごうほどの翠山の作品を見ているが、筆技の幅広さと巧みさを示す一作である。

青木南湖筆　山水図

絹本着色　軸丈一四四　幅七一センチ　（後閑祐次氏蔵）

落款に「煙衣南湖」とある。

江水に沿って山々、樹林、点在する家々を配し、上部に田園、主山を描き、平遠の広々とした風景の中に雅趣をただよわせた絵である。しかし近景の針葉樹が、広葉樹の大きさにくらべ、あまりにも小さく、いかに胸中の山水画とはいえ、不自然さを感ずる。

春木南湖は谷文晁、木村巽斎、清人費西海に学び幽石、烟霞釣叟、呑墨翁の別号を用い、文晁と共に天下の二老とも称された。

青柳琴僊筆　前赤壁図

絹本着色　丈一三七　幅五二センチ（後閑祐次氏蔵）

大正五年、五十歳の作。渋温泉時代だが右側に赤壁の断崖を独特の皺法で描き、彩色も鮮やかである。上部左寄りに前赤壁賦全文を書いているが、絵との調和を乱さない筆意、画面の一部として重要な位置を占めている。清風おもむろに吹く江上の情趣が流れる中で、主人公の蘇東坡が足を止め、客を舟にいざなう姿を写し出し、有名な赤壁舟遊の序曲の響きを伝えているような図組みである。

青木南湖筆　山水図（後閑祐次氏蔵）

青柳琴僊筆　前赤壁図（後閑祐次氏蔵）

青柳琴僊筆　秋景山水図（後閑祐次氏蔵）

景の中で、棋を楽しむ高士を点景に配した。師児玉果亭の許へ白根―渋峠を越して通っているころの作で、師の筆致によく似てはいるが、すでに琴僊の画境の一面がうかがえる。

井上無蓋筆　万歳図

紙本淡彩　丈五八　幅二九センチ（後閑祐次氏蔵）

無蓋は僧侶で、画人ではないが南画風の山水、花卉、虫禽など風趣の絵をかき残した。青木翠山は少年時代にこの無蓋に学んだ。

沼田市西原新町浄土真宗大谷派平等寺二十一世の住職で僧名は恵純、慶応四年九月十八日入寂した。

この絵は軽妙な筆意で飄逸滑稽な姿態、表情を描写している。無蓋の心の中の一端を吐露した作ともいえよう。とくに落款の書がよい。

児玉果亭筆　人物図

絹本着色　丈一一五　幅四三センチ（後閑祐次氏蔵）

珍しい写生風の画である。果亭は信濃の人。佐久間雲窓、前田暢堂、

井上無蓋筆　万歳図（後閑祐次氏蔵）

青柳琴僊筆　秋景山水図

絹本着色　丈一五八　幅七一センチ（後閑祐次氏蔵）

明治三十八年、数え三十九歳の作品。品よく燃ゆる紅葉に彩られた風

児玉果亭筆　人物図（後閑祐次氏蔵）

田能村直入に師事し、遂に南宋画の蘊奥を極めて独自の画風を完成した。渋温泉にこもり、大正二年七十三歳で没した。辺地に遁世しながらも隠然たる画人であった。

この画は明治二十年代、門弟の琴僊が郷里月夜野の名家三人の懇望を伝え、琴僊の写生をもとにして描いた画像である。上部に後閑仁右衛門、下の右は小野善兵衛、同左は真庭巳弥太で、よく似ているという。

滝和亭筆　双鶏図

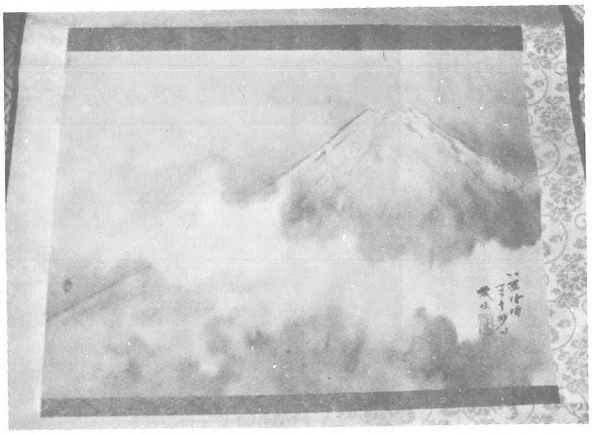
絹本着色　丈一二三　幅五二センチ（増田徳治郎氏蔵）

「丙戌秋日…和亭生」とあり、明治十九年五十四歳の作。南宗画の巨匠といわれた和亭の絵としては当然ながら、技法、構図、気品ともに秀れた図である。岩上に威をみせる雄鳥、岩の下には雌鳥を配し、背景に数本の竹を描き、鳥の生気と風趣とが融合し、さわやかな絵となっている。

月夜野町小川島の林青山が、和亭に師事したので、青山を介して求めたものであろう。

和亭は天保三年江戸に生れた。大岡雲峰、長崎の鉄翁に学び清人陳逸舟、華昆田らと交わり、京、南海を歴遊して江戸へ帰り、一時幕府に仕え、北陸の勝地を十余年歴遊した。明治六年新政府の命で大作を海外展

滝和亭筆　双鶏図
（増田徳治郎氏蔵）



児玉果亭筆　富士山図（増田徳治郎氏蔵）

滝和亭筆　一品当朝図（原沢ツヤ氏蔵）

に出品、以来各博覧会、展覧会に名作を発表、帝室技芸員に挙げられた。明治三十四年九月、六十九歳で病没した。

滝和亭筆

一品当朝図

絹本着色　丈一三〇　幅五七センチ

（原沢ツヤ氏蔵）

海浜の二つの小岩の上に双鶴を、巧みな筆で鮮やかに描き、左上部に老松の一枝を配した構図の妙趣は、追随を許さ

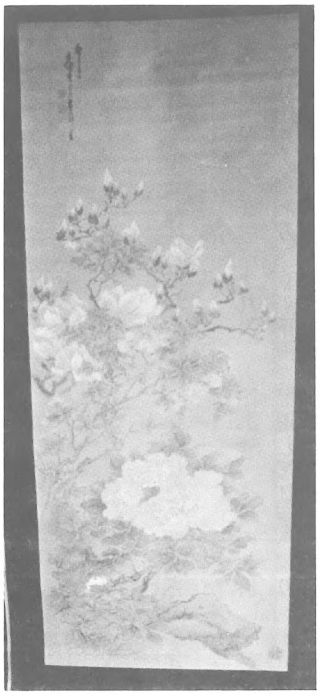
ないものを感ずる。下部から中央部まで静かに流動する波の筆致は、洋々として果なき大海の深さと瑞色を、如実に表現している。さすが南宋派の名家の作であり、高い格調が漂っている。

児玉果亭筆　富士山図

絹本墨画　丈四三　幅六〇センチ（増田徳治郎氏蔵）

果生の落款で、老境に入っての作であろう。中央に雲煙を切り、山頂に雪を冠し、悠然とそびゆる富岳の姿を、僅かの線を濃淡墨で描きあげている。絹本なのに、紙本のようなうるおいある墨気と、変転瞬動する雲煙のさまを見事に表現している。

果亭の門に学んだ月夜野町の青柳琴僊を通じて入手されたものである。



青柳琴僊筆　玉堂富貴図
（増田徳治郎氏蔵）

青柳琴僊筆　玉堂富貴図

絹本着色　丈一三五　幅五四センチ（増田徳治郎氏蔵）

落款に庚子春日とあり、明治三十三年、三十四歳の作である。白牡丹、海棠、白玉蘭を巧みに組み合わせ、精緻な構図と調和ある彩色は見事である。花卉の絵は晩年の枯淡さよりも、五十歳までの作に生気あふるる秀作が多い。

林青山筆　西園雅集図

絹本着色　丈一四八　幅七三・五センチ（竹内貞郎氏蔵）

林青山筆　西園雅集図（竹内貞郎氏蔵）

青山の代表作の一つである。落款だけで制作年代は未詳だが壮年期の作であろう。

弘化四年（一八四七）月夜野町に生れ、十歳で新治村の南画家原沢豊山に入門、青年時代に同町如意寺の格天井の絵をはじめとし、太田の大光院、関東信越仙台方面を歴遊し、四十三カ所の社寺の画を描いたという。明治二十六年シカゴの万国勧業博に出品、翌年貴族院議員本間千代吉の知遇を得、東京の本邸に起居、滝和亭に師事した。同三十九年日本美術絵画展出品作は宮内省の買上げとなる。六十四歳で帰郷、昭和九年一月、八十八歳の高齢で他界した。

山水、花鳥、人物を能くし、多くの作品を遺した。この画は穏雅な筆致ながら、竪長の幅中に丘岳樹林流水を巧みに配し、多くの雅人を適所に描き入れ少しの繁雑もない。各所に集った人々の談笑は他の人々の和気を煩わすことなく、高雅な情趣を画面いっぱいに展開している。和亭に学び、一流画人の作に多く接した結果の所産であろう。けだし傑作である。

林青山筆　人物図

絹本着色　丈九九　幅三三・五センチ（本木庄司氏蔵）

南画手法の人物画は多いが、これはまさに歴史人物画像で、青山の画域の一端を見せる秀作。烏帽子形の兜、冑を着し、定紋をうった南無妙法蓮華経の幟旗を背にして、床几に倚った姿は、あたりを払う威厳を備えている。兜の前立ちは桔梗の花、胴と六字の旗には〇形の紋、加藤清正像であろう。面貌にも似る太く濃く巻きあがった眉毛、かっと開いた大きな活眼、鼻髯あごひげ、勇将を生き写しにしたような名画である。

本木氏は他に青山筆「竹林七賢人図」六曲屏風を蔵している。一面一枚がきで、左端下部に「上章（庚）困敦（子）孟春」とあり、明治三十三年正月、五十四歳の作である。

林青山筆　波に鯉図
（林　光太郎氏蔵）

菅井梅関筆　月夜雪梅図
（池田正雄氏蔵）

林青山筆　人物図
（本木庄司氏蔵）

林青山筆　波に鯉図

紙本着色　丈一一三　幅四〇センチ（林　光太郎氏蔵）

青山が自宅に遺した八十歳以上の作品十余点のうちの一作。王洋明図、行年八十翁の落款があり、大正十四年の筆である。模写であろうが、生気あふれる青年の作を思わせる。跳りあがらんとする大きな鯉、力強い波の筆勢、波頭の巧みな描写、落款がなければ、これが八十歳の老南画家の絵とは見られない力作。利根沼田の画人の作品中、異色の一点である。

なお同家に伝う蓬莱山図（紙本着色、丈一二九、幅四九センチ、八十五歳の作）も会心の一作であろう。ほかに十三仏図（八十二歳作）、楊柳観音図、雪中鴉図、花卉図、富岳図、明月狸図などがあり、それぞれ青山の画境を示している。

菅井梅関筆　月夜雪梅図

紙本墨画　丈一三六　幅四四センチ（池田正雄氏蔵）

梅関の作としては特に秀れた絵ではない。雪の点だけ胡粉を用いている。上部に少し虫なめがある。

狩野柳伯筆　松下高士図

絹本着色　丈二七　幅三八センチ（真庭唯芳氏蔵）

柳伯は号で、名は久米次郎。氏信の三男（また秀信の子・弟とも伝う）

青木翠山画　城光同句書（阿部卓蔵氏蔵）

兄柳雪の養子となり、享保七年（一七二二）五十七歳で没した。

この絵は二百七十年以上も前のものとすれば画面もさびず、保存もよい。特に秀れた作品ではないが、格調がある。

軸の裏面に「正三位勲三等子爵本多忠敬是を所蔵、嫡子本多忠昭相続して所持し、三河岡崎の旧臣岸上敬一君に贈る。昭和六年一月七日」と記した書片を添付してある。

青木翠山画　城光同句書

紙本墨画　丈一一一　幅五六センチ（阿部卓蔵氏蔵）

翠山の鉢植の竹、石牡丹の絵に、俳人光同が「庭掃の子が詩をうたふ牡丹哉」の句を書いた合作。乙酉秋日とあり、明治十八年の筆である。翠山は眼疾で片眼を失明していたが、竹の幹、多くの葉を、また牡丹の花と葉、葉脈など運筆も整然としており、濃淡の墨気は冴え、清爽の趣が漂っている。

翠山については別に記すが、城光同は江戸末期から明治にかけての利根沼田の俳諧の中心人物となった俳人である。文政七年（一八二四）能登国七尾に生れ、上洛して花守岱年に学び、諸国の俳人を訪れ、万延元年、昭和村森下の綿貫由義の家に足を止め、沼田に居を定めた。明治七年東京の春秋庵幹雄の俳諧明倫社結成に参画、大講議となった。

同十一年内務省が、幹雄、永機、金羅に対し俳諧について諮問した際、三人は俳諧の興亡にかかわる重大事として光同と同道、光同は俳諧の精神、庶民の教養と俳諧について詳しく答申したという。

光同は堕落した俳諧を救うため古池教会を設立、学ぶものは長野、新潟にまでひろがり数百人に及んだ。著書も多く、同二十四年五月、六十八歳で没した。その流れは今もつづいている。

利根川月海筆　鐘馗図

紙本淡彩　丈八二　幅二八センチ（池田正雄氏蔵）

月海は新治村の天台宗千手院の僧、維新後廃寺し神職に転じ、明治五年没した。年七十一歳。

俳諧、漢詩を学び、南画を新田郡の柿沼山岳に習った。山水図も画いたが、竹や鐘馗の絵を得意とした。専門画家でないので筆意も稚拙だが、郷土人の作としてあげておく。

小栗十洲筆　白竜図

絹本墨画　丈一〇一　幅二八センチ（小野利夫氏蔵）

竜を白描にし、地をやや濃墨で塗った類形の少ない図柄で筆致も良い。

利根川月海筆　鐘馗図
（池田正雄氏蔵）

落款印に小栗とあるので小栗光胤（字は万年）の作であろう。明兆派宗栗の裔で京都に生れ、若狭国に住み、詩も能くした。
左下隅に「元信」の遊印があるが、これは後代に捺したものであろう。

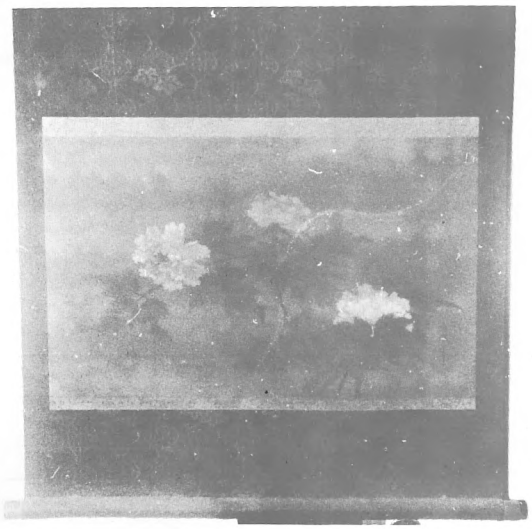
新治村

狩野洞春筆　牡丹図

絹本着色　丈三〇　幅六〇センチ（片野一司氏蔵）

色彩もよく格調の高い絵であるが、焚火の煙ですすけているのが惜しい。

洞春は初め兼信、のち義信、良信、政信と号をかえ、更に福信と称した。また守静斎とも号した。洞雲の養子となり駿河台狩野の二世を継ぐ。



狩野洞春筆　牡丹図（片野一司氏蔵）

享保八年（一七二三）歿した。

片野氏は猿ケ京関所役人の一人で、片野文志という役人が入手したと伝えているが、他にも古画を所蔵している。

筆者不詳　十六善神図

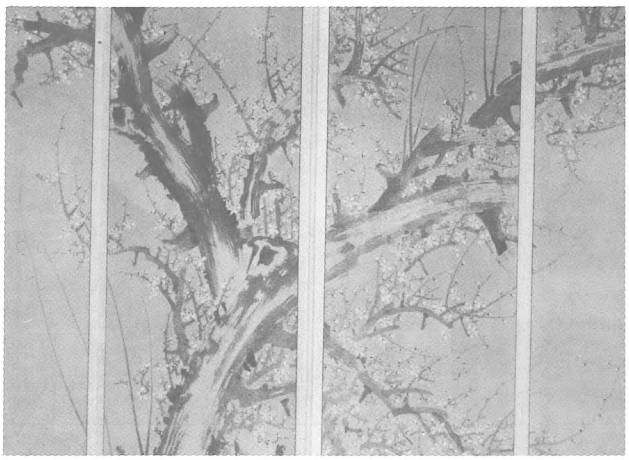
絹本着色　丈一三〇　幅五五センチ（泰寧寺蔵）

極彩色密画で、元文元年（一七三六）十一月、当時東峰須川の檀家柏屋河合作右衛門が、大般若経六百巻と共に寄進したと伝えている。

図柄は川場村吉祥寺ほかにあるものと大体同じだが、制作年代は元文

筆者不詳　十六善神図
（泰寧寺蔵）

金井烏洲筆　雪樹双鴉図
（三浦浅一郎氏蔵）



林豊山筆　月夜梅花図（原沢保之助氏蔵）

滝和亭筆　富貴万年図
（三浦浅一郎氏蔵）

以前と見られる。

金井烏洲筆　雪樹双鴉図

紙本墨画　丈一二二　幅五七センチ（三浦浅一郎氏蔵）

雪の積った枯木の枝にとまった二羽の烏の墨気の強さ、雪をかむった岩の描線の厳しさ、空間を塗った淡い墨色の冷たさに雪暮の寒さが感じられる。岩の影に淡彩一茎の水仙花を描き、季節を現わしているのも見のがせない。温潤な筆致の山水画と対照的な作品である。

滝和亭筆　富貴万年図

紙本墨画　丈一三五　幅四三センチ（三浦浅一郎氏蔵）

富貴万年之図　倣秋穀之本　和亭　と落款している。富貴は牡丹の花を指す詞だが、この画は薔薇と二羽の雀を描いている。岩の下の一本は濃墨で、上の一本は淡墨で、没骨附立の妙技を発揮した好作品である。

林豊山筆　月夜梅花図

紙本着色　六曲屏風　丈一二一・五　幅二五七センチ（原沢保之助氏蔵）

郷土人にしか知られていないが、豊山の代表作である。専門画家の梅花図に比べても遜色ないであろう。

筆意、構図も秀れているが、ドウサ引きした紙のために、雄勁な筆勢で描きながら、樹幹の墨気が浅く、潤いがなく生気が薄い。

しかし大小の枝の筆致は力強く、寒風の中に生々と伸び、春にさきがけて開き清香を漂わす花の、凛然たる姿を見事描き出している。中央上部に円い大きな月を残し、夜陰の空を淡墨で冷え冷えと染めた手法、一樹で広い画面を構成した豊山の気宇が感じとれる。戊午仲秋日（一八五八）の落款があり四十八歳の作である。

林豊山筆　梅花図

紙本着色　六曲屏風　丈一三八　幅二七八センチ（富沢貞義氏蔵）

月夜梅花図と一対をなす構図で、同じ安政五年仲春（旧暦二月）の作である。

右から左へ枝を張る一樹で、広い画面を構成している。筆致は月梅と

林豊山筆　梅花図（富沢貞義氏蔵）

林青山筆　韓信出胯下図（富沢貞義蔵）

同じだが、枝々の姿は対照的で、屈折せず、軟かく円曲させ、筆意の中に弾力を秘めて、梅樹の若枝の心を描写した好作といえよう。豊山は文化八年新巻（現在は新治村新巻）に生れ、渋川の豊秀に画を学び、片品村の萩原賢和に書を習った。鋳金、木工、印刻を能くし、また華道も極め、二代貞鳳斎一徳といい、後輩に教え、明治九年十月、六十六歳で没した。

林青山筆　韓信出胯下図

絹本着色　丈一〇四　幅四一センチ（富沢貞義氏蔵）

沈南蘋図意、明治二十八年吉久月吉晨、とあり、四十九歳の作である。その三年前のアメリカシカゴの万国博覧会に出品、好評を博した青山が、自戒自重の意中を写した絵とみられる。

巨体に剣を負うた少年韓信でなく、無頼者の股をくぐらんとする姿を描いた。その横顔には、他日漢の高祖皇帝に仕え、遂に項羽を滅して、楚王になる韓信の、若かりし日の面影が、わずかに見られる。

木内晋斎筆　菅公図

紙本墨画　丈一一二・五　幅三〇センチ（本多一郎氏蔵）

晋斎の名は郷土人に知られているが、山水図に比べて人物画は巧みでない。この絵も素人画のようである。

上部に「心だに誠の道にかなひなば　いのらずとても神や守らむ」の

木内晋斎筆　菅公図
（本多一郎氏蔵）

和歌を題し、一千体の内百二十二号、明治三十五年二月、と落款し、六十五歳の作。一千体を画かんと欲し、これが百二十二枚目で、あと何枚画いたか不明だが、三年後の三十八年に六十八歳で没した。

晋斎は入須川の人で父は村の手習師匠。晋斎は吾妻郡原町の木村翁と新田郡の柿沼山岳に画を学んだ。詩文書篆刻も能くし、明治の学制施行で教壇に立ち、病んで職を辞し、時に畑を耕し、雨読作画の生涯を閉じた。

木内晋斎筆　蓬萊山水図（本多一郎氏蔵）

木内晋斎筆　蓬萊山水図

紙本淡彩　丈一三六　幅六二センチ（本多一郎氏蔵）

晋斎は青苔、日厚楼、蕪坪、巻石道人など多くの別号を用いたが、この絵は蕪坪と落款している。ことさらに蓬萊山らしくない南画山水図で、老松の下に一株の梅花を添え、流辺の坡上に亀を遊ばせ、空に鶴を舞わせた。主山の筆致も雅趣をふくんでいるが、老松との距離がなく、近景の弱いのが惜しい。

伝・木内晋斎筆　山水図（神保武夫氏蔵）

伝木内晋斎筆　山水図

紙本着色　六曲屏風　丈一三〇　二九八センチ（神保武夫氏蔵）

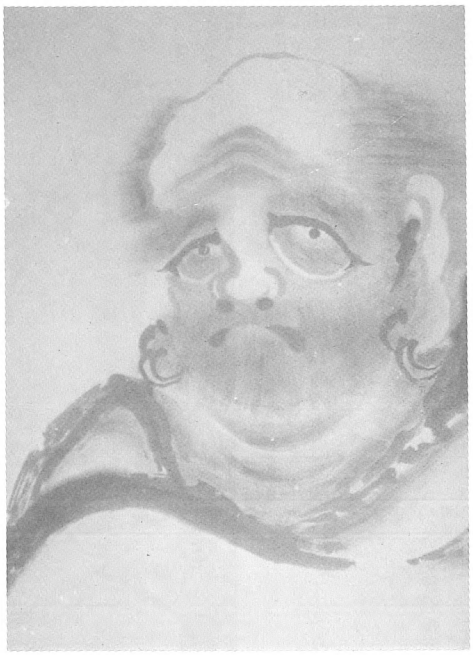
無落款であるが木内晋斎筆と伝えている。右隅の雲煙、とくに前景松林のあたりまで、幅広く直線的にはっきり描き込んだのが目ざわりだが、一応整った構図である。樹林の筆意、山の皺法、点苔に温潤の趣きがあり、晋斎の画想がうかがえる。

しかし梅か桃か、胡粉を打つた樹、紅色の花をつけた樹、緑樹にまじって黄葉樹を描き、春夏秋の季節が同居した絵である。ために完成したが、落款を書かなかったのではあるまいか。

同上　部分

観応道察筆　達磨図

紙本墨画　丈一三一　幅九一センチ（原沢宣也氏蔵）



観応道察筆　達磨図（原沢宣也氏蔵）

道察は月夜野町の名刹玉泉寺三十二世の住職で姓は荻野、越後高田藩士の子に生れたが片足不自由のため出家、新治村広福寺で修行、吾妻都の宗福寺、ついで月夜野町の法泉寺、常恩院を経て明治十二年玉泉寺に入山、寺の復興に尽した。

書画、華道、篆刻に秀で表具も能くしたが、とくに達磨図に秀作があり、この絵はそのうちの一点である。

昭和村

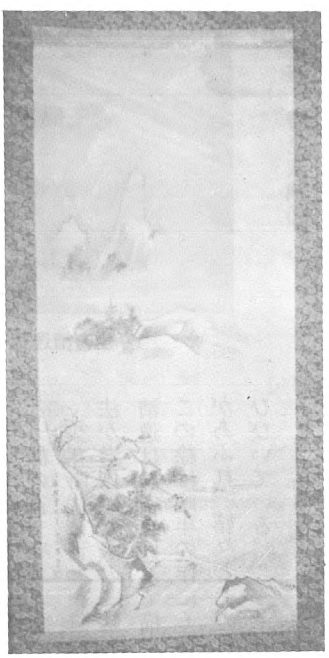
上野探雲筆　夏冬山水図

対幅　絹本着色　丈九八　幅四三センチ（林　幸勇氏蔵）

落款に「行年八十五歳法眼探雲筆」となり、文化六年（一八〇九）の作で筆意に枯淡の趣きが出ている。

形にはまった狩野派山水対幅の構図である。近景はやや密に、中景は雲煙茫々、その遠方に隠見する主山を伝統の技法で描き、無限の天空の広さを描かずして画中に取りこんでいる。夏景の墨色との調和もあろうが、冬景は江水を淡墨にして煙霧と融合させ、冷たさのない絵となっている。上部に、すす水の汚れがあるのが惜しまれる。

上野探雲筆　夏山水図
（林　幸勇氏蔵）



上野探雲筆　冬山水図
（林　幸勇氏蔵）

筆者不詳　黒龍図

紙本墨画　丈一三六　幅六一センチ（倉沢勝二氏蔵）

雅印だけで筆者不詳。狩野元信と伝えているが別人の作である。

紙面を濃墨で塗りつぶし、長身をくねらす龍の全姿を精緻の筆技で描

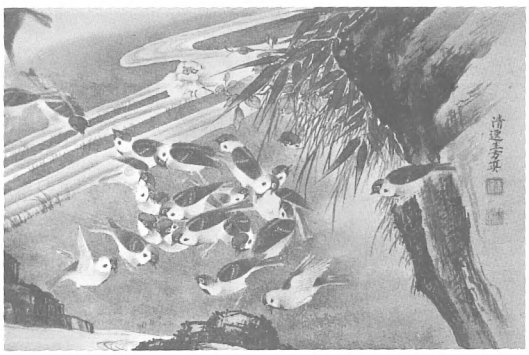
黒龍図（倉沢勝二氏蔵）

生方清逸筆　梅花群雀図（倉沢勝二氏筆）

三十九歳。制作意欲にあふれ、同じ図柄の作を二、三点描いた上で、完成させた。代表作の一点である。

画面の中央から上は一本の老梅で占め、下の流水の辺りには、文字通り雀躍する一群の雀を繊細な筆で描写。梅には十余羽、空にも戯むれつつ舞い降りんとする一群の雀を巧みに描いている。

少年時代に習った狩野派の筆法が岩の皺と水辺に見られる。清逸は群雀を好んで描いたが、この絵は晩年の作にくらべ生気があふれ、嬉々とした雀の声がひびいている。



生方清逸筆　梅花群雀図　部分

いた異色の図である。

沼田の某家にも「狩野元信」の落款ある水墨の龍の絵が二点あり、うち一点はこの絵と似た構図である。

生方清逸筆　梅花群雀図

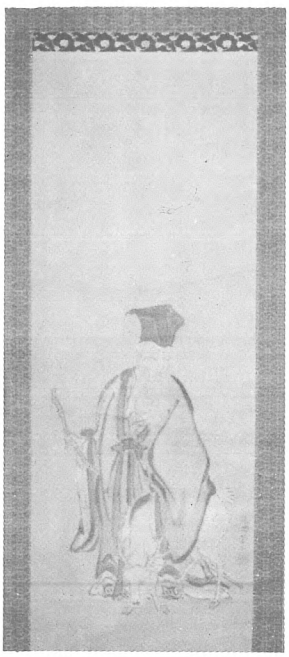
絹本着色　丈一七一　幅八七・五センチ（倉沢勝二氏蔵）

明治二十六年アメリカシカゴの万国博覧会に出品、受賞した作品。時に

燕恪筆　寿老双鶴図

三幅対　丈一〇七・五　幅三八・五センチ（林　厚一氏蔵）

類形の多い狩野派の絵である。燕恪の名は知られていないが、一応見られる作品。（以上　岸　大洞）



燕恪筆　寿老図
（林　厚一氏蔵）

燕恪筆　鶴図（林　厚一氏蔵）

彫刻

役ノ行者像

総高（光背・台座共）六九センチ

白沢村生枝一、二二七　観音寺

この役ノ行者（役ノ小角）像は、左右に前鬼・後鬼をしたがえた像で、鎌倉時代につくられた像の形式を踏襲したものであるが、修験の霊地の少なくない当県にあっては、珍しい作例である。役ノ小角は奈良時代の人物であるが、その像の最も古いもので、現存するのは吉野山桜本坊のものである。

観音寺のこの像は、寄木造、彩色像で、台座の裏に

役ノ行者像（観音寺）

御室大仏師　法橋祐敬

の墨書銘があるが、これがどのような仏師であるのか、見当がつかない。ただこうした仏師名が、わが国彫刻史研究の上に新しい資料として紹介されることは、貴重なことで、詳しくは今後の研究調査をまつことにしたい。

毘沙門天立像

木造　総高（台座共）二六・五センチ

白沢村高平一、四八二　雲谷寺

木造の小像であるが、像身を青、衲衣は青、朱、黒、金などで彩色され、怒髪は赤、邪鬼、台座にも色がほどこされ、光背の半分は欠失している。

木造の厨子に納めてあるが、厨子の背面に

明和二酉正月吉祥日　施主要天

と刻銘がある。

明和二年（一七六五）像と厨子と同じ頃につくられたものと思われる。

地蔵菩薩半跏像

木造　像高　六〇センチ

白沢村高平一、四八二　雲谷寺

寄木造、玉眼、左足を踏みさげた、いわゆる半跏の形式の地蔵像である。右手に錫丈、左手に宝珠をささげ、体に金泥を塗ってある。右足先は衲差しであるが、現在は失われている。

底部後のところに墨書銘がある。

□時元禄十五壬午年十一月日

現住供普再修之

これは元禄十五年（一七〇二）の修理銘であることがわかり、像の造立は室町時代までさかのぼるものと考えられる。

菩薩立像

木造　総高　一〇六・五センチ

片品村東小川大沢　観音堂（通称大御堂）

ヒノキの一木造で、仏身の表面には、彩色がほどこされていたが、現在では一部に白色下地を残すのみで、ほとんど剝落している。とくに上半身の白色下地は鮮やかにそのことを物語っている。

彫眼、宝冠をのせた天冠台と称する頭の周縁に切りこみの装飾が明瞭にのこっており、高髻の表現などから、菩薩であることを示し、伝承では観音菩薩と称せられている。

左手、肘先が欠失しているが、もとは別木でつくられた腕を差しこんであったものであろう。

像の姿は、全体的に優雅で、体軀に比して頭部が小さく、ほっそりとしており、他の仏像にくらべて、均整のとれた容姿は、劣るものではない。

ただところどころに虫食いのあとがあり、早急な処置がのぞまれる。

像の左肩前のところに、木屑漆（こくそうるし）をもりあげてあらわした可憐な花文様の付着しているのが注目される。土文の技法は鎌倉地方の仏像にも例があるが、この像の文様は土文ではなく、漆を材料にした特殊な技法が用いられているようである。なんの花を文様化したのか明らかでないが、典雅な像の姿に、いかにもぴったりとした花文様である。

像の足の部分は、足柄がついていて、台座にさしこむ形式になっている。

菩薩立像（観音堂）

台座は木造で、形式は中央の仏像のそれに則ったものであるが、破損していて、欠失した部分も少なくない。

光背（一三五・五センチ）は舟型光背で、頭光のところに、同心円をあらわし、光背下部に菊座があり、二本の枘で台座にたてるようになっている。材は板を二枚はぎあわせている。白色下地のあとがあり、もとは彩色してあったものと思われる。光背の中央やや上によったところに、枘孔がある。また下の部分に花文様があり、その形式から、像と同時につくったものであることがわかる。

光背表面に左の墨書がある。

□色仏所和泉諸旦那現世安穏後世善処為也
皆文明拾八年丙午三月十一日花押

これによって、文明十八年（一四八六）に仏像と光背に彩色をほどこしたことがわかるが、この時仏像を造立したと考えるには、もっと検討を要する。

別に観音像の棟札があり、最古のものは、正和三年（一三一四）である。観音堂建立の時、本尊であるこの仏像をつくったとすれば、彩色をした年代よりもさらにさかのぼることになる。

仏像や光背の様式からみて、十四世紀前半とみても、決して無理のないことであるし、観音堂の造建のとき、この仏像をつくり、彩色が剝落したので、文明十八年に、塗りなおしたとするのが、自然な見方であると思われる。（昭和四十八年十一月二十四日に県指定重要文化財となる。）

薬師如来坐像および月光菩薩立像

木造　像高　薬師　二四センチ
　　月光菩薩　五〇センチ

川場村川場湯原　武尊神社

もとは薬師三尊の形式をとっていたもので、現在脇侍の日光菩薩像を欠失している。

薬師の光背裏面、黒漆塗りの上に朱筆の銘文があり、月光菩薩の光背

にも銘文がある。

両者をあわせてよむと次のようになる。

享保十四年己酉　施主　角田惣兵衛

同　新□門

同　彦兵衛

これによって享保十四年（一七二九）につくられたことがわかるが、どういういわれで当神社に安置されるようになったかは、明らかでない。

仏種慧済禅師像

木造　川場村　吉祥寺

吉祥寺開山の像である。寄木造、玉眼嵌入、頭部は差首、胴部と膝前は別木ではぎ、着衣を前に垂れさげた部分も、別木をよせてつくってある。

鎌倉時代の写実精神をうけついだ、堂々たる作風を示し、頂相彫刻としてすぐれた作例である。

像の前面に垂れている着衣の裾の裏側に、左の墨書がある。

就于止々菴炎上

本尊御影焼却

三ヶ年内奉造立

五代法孫庵主玉峰

泉珎座元者□同

京都七条住侶自

運慶十三代子孫

刑部卿法眼作焉

天文八年　己亥

夷則上澣如意

珠日書搦

これによると、止々庵が炎上、本尊、御影が焼却、五代庵主玉峰のとき、三カ年をついやして再建、この肖像彫刻もその時つくったもので、造立年代は天文八年（一五三九）であることがわかる。仏師は刑部卿法眼とあり、京都七条仏所に属し、運慶十三代の子孫と明記してあることも注意をひく。

広円明鑑禅師像

木造　総高　八三センチ

川場村　吉祥寺

開山像と同じ頃つくられたものらしく、頂相彫刻の形式にのっとり、鎌倉彫刻の写実的傾向をうけついだ高僧像である。

胎内に納入文書があり、細長い和紙に墨書された金剛経の経文と思われる。

◇

なお、本寺境内にある法泉殿の本尊釈迦三尊像は、鎌倉時代の宋風の彫刻の影響をうけた作例で、法量は丈六像の大きさを有し、そのため、詳しく調査することができなかったが、かなり優れた仏像とみうけられる。

この本尊に比較されるものは、鎌倉の禅刹にもみられるところで、吉祥寺が鎌倉五山の建長寺派に属するところからも、鎌倉五山の造像と深い関係のあることが推察できる。

大日如来坐像

木造　像高　六〇・五センチ

川場村川場湯原太郎　大日堂

一木造の、素人のつくったような、素朴な像である。宝冠・白毫に金箔をおき、両眼、唇には彩色があり、いずれも後世のものであろう。ただ木の扱い方に、細い配慮がなされ、鼻の部分に、木目の中心がくるように、木割りがされている。

像の背面に左の墨書銘がある。

造立大日一躰　願主道空
康安二年九月日

これによって康安二年（一三六二）につくられたことがわかる。鎌倉時代末の作。

大日如来像（大日堂）

聖観音坐像

木造　像高　六七センチ　台座高　二四センチ
月夜野町大字後閑　明徳寺

等身像の坐形の観音像で寄木造、相貌は端正で、全体に均整がとれている。

像の表面は黒くなっているが、金箔がおいてあったのか、彩色されていたのか不明である。両頬の張り工合、写実的な手法を用いている点など、鎌倉末期頃までさかのぼった制作と考えても無理はないと思う。

光背、持物、台座などは後補である。（永井信一）

聖観音像（明徳寺）

建造物

はじめに

㈠ 調査の対象

群馬県教育委員会では昭和四十三年度に県内全域にわたって、各地に残る古い民家建築の調査を実施しているが、他の古い建造物についての県内全域にわたる詳細な調査はこれまで行われていなかった。そこで、この度の文化財総合調査における建造物の調査では、民家を除いた建造物に重点を置いて調査することになった。

調査対象が民家を除いた建造物ということになると、その大部分は神社・仏閣およびそれらの付属建造物である。

㈡ 調査の方法

調査は第一次、第二次の二段階に分けて実施した。

第一次調査は調査の基礎段階としてできるだけ網羅的に、各地に残る民家以外の重要建造物をリストアップすることを目標とした。そのため第一次調査は各地の市町村教育委員会に依頼して調査対象の選定および調査表の記入を行った。

第二次調査は第一次調査でリストアップされた建造物をできるだけ総当り的に現地調査し、その中で特色あるもの、および主に江戸時代中期以前の建造物については、正確な復原平面図、詳細な写真撮影、棟札や普請帳等の記録類を調査し、これらによって建築年代や保存価値を正しく判断できることを目標とした。

㈢ 調査の結果

この度、調査対象地域の建造物をみて廻った結果、神社、仏閣といえども江戸時代中期以前に溯るものは極めて少なく、平均して各市町村単位で一・二棟というところであり、大半は幕末のものであった。

次に第二次調査の結果、特色あるものおよび江戸時代中期以前の建築と認められた民家以外の建造物の名称、所在地、様式の特色や建築年代の概略を各市町村別に記すことにする。（桑原　稔）

調査報告

諏訪大明神社殿

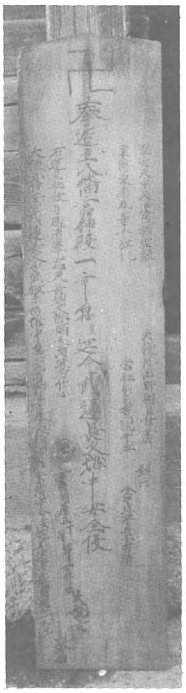
〔写真①〕諏訪大明神社殿

所在地　沼田市大字戸鹿野八〇〇
管理者　星野房治

当社殿は戸鹿野八幡宮の境内に鎮座している。一間社流れ造りのこじんまりした社殿で、現在屋根は鉄板で葺かれているが、当初は板葺であったものと思われる。

社殿内には十枚の棟札があり、「明暦三丁酉年七月」のものが最も古い年号である。次に古い年号のものは左記のような内容が書かれており、「万治元戊戌年拾弐月」の年号が墨書されているから前者より一年遅い年号である。

明暦三年の年号のある棟札は薄い粗末な板に粗雑な墨書があるもの（写真②）で、右に掲げた万治元年の年号のある棟札は分厚い板に墨書がていねいに書かれている（写真③④）。



〔写真②〕明暦３年の年号のある棟札

封多聞　持国封
聖主天中天　迦陵頻伽聲　和光同塵結縁之始
大行事多聞天　哉師文殊菩薩　頭以此功徳　普及於一切　奉行　内田成次
卍（梵字）
奉爾造八幡大菩薩惣哉釈迦牟尼如來　敬白別当　海海
小行事帝釈天　道師弥勒菩薩　我等与衆生　皆共成佛道　大工　大河原熏吉
哀愍衆生者　我等今敬礼　八相成道以論其終
封増長
北上野勢多郡利根庄沼田万治元戊年十二月三日　真田信澄公建立之　広目封

表

北上野国勢多郡利根庄沼田鎮守　千時万治元戊年拾貳月三日

裏

〔写真③〕万治元年の年号のある棟札（表）

〔写真④〕万治元年の年号のある棟札（裏）

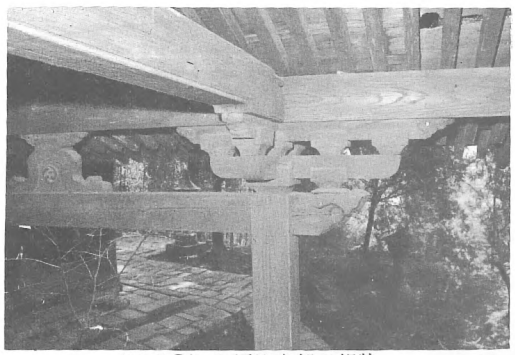
〔写真⑤〕右から４番目のものが再建の棟札、他の７枚は修覆の棟札

社殿造立時の棟札としてどちらが本物であるのか、選択に躊躇するところである。しかし、社殿は沼田城主、真田氏が建立した伝承があり、前述の二枚の棟札にもそれを裏付ける内容が記されているので、棟札の体裁から推察して右に掲げた万治元年のものが社殿造立時の棟札とみるのが穏当であろう。

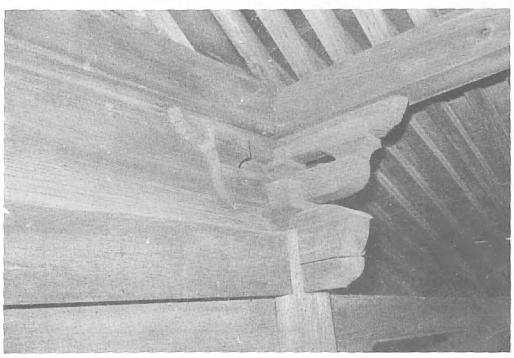
他の棟札は「寛政三年、享和二年、文化九年、嘉永七年、文久元年、明治二十年、明治二十七年」の年号のある七枚がいずれも修覆のものである（写真⑤）。残る一枚の棟札は左記のような内容のもので、これによれば社殿は「天保八丁酉十一月」に再建されたことになる。

天保八丁酉年　八幡山第十世法卯
梵字　奉再建諏訪大明神社一宇氏子安全攸
十一月吉祥日　権大僧都亮勤

社殿を詳細に調査してみると、柱上の組物・木鼻および蟇股、虹梁（写真⑥⑦）、擬宝珠柱（写真⑧）等の手法は明らかに江戸時代前期の様式を示しており、建築全体も飾り気なく質素で落ちついた意匠を表現している。しかし、向拝柱をはじめ繋虹梁、丸桁、地覆、小脇柱、笠木、床下の束等はより新しい用材であり、再建された社殿であることを裏付けている。



〔写真⑥〕向拝柱上部の組物



〔写真⑦〕本柱上部の組物

社寺建築の建替においては建替前の様式を踏襲したり、前身建物の部材をも好んで使用される。このようなところから当社殿は前身建物の組物および部材をできるだけ使用し、その様式を踏襲して天保八（一八三七）年再建されたものであろうと推察する。そして、当社殿の前身建物は残された手法により、江戸時代前期頃の様式が窺われることから古い棟札の墨書の通り、万治元（一六五八）年に造立されたものとみて穏当であろう。以上のようなところから当社殿は天保八年に再建されはしたものの、万治元年頃の様式をつたえているため、建築全体が質素で飾り気のない落ちついた意匠を表現しているものと推察される。

戸鹿野八幡宮本殿

所在地　沼田市大字戸鹿野八〇〇

管理者　星野房治

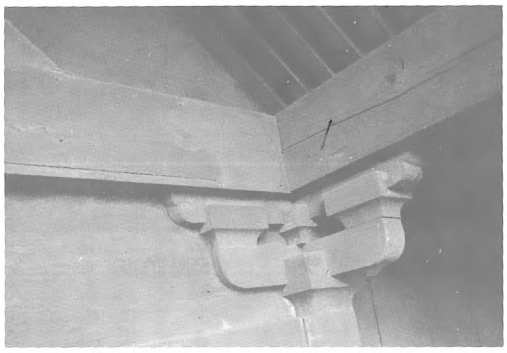
〔写真⑧〕大床上に立つ擬宝珠柱

三間二面の流れ造で屋根は現在鉄板葺であるが元は板葺である。柱上の組物・木鼻・蟇股・絵様彫刻等（写真⑪～⑭）は立派なもので江戸時代初期頃を下らない様式が窺われるところから、前述の諏訪大明神社殿の前身建物と同じ頃造立されたものとみてよかろう。残念なことに当八幡宮本殿は前面の階がもぎ取られ、向拝柱が移動して大床に接し、手挟が根元から切断されている等向拝部における後世の改造が著しい。しかし、

〔写真⑨〕戸鹿野八幡宮本殿

〔写真⑫〕長押上部（極彩色がほどこされている）

〔写真⑩〕戸鹿野八幡宮本殿の正面



〔写真⑭〕本柱上部　虹梁の端都には袖切眉なく唐草絵様は２重半に巻いている。

〔写真⑪〕蟇股および柱上の組物

他の部分は比較的よく残っており、江戸時代初期頃の様式を随所に伝えている。

虚空蔵菩薩堂

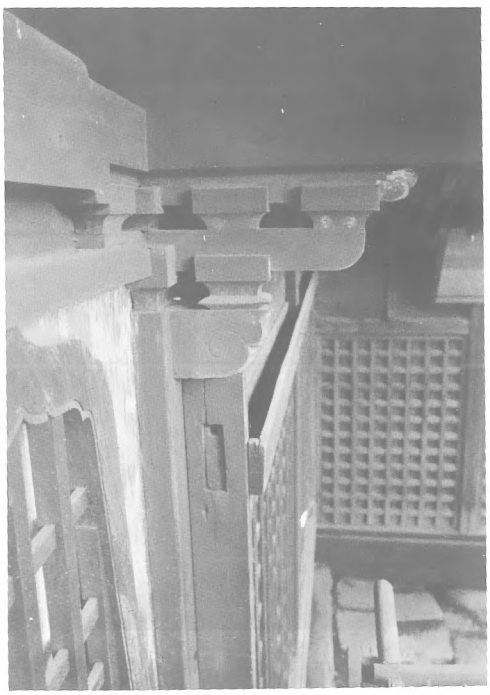
所在地　沼田市戸神町

管理者　戸神町

草葺方形屋根で前面に向拝を持っている。堂内には「享保十三戊申年五月吉祥日」の年号の棟札がある（写真⑯）。堂宇の造立は建築様式から推察して、棟札の通り享保十三（一七二八）年とみて間違いなかろう。しかし、棟札中の「本尊運慶作」の項は疑わしい。

内陣には立派な厨子（写真㉑）が安置され、この中にも棟札があって天明四（一七八四）年につくられたことが明らかである（写真㉒㉓）。厨子としては比較的大きく、唐様を基調とした手のこんだつくりで、天明期の厨子として優れた作品のうちに数えられよう。

堂宇は人里離れた小高い山頂に存在し、近くに管理に適した人家もな



〔写真⑬〕向拝柱上部

〔写真⑮〕虚空蔵菩薩堂

〔写真⑱〕向拝部虹梁および蟇股（裏側）

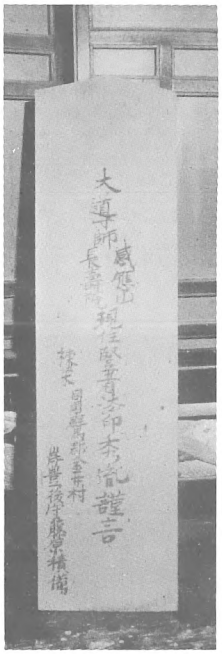
〔写真⑯〕虚空蔵寺棟札

〔写真⑲〕向拝部前面

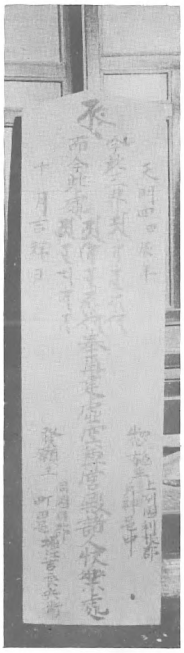
〔写真⑰〕繋虹梁および向拝柱上部

〔写真⑳〕外陣より内陣をみる

〔写真㉑〕虚空蔵寺厨子



〔写真㉓〕厨子内にある棟札(裏)



〔写真㉒〕厨子内にある棟札(表)

いため、堂宇の内外は荒され易い状態になっている。適切な管理の方法が望まれるところである。

観音寺観音堂

所在地　利根郡白沢村大字生枝一二二五

管理者　桑原順澄

当観音堂にはすすぼけた棟札が存在し（写真㉕）、水をかけてはわずかにうきでた墨書を記録するというありさまで、ようやく左記の項目を明らかにすることができた。

観音堂棟札

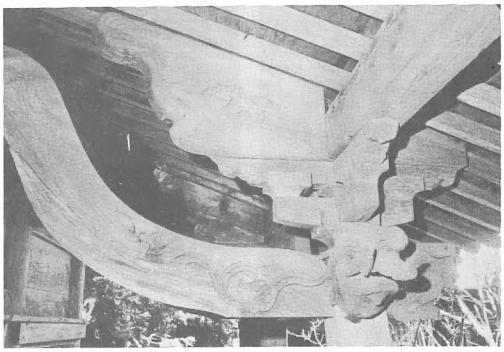
正徳四年　大阿闍梨堅者舜応法印敬白
（梵字）　奉建立聖観世音菩薩為現世安穏後世善生　願主頓誉秀円
大阿闍梨堅者舜盛法印施主

当観音堂は棟札によって正徳四（一七一四）年に建立されたことが判明し、建築様式からみても棟札の建立年代と一致するようである。

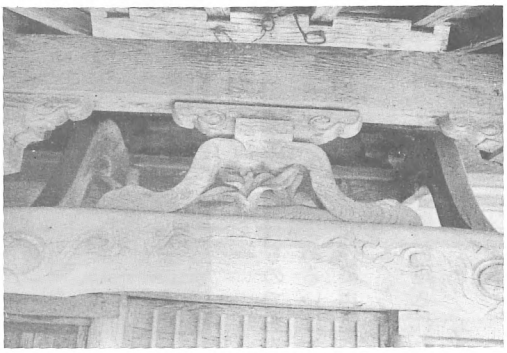
方形屋根の頂に宝珠露盤を置き、現在鉄板葺になっているが、当初は板葺であったものと思われる。また、縁板が四周に廻っているが、後側の縁板は後補のものである。

堂宇は彫刻の乱用および彩色もなく、全体としてじみにまとめられているため、かえってそれが建築全体に落ちつきを与えており、江戸時代建築の特徴である煩わしい感じを受けることがなく、比較的素朴で親しみ易い建物である。

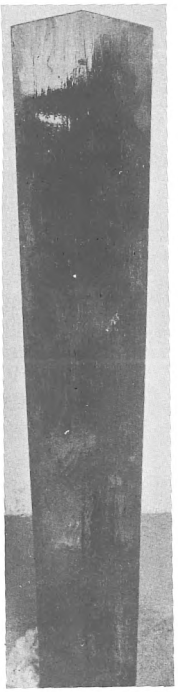
〔写真㉔〕観音寺観音堂



〔写真㉖〕向拝柱上部の組物および手挟・海老虹梁



〔写真㉗〕虹梁上部の蟇股



〔写真㉕〕
観音堂棟札

観音寺護摩堂

所在地　利根郡白沢村大字生枝一二二五

管理者　桑原順澄

護摩堂は前述の観音堂のすぐ手前に建っているもので、やはり黒くすすぼけた棟札が存在し、判読に骨を折った次第である。

宝暦九年　想台山西光院観音寺現住願主
奉再建立護摩堂令法久住参詣面々各願成就祈所
卯月二十八日　三部邑都法大阿闍梨堅者法印全海敬白

護摩堂棟札

〔写真㉘〕観音堂護摩堂

〔写真㉙〕向拝柱上部の象鼻および斗栱

〔写真㉚〕外陣より内陣をみる。

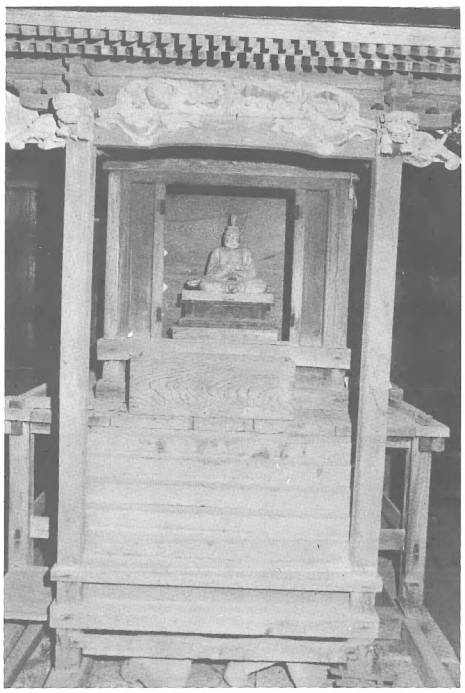
堂宇は棟札によれば宝暦九（一七五九）年に再建されたものである。調査の結果多くの柱に古い貫穴や小舞竹の穴があったり、あるいは古い柱が切断されて釣束として利用されていたりして、やはり移築再建されたものであることが裏付けられた。そして、前述の観音堂とくらべて護摩堂の柱はかなり傾斜しており歪みがひどい。これも移築再建された建物であるゆえんであろう。また、観音堂よりも彫刻は煩雑になり（写真㉙㉚）、極彩色も施されるなど煩雑過飾の感がある。

諏訪神社

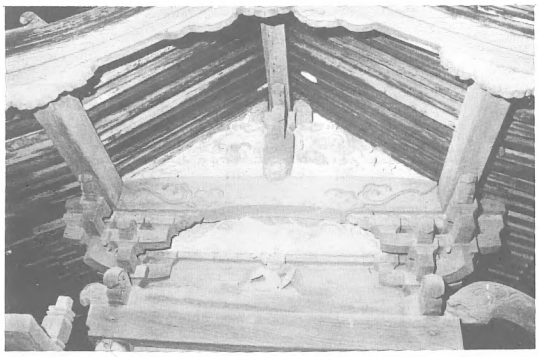
所在地　利根郡利根村平川七七七
管理者　平川区長

当神社には棟札および建築に関する古文書等残されていない。社殿は幕末のもののように胴羽目、小脇、小壁板等彫刻をもって装飾されていないところから、比較的落ちついた感じを与えている。さらに、

〔写真㉜〕向拝部をみる



〔写真㉛〕諏訪神社社殿



〔写真㉝〕妻上部をみる

〔写真㉞〕妻側全体をみる

〔写真㉟〕祭神

向拝柱上部の手挟、象鼻、海老虹梁（写真㉜）および蟇股、脇障子、本柱上部の組物（写真㉝㉞）等より推察すると、およそ江戸時代中期頃の建築と思われる。

神殿内に鎮座する祭神（写真㉟）の台座には「宝永元甲申歳六月吉日、奉御信心……」の墨書がみられる（写真㊱）ところから、当社殿は台座の年代と同じ年、即ち宝永元（一七〇四）年の建築とみて不合理でない。

当社殿は浜床、高欄が破損し神殿の扉が無くなっている。しかし、その他の個所はよく残されており、比較的質がよい。故に、江戸時代中期を代表する「一間社流れ造り」の遺構として貴重である。

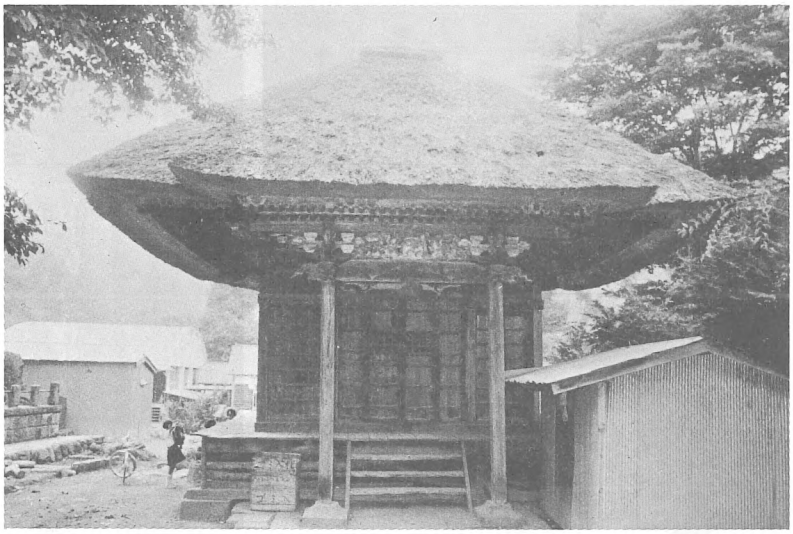
〔写真㊱〕祭神の台座裏にある墨書

薬師堂

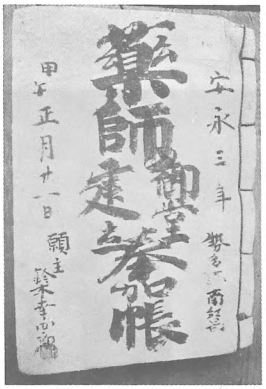
所在地　利根郡利根村日影南郷一七一

管理者　鈴木順一

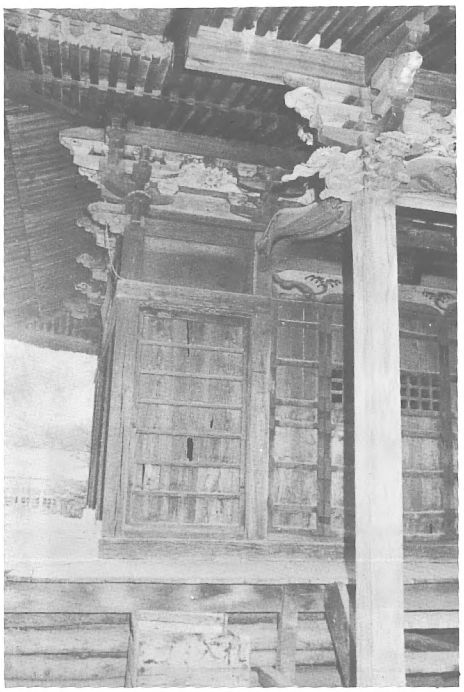
堂宇は管理者の鈴木家に残されている「薬師御堂建立奉賀帳」によって安永三（一七七四）年の建立が明らかである（写真㊳）。草葺で向拝を持ち回縁を設け正面の奥に須弥壇（写真㊷）を安置する。内部の天井は棹縁天井であり、全体の質は優れているとはいいがたいが、建築年代が明確であるので、安永年間およびその前後の建築手法を知る貴重な史料である。



〔写真㊲〕薬師堂（正面よりみる）



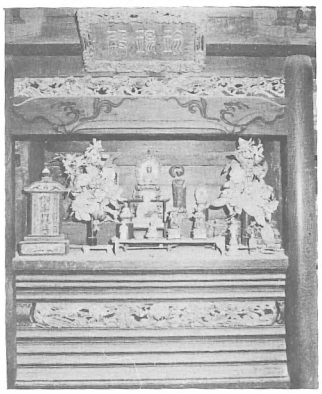
〔写真㊳〕薬師御堂奉賀帳



〔写真㊵〕向拝柱上部を外側よりみる

〔写真㊴〕向拝柱上部を内側よりみる

〔写真㊶〕軒裏をみる



〔写真㊷〕須弥壇

武尊神社

所在地　利根郡片品村花咲山崎

管理者　花咲区長

当社殿内には次のような棟札が二枚、神殿奥の胴羽目に釘打ちされている。

なお、当社殿のすぐ右側に立つ諏訪神社の社殿内にも元禄四年の年号のある同様な棟札が二枚あり、同境内に接して立つ二つの社殿内に同様な棟札が合計四枚存在することになる。

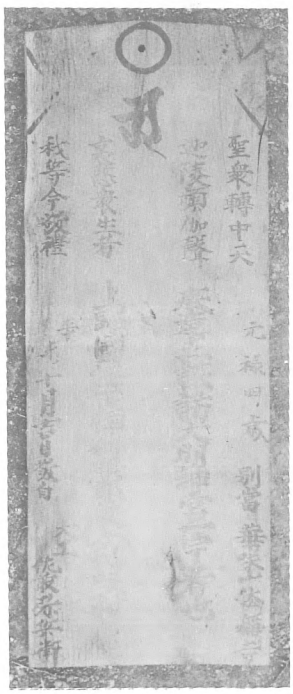
建築様式から、接して立つ二つの社殿を考察すれば、右側にたつ諏訪神社の社殿は明らかに幕末頃の手法であるので、元禄四年の棟札とは直接結びつかない。

武尊神社の社殿は向拝柱上部の象鼻・虹梁、その上の蟇股、海老虹梁（写真㊻～㊽）および本柱上部の組物（写真㊾）、脇障子（写真㊿）さらに全体から受ける感じなどから江戸時代前期を下らない極めて質のよい遺構と思われる。当社殿が棟札のとおり元禄四（一六九一）年の造立とみた場合、建築様式とくらべて建立年代が幾分下降し過ぎるような気もする。しかし、片品村の山深い地に鎮座するという地理的条件を考慮すれば、建築技術の後進性は十分考えられるところである。したがって、武尊神

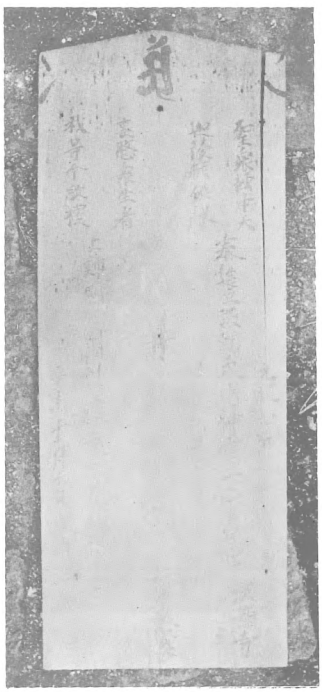
社の社殿は元禄四年に建立されたものとみて穏当であろうと推察する。

当社殿は厳重な鞘堂に覆われていることもあって、破損少なく、本県内に残る「一間社流れ造り」の神社建築として優れて質がよく、建築年代も一七世紀に溯る古いものである。今後早急に火災等の不安のないよう保護対策が望まれるところである。

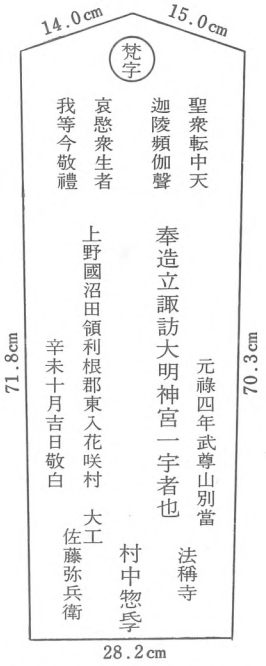
〔写真㊸〕武尊神社社殿



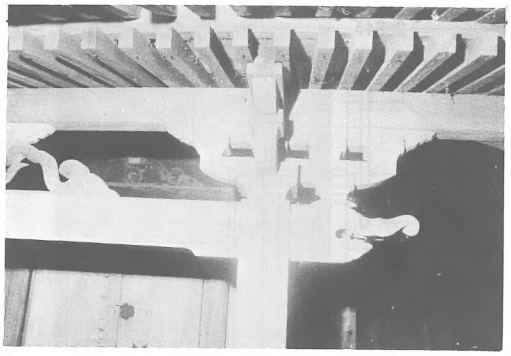
〔写真㊺〕社殿内の棟札(2)



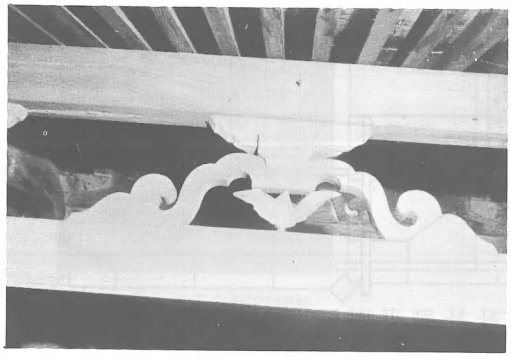
〔写真㊹〕社殿内の棟札(1)



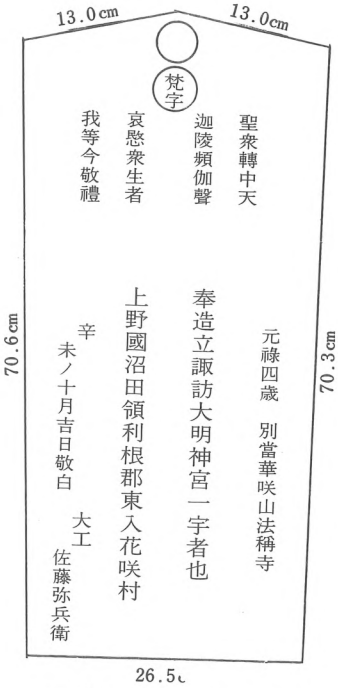
武尊神社社殿内の棟札 (1)



〔写真㊻〕向拝柱上部の斗栱および象鼻



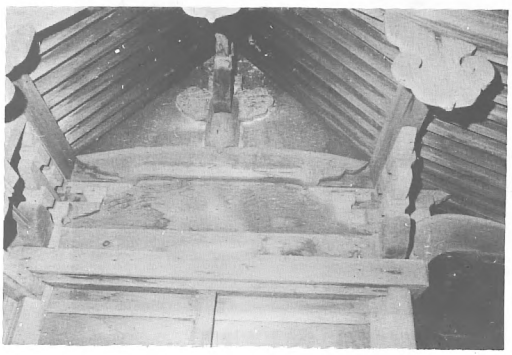
〔写真㊼〕虹梁上部の蟇股



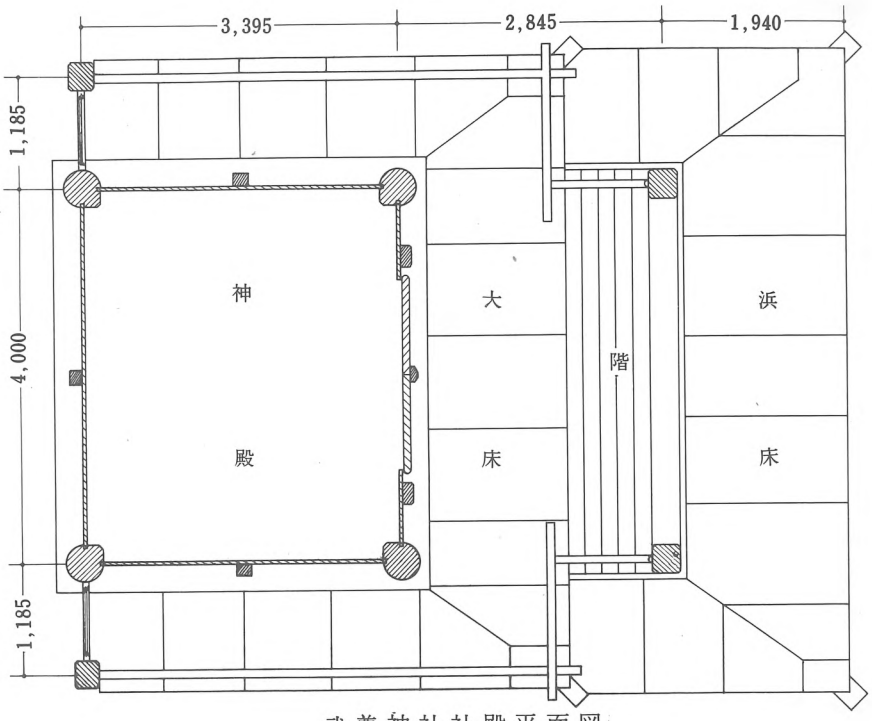
武尊神社社殿内の棟札 (2)

〔写真㊽〕向拝上部をみる。海老虹梁は反りが少なく古風である。

〔写真㊿〕　脇障子をみる



〔写真㊾〕妻側上部をみる



武尊神社社殿平面図

清雲寺楼門

所在地　昭和村
管理者　竹之内金道

当楼門は草葺入母屋造りであるが、昭和四十一年三月鉄板瓦棒葺に改める。この時「グシ」より左記のような楼門記（棟札）がでてきたという。

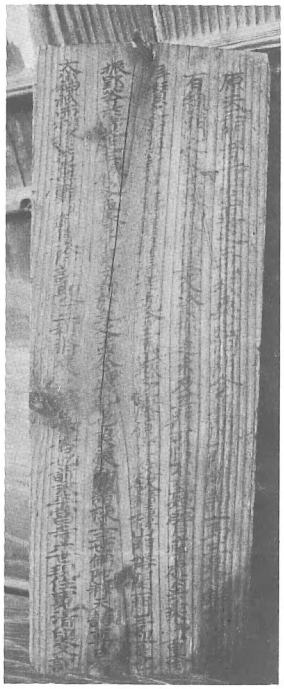
当寺の本堂およびその他の堂宇は記録によれば天保十一年八月九日火災にあい焼失したが、楼門だけ焼失を免れたと伝える。また、昭和四十一年の屋根替の時グシより右に掲げた棟札が発見されたことにより、楼門は棟札の通り寛延三（一七五〇）年に造立されたものとみて間違いない。

当楼門は二階建和唐折衷様式であり、吹寄垂木としている点が県内ではめずらしい（写真㊸）。

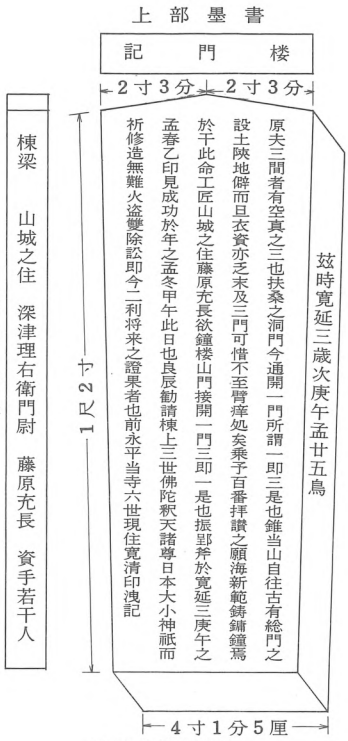
県内の社寺で楼門を残しているところは極めて少なく、しかも、清雲

〔写真㊶〕　清雲寺楼門

寺楼門は破損少なく保存状態は非常によい。そして、棟札によって寛延三年の造立が明らかであり、県内に現存する江戸時代中期の楼門として貴重である。（以上桑原　稔）



〔写真㊷〕清雲寺楼門棟札



清雲寺楼門棟札

〔写真㊸〕清雲寺楼門

吉祥寺

所在地　川場村門前八六〇

管理者　高木宗監

山門

木造、入母屋造り、三間二間の楼門である。草葺屋根を十年程前にトタン葺（赤い棒瓦葺き）に代えた。二階は高欄手摺を回した濡縁がつく。中央四枚唐戸、両脇引違い舞良戸、一階は三間とも吹抜け。軒廻りの組物は二手先、天井は二重化粧本繁垂木。一階丸柱、虹梁、眉付き。基礎は礎盤付き、基壇六段上り。

正平七年後光厳天皇勅願所となり、勅額を賜い、文政七年に改築されたという。

木立に囲まれた参道があり、参拝者がここを通ることにより静かな気分になる。参道を持つ社寺も数少なくなっており、配置様式的な意味合も兼ね、価値を認めることができる。

本堂

木造、茅葺。五年程前に銅板葺きに改めた。寄棟。二重本繁垂木。内部の欄間に質のよい透彫りがある。銅板葺きの唐破風の玄関がついている。延元元年九月八日開創、康永二年創建といわれる。鉄眼版一切経を所蔵している。

臨済宗、檀徒四〇〇戸、川場村、白沢村、沼田市にわたる地域の名刹であり、庭園も小池、庭石、植え込み等美しく整備されている。

茅葺きの時はどっしりしていて良かったと村人は言っていた。茅不足のために銅板葺きに改めたが、庫裡はその面影をとどめている。

釈迦堂

三間四面の寄棟造り、茅葺き、二重軒化粧本繁垂木、組物は一手先。正面両脇二枚桟唐戸、中央四枚高桟唐戸、外部内法長押まわる。蟇股上、透し彫り等に一部彩色残る。二段上りの基壇上に土台をまわしている。「法泉殿」との銘が刻んである。

形姿、諸材の比、材料、施工とも優秀である。山門と同時代頃の建立と考えられる。

愛宕社　社殿

三間四面、方形造り、茅葺き、二重軒化粧本繁垂木、組物一手先。内法長押まわる。大床まわる。蟇股上など一部彩色残る。木割りは太く剛直な感がある。本柱は正面幅の約八分の一（普通十分の一）、正面幅は十五～十六枝（普通二十二枝）。

製作代は不明（江戸時代中期か）であるが、垂木に至るまで太い材を使った、剛直な力強さは、この地方では稀有のものであろう。

庫裡

草葺き、入母屋、二階造りである。

以上吉祥寺の建造物群は、庭園やまわりの樹木森林等と共に、これら文化財を納めておく地区（文教地区とでも言うべきか）として保存を考えて行くべきであろう。

薬師堂

所在地　川場村谷地四七二

管理者　宮内祐一

一間四方、切妻造り、瓦葺き。虹梁、蟇股、組物、丸桁がつき、色彩豊かである。小堂ながら民間信仰対象物として保存された好例と言えよう。

内部に板碑があり、観応三年十月　日の銘がある。

太右衛門翁の道場

所在地　川場村谷地三四二

管理者　関和夫

長屋門式（梁行一二・六メートル、桁行四・六メートル）、草葺き、白壁塗り、腰下見板張り、高い武者窓がつく。丈三の柱を使い建物の丈を高くしてある。一部掃出し開口。

直心影流の達人、関太右衛門（天保一二～明治四十五年）の開いていた道場である。

江戸時代末期の製作と推定され、農業用に用途を変更し、除去されている部材が多いが、現在では珍しくなっている建造物である。

湯原薬師堂

所在地　川場村川場湯原

管理者　湯原区長

入母屋造り、千鳥破風、唐破風がつく、茅葺き、一間程の向拝がつく。三間四方、大床、勾欄を四面にまわす。主柱は丸柱で三手先の組物で屋根を支え二重本繁垂木である。向拝は角柱で、唐破風が屋根の形を複雑なものにしている。

貫、頭貫、虹梁、海老虹梁、欄間、出組等丁寧な彫り物がある。内部の天井には狩野探雲筆と伝承される竜が画かれている。

文化三年上棟の伝えがあり、その頃の製作と推定される。（絵画編参照）屋根の形、彫刻、彩色等に特色があり、現在も信仰の対象として存在しており、貴重である。

雨漏りがあり、保存に留意すべきである。

桂昌寺　本堂

所在地　川場村谷地甲二、〇〇九―一

管理者　矢島文正

七間×六間半、寄棟造り、茅葺き、箱棟がつく。内部は六間取り、中央奥に須弥壇を置く。欄間は天人の透し彫りがある。

応永三年九月十三日、吉祥寺三世万像和尚の開山と伝えられ、現在の本堂は江戸時代末期の製作であろう。

桂昌寺には他に入母屋造り、茅葺きの庫裡があり、本堂と共に保存を考えたい。

延命院　本堂

所在地　川場村生品甲八一一

管理者　高山広純

間口一五・一メートル、奥行一二・四メートル、寄棟造り、茅葺き。間取りは六間取りで中央奥に須弥壇を置く。

曹洞宗で檀家は九八軒。正和三年創建、天保十五年七月七日焼失、嘉永二年再建。始めは天台宗で川場村一円の信仰を集め栄えていたが、大友氏が臨済宗を入れ衰微した。曹洞宗になったのは、領主の指導によるという。焼失前の村の飢饉等も重なり、明治初期まで住職のいない時代が続いた。

江戸時代末期の宗教建築の姿を残している。

生品堂（観音堂）

所在地　川場村生品一一六〇

管理者　春原　始

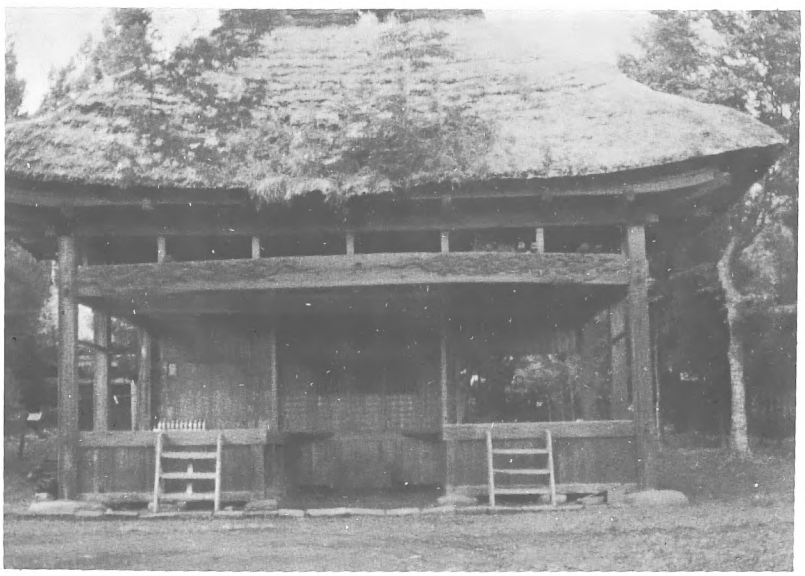
二間×一・五間、草葺きの小堂。後列半間が本陣になっている。出梁セガイ造り、正面格子戸、脇舞良戸。屋根、壁等痛みが多い。

利根郡三十三番札所のうち第九番札所。「おしなべてたかきいやしき生品や、玉のうてなをいのらぬはなし」がご詠歌。本尊は盗まれたのかない。

武尊神社　舞殿

所在地　川場村生品

管理者　生品区長



武尊神社　舞　　殿

六間×四間の寄棟造り、草葺屋根。吹放ちで、床高約一メートル、中央二間に床はない割拝殿形式。正面には両脇に柱があるのみで中間にはない。

中央に板を渡して歌舞伎舞台に使用したという。門前、湯原にも同型の舞台があったが取り壊してしまったという。

江戸時代後期のものであろう。民衆生活史上貴重と言える。

八幡宮

所在地　水上町藤原字須田貝

管理者　須田貝組長

一間社流れ造り、鞘堂に入っている。唐破風向拝がつく。大床は勾欄がつき、二手先の腰組にて支えられる。向拝柱は角柱で重ね菱地紋彫り、虹梁、懸魚、後、両脇に狛犬、牡丹等の彫刻がある。

内部に「中の中宮」があり、朱、緑、金で彩色してある。

「宝暦三年十月吉祥日」建立の棟札があり、須田貝部落出身の中島小市の寄進という。文化五年八月十五日の再建。

江戸時代山村の信仰のありさまを伝える好例といえよう。

諏訪神社

所在地　水上町川上字東原

管理者　東原組長

本殿

三間社、入母屋造り、千鳥破風、唐破風がつく瓦葺屋根。向拝がつく。

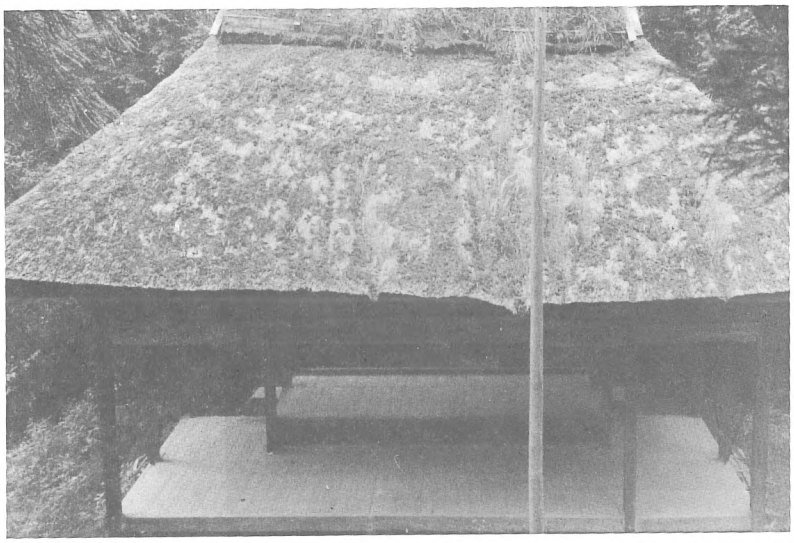
「寛延四年霜月」建立の棟札がある。向拝柱等太く、彫刻も少なく単純な唐草模様等である。

舞殿

五間×四間、寄棟造り、草葺き。四方吹放ち、床高一メートル程の舞台。奥中央に幅三間、奥行一・五間が約三〇センチメートル高くなっている。鉄骨梁で補強してある。

「寛保二年八月」建立の伝承がある。「前殿」と言っている。

段々になっている観覧席と共に、神社境内一帯が村民の楽しみの場所であり、そのような意味で本殿のみとかの単体の価値評価でなく、全体として考慮する必要があろう。現に境内に「角力の場所」がしつらえてあり、昭和三十年頃から三十六年に一度休んだだけで毎年角力が行なわれているというのを見ても、新しい意味の境内の利用、見方が可能な事を示している。



諏訪神社舞殿

武尊神社

所在地　水上町藤原字宝台樹
管理者　宝台樹組長

一間社流れ造り、唐破風向拝付。向拝柱は角柱、重ね菱地紋の彫刻がある。虹梁は水紋絵様透し彫り、両木鼻は唐獅子彫り、懸魚中備えは一体をなした大龍の透し彫り、海老虹梁はカゴ彫り、正面扉の鏡板、小脇板、框下部等に浮き彫りがあり、横の羽目に武者、裏に鷲の彫刻があり、全体的に彩色が残っている。

「安永三年六月吉祥日」の「奉新造立武尊大明神尊像」の棟札がある。覆屋に納まっており、数多くの同型式の神社の一つであり、装飾的な江戸時代後期の作である。村民の尊崇の形象的方向がうかがえる。

観音堂

所在地　水上町青木沢
管理者　林　栄

木造・草葺き・宝形の堂様形建物の中に、経七寸程の丸柱、唐草絵様の虹梁中備えに卍模様の入った蟇股があり、獏の頭の彫刻の木鼻、一手先組物の、大きな建物のおそらく向拝部分のみが残ったものと考えられる。

「応永廿六年卯月廿七日」の「奉造立一宇観音堂」の記録があるが、この建造物のものであるかは疑問である。古風な形をよくとどめているが、部分的であるのが惜しまれる。

富士浅間神社

所在地　水上町谷川字上の原
管理者　上の原組長

一間社流れ造り、板葺き、本繁垂木、向拝柱は面取りをした角柱、木鼻によく巻いてある渦巻き模様があり、皿斗の上に一手先の組物を載せている。

覆屋がつき、切妻、瓦葺き、妻入りで唐破風の向拝がつく。向拝懸魚は龍の透彫り、向拝柱は角柱、重ね菱地紋の彫りがある。

「延宝八庚申年初春吉祥日」に「大旦那源信直、神主鈴木駿河丞重久、御普請御奉行麻田権兵衛」「奉造立富士浅間一社、前殿、鳥居、玉垣迄造営」の棟札があり、真田伊賀守の造営したものである。

内部に中宮があり、木花開耶姫命をまつる。

境内に神楽殿があり、一体として考慮する必要があろう。

菅原神社

所在地　水上町小日向
管理者　小日向区長

一間社、切妻造、正面に千鳥破風がつき、唐破風の向拝がある。向拝は角柱に重ね菱地紋彫り、虹梁は彩色の花紋浮彫り、木鼻は獅子頭、虹梁の中備えは竜、懸魚は水竜の浮彫り、唐破風上の鬼板台に唐草様彫り物がある。本殿正面は観音扉、鏡板に梅等の浮き彫り、両小脇板は梅等の花木の透し彫り、蟇股、腰羽目、海老虹梁等にも彫刻が施されている。

木造の覆屋に納まっている。

この神社は小日向村、鹿野沢村の総鎮守であり、天満宮、八幡宮を合祀したものという。「享和六年十月吉祥日」建立の棟札がある。

柱、梁、内法材、勾欄などの部材は細く、全面に彩色、彫刻があり、江戸時代末期の剛直とかケンランとかの時代を過ぎた文化の産物と言えよう。

大峯（だいほう）神社

所在地　水上町小仁田字筒中
管理者　小仁田区長

一間社、入母屋造り、唐破風付き。向拝柱は面取り角柱、虹梁共に市松模様の地紋彫りがある。木鼻は獏頭の彫り物、唐破風の懸魚は鳳凰、海老虹梁は水流紋の彫刻。本殿軸部は素木の丸柱。正面観音扉鏡板に菊花浮き彫り、両小脇板に菊花・鶴・唐草の透し彫り。縁長押と腰長押の間に松の彫刻、上長押・頭貫共地紋彫り、頭貫木鼻は唐獅子彫り、中備

え本蟇股で中に梅・牡丹の彫刻、横、裏の三方の腰羽目に故事を主題にした彫刻。組物は和様三手先。

本殿は覆屋が付き、渡殿で拝殿と接する。

大宝元年に勧請し、正平五年、寛永十四年、寛政七年に再建したという。「寛政七年六月」の「奉造立大峯大権現正遷宮」の棟札がある。谷川地方十五カ村が氏子となっており、組物、彫刻等装飾的表現にすぐれている。

建明寺

所在地　水上町湯原

管理者

寄棟造り、トタン葺き。九間×八・二間で六間取りで、中央奥に須弥壇を置く。天蓋・天井絵・欄間彫刻がある。

曹洞宗、本尊地蔵菩薩像。永禄六年建立というが、建立に関する記録は見当らなかった。

諏訪神社

所在地　新治村吹路

管理者　吹路区長

一間社流造り、向拝柱面取り角柱、虹梁に形のよい唐草模様の彫刻、木鼻は獏頭の彫刻。主屋は縁長押、内法長押をまわし、正面小脇板は透し彫り、組物は二手先、形のよい蟇股がある。小脇板、木鼻等破損している。本殿は覆屋に入り、その前に拝殿がある。

正和年中らしい棟札があり、正徳年中の修理棟札がある。覆屋を安永九年に造営したという。

神明神社

所在地　新治村猿ケ京高梨

管理者　猿ケ京区長

本殿

一間社流れ造り、トタン葺き、向拝が付き浜床をまわし、両脇に脇障子がつく。腰羽目、脇障子には彩色・彫刻はない。主軸に縁長押、内法長押をまわし、二手先組物で虹梁を支え、大瓶束、叉首組で棟木を支える。

木鼻、虹梁等簡潔で骨太く剛直の感がある。奥の院と称する。

拝殿

五間×三間・入母屋造り・トタン葺き。軒は出し梁セガイ造り。大虹梁の両脇に唐草模様の彫刻がある。

本殿の前に位置する。

神楽殿

一・五間四方、入母屋造り、瓦葺き。拝殿の左手前面に直角方向に向いている。

天文年間に伊勢神社外宮を勧請し雨宮神社として建立し、明治四十一年に他の四社と合祀し、神明神社と改称した。その折に移転したらしいが特に本殿は古い形を存続している。

日枝神社　舞台

所在地　新治村相俣字宮坂

管理者　小野文治

五間×三・五間、寄棟造り、草葺き。正面および右側の前面一・五間は開放。内部は全面板敷の舞台で、右側前面に二間四方、床の高さ約三十cm、それに手摺をまわしたものが設けてある。二十年程前に太々神楽の舞台に改造したものという。

かつては本殿から花橋を渡って舞台に行き（花橋の板が現存する）、舞台は廻り舞台、左右に引き分け、せり出しができる様になっていたという。

軒は出し梁セガイ造り、大虹梁両脇に唐草模様の、出し梁鼻に蛭眉彫刻がある。

安永二年の造営といい、神楽殿と称している。

山村の娯楽・文化施設の様子を現在に伝えており貴重である。松崎茂

氏による調査が実施されている。

熊野神社

所在地　新治村須川
管理者　西山助夫

本殿

三間社、唐破風の向拝がつく。向拝上部、海老虹梁、正面および側面、組物等賑やかに彫刻がある。向拝柱は亀甲つなぎ地紋彫り。縁長押、内法長押は大きく表面地紋彫り。組物は三手先。材はケヤキを使用。

覆屋

拝殿兼用で、ホンデンと称している。三間半×五間程の入母屋造り、トタン瓦棒葺き。唐破風の向拝が付く。軒はまばら垂木。

「正徳元年七月吉日」の造営のものと寛政十二年の遷宮の棟札がある。

本殿は古い様式を残しており、また、彫刻が豊富で念入りに作られており、村内では有数のものである。覆屋がしっかりしており腐蝕の心配はないが、盗難等の防災面に留意したい。

駒形観音堂

所在地　新治村須川字駒形

三間四方の方形、草葺き。軒は二重繁垂木。縁長押、内法長押をまわす。頭貫、台輪がつく。組物は平三つ斗組。

遠望すると駒の形をした山の中腹にあり、登るまでの間に、参拝者の心を整えさせたものであろう。

野々宮神社　本殿

所在地　新治村東峯須川
管理者　氏子総代、本多孝雄

一間社流れ造り、唐破風向拝付き。屋根大きく鰹木を載せ、銅板瓦棒葺き。棟の側板高く、棟近くで急勾配になる。鬼板は異常な程大きい。虹梁、木鼻、中備え等に彫刻がある。主屋は縁長押、内法長押をまわす。組物は三手先、二重尾垂木。妻に懸魚がつく。

以前の本殿が火災で焼失した後、入須川村の大工、吉典の最後の作で、明治時代のものである。屋根を大きくし、棟近くが急勾配、箱棟大きく、時には鰹木を載せる等、様式としては色々な要素が入り混乱している。明治期の特徴を示しており、他の村にも同様のものが見られた。

荒沢不動堂

所在地　新治村入須川
管理者　入須川下組壮健

二間四方の木造・トタン葺き。材料もよく軸部、組物等美麗である。

「明治十七甲申年旧三月廿八日」の棟札があり、入須川村の林吉典の作である。氏は宮大工で、四万（中之条町）の若狭守の弟子と言われる。須川地区に神社、堂宇等沢山の遺作がある。

地方技術者の存在のし方、信仰中心の施設の建て方の分るものとして貴重であろう。

三峰神社

所在地　月夜野町師中堀一五八九
管理者　高橋好爵

石鳥居（享保八年の銘）の左に舞殿、奥に拝殿、本殿、本殿と並んで左殿、右殿がある。

本殿

一間社流れ造り、トタン板葺き、二重繁垂木。海老虹梁は湾曲強く、唐草模様の彫刻がある。正面板扉、蟇股は中に簡素な草花の彫刻。側面は腰長押、内法長押をまわし、腰羽目は板。中備え蟇股、出組、妻虹梁、大瓶束で棟を支える。浜床、勾欄がまわる。彫刻は繁雑でなく、枇杷板、妻板に花、雲形の浮き彫りがある位である。

左殿

一間社流れ造り、トタン瓦棒葺き、唐破風向拝付き、二重繁垂木。向拝柱地紋彫り、木鼻は象頭、前面に向いている海老虹梁の木鼻は唐

三峰神社　左　　殿

獅子、二手先組物で屋根を支える。虹梁中備えは花の透かし彫り。虹梁、海老虹梁共に賑やかな浮き彫り。

主体は三手先組物で支え、大浜をまわし、勾欄がある。正面は一木の唐戸、小脇板、側面、背面、脇障子共こった水紋の彫刻がある。

内法長押の上部に水紋の彫刻があり、それを二手先組物、一手先で妻虹梁を支え、更に一手先組物で屋根を支えている。妻虹梁下部に二重の斗栱があり、その上下に水紋の彫刻があり、彫刻、組物で装飾の賑やかな建造物である。

「寛延元年」の造立棟札と「寛政十二年十一月」の再興棟札がある。「牛頭天王宮」となっている。

右殿

一間社流れ造り、トタン葺き。向拝柱太く木鼻は獏頭、唐獅子、中備えに水龍の透かし彫り、一手先組物で丸桁を支える。海老虹梁も太く、彫刻はない。主体は大浜をまわし、正面唐戸、小脇板に草木の浮き彫り、側面には彫刻なく、左殿と比べると質素で剛直である。「文久二年二月十九日」、「奉再建正一位河内大明神壱宇」の棟札がある。

舞殿

六間×四間、寄棟造り、トタン瓦棒葺き。四方吹放ちである。明治五年に焼失し再建したものという。

明治四一年に諏訪神社、神明宮、稲荷神社、八幡宮、十二神社、日枝神社、琴刀平神社を合祀して三峯神社としたものである。

よく保存されており、特に左殿は木組、彫刻等装飾的であるが、いやらしさがない。永く保存していきたい建造物である。

龍谷寺　本堂

所在地　月夜野町師字青岳一六六八

管理者　橋爪青龍

八間×六間、寄棟トタン瓦棒葺き、化粧軒天井、まばら垂木。六間取りで、正間の大間（だいま）は坐禅堂形式を取入れている。格天井の絵は林青山画。

他に鐘撞堂、羅漢堂、山門がある。

文政六年十月に再建という。

天治元年創建、貞治元年兵火により焼失し、現在地に移転という。川場村吉祥寺の末寺になっている。

下師　観音堂

所在地　月夜野町師字観音前三二六

管理者　馬場弥佐吉

三間×二間、寄棟造り、藁葺き。馬場氏の先祖が造り酒屋を営み、先祖供養の為に元禄頃建てたものという。簡素な建物で倒壊しかかっている。祖先祀祭施設の一例として興味あるものである。

増田一統観音堂

所在地　月夜野町師字上の原九六一

管理者　増田寿助

三間四尺×二間四尺程の寄棟造り、藁葺き。漆喰の白壁である。背面

に一間の下屋を設け、その部分だけ屋根を葺き下ろしている。入口は両開きの板戸で、虹梁に唐草模様の地紋彫りがあり、上の舟肘木が桁を支えている。

白壁と貫の入らない柱、屋根、トタン板の棟、そこから張り出した鳥衾等が調和している。増田家の先祖供養のもので、保存もよく、同族団信仰の形を残す好個の例と言えよう。

弘法大師堂

所在地　月夜野町師字八幡一四七三―一

管理者　橋爪清龍

三間×二間、宝形造り、瓦葺き。地上から一メートル程床を高くし、濡縁をまわしている。縁長押、内法長押に一手先の組物で屋根を支えている。中備えに簡素な蟇股がある。

背面に約半間の下屋を付け足してある。

宝暦十一年の造立の棟札がある。

以前浄明院があった場所に増田弘左衛門が堂を建て、弘法大師を祀ったものという。

天理教沼田分教会

所在地　月夜野町真庭政所七五八

管理者　真庭茂道

九・五×一六メートル、入母屋造り、妻入り、入母屋造りの玄関が付く。二重に見える破風はよく引き締まり明治の新興の勢いを示している。

明治二六年の造立である。

神道一心流源武場

所在地　月夜野町後閑三四二

管理者　櫛淵儀一

五・八×五・五メートルの瓦葺き、土蔵にもたせて建てており、屋根は片流れになっている。正面が白壁で他は荒壁。櫛渕周作・幸作父子の開いた道場という。

蚕影山二十三夜堂

所在地　月夜野町下牧字原組二五七

管理者　藤原晃長

二間の宝形造り、トタン葺き。擬宝珠がある。縋破風がつく。正面は中央に内開きの桟唐戸があり、他は板である。四周に濡縁がまわる。向拝虹梁に簡単な彫刻があり、木鼻は独特の唐獅子である。内部は白壁、格天井、竜の絵を画く。柱、長押、一手先組物で天井を支える。

以前火災にあいその跡がある。

小堂ながら民間に存在した特色のある建造物である。大正初期に現在地に移したという。

常恩院　本堂

所在地　月夜野町下牧字高平二、二七〇

管理者　都筑賢鳳

常恩院本堂欄間

九間×七間、寄棟造り、瓦葺き。前面に一間の畳廊があり、二列に三間ずつある六間取りで、後列中央に須弥壇がある。畳廊の部分は一間毎に海老虹梁があり、また、内陣・外陣の境に丸柱・虹梁・欄間で仕切っており、欄間は重厚な十六羅漢の浮き彫りがある。

天文十六年の創建、天明二年の再建。

他に六間×四間、寄棟造り、トタン葺きの衆寮、九間×五間、寄棟造り、トタン葺きの

庫裡、三間×二間の土蔵があり、庭園も手入れが行き届いており、まとまった文化財包蔵地区と言えよう。

牧野神社　本殿

所在地　月夜野町下牧字諏訪原一、一八七

管理者　下牧区長

一間社流れ造り。向拝・海老虹梁・主体部の頭貫・枇杷板・虹梁・妻板にいたるまで華麗な彫刻がある。貞享五年の修築、昭和四一年改修。覆屋に入っており、拝殿と接続している。

小持神社　本殿

所在地　月夜野町上牧字小松五二八

管理者　鈴木孝太郎

一間社流れ造り、柿葺き。装飾少なく簡素な建造物である。寛永十年六月建立と言う。拝殿の屋根と接続して、本殿の覆屋が設けられており、複雑な屋根を形成している。

木之根不動堂

所在地　月夜野町上牧

二間×二間の宝形造り、瓦葺き。擬宝珠がつく。正面中央に引違いの腰高障子があり、他は板壁。内部に後部半間に祭壇がある。内陣との境に丸柱、虹梁、台輪、一手先組物で天井を支え、虹梁中備えに形の崩れた蟇股がある。祭壇に半間程の精巧な中の宮があり。不動明王が安置されている。

法泉寺　庫裡

所在地　月夜野町上石倉字笠原一四五九

管理者　貴美候部省吾（高崎市、龍広寺）

間口九メートルの瓦葺き、二階建であるが巾一間の唐破風付きの玄関がついている。太い面取り柱、唐草模様の彫刻の虹梁、獏頭様の木鼻、懸魚、破風板等独得の味があり、小さい境内をよく引き締めている。

本堂は寄棟造り、草葺きであるが、無住で荒れている。

建長五年から当地に庵があり、永禄五年再興という。庫裡玄関が江戸中期のもので他はそれ以後のものであろう。

武尊神社　本殿

所在地　月夜野町石倉字笠原一七一七

一間社流れ造り、板葺き。向拝桂は角柱地紋彫り、虹梁は唐草模様、木鼻は獏頭、唐獅子、中備えは龍の丸彫り、一手先組物で丸桁、二重繁垂木で屋根を支える。主体部は浜床をまわし、正面は桟唐戸、両小脇板に鳥木の浮彫りがある。覆屋に入っている。

他に六間×四間、切妻造り、瓦葺きの舞殿がある。

小川神社　本殿

所在地　月夜野町小川字森原一、〇四九

管理者　石坂金次郎

一間社流れ造り、板葺き。土造の土台の上に乗り、高床になり、浜床をまわし、正面に観音開きの板戸、小型の装飾も少ない簡素なものである。覆屋に入っている。

他に一間社流れ造り、トタン葺きの稲荷社、三、八×五、六メートル、切妻造り、瓦葺きの神楽殿がある。

天文八年創建、元文五年再建という。又、稲荷社は地元の上牧の人の造ったものという。

お駒供養堂

所在地　月夜野町上組字藪田一、六九七

管理者　吉田瑞龍

三間四方、宝形造り、瓦葺き、縋破風の向拝が付く。向拝は角柱、唐草模様の彫刻の虹梁、木鼻は獏頭様彫刻、蟇股は雲形様、一手先組物で丸桁、屋根を支える。主体部は高床になり、床下は吹抜け。濡縁をまわす。角柱、縁長押、内法長押をまわし、柱頂部は舟肘木、小壁は横板を張る。正面中央一間に舞良戸、左側面前方二間は引違い板戸、他は板壁。

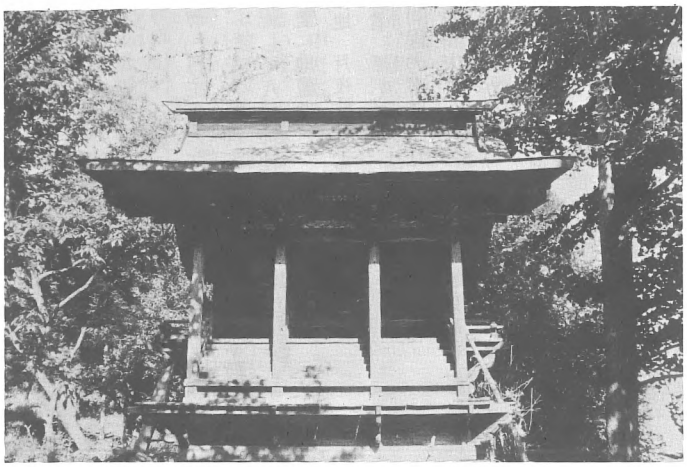
内部は背面一間が内陣であり、引違い格子戸が入っている。天井は格天井。虹梁、組物が装飾になっている位で、質実な建造物である。

享保年間にお駒という人が罪を得て処刑されたので筏商をしていた父親が供養のため建てたという。その話が次第に脚色され鉄砲で心中したということになり、心中堂と呼ぶようになった。

嶽林寺

所在地　月夜野町上組字藪田一六九七

管理者　吉田瑞龍



嶽林寺　末社

本堂

九間半×九間、寄棟造り、瓦葺き。前列土間、前廊下で六間取り、中央奥に須弥壇を安置する。欄間に龍の彫刻等ある。

末社

三間社流れ造り、銅板葺き、一間の向拝が付き、向拝柱が一間毎に立つ。虹梁、海老虹梁は唐草模様の彫刻があり、手挟みは水流紋の浮き彫りが施されている。

主体部は高床で勾欄付きの浜床をまわし、正面に一間ずつの桟唐戸が三面ある。縁長押、内法長押がまわり、組物で丸桁を支え、枇杷板は浮き彫り、側面は組物で妻虹梁を支えている。妻板は浮き彫りがある。脇障子、向拝の木鼻は失なわれている。

他に四脚門、庫裡、開山堂、鐘楼、土蔵がある。

永正二年、小川城主小川次郎景祐の開基で、本堂その他は火災にあい安永三年に再建されたものという。

華麗な本堂末社の屋根の美しさ、鐘楼その他の建造物が、庭園と共に独特の静けさをかもし出し、地方文化の水準を示している。

月夜野神社　本殿

所在地　月夜野町上組字都

一間社、トタン瓦棒葺き。大きな唐破風の向拝がつく。浜床をまわす。腰組の一部、壁面、組物の間、軒天井等、いたる所に水流、雲、龍の彫り物、彩色がある。覆屋に入り、他にも同様の社がある。

境内に高床三方吹抜けの舞殿、末社がある。これらが一群となり精神的文化的境域を形成している。

村主八幡宮　本殿

所在地　月夜的町上津字村主（すぐろ）一、二三四

一間社流れ造り、銅板瓦棒葺き。主屋に対して屋根が大きい。

向拝部は虹梁に唐草模様の彫刻、三手先組物で丸桁を支える。湾曲の強い海老虹梁で主体部と接続する。正面は桟唐戸、側面、脇障子は装飾なし。二重虹梁、大瓶束で棟を支え、大きな懸魚がある。

他に拝殿（入母屋造り、トタン瓦棒葺き）、神楽殿（高床、切妻造り、瓦葺き、三方吹抜け）、舞殿（寄棟造り、瓦葺き）等があり、境内に県指定天然記念物「村主の大ケヤキ」がある。

天正二年に村主大明神を創建、承応二年本殿を再建したという。明治四十二年合祀して八幡神社と改称した。

馬廻り堂（地蔵堂）

所在地　月夜野町上津字貝沢一、六一二

管理者　原沢満治

二間×三間程の寄棟造り、草葺き。

五十㎝程の高床になり、四周に濡縁がまわる。正面一間に両引格子戸がつく。内法長押がまわり、軒天井は化粧まばら垂木。内部に祭壇がある。

地元では「オンマシノ堂」と言い、百万遍などの行事が行なわれ、その数珠が保管してある。現在は原沢家の物置として使用されている。民衆の信仰生活の文化財として注目してよい建物であろう。

如意寺　本堂

所在地　月夜野町上津字天神

管理者　板西僧寿

九間半×七間、寄棟造り、トタン瓦棒葺き。天井は格天井、小川島の林青山の画いた天井絵がある。

他に山門（切妻、瓦葺き、薬医門型式）、鐘楼（入母屋造り、トタン瓦棒葺き、石造基壇）、玄関（三間半×二間、唐草模様彫りの虹梁、欄間に華麗な波形透かし彫りがある。式台、両引き舞良戸で庫裡に接続する）、庫裡（十一間×五間半、入母屋造り、草葺き、二階建て）、開山堂、土蔵、経蔵、座禅堂、茶室等がある。

如意寺遠望

これらが山を背景に揃っている様子は壮観であり、諸施設が揃い、保存のよいことは有数である。

文明年間に荘田城主沼田景光の姉の如意尼が草庵を営んだことが本寺の始まりという。寛永年間の再建という。

中之神社

所在地　月夜野町下津字天神二、三三二

管理者　高橋辰次郎

二間×二間、入母屋造り、草葺き。軒は出し梁セガイで屋根を支える。正面中央一間に両引の格子戸がつく。他は板壁。

中諏訪と称していたが、正徳年間に菅原道真公を合祀し北野社と称す。明治五年に再度中之神社と称するようになった。

なお、境内に四方吹放ちの舞殿があり、まわり舞台の装置が保存されている。

（群馬県教育委員会編「群馬県の農村舞台」参照）

若宮八幡宮　本殿

所在地　月夜野町月夜野字小川島

管理者　千明左太夫

一間社流れ造り、板葺き。切妻造り、トタン葺、四方吹抜けの覆屋に納まる。

向拝角柱、地紋彫り、虹梁の木鼻は獏頭、唐獅子の彫刻、中備えに龍の透かし彫り。軒は二重繁垂木。主体部は正面に観音開きの板戸、縁長押、内法長押をまわし、重厚な蟇股がある。妻虹梁、大瓶束で棟を支えている。

寛治五年の創立、何度か火災に逢い、慶応二年九月の再建という。毎年ここでヤッサ祭りが行なわれる。（芸能編参照）

境内に県指定重要文化財「小川島の歌舞伎舞台」がある。

八幡宮　本殿

所在地　月夜野町下牧字東山二、三九一、玉泉寺内

管理者　坂西賢光

三間社流れ造り、屋根は柿葺き、正面に千鳥破風がつく。覆屋に納まる。

向拝柱上部、母屋組物上部、妻板、懸魚、桁隠し等に簡潔な彫刻がある。

左に白山、中央に八幡、右に稲荷をまつる。康平六年の創建で、元禄一六年再建という。古風を残した建物である。

玉泉寺には他に本堂（切妻の上に入母屋の屋根がつき、入母屋造り、妻入りの玄関がつく。瓦葺き。天井絵は林青山の画）、惣門、経蔵、庫裡、宝蔵、鐘撞堂がある。

玉泉寺は文明年間の創設で四度火災にあい、本堂は明治六年新治村千手院の護摩堂を移築し、玄関、庫裡は同十三年新築した。

奥深い山懐にいだかれ、寺としての諸施設、空間があり、文化財として見るべき建造物が多く、それらが木立、庭園、石段などと調和して独特の精神的雰囲気をかもし出している。（以上持田照夫）

石造美術品

はじめに

人間生活と石造物とは、太古以来密接な結びつきをもっており、その種類も非常に多い。然し現在石造美術品の概念に含まれるものは、およそ次の如き種目となると川勝政太郎氏は、その著『京都の石造美術』で述べている。

層塔、宝塔、宝篋印塔、五輪塔、笠塔婆、板碑、無縫塔、石幢、石仏、石燈籠、水船、石鳥居、狛犬其他である。

今回の調査に当っては、前記種目に含まれるもので、慶長以前に造られたと考えられるものを主とし、特殊なものについては、江戸時代のものも対象とした。

前記種目の内この地域に遺存するものは、宝篋印塔、五輪塔、板碑、無縫塔、石仏の五種目で、何れも仏教関係のもののみである。尚江戸時代の物であるが層塔形式の庚申塔と、十王関係石仏は平坦地には比較的少い物故ふれることにした。然し限られた期間内に於ける調査のため見残した物もあると同時に、銘文あるものも打拓する遑がなく、単に造立年号をノートしたのみの塔もあり、極めて不完全な調査であるが一応報告して、後に精査をする手掛りとしたい。

概説を記する前に、地域内に現存する、寺院数を宗派別に上げれば次の如くである。

曹洞宗四一、臨済宗八、天台宗（寺門派を含む）二八、浄土宗九、浄土真宗三、真言宗五、日蓮宗二、計九六（群馬県寺院名簿）

まず地域内に於ける遺物の分布状態を見ると、宝篋印塔、五輪塔、板碑は各地区に亘って分布し、有銘無銘のものを合すると、各数十基以上の多数になるであろう、その内で慶長以前の紀年銘のあるものの数は、板碑、宝篋印塔、五輪塔の順序になる。

板碑は沼田市五、昭和村四、川場村、利根村各三、新治村、月夜野町各二、白沢村一、計二〇基。内沼田市井土上町成孝院の貞治六年のものは、調査地域内ただ一基の安山岩製の有銘塔である。

宝篋印塔は月夜野町五、沼田市三、白沢村、川場村、利根村、片品村、水上町各一、計一三基、内沼田市大字川田東光寺の観応三年塔は完全に遺存し、水上町綱子の永和二年塔は相輪一部を欠損するのみであり、沼田市上久屋の明徳二年塔は、中台のある県内に数少い型式の塔でしかも完全である。

五輪塔は白沢村に三、月夜野町三、計六基、内白沢村の三基は南北朝時代のもので、月夜野町の三基は室町期のものである。

無縫塔は川場村一、この塔に就いては疑問があるが刻銘があるのであげて置いた。以上合計四〇基である。

紀年銘のない塔は各種目共計算をしなかったので、実数は不明であるが、各市町村に比較的平均に分布しているのは五輪塔である。従って遺存数も非常に多いが高さ一米以下の小型のもののみである。五輪塔で特に感じたのは地域内に、禅宗寺院が四九ヶ寺もありながら、禅宗の公案の一つである、祖師西来意を刻した塔が一基も見当らなかったことである。宝篋印塔に於ても分布は、前者と同様なことがいえるが、その数は半数にも達しないであろう。板碑は五輪塔に次いで無銘のものが多く、その数は数十基に及ぶであろう。県内平坦地にては見られない現象である。宝塔については天台宗寺院が二八ヶ寺あるので注意したが、一基も見ることは出来なかった。地域性の関係であろうか不思議に思われた事の一つ

である。石仏では白沢村雲谷寺の十王と一組の小石仏及び川場村の磨崖仏以外、特に注意する程のものは見当らなかった。江戸時代のものであるが閻魔王、脱衣婆（この地方では味噌なめ婆と呼ぶ）、層塔型式の庚申塔は各市町村に分布しており双体道祖神も亦非常に多い。この地域の一つの特徴といえるであろう。

以上今回の調査によって感じたことを略記したが、次に各種目の内の主なるものに就いて記して置く。（金子規矩雄）

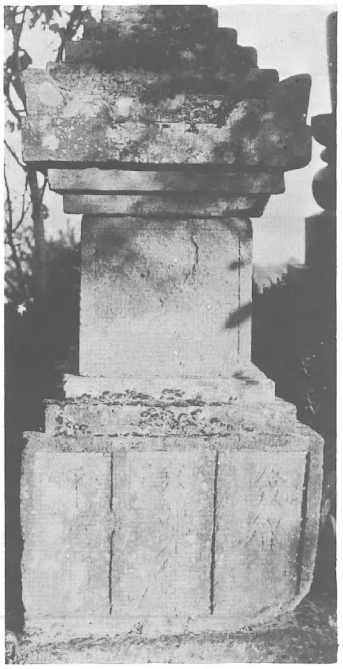
宝篋印塔

石材は有銘無銘の別なく、殆ど安山岩が使用されており、型式は関東式に属するものである。その構造は低い反花座の上に側面に細い輪廓を附け二区に分け上部に二段の造出しのある基礎、輪廓を巻いた塔身には四方仏の種子を彫刻。屋蓋は下二段上四段乃至五段の段型を造り、隅飾突起は二乃至三孤にして細い輪廓を付ける。相輪は反花・請花・九輪・請花・宝珠で造られている。

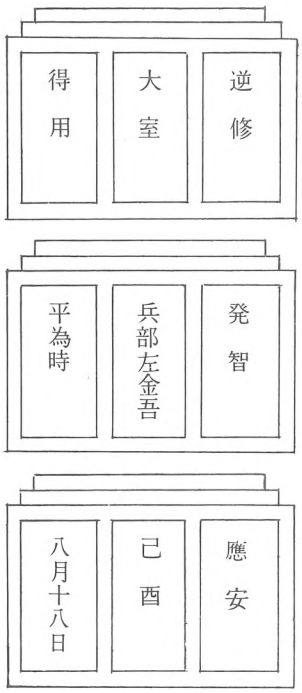
東光寺塔

東光寺塔（沼田市大字上川田）

県内でも完全に遺存する屈指の塔である。総高約二三〇糎、石材安山岩、高さ一二糎、巾六七糎の反花のない基台の上に側面を三区に分けた基礎を置き、四方仏種子の彫刻のない塔身・屋蓋・相輪と積んだ関東型式の塔にして、各部の均衡のとれた塔婆は堂々たるものである。しかし塔身に種子の彫刻が無いことは何か空虚さを感じさせられる。各部の均衡と石材の腐蝕程度等から見て、塔身は別物とは考えられない一体の物である。銘文は基礎三面に雄勁な筆致で大きく左記の如く陰刻されている。



東光寺塔（部分）



塔身　高さ　36.6㎝
　　巾　59㎝

己酉は応安二（一三六九）年に当る。

この塔の基礎は前記の如く三区に分けられている。この時代の塔としては県内に未だ例が見出されていない。なお特筆すべきは塔身に四方仏種子の彫刻がないことである。これは何等かの理由があってそうしたのであろうと考えられるが、それを解明する資料は現在無い。思うに密教から発した宝篋印塔を禅宗寺院で建立するのに際して、当時の関係僧侶の見識によって、その構造型式のみを採用し、密教的色彩を昇華させた結果ではないだろうか、興味ある問題である。

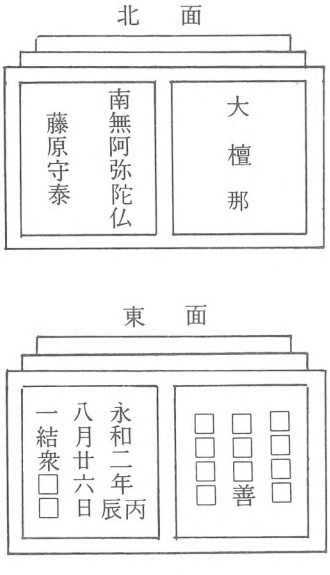
綱子の塔　（水上町大字綱子）

現存部総高一二五糎。石材安山岩。関東型式に属する塔にして相輪上部と基台を欠失している外基礎、塔身、屋蓋は完全に残っている。基礎は四方共輪廓を巻き二区に分ち、北面および東西に銘文を刻す。塔身は輪廓を巻き胎蔵界四仏種子ア、アー、アン、アクを雄渾に彫刻し、屋蓋は下二段上五段に造り、相輪最下部の反花は無地で伏鉢状をなしている。

綱子の塔

綱子の塔

請花は単弁であるが時代を良く現している。九輪の四輪を残して上部欠失せるは惜しい。銘文は次の如く陰刻されている。



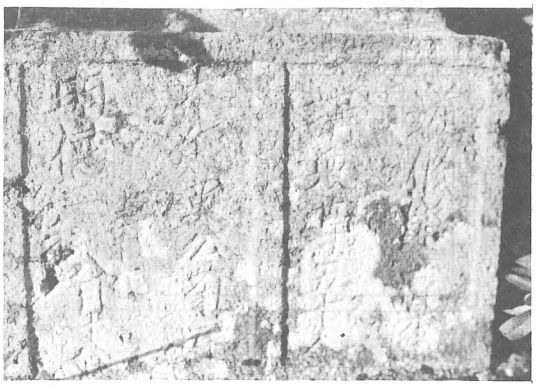
基礎

高さ——31.2㎝

巾　——47.5㎝

塔の構造様式種子其他の書体刻法から見て、永和の造立と見て差支えないであろう。宝篋印塔に六字の名号が彫られている例は、県内には他に無いかと思う。はっきりと阿弥陀信仰を表現した塔として貴重な一基である。永和二年は西暦一三七六年である。

県指定重要文化財に調査後なっている。

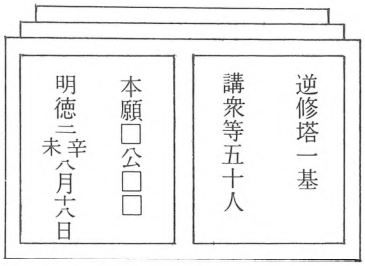


上久屋の塔　基礎

上久屋の塔

上久屋の塔（沼田市上久屋松永氏墓地）

総高一六〇糎。石材安山岩。地域内只一基の中台付きの塔にして完全に遺存する。基礎は通例の輪廓を巻き二区に分け二段の造出しのあるものであるが、中台は下二段の造出しの最下段は九糎も高さがある。二孤の隅飾突起をつけ一段の造出しがある。塔身は輪廓がなく四方に円相を浅く彫り、中に胎蔵界四仏種子ア、アー、アン、アクを陰刻、屋蓋は下二段上四段、隅飾突起は二孤で輪廓を巻く。相輪は複弁の反花、単弁の請花、九輪、単弁の請花の上に完好の宝珠がつけてある。銘文は基礎一面に次の如く陰刻してある。明徳二年は一三九一年である。



基礎
高さ——27㎝
巾——39

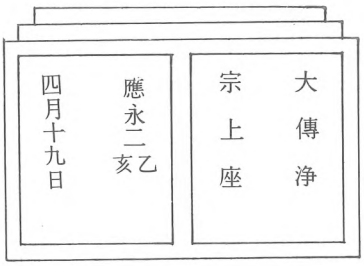
塔の様式と紀年銘と一致した規準になる塔である。

延命院の塔（川場村大字生品）

現存部高さ八〇・五糎。石材安山岩。中型のまとまっている塔である。相輪上部を欠失しており、反花座も現在の物は当初よりの物ではない。構造は関東型式通例のもので、特に変った所はない。四仏種子は胎蔵界

川場村延明院　宝篋印塔

のア、アー、アン、アクを彫刻、屋蓋の隅飾突起の二孤の小さい一つが角になっている。相輪最下部の反花は無地で伏鉢状をなし、その上の請花は単弁、この様式は綱子の塔と類似している。九輪は七輪を残し上部を失なっている。銘文は左記の如く陰刻されている。

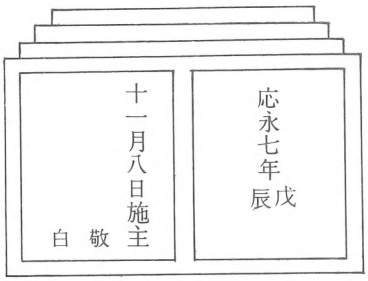


基礎
高さ——18.5 cm
巾　——28.9 cm

根利の塔　（利根村大字根利字宇津野）

この塔を宝篋印塔と呼ぶのは適当でなく、むしろ多宝塔と呼ぶ可きかも知れない。本来の構造が遺憾乍ら摑めないので仮に宝篋印塔としたのである。時間をかけて附近に倒れている塔の部分と組合せて見れば本来の形が得られるかも知れない。各部の構造は二段の台座の上に、輪廓を巻いた塔身、下二段上に半球形とその上部に円形の低い造出しを付けた基礎、輪廓を巻いた塔身、下二段上に半球形とその上部に円形の低い造出しを持つ中台がある。中台には隅飾突起と中心にもう一つ三孤の突起があり、側面には縦連子が彫刻してある。その上に円筒状の下部に単弁の請花を彫り出し上部に低い造出しをつけた一石を積み、その上に相輪が立て、ある、極めて不安定な形である。これは勿論元の姿で無いことは誰でも感じるであろう。相輪と円筒状のものとの間に屋蓋があったのかも知れない。そうすれば一応塔形は整う。しかし中台上の物がこの塔の物かどうか一考せねばならぬと思うが、中台上の円形造出しと円筒状の下部との直径は同じでぴったり合っている。

この円筒状の物を取除き半球形の造出しの上に直接屋蓋を乗せれば、前橋市公田町覚動寺の永和二年塔と非常に良く似た形となる。覚動寺塔の中台には隅飾突起の他中央に三孤の突起があり、上部に半円球の造出しのある事も根利塔と同様である。何れにしても充分の検討をせねば本来の形は摑めないと思う。興味ある塔である。塔身には胎蔵界四仏の種子ア、アー、アン、アクが雄渾に彫刻されており、基礎に次の如き銘文がある。



基礎
高さ——27.8 cm
巾　——46.5 cm

根利　宝篋印塔

この塔の附近に無銘宝篋印塔の他同時代と考えられる石造物が散乱している。相輪、宝塔の屋蓋と見られる物、宝篋印塔の基礎、塔身、五輪塔の一部等々である。

次に紀年銘のある塔を年代順に所在地を上げておく。

(1) 片品村大字花咲（基礎）　文永元（一二六四）年
(2) 白沢村大字高平雲谷寺（基礎）　貞治二（一三六三）年
(3) 月夜野町大字上津（相輪欠）　貞治□年
(4) 同　大字下津三重院（相輪及塔身欠）　明徳三（一三九二）年
(5) 沼田市井土上成孝院（基礎）　応永十五（一四〇八）年
(6) 月夜野町大字上牧玉泉寺（相輪欠）　文明四（一四七二）年
(7) 同　後閑増田堂　明応二（一四九三）年
(8) 同　大字上津如意寺（塔身欠）　天正六（一五七八）年

（右八基の内第七の増田堂の塔は未調査故村誌による）

以上在銘塔以外に無銘塔は各市町村に遺存するが、完全かそれに近い物は極めて少い。利根村大字大揚字大平金子美濃守一族の墓、同村根利字宇津野の塔は比較的良く残っている。金子美濃守一族の墓にある一基は、屋蓋の隅飾突起の様式が、同村延命院応永二年銘塔と同手法であり、造立年代も近い頃の物と考えられる。

五　輪　塔

石材は安山岩が大部分であるが凝灰岩のものもある。非常に数は多く遺存するが無銘のものが多く且つ数基以外は小型である。

雲谷寺塔　（白沢村大字高平雲谷寺）

県内所在の南北朝以前の五輪塔は凝灰岩の物が多いが、雲谷寺の三基は何れも安山岩である。これ等三基は昭和初年現在地より数百米離れた所で発見され、こゝへ移建されたのである。三基の内無銘塔は新田義宗之墓と伝えられている。

向って左の塔は上部の三輪と、下部の二輪は別物である。水輪と地輪は四門の梵字の筆法、刻法等から見て一体の物と考えられる。地輪の中心に雄大な修行門の梵字アーを彫りその左右に、次の如き銘文が刻されている。

雲谷寺　五輪塔

聖慶禅尼　生年
廿八
於
申剋
文和三甲午十月十三日
死去

右の銘文によれば、文和三（一三五四）年十月十三日は歿した年月日で、塔造立年月日ではない。而し種子や塔の様式から見て、逝去後いくばくもなく造立されたものと考えられる。

文和３年銘

向って右の塔は、上二輪と下三輪は別物である。火水地の下三輪は同時代の物であろう。四門の梵字の筆法刻法等に一致点が見られる。地輪中心に大きく修行門の梵字アーを彫り、その左右に次の如き銘文が刻されている。

午
長州禅門永祥
六十一

逆修畠
応安三年庚戌十月廿三日
敬白

二基共完全な塔ではないが、水地輪は時代の規準となる貴重な塔である。応安二年は一三七〇年である。

新治の塔（新治村新巻徳厳寺管理墓地）

無銘であるが完全に遺存する。凝灰岩の塔である。総高九一糎、各部の構造から見て、室町初期の造立と考えられる。只一基近世墓地の中に総墓の如く建てられている。新治村には凝灰岩の出る山があり、石質も同じ様に見られる、その山の石材を利用したのではないだろうか。

月夜野町上真庭、真庭氏先祖の墓地には六基の五輪塔があり、内三基に紀年銘がある。寛正二年、永禄六年、元亀二年と何れも室町中末期の塔である。写真だけ見て実査しないが、何れも紀年銘時代の物と見て差支えないであろう。

無縫塔

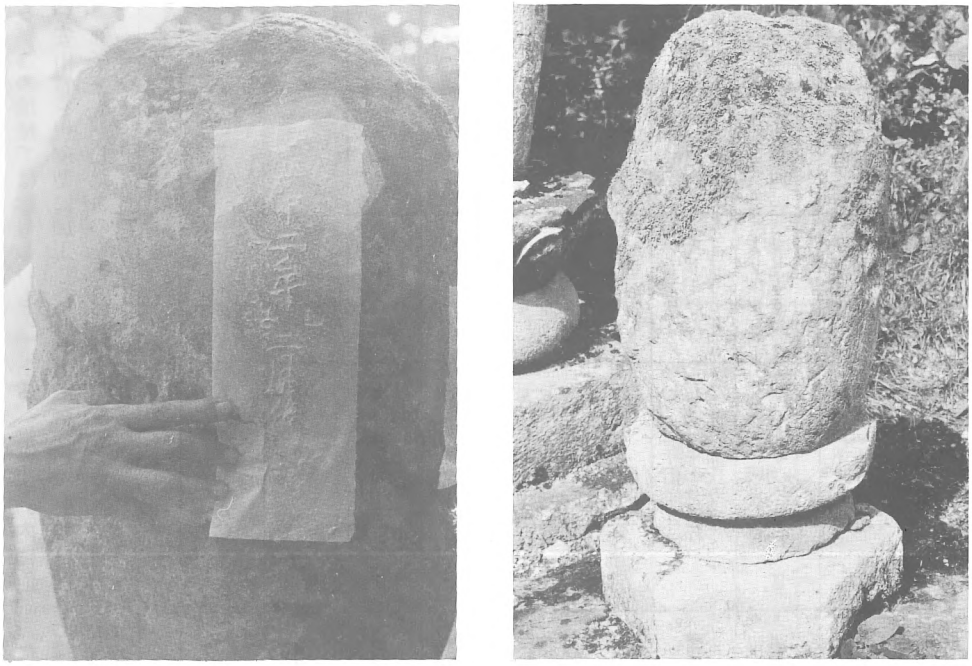
県下に現在四百ヶ寺近い禅宗寺院があり、鎌倉時代に創建された禅宗寺院も世良田の長楽寺を始め多数あるが、中世の無縫塔は未だ一基も発表されていない。この度の調査によって始めて鎌倉末の紀年銘ある塔に接したのであるが、銘文通りの造立か否か疑問のまま報告しておく。

延命院無縫塔（川場村大字生品）

現存部総高九九糎。石材凝灰岩。六角形の基礎上に一石造りの円形敷茄子と単弁の蓮華座を置き、高さ六七糎下部径三〇糎の卵形塔身を建てた塔である。台座に比較し塔身は非常にやつれている。特に上部は剝落が著しく目立つ。石材が軟弱な関係であろう。銘文は塔身に次の如く二行に陰刻されている。正中二年は一三二五年である。

正中二年乙丑二月
弁清　敬？白？

右銘文が造立年月とすれば、県下只一基の鎌倉期無縫塔として特筆す



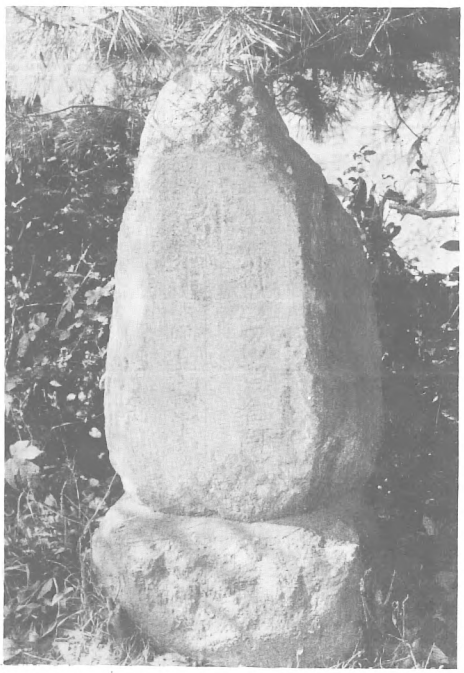
川場村　延命院　無縫塔

べきであるが、何かそのまま信じることが出来ない面がある。第一鎌倉時代に塔身へ右の如き銘文の彫り方をするか否かである。江戸時代なら不思議はないが、鎌倉時代にはもっと慎重な塔身の取扱いをしたのではないだろうか。又文字が弱々しく、刻法にも疑問な点がある。しかし干支の文字、その入れ方には中世的な所があり、塔身の形にも荘重さがある。何れにしても一考を要する塔である。

これは余事であるが、延命院境内出土の骨壺は印花巴文のある瓶子にして十四世紀の作と見られる立派な壺である。

板　碑

前記の如く二〇基の在銘塔と多数の無銘塔があるが、大部分の種子は弥陀三尊か弥陀一尊で、釈迦、大日、地蔵等の種子所刻のものは見られなかった。月夜野町大重院の永仁塔には天蓋、瓔珞及び一対の華瓶があ



沼田市　成孝院　異形板碑

り、同町資料館保管貞和塔には、天蓋、瓔珞及び一個の華瓶を配してある。この地域では珍らしいものである。無銘塔の内に他地方には珍らしい安山岩を板碑型に加工した高さ三七糎、巾一七糎、厚さ七糎の弥陀三尊種子を彫刻したものを、月夜野町真庭で、又白沢村大字上古語父で真庭塔より稍々大きい同種類の物を見た。何れも室町末期のものであろう。沼田市井土上町成孝院に、安山岩の自然石の表面だけを加工し、銘文を刻したものがある。

次に年代順に銘文および所在地を上げておく。

番号	西暦	種子	銘文	所在地	備考
1	一二九六	サ キリーク サク	永仁四年（カ）（下欠）	月夜野町大字上津大重院	高さ　巾三一糎 天蓋瓔珞あり、三尊種子の下に蓮華座あり 年号左右に各一個宛華瓶を刻す
2	一三一八	（上欠）サ サク	文保二年戊午六月　日（下欠）	沼田市下沼田片山敏氏墓地	現高　七六・七糎　巾三二・八糎 三尊種子の下に蓮華座あり
3	一三一九	（上欠）サ サク	文保三年己未卯月　十八日 忠時	沼田市井土上町成孝院参道	現高　七六・七糎　巾三二・八糎 俗名のある貴重なもの 忠時の忠は剝落のため已に見えるが、忠が正しい
4	一三二〇	キリーク	元応二年	白沢村糸井長慶寺	高さ一五〇糎　巾四三糎 キリークの下に種子が刻してあるが剝落のため判読不能、年号も全然見えない。村誌による。
5	一三二二	サ キリーク サク	元享二年二月　日	新治村大字須川泰寧寺	高さ九七糎　巾二五糎 キリークの下に蓮華座あり 完全
6	一三二九	（上欠）	元徳（カ）元年己巳十一月廿三日	県立博物館蔵、昭和村出土	現高　四三糎　巾二八・五 昭和村糸井一三二より骨壺と共に昭和三十六年出土
7	一三三〇	サ キリーク サク	上野相俣 元徳二年十月□日 物部氏女立	新治村塩原割田勇氏蔵	高さ九一糎　巾二六糎 三尊種子の下に蓮華座あり、上野相俣、物部氏女立の二行は追刻 完全
8	一三三四	サ キリーク サク	建武元年甲戌十二月　日	沼田市堀廻町竜興寺	高さ一一四糎　巾三二糎 天蓋三尊種子の下に蓮華座あり 完全
9	一三四八	サ キリーク サク	貞和二年（一）戊子三月　日	月夜野町資料館　鈴木一郎氏蔵	高さ九九糎　巾二七糎 天蓋瓔珞キリーク下に蓮華座あり年号上に一個の華瓶を刻す年号左右に梵字光明真言を四行に刻す　優秀　完全
10	一三五〇	サ キリーク サク	貞和六年二月　日	県立博物館蔵、昭和村糸井出土	高さ六九糎　巾二二糎 キリークの下に蓮華座あり 骨壺と共に出土

11	一三五一	キリーク サク	観応二年十月 (下欠)	沼田市下川田遷流寺	現高　巾二四・五糎 キリーク下に蓮華座あり
12	一三五二	キリーク	観応三年十月　日	川場村谷地薬師堂	高さ五五糎　巾一六糎 キリーク下に蓮華座あり 小型であるが、種子蓮華の彫り　優秀　完全
13	一三五三	キリーク サク	文和二年四月　日 (下欠)	川場村生品延命院	現高　五八糎　巾二三糎 キリーク下に蓮華座あり 年号左右に華瓶彫刻
14	一三五六	キリーク	延文元年八月　日	利根村大原昌竜寺	高さ四七・五糎　巾一五・五糎 キリーク下に蓮華座あり　完全
15	一三五八	キリーク サク	延文三年（下欠）	川場村生品延命院出土中学校保管	現高　五八糎　巾二四糎 キリーク下に蓮華座あり
16	一三五八	キリーク サク	延文三年　戊 戌　十一月　日	昭和村教育委員会	高さ　六七糎　巾二一糎 キリーク下に蓮華座あり 四八年八月二三日出土　完全
17	一三六一	キリーク	延文六年六月　日	利根村園原新井隆昌氏蔵	高さ　五七糎　巾一九糎 キリーク下に蓮華座あり　完全
18	一三六七	キリーク サク	百聖金阿 貞治六年七月　日	沼田市井土上町成孝院参道	高さ八五糎　巾五六糎　厚さ四五糎 安山岩の自然石の表面のみ加工して刻字 完全
19	一三六七	キリーク サク	大才浄暁 貞治六年十一月廿七日 丁未　七十四	県立博物館蔵、昭和村出土	高さ一一三糎　巾三二・五糎 三尊には各々蓮華あり サ・サクの下に梵字光明真言を四行に彫刻　完全
20	一三六八 ～ 一三七四	キリーク	広安□年八月　日	利根村大原昌竜寺	高さ五一糎　巾二一・五糎 キリーク下に蓮華座あり
21		キリーク サク		月夜野町真庭佐藤武雄氏蔵	高さ三七糎　巾一四糎　厚七糎 安山岩を板碑型に加工し表面を輪廓を残して彫り凹め三尊種子を彫刻　完全
22		キリーク サク		白沢村上古語父桑原功氏蔵	高さ五四糎　巾一九・五糎　厚七糎 安山岩を板碑型に加工し三尊種子を彫刻、二折になっているが接着可能

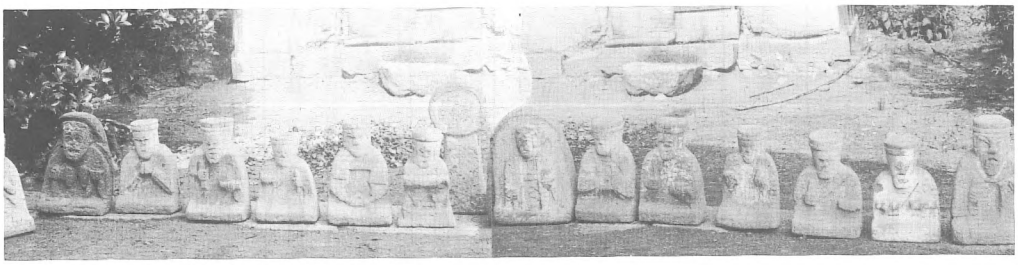
無銘板碑は所在地だけを上げておく。
片品村伊閑町釈迦堂
川場村公民館、同中学校、同延命院
白沢村上古語父桑原功氏、同尾合禅定院、昭和村上糸井長慶寺、同川額雲昌寺
新治村東峯金泉寺、同東峯本多孝雄氏、同須川本多光寿氏、同須川泰寧寺、同相俣海円寺、同相俣林喬氏
利根村日向南郷吉野金作氏、同大原昌竜寺、同島古井釈迦堂址
沼田市原町須田重造氏、同堀廻町竜興寺、同下沼田片山敏氏、同井土上町成孝院、同下川田遷流寺、同屋形原町、同上川田町下村
月夜野町後閑祐次氏、同小川島、同上津地蔵堂、同下津大重院。

石仏

中世の紀年銘のある石仏は見られなかったが、雲谷寺の十王像と谷地の磨崖仏は注目すべきものである。

十王像（白沢村大字高平雲谷寺）

地獄にあって亡者の罪業を裁断する、十人の主である十王が死者の善悪を裁判するという思想は、中国的道教的なもので、吾国には平安時代後期より次第に信仰が盛んになり、鎌倉時代



雲谷寺十三像

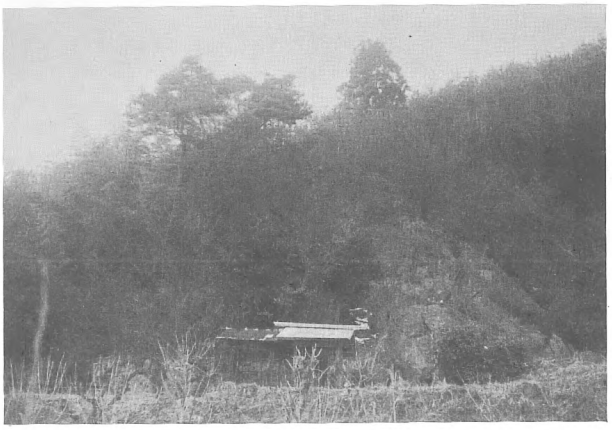
川場村　延命院　墓地

（銘文）　元禄十丁丑歳
庚申供養之所
九月十六日

に充実した。しかし像容についてははっきりした規定はない。地獄極楽という思想や、地獄信仰とからみ合って特殊な発展をしたと云われている。十王の中では閻魔王が一般に知られている。

雲谷寺本堂に向って左手に小堂宇がある。その中に十王、地蔵、脱衣婆、浄玻璃、人頭杖、裸身像等十七体の像がある。十王、人頭杖、浄玻璃、裸身像は江戸時代初期に造られたものと見られる。高さ五〇糎前後の小像であるが珍らしい物である。人頭杖は簡便化した蓮台上に二個の首を乗せてある。元焔魔天の持物であったが、閻魔王にも流用されたのである。浄玻璃は柄鏡状に造られている。裸身像は女体を思わせる物にして、腰から二つに体を前に折ってひれ臥している姿である。僅か一五糎の小像であるが写実的な表現は強い迫力がある。これ等を並べて見ると往生要集の絵図を見ている様な感じに打たれる。珍重すべき像である。

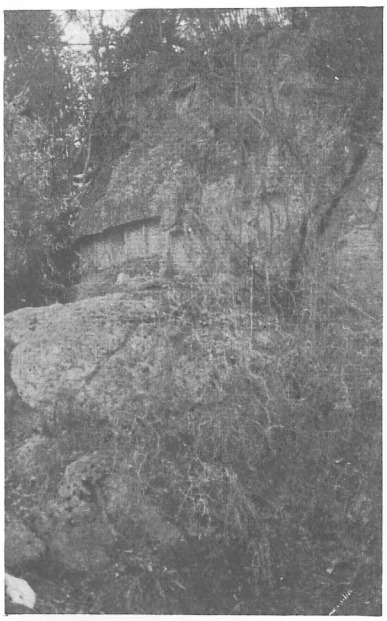
江戸時代の物であるが、閻魔大王と脱衣婆（みそなめ婆さん）の像が墓地入口以外の路傍に数多く建てられている。中には閻魔大王が庚申塔に流用されているものもある。川場村生品延命院の像には背銘に、元禄十丁丑歳、九月十六日、庚申供養之所と三行に彫られている。



川場村谷地　全景

磨崖仏　（川場村大字谷地字打越）

雑木山の表土が流れ落ちて凝灰岩の岩肌が、大きく露出している部分がある。磨崖仏はその岩面を一〇糎乃至二〇糎彫りくぼめ、その内へ高さ約六〇糎の観音像を一区廓一体宛陽刻し、岩壁面の大きさに応じて、二体、三体或いは五体一ヶ所にまとめて飛び飛びに彫られている。総数約二十体、秩父三十四番札所にならって造顕されたと伝えられている。而し三十四体全部の完成を見ないで中止されたのであろう。麓の岩上に寛保三年（一七四三）に新田郡脇屋村の良円によって建立された回国供養塔がある。良円は現在の太田市脇屋の正法寺の僧であろう。寛保三年にこの磨崖仏をたずねて、東上州から巡拝者がある程既に、世の中に知られていたのであろう。当時の観音信仰を知る良き資料である。山の麓は墓地でさゝやかな堂も建てられている。墓地には中世の宝篋印塔と五輪塔の一部が遺存しており、中世からの仏教遺跡である。磨崖仏の造顕年代は像の様式から見て江戸時代中期と考えられる。



磨崖仏の巌

層塔式庚申塔

東毛地方平担地では見られない庚申塔の一型式である。構造は基礎上に三猿、二鶏を陽刻し銘文を記した塔身を置き屋蓋をのせ、次に第二、第三、第四、第五と軸部と屋蓋を交互に積み重ね最後に相輪をのせる。上層部の軸部に円相を薄肉に現した物もある。造立年代は次に記す如く大体江戸時代中期であり、石材は安山岩が用いられている。

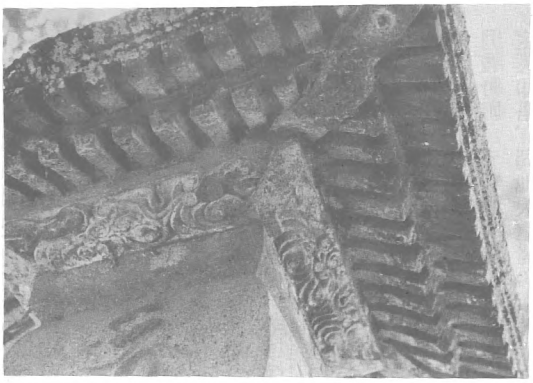
並ぶ磨崖の仏たち

次に重なる塔を年代順に上げておく

新治村大字須川	承応二年（一六五三）
川湯村大字谷地	承応四年（一六五五）
白沢村大字高平	明暦三年（一六五七）
月夜野町大字真庭	同
同　大字真政	同
片品村大字伊閑町	延宝四年（一六七六）
同　大字戸倉	貞享三年（一六八六）
昭和村大字川額	元禄五年（一六九二）
月夜野町大字下牧	正徳三年（一七一三）
新治村大字猿ヶ京	明和二年（一七六五）
沼田市大字沼須	明和四年（一七六七）

片品村　所見

昭和村川額



右の部分

信州高遠 石工の作品

江戸時代中末期から高遠石工が、上州各地へ進出して多くの優秀な作品を残している。当時の高遠藩は小藩であり、財政的に苦しかった関係から、藩の政策として、耕地面積が少ない山間部の農民に対して、石工の旅稼ぎを奨励した結果、最盛期には全国各地へ数百人にのぼる石工が旅稼ぎに出たと伝えられている。利根郡内には比較的遺品数は少ないが次の一点は注目に値する。

昭和村大字川額字永井に、寛政五年高遠弥勒村の石工伊藤新助、同友八郎が作った宝篋印塔がある。二段の切石積の基段上に、四つ足の基礎、草花模様を彫刻した受座、迦陵頻伽を彫刻した中台、三重の連華座、木造建築の如く軒廻りに技巧を施した屋蓋、相輪等何れも極めて精緻な技巧をこらした彫刻のある優秀な作品である。石材は俗に信州真石と云う安山岩が用いられている。(金子規矩雄)

調査日乗

昭和四十七年

八月十七日

沼田合同庁舎における打合会終了後、白沢村出身の岸大洞氏先導により、近藤義雄氏同道にて白沢村大字高平の雲谷寺調査。

五輪塔。新田義宗の墓と伝えるほぼ同年代の三基。利根地区の五輪塔として優位なものであろう。南北朝時代。

境内左手の十王堂内の十王像。寺の木像二体。門前の石造群。

八月二十二日

片品村。雨降る中を阿部孝社教主事、片品村教委の先導で調査。戸倉武尊山神社境内の石造群から土出、越本、須賀川、花咲とめぐる。層塔型式の庚申塔とえんま像と奪衣婆(みそなめばあさんという)が特に目立つ。

鎌田泊。夜、彫刻の永井信一、県社教丑木幸男氏と同宿。

八月二十三日

川場村。大字大門の明田岷斎梅渓画梅の碑(高遠石工作、明治五年)を見て谷地の薬師堂板碑(観応三年)。生品の延命院の宝篋印塔、無縫塔、印花瓶子、板碑などを調査。

白沢村。上古語父字月夜野の胄塚出土の板碑と関係資料を調査。
沼田市泊。
八月二十四日
昭和村。森下の道路工事中出土の板碑（延文三年）を教育委員会室で調査。川額の五輪塔、雲昌寺の五輪塔群、前記板碑出土地。川額円乗院門前の寛政五年宝篋印塔は信州高遠石工の作品の中でも出色のもの。上糸井。長慶寺板碑は正応二年と伝えるもの。
新治村。東峰須川の板碑。本多家三軒。泰寧寺の元亨三年銘の板碑から相俣の海円寺板碑調査。
猿ヶ京泊。
八月二十五日
水上町。綱子の宝篋印塔。永和二年八月二十六日。ととのった型体の美しさ。小仁田の五輪塔その他を調査。
月夜野町。資料館所蔵板碑。天蓋、三尊、貞和四年銘。上津の如意寺宝篋印塔、同地大重院の板碑、天蓋、三尊蓮台、一対の花瓶、永仁四年銘。下牧玉泉寺。
夕刻帰宅。
十月三十一日
利根村。根利の異型宝篋印塔調査のため根利川を溯行。紅葉の美しい渓谷をゆく。根利小学校の近くに数基の石造あり。日向南郷の吉野家板碑その他。穴原の金子家墓地の異型板碑など。大原昌龍寺所蔵板碑と同栗生の五輪塔。追貝吹割地内浮島の五輪塔。大揚の金子美濃守観音堂跡の五輪塔群。
追貝泊。
十一月一日
沼田市。下沼田片山家墓地の文保二年板碑。上川田東光寺宝篋印塔。完型。大きさ型体銘文もよい。遷流寺板碑。
沼田市泊
十一月二日
沼田市。井土上の成孝院。文保三年銘板碑。異型板碑、貞治六年銘。宝篋印塔。その他。池田地内石造美術品を調査。（丸山知良）

民俗芸能

はじめに

芸能の今回の調査で各地区の調査員の方々から出された調査用紙には、ほとんど神楽や獅子舞の類のものが多かった。これら集団により構成されている伝統芸能の沈降現象もはげしいが、しかし個々人により伝承されて来た民謡の消滅はこれよりはるかに激しいテンポで沈降現象をもっている。

こうした面から考えても、民謡のにない手を今回の調査で探求できなかったことは、心残りのすることであった。

民謡の場合にはその領域がはなはだ広く、仕事唄、祝儀唄等更にその内容分類をしたら無限といえるか知れない程たくさんの唄がある。

群馬県の外郭地帯ともいえる、深い山にかこまれた利根、沼田地方にまだ多くの民謡等の伝承者がいてよいはずであると思う。

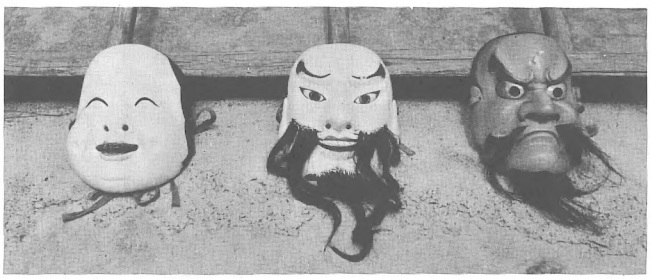
今回の地区の調査員の方々からは民謡に関する報告はほとんど出されなかった片品村の例を引用してみよう。星野教育次長にお願いして「声よし」の方を紹介して戴き、今回の調査に合わせて民謡の調査を行なってみた。民謡を歌って戴いたのは二人の老人であるが、二人で二十曲もの珍しい片品村の民謡を採集することができた。

また芸能はその村や町の祭等に合わせて行なわれるので、きめられた今回の調査日程の四日間の中で、調査、録音、録画等を行なうのは無理で、決められた日時に調査を行ない、その後その地域の実状に合わせて演奏、演唱等の実演をして戴き、録音録画等しなければならない。そのため祭典等に合わせて行なう例が多く、芸能調査班の出むく日数は、おのずと多かった。特に一月から春祭り等の芸能がはじまるので、調査も春から一年間を通してこれらの祭に合わせて行なうことが、芸能調査には大切と思われる。特に最近は人手不足から老人等も働いている方が多く、普通の日に歌って戴くようなことは誠にむつかしい時代となって来ている。

また今回の調査では芝居に関するものが少なく、現実に行なわれておらなくても、舞台、芝居の小道具など、各地に埋れているものの調査も民謡、獅子舞、神楽等と同様に大切と思われた。

「民俗芸能」１０２頁は

個人情報が含まれるため非公開



利根村高戸谷の「太々神楽面」

十一年に硯田より道具を借りて来て、高戸谷部落で習った。この時松本光四郎が教える。松本光四郎の祖父が全国を廻り、さまざまな神楽を習いおぼえ、この神楽を特別に編み出したといわれている。大正十一年に高戸谷部落で受けついだ者は、金子虎弥（舞）、高橋明（舞）、高橋祥次郎（舞）、高橋一二三（舞タイコ）、高橋賢一（刀つかいと舞）、金子市太郎（舞）、高橋五八（笛）などの青年である。当時は高戸谷に生れた青年男子（長男でなくても）が行なった。大正十二年には村の者に笛吹きが出きず、硯田から教えに来た笛吹きが吹いてくれた。舞とタイコは地元の者でできた。翌年の大正十三年にも師匠が来て教えてくれた。

練習は高橋貞作氏（神官）宅（現在の高橋五八氏生家）で行なった。教えに来た松本光四郎も神官であり、貞作氏が神官仲間であったので、松本氏に依頼して神楽の伝授をしたという。

楽器

大胴(1)　締タイコ(2)　笛(1)

これらの楽器は、昔高戸谷に祭ばやしがありその楽器を利用した。

座数（十二座）

素面（奉弊・大麻）　天狗　浮橋　かぐや　なぎなた　てんこ　岩戸開き　両刀　弓　おろちたいじ　えびす　国がため

次上十二座である。太平洋戦争中は休み、戦後始めたのは、昭和四十年からである。また昭和四十三年に保存会ができ、青年によって伝承されている。面などの用具は非常にいたみがひどい。

小川神社神楽

所在地　月夜野町小川

管理者　月夜野町小川部落

小川神社御神楽由来

始創詳ならねど近来知る所を記すに、現在小川神社は元小川字富士山頂上に鎮座せし富士浅間神社にて、氏子は小和知、和名中、渕尻、森原、水沼の住民の氏神様として崇拝せし所、明治の末年神社合併の時、右五部落の神社合併し森原に元より在りし諏訪神社に合祭小川神社と社名し、富士浅間神社の祭神木之花開耶姫の外拾三神社の祭神合祀しある。小川神社、大祭春、秋、外小祭は数多けれ共、春季大祭四月十五日祭典に奉納の御神楽にして其神楽師として認可は元禄三年二月七日神祇管領長上従三位左兵衛督卜部朝臣兼連より上野国利根郡沼田月夜野天王之巫女兵庫恒例之神事神楽勤仕之時可着無衣者神道裁許之状如件。其後正徳三年、元文五年、寛政四年、天保四年、以上五通の外最近のものは明治三七年八月廿日付神拝講社本部よりの神楽認可証、外に元文、寛政、天保の年間神楽冠、装束、袴の許可証、神楽秘文ゐん口傳、等位記箱調査中発見。

揚楽、一

神鏡、一　剣、一　太刀一　神面拾七面　装束数十着　冠、一

太鼓、大小各一、長一、龍笛、三、鉦鼓一、昔より相傳。

一日の奉納は十二座に限定。

第一座　通称奉弊式。出御神、五神、句句遅馳命、鴨遇槌命、植安命、金山彦命、水泉女命

第二座　通称国がため、国常立命。

第三座　通称鏡とぎ、石凝姥命。

第四座　通称かじや、大戸道命、天目一津命。

第五座　通称鉾つき、猿田彦命。

第六座　通称岩戸開、天鈿女命、手力男命。

此所にて太々御神楽の御札を神楽殿より神前に供御して主祭司宮司に

よって祭典挙行。

第七座　経津主命、武甕槌命。
第八座　春日大神。
第九座　大日要命、稲蒼魂命、素盞嗚命。
第十座　素盞嗚命、稲田姫命、大山祇命。
第十一座　素盞嗚命、稲田姫命、八頭大蛇。
第十二座　手奈槌命、天津姫命。

以上十二座を以て終了す。神楽師人員に付ては罪科なき家の長男と定めあれども、現在の所適任者少し。舞師、楽仕にて十名は是非必要なれど定員補充困難。装束外必要物の修理補足に付ては、区有志、共有等より補助を受けても永年勤続のこと故破損甚しく、元より敬神奉仕にて定まる給与等なく、座員の少なくなるも無理ならず、よくも三百年近き間奉仕したるは崇敬の極である。案ずるに往古認可の時代は神子舞にありしもの、吾等の知る所は明治の中頃、時の座長某吾妻郡三島村唐沢某招聘して現在の神楽舞となり。以降百年ならんとす。まだ調査すればとは思うが資料も中々の事。これまでにて筆を置く。

（月夜野町民俗調査より）

箱根権現神楽（代々神楽）

所在地　利根郡昭和村永井
管理地　利根郡昭和村永井　諸田英次郎地

武州の御嶽山より伝わったといわれる。勢多郡北橘村下南室のものも同じ神楽といわれる。北群馬郡子持村の千木良利三郎氏が、来て教えてくれた。下南室の神楽と千木良氏の教えたものと、二つ合わさって出きた神楽である。

四月十五日の笹根神社の祭典に、この神楽を奉納する。この神楽は明治十六年に十二人で始めた。面や道具を二百五十円で買った。諸田を名乗る親類同志の家だけで、この神楽は構成されている。同族所有の神楽といってよかろう。

明治十六年初代　諸田忠五郎
二代　諸田三津五郎
三代　諸田英五郎（現）
四代　諸田金夫

諸田を名乗る十二軒で構成し、他の家の者は入ることは許されない。又諸田家十二軒の長男のみに受け継がれる。

練習は祭典の十五日前より始める。諸田講長宅。神楽の指導者を講長、神楽連中を講中と呼ぶ。すべて講長が指導する。親が子に教える。親子親戚の中での練習だけに、はなはだ厳しかった。

楽器大胴一　締太鼓一　笛三（六穴）　舞手六

戦時中もこの神楽は休んだことはなかった。舞の中で問答をする。かつては二十一座あったが、現在は七座のみ行なう。

河内神楽

所在地　沼田市井土上町
管理者　沼田市井土上町。原町。

昔は三月九日に行なったが、現在は四月二十九日に、河内神社の祭典にこの神楽を奉納する。大正時代は後閑町より神楽を頼んで行なった。練習は井土上町公民館で行なう（戦後）。戦前は原町で行なった。大正の末頃硯田に松本光三郎が警察官をやめて住んでおり、この神楽を河内神社にも教えた。井土上町からは高橋戸市郎（八二才、昭和四十七年七月死去）が一人習った。その年より河内神社に神楽は奉納された。現在は原町、硯田だけにしか神楽の演奏者はいない。

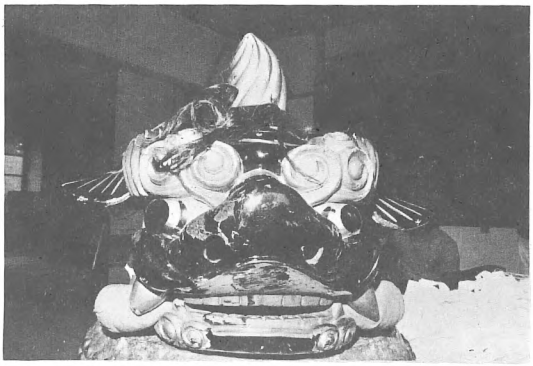
高橋戸市郎は舞も笛もこの村に教えた。今も硯田の人達と一緒になって奉納している。

楽器　大胴一　笛二　締太鼓四

面や道具は現在は原町に保存してある。

獅子舞（一匹だち）

所在地　利根郡利根村追貝一四八
管理者　利根郡利根村追貝一四八　長谷川信次



利根村追貝の獅子頭

三月二十九日大国神社の祭典に行う。追貝の青年が中心で行なう。三月に入ると練習を始める。追貝に生れた男子が行なうことは昔から変らない。しかし青年女子は接待役で当日手伝う。この獅子舞に入るのは、学校を終えてからで、はじめは笛を与えられて練習に入る。獅子頭をかぶれるのは三年目にならねば出きない。三年目になっても練習中は、イス、箱などを面として練習する。練習場所は昔は海蔵寺、その後小学校で行なう、小学校で練習するのはかなり前からである。

太鼓が大きく音も大きいので近所より苦情がくる。こうした面でいつの練習も青年は苦労する。祭りの日は追貝地区各戸を廻る。朝五時頃神社に集り、宮司のおはらいを受け清め酒を戴いて振りはじめる。

曲　目

乱丸（神社で舞い奏する）　道行き（家に飛び込んで奏する）　ギオン囃子（家の中に入ったとき奏する）　ラクネ（家の中に入ったとき奏する）

各家でハナといって祝をくれる。その金額によって、演奏する曲目もちがう。金が少なければ道行きのみ、金の多い家では、ギオン囃子やラクネなど全曲奏しまた舞う。金のみでなく各家ではお祝として酒が出る。昭和四十六年にはハナが十二万円。昭和四十七年には十四万円程あがった。その金の半分は、師匠（古老）たちに、残りは青年団会費とする。

各戸を舞い終ると、青年会長の家で酒を飲みその晩は会長宅に泊る。

由　来

この獅子舞は、大正のはじめ頃（六十年程前）根利林業所に富山県から、高田三松が来ており、その人の息子の鉢呂荘一郎（聟のため鉢呂姓）が、追貝に教えた。はじめは根利山でやっていたが、この追貝で習いはじめたのが大正十一年である。

楽　器　笛、四　大太鼓、一（棒に差して二人でかつぎ、打ち方が一人）

また獅子とりがあり、獅子とりが獅子をいとめて、このとき大きなキセルでタバコをすう。獅子とりの道具は、大きなキセル　ドーラン　獅子とりのかぶる毛（ヘットといっている）。

この獅子舞は、追貝で昔疫病が絶えたことがないので、その平癒の為に行なわれたのがはじまりである。また年始めの悪魔払いとも村人は言っている。

獅子舞（三匹獅子）

所在地　利根郡利根村穴原

管理者　利根郡利根村穴原　猪瀬光一

穴原の武尊神社の九月十日の祭りに奉納される。獅子舞の練習は祭典の一週間程前から、農家の養蚕室、それも養蚕をしない家のを、区長が話して借りる。獅子舞に加わる者は昔はこの地に生れた長男だけ、現在は誰でも加わることが出きる。小学六年生から中学二年生までの者が加わる（昔は高等小学校高等科二年）。昔は練習は誠に厳しかったという。

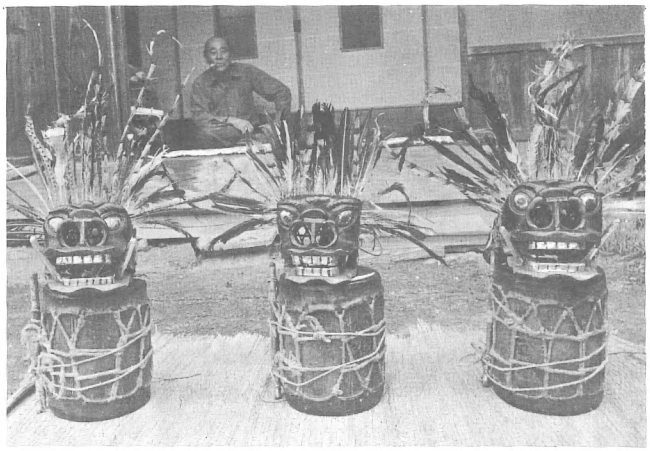
この獅子舞では、明治のはじめ笛吹きの中沢栄蔵氏が死亡、その時笛を誰も受けついでいなかったため、笛の節を口で歌ってその後現在まで「口歌い」で続けられている珍らしい獅子舞である。

祭典の日は、神社の境内にネコ（ガマダタミ）を十二畳程敷き、師匠の文句に合わせて舞う。獅子舞に参加する者は、紋付姿に夏羽織を着る。

獅子振りの子供は、ハカマにかすりの着物姿。神社の廻りを獅子振りが先頭になって舞う。後を村中の人がついて廻る。そして前の者が「世の中のよいときは」と歌うと、後の者が「駒に角がおいそろう」と掛け合い的に歌う。この獅子舞（祭典）に参加する村人で刀や鉄砲をもっている人は、だれも持ち寄って参加する。刀はぬいて高くふりあげ、鉄砲は神社の外側を廻りながら空砲を幾回かうつ。

楽　器　腰太鼓　三　締太鼓　一　口で歌う笛一

祭典の前の晩は宿で、本番と同じに舞を行なう。リハーサルの意味である。



利根村穴原の獅子頭

この穴原の獅子舞は、子どもが舞うのと各戸を獅子が振り歩かないのが特徴である。また、獅子頭は猪獅子で、柿の黒たんで作ってあるのが珍らしい。実に立派な頭である。頭には山鳥の羽根を古くは差したが、次にコウチン鳥の毛を用いた。しかしこのコウチン鳥も少なく、今では白い鶏の毛を用いている。その鶏の毛も少ないので、村人が少しずつ持ち寄るようにして、祭典にまにあわせている。

この獅子舞は、猪に作物を荒されないようにとのことと、村に疫病が入ってこないために行なうとのいわれがある。

獅子舞（三匹獅子）

所在地　利根郡利根村根利

管理者　利根郡利根村根利　区長

諏訪神社の祭り、昔は七月二十七日、現在は九月十七日に行なう。この獅子舞を行う人々を獅子組と呼んだ。練習は祭りの日より一ヵ月程前より行なう。獅子組の家三軒を廻りもちにして練習した。かつては相当厳しく練習した。練習期間中は舞等も特に厳しく、便所に行ってもつくめぬ程、大変だったという。獅子組に入るのは長男が選ばれた。

根利の上組が中心でこの獅子舞を行ない、すべての指揮をしていた。この獅子は、どこからかかっぱらって来たものだと言われている。かっぱらって来るとき、後を追いかけて来た者が、鉄砲や刀をつかって追ったというので、現在も当日振り出しに神社で舞うとき鉄砲や刀をつかう。

舞いはじめは神社へ頭を三つ奉納し宮司のお払いを受けてから頭をつけて、それから神社を三回廻る。獅子が先頭で廻る。村人は刀、鉄砲を持って廻る。そして空砲を射つ。古くは紋付はかま姿で行なった。これがすむと神社の前に畳（ガマダタミ）三枚を敷いて、その脇に太鼓や笛の者が位置する。

村の役員は、羽織はかま姿で一段高い石垣の所（社殿）に座って酒を飲みながら、獅子舞を見ている。この役員達は金を多く出してくれた。舞うとき名主が神社のご神体を先頭にもって廻る。

この獅子組も若者が中心で行なうが、現在は年寄も加わって行なうので、ある程度略して行なっている。道化舞もある。道化は踊っている蔭から出て舞う。道化は火男面をつけ、木製の男性のシンボルをもって舞う。

楽　器　大胴　一（歌いながらたたく）　腰太鼓　三、笛　五

獅子頭　大獅子　一、中獅子　一、トモ獅子　一

この獅子頭も猪の頭である。穴原のものと同種類のものがあるが、この頭の方が彫りが大きく雄壮な感がある。

この獅子の起源は、村に疫病の入らないように行なうといういわれと、嵐をよけ、豊作を祈るためと言われる。特に嵐をよけるためとして、ススキの穂を（稲がないのでススキ）を三本ずつ首にさして、神社に奉納するなど、やはり豊作予祝的なこともこの獅子舞の附帯目的であろう。

獅子舞（非鋏流）

所在地　利根郡川場村萩室

所有者　利根郡川場村鍛治沢　村社諏訪神社氏子中外山哲夫他

祭りは十月一日、二日、三日で、獅子舞を舞うのは三日である。祭の前十日間程蚕屋を借りて練習を行なう。ほとんど練習は夜間行なった。昭和六年までは、小学校高等科の男子（長男のみでない）生徒が中心、これら小学校高等科の生徒を弟子と呼び、これらの者を教える古老を師匠と呼んだ。舞を教えるのに、師匠が弟子の体を持って行なうと、熱が入って弟子は持ちあがってしまった（小学生が体が軽く体が浮き上る）という。

練習のときは、各戸一人ずつ戸主にあたる者が出て立合い、区長が出席をとった。

十月三日の当日の舞始めには、練習宿になった家から振り始め、氏子総代（五人）の家を次々と舞う。最後に神社にオシメを張って舞う。村の人たちはこの神社で舞うのを一斉に見て来る。獅子舞は各戸を廻らず境内で舞う。

獅子は三匹獅子、三人で舞う他に振り付け役が加わる。振り付けは指導格の者があたる。振り付けは八尺程の竹に百枚の弊束をつけそれを持つ。これを百枚ボンデンと呼ぶ。

獅子舞が終ると翌日、同行バライといって、区長の家で獅子組の参加者は酒でごちそうになる。

楽　器　大太鼓　四、笛　四、腰太鼓　三、歌手　二（見物人も合わせて歌う）

腰太鼓を打つバチはシノで作る。それに色紙を巻く、舞い手は弊束を腰に二本差して舞う。

この非鋏流獅子舞は栃木県より伝えられたものと言われている。これについての古文書等は見られないが、この流派の獅子舞は栃木県に見られる。

現在萩室のこの獅子舞は中止の状態にある。獅子舞に使う道具や、衣裳等もしっかりしており、存続されることを望みたい。舞等も静かで優雅な舞である。

次にこの神楽の笛、タイコ、唄の文句をあげる。

川場村萩室の「非鋏流獅子舞」

振り出シ之段

笛　忠リヤウリヤリ 忠リヤウリヤー
　　忠リイリヤウトロ 忠リヤウリヤー
　　トーロリヒヤーラウラーウーラーラ
　　ラーハーウララハウローラーウーラーラ
　　トーロリヒャーラウ トロヒーヒ 右二回
笛　トヒリャウトヒリヤウトヒリャウリヤー
　　トーヒーリャウトロトヒリャウリャリャー
　　トーヒーリャリャウローリャリ
　　リヤリヤウロ
　　リヤリヤーリリヤウリヤリヤウ
　　ローニラウー ラーラ

笹掛り之段

笛　ヒーヒーヒートトロ忠リヤウリヤー
　　忠リーリヤーウトロ忠リヤウリヤー
　　トロヒトヒャーヒャウローリヤーウー
　　リヤーリヤ
　　ラーハウローラ ハウローラーウー
　　ラーラ
　　トロビヒトヒヤヒヤウローラー
歌　　トロヒーヒー
　　まわりやまわり水車
　　オカザキ女郎衆がウーラウラーラ
　　おそくまわりて
　　せつきに とまるな
笛　オカザキヒヨヒーヨオカザキヒヨヒ
　　デンツクデンツクデン〳〵〳〵クウ

霧獅子之段

笛　トヒリヤウ（振り出シト同ジ）
太鼓　デン デコデコデコ デンデーコ
　　デンデーコ
　　デン デコデコデコデンデーコ
　　デンデーコ
　　デン カタカッター デンカタカ
　　カッチンカー テッツンテ
　　デーコーデーッコン
　　デコデコデンデコ デンデコ デッコン
　　デコ〳〵デンデコ デンデコ デッコン
　　デン デーコーデーッコン
　　デコデコデンデコ
　　デンデコデッコン
笛　デコ〳〵デンデコ デンデコデッコン
　　デン デーコーデーッコン
　　トローヒーヨヒーヨヒ
　　トローヒーヨヒーヨヒ
　　トローヒートーヒヤラローガ
　　ウーラーウ ラーウヒ
　　ヒーヒートーヒヤラローガ
　　ウーラーウ ラーウヒ
歌　　思はぬ外に朝霧がおりて
　　そこで女獅子を
　　かくしとられた
太鼓　デンデコ〳〵 デンデンデン
　　デンデコ〳〵 デンデンデンデン
　　デンカタ カツカタ カツカタ
　　カツクー デン カタカッカタ
　　カーックウ
　　女獅子休ミ

笛　トロヒヨ　（前ニ同ジ）
歌　あなたも男獅子
　　こなたも男獅子
　心合せて女獅子たづねに
太鼓　デンデコ　（前ニ同ジ）
　次ニ四本デーコ　スナワチ
　デーコ　デーコ　デッテコ　デー
　デーコ　デーコ　デッテコ　デー
　デーコ　デーコ　デッテコ　デー
　デーコ　デーコ　デッテコ　デー
笛　トロヒヨ　（前ニ同ジ）
歌　奥山の沢の出口に女獅子居て
　なにと男獅子が嬉しがるらめ
太鼓　デンデコ　（前ニ同ジ）
笛　トロヒヨ　（前ニ同ジ）
歌　笛吹きの間にたちたる
　　女獅子をバ
　なにとかなして誘き出さばや
太鼓　デンデコ　（前ニ同ジ）
　次ニ二本デーコ　女獅子出ル
　デーコ　デーコ　デッテコ　デー
　デーコ　デーコ　デッテコ　デー
　次ニ
　デーコーデーッコン
笛　トロヒヨ　（前ニ同ジ）
歌　あれみさひ女獅子
　　男獅子の振りみさひ
　よれつほどれつ余念ないもの
太鼓　デンデコ〳〵デン〳〵〳〵（前ニ同ジ）
　次ニ獅子タツツク
歌　白銀の剣のつくりに刃をつけて
　松にからまる蔦を切らばや
太鼓　デンデコ　（前ニ同ジ）
笛　オカザキ　（前ニ同ジ）
歌　マワリヤ　（前ニ同ジ）
太鼓　デンツク　（前ニ同ジ）

庭　見　之　段

笛　リーリート〳〵リーリィートリィー
　チャリィリャリィリャーウトロリィー
　　リィートリー
　ヒィトーヒ　トーヒィトーロ
　　チャリーチャー
　　ラウローラ
　チャーラウローニラーウラァーウ
　　ローニラアウラーラ
　チャーラウローニ
　　チャーラーヒートヒート
　　チャーラウローニ
　チャーラウローガラーウラァーウ
　　ローガラァウーラーラ
歌　オカザキヒヨ〳〵
　思はぬ外に朝霧がおりて
　そこで女獅子をかくしとられた
笛　リーリートリリト
　　リーリートーロートーロ
　リーリートーロートーロー
　　トーローウロートーロ
　ウーローヲーニーヒャーララ
　ヒャーリ　ヒャーラロガローロ

歌　まわりやまわり水車
　おそくまわりて
　せきにとまるな

笛　歌切之段
　トーヒーヒャーウーヒャ〳〵ヒー（ユキエ）
　ヒーヒーヒーヒャヒヤウー
　　ヒーヒーヒーヒー
　ピヒャローニ　ヒャーロー
　ヒャァヒャァーウーローラー
　トーヒーヒャーウーヒャ〳〵ヒー
　ヒーヒーヒーヒャヒャウー
　　ヒーヒーヒーヒー
　ピヒヤローニヒャーロー
　ヒャァ　ヒャァーウーローヒー（ナガク）
　太鼓デーコーデーッコンデン

(諏)　マイリキテ　スワノミ
　ミタラセ　ナガムレバ
　イツモツ　ツキセヌ
　　コイトフナデソー

笛　チュン　リャ　リヤウー
　チュン　リャ　リヤウー（ナガク）
　チュン　リャ　リヤウー
　　リヤウ
　チュン　リャ　リャウー
　チュン　リャ　リャウー（ナガク）
　チュン　リャ　リャウー
　　リャウ
　ヒイトーヒイヒイトー
　ヒイトーヒャァヒャウロー
　ヒャァローヒャァ　ヒャァ
　ヒイトーヒイヒイトー
　ヒイトーヒャァ　ヒャウロー
　ヒャァローヒャァ　ヒャァ

太鼓　デーコーデーッコンデン

(訪)　コイフナガ　ヒゲヲソ
　ソロヘテ　アソブナラ
　スワノミ　ミタラセ
　　メイショナルモノ

笛　チュン　リヤ　リヤウ　（前ト同ジ）

(武)　コノモリニ　タカガス
　スムゲデ　スズノオト

(尊)　タカハス　スマネド
　オカグラノオト

笛　チュンリャリャウ　（前ト同ジ）

(熊)　コノミヤハ　ヒダノ
　タクミガ　タテタゲデ

(野)　クサビヒ　ヒトツデ
　　シホーシメタヨ

笛　チュン　リャ　リャウ　（前ト同ジ）

(東)　モロトモニ　ニシヘニ
　ニシヘト　ツキカゲノ
　ニシハア　アミダノ
　　ジョード　ナルカナ

笛　ヒョヲーヒョロヒョロ
　ヒョローヒャロー　ヒーヨ
　ヒョヲーヒョロヒョロヒョロ（ナガク）
　　ヒャロー　ヒーヨ
　ヒーカジャキ　ヒーヒー（ツヨク）
　ヒーカジャキ　ヒーヒー（ツヨク）

ヒーカジャキイヒーカジャキイ
ヒャウー ヒャウー
太鼓 ヒャァ ヒャァ ヒーヒー（ナガク）
デーコーデーッコンデン
㊀ テンジクノ イハガク
クヅレテ カブルトモ
歌 ココロシ シズカニ
アソベトモダチ
笛 ヒョヲーヒョー（前ト同ジ）
㊁ ヤマザハニ キリモノ
歌 ノボレバ ヤマヲダク
ワレモダ ダキタヤ
十六七ノコシ
笛 ヒョーヒョー（前ト同ジ）
太鼓 デーコーデーッコンデン
㊃ ココハドコ ココハミ
歌 ミヤコノ クルマバシ
キリリク クルリト
アソベトモダチ
笛 ヒョトヒョー（前ト同ジ）
太鼓 デーコーデーッコンデン
㊄ メグリキテ コレノヤ
歌 ヤカタヲ ナガムレバ
ゴシャクカ カモヰニ
ヤリノゴマンボー
笛 ヒョーヒョー（前ト同ジ）
太鼓 デーコーデーッコンデン
ゴマンボウ ヤリヲカ
㊅ カトゲテ アソブナラ
オクトエ エチゴハ
コレノゴショダヨ
笛 ヒョーヒョー（前ト同ジ）
太鼓 カッチンカー
テッツンテー
デーコーデーッコン
デコデコデンデコデンデコ
デッコン デコ〳〵デンデコ（ツヨク）
デンデコ デッコン デン
デーコーデーッコン
デコ〳〵デンデコデンデコ
デッコン デコ〳〵デンデコ（ツヨク）
デンデコ デッコン デン
デーコーデーッコン
笛 トロヒヨ（前ニ同ジ）
歌 山雀が山にはなれて里へ出て
これの御庭で羽を休めた
太鼓 キイ〳〵〳〵〳〵 カチ〳〵カー
デンカチカチカーカチ〳〵カー
デンカチカチカーカチ〳〵カー
デン〳〵カチカーカチ〳〵カー
デン〳〵カチカーカチ〳〵カー
デンデーコーデーコー
デーコーデーッコン
笛 トロヒヨ（前ト同ジ）
歌 天竺（ジンフ）三天の鳴る霹靂（カッチ）
連れていづれもこのごとく
デーコーデンカチ
デーコーデンカチ
デンカチ〳〵デッテコ〳〵

デコデーコー
（右　カヘシ）
デーコーデェーコォーデコ〳〵デー
デーコーデェーコォーデコ〳〵デー
デーコーデーコーデー
デーコーデーッコン

笛　トロヒヨ　（前ニ同ジ）
歌　嫁ご立ささらが見たくば
板戸を出せ板戸の上での
ささらさんみようし
デーデーデーデーデー
デッテコ〳〵デッテコデー
デコ〳〵デー
デーデーデーデーデー
デッテコ〳〵デッテコ　デー
デコ〳〵デー
デーコー〳〵デー
　デーコーデッコン
デコデンテン〳〵デコデン
　テンテン
デコデンデコデン　デコデコ　デン
デコデンテン〳〵デコデン　テン〳〵
デコデン　デコデン　デコデコデッコー
デコデーコー
デーコーデーコーデン
デーコーデーッコン

笛　トロヒヨ　（前ト同ジ）
歌　友達に霧を〳〵と望まれて
我等が習ひの小霧こうみようし

太鼓　キックンポックンデンカタカタカタ
　スッタン　タン
　キックンポックンデンカタ〳〵〳〵
　スッタン　タン
　デンカタ　カックー
　デンカタカックー
　デンカタ〳〵〳〵カッカタ〳〵
　カァッ　クゥー
　デンデコデッコンデコデッコン
　デンデコデッコンデコデッコン
　デンデコデーコー
　デンデコデーコー
　デンデーコー
　デーコーデーコーデー
　デーコーデーッコン
　デンデコデコデンデコデッコン
　デンデコデコ〳〵デンデコデッコン
　デコデコデッコンデコ〳〵デッコン
　デーコーデーコーデー
　デーコーデーッコン

笛　トロヒョ　（前ニ同ジ）
歌　いつか夜も明け花の朝霧
太鼓　デンカチカーデンカチカー
　デンカチ〳〵〳〵
　カッカチ〳〵　カアックー
　デンデーコーデーコー
　デーコーデーッコン
　デンカチカデンカチカー
　デンカチ〳〵〳〵
　カッカチ〳〵カアックー

デンデーコーデーコー
デーコーデーッコン
笛　トロヒョ　（前ト同ジ）
歌　向ひ小岩の獅子こ竹
　　節を揃へて切を細かに（コマ）
太鼓　キッカラッカラ デン〳〵〳〵
キッカラッカラ デン〳〵〳〵
キッカラカーキッカラカー
キーカラン〳〵カラカックー
デーコーデーコー
　　デコ〳〵デー
デーコーデーコー
　　デコ〳〵デー（ツヨク）
デーコーデーコーデー
デーコーデーッコン
笛　トロヒョ　（前ト同ジ）
歌　此の霧はいづこの霧と
　　人が問はば
　　都下りの
　　七ッ霧〳〵す
太鼓　デンカチカーデンカチカー
デンカチカチカー
　　カチ〳〵カー
カッカチカックー
　　カァッ〳〵〳〵
デンデコデッコンデコデッコン
デンデコデッコンデコデッコン
デンデコデーコー
　　デンデーコー
デンデコデーコー

　　デンデーコー
デーコーデーコーデー（ツヨク）
デーコーデーッコン
デンデコデコデンデコデッコン
デンデコデコデンデコデッコン
デコデコ デッコン
　　デコデコ デッコン
デーコーデーコーデー（ツヨク）
デーコーデーッコン
笛　トロヒョ　（前ニ同ジ）
歌　籠の入おきや籠山藤の花
　　花ふみ散らして遊べ鶯
太鼓　デコデコ デンカタ
　　デン〳〵〳〵
デコデコ デンカタ
　　デン〳〵〳〵
デンデンテン〳〵
　　デコデンテン〳〵
デコデンデコン
　　デコデコデン
デコデンテン〳〵
　　デコデンテン〳〵
デコデン〳〵
　　デコデコデッコー
デコ〳〵デンカタ
　　デコ〳〵デンカタ
デンカタ〳〵デン〳〵〳〵
デコ〳〵デンカタ
　　デコ〳〵デンカタ
デンカタ〳〵デン〳〵〳〵

デコデンテン〳〵
デコデンテン〳〵
デコデンテン〳〵デコ〳〵デン
デコデンテン〳〵
デコデンテン〳〵
デコ〳〵デッコー
デコデーコー
デーコーデーコーデン（ツヨク）
デーコーデーッコン
笛　トロヒョ（前ト同ジ）
歌　歌を習はば西の寺
太鼓を習はば川の川寺
太鼓　カーッチ〳〵カッカチカー
デーコー〳〵デッテコデー

沼田仲町祭囃子

所在地　沼田市本町通（上、中、下）
理管者　沼田市本町通（上、中、下）

八月三日から六日まで行なう。練習は七月二十日頃より夜、空屋か物置きを借りて行なう。古くは男子（子供のみ）であったが、最近は女子も加わっている。当日はミコシの後を山車六台が行く。ミコシが神社の境内を練っている間に、山車の上で演奏する。

楽　器　締太鼓　四、大胴　一、鉦　二、笛　一

山車の上には人形をあげる。沼田には浜田屋という人形屋があった。この人形屋からのものが多い。近郊より人形を求める者がこの浜田屋には多く来た。現在はこの浜田屋はない。戦後囃子の競演会があり、前橋よりバチを回す技法をとり入れ入賞したことがある。

カーッチ〳〵カッカチカー
デーコ〳〵デッテコデー
デーコー〳〵デコ〳〵デー
デーコー〳〵デコ〳〵デー
デーコーデーコーデー
デーコーデーッコン
笛　トロヒョ（前ニ同ジ）
歌　太鼓のどうをきりりと束（シメ）て
ささらを返して硯とどめた
笛　忠リャーウ リャーウリヤ
忠リャーウ リャーウリヤ
忠リーリャウ トロヒー（ナカク）
社前ニテ　都からいそぎ戻りの文が来て
大切リニ唄フ　御遑（いとま）申して華の都へ（地元発行のパンフレットより）
引唄

仲町の山車は総ケヤキ作りの彫り物があり美しい。引き出すときに世話人の合図でひき出す。

囃子連の仕度は、揃いのユカタ。しかし祭世話人は、金のかかったものを着る。子供は内じゅばん、揃いのぞうり。

曲　目

さんてこ　よしはらかんのん　四方殿くずし　てけてっと（坂を登るとき）　キリン（急いで帰るとき）　籠丸（静止）　よしくらかんら　夜かぐら

この囃子は明治以前より行なわれていた。沼田の祭りは荒く、特に山車のすれちがいのときはよくケンカがあった。そのとき太鼓切りの事件もあった。

山車の廻し方も、下の台はそのまゝ上だけ廻る。

次に沼田市の祇園祭の由来と歴史について紹介する。

沼田の祇園祭は、京都八坂神社の祇園祭に、端を発している。

京都八坂神社の祭神は、素盞嗚命（牛頭天皇の化身）であるが、平安時代、清和天皇の貞観十一年（八六九年）に、全国に疫病が流行した。これは牛頭天皇のたたりだといわれたので、その霊をなぐさめるため国の数に合わせて六十六本の鉾をたて御霊会を行なった。やがて一条天皇の長保元年（九九九年）頃から、太鼓や笛を鳴らし行列を組んで、疫病の元をその行列の中に誘いこもうとしたのが、現在の祇園祭の原型である。全国各地の素盞嗚命をまつっている神社では、この祇園祭を行なう所が多い。沼田の須賀神社も素盞嗚命を祀っている。

沼田の祇園祭は、天保十三年（一八四二年）までは上之町・中町・下之町の三ヶ町で行なわれていたが城主土岐氏の命により、それ以後、榛名神社も一緒になって全町内で行なうようになった。山車（沼田では萬灯というが、萬灯とは一本の柱に数段の飾りをつけたものと思われ、現在の沼田のそれとは異なる）は、柳町を先頭に各町の山車が城内に入った。しかし、神輿の城内渡御は土岐氏以前の真田氏の頃からなかった。やがて、明治の世となり、城内に入ることもなくなり、ただ町内を廻るだけとなった。

戦前は、須賀神社・榛名神社両社の神輿が並んで練り歩き、最終日には各氏子の山車が勢揃いして、境内で神輿の遷りを待ち六日の夜明け近くまで、囃子が続いたものである。戦後、祭礼の形も一変し、交通事情などの問題も重なって、現在のようになってしまった。

（上之町祭吉連の資料より）

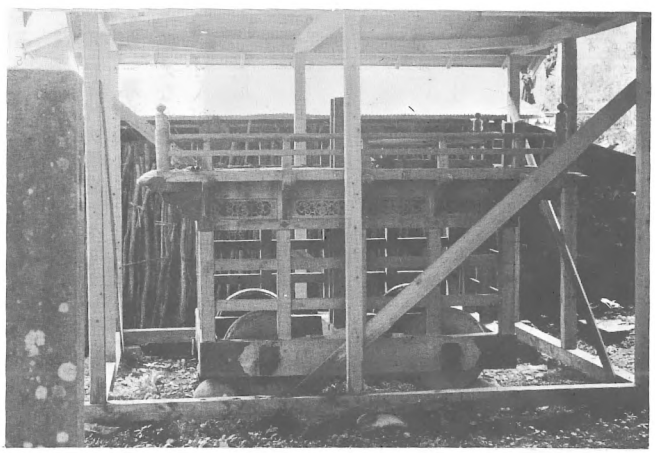
高平の祭囃子

所在地　利根郡白沢村高平

管理者　白沢村高平部落

高平の八坂神社の祭りに行う。七月二十二日の宵祭りに屋台を出す。午後三時より夜十一時頃まで、高平の大通りをひく。麻の直径五センチ程のロープで、子供や大人がひく。屋台の上には沼田の人形屋から借りた武者人形をあげる。

下り坂ではひき縄をつけ、祭典係がカジ取りの運転する。屋台には花をつける。練習は十五日前より行なう。演奏は大人と子供混合でやる囃子である。



白沢村高平の屋台

高平の屋台囃子の笛は梅製のもので、この笛は二キロに四方にひびいたといわれる。この地に笛を教えたのは、沼田市のソバ屋の人が来て教えたという。高平の井上喜一郎氏が伝授したといわれる。

高平の八坂神社の近くに、かつての屋台が残されている。

念仏

所在地　利根郡川場村湯原太郎

管理者　利根郡川場村湯原太郎部落　代表金子利雄

古くは春秋の彼岸の入りに行なった。大日堂に子供、青年、老人など大勢集まり盛大なものであった。現在は春秋の彼岸の中日のみ行なう。

笛、鉦、大胴は大人。締太鼓は子供。

太鼓が速く打つと屋台ひきも速く引いた。

昭和十八年までは毎年行なったが、戦争がはげしくなるにつれて中止した。戦後昭和二十二年に一度行なったがその後は中止。

この屋台は明治の始め頃より行なってきたという。その後も不況の年はミコシをひくだけであった。

楽器

締大鼓　四、大胴

一、笛　一（三尺の梅笛）、鉦　二

夕食後集まり全員で念仏の斉唱をする。ほとんど夜の十時頃までに今は終る。その時の音頭は先輩が行なう。昔は念仏のあと、ジャガイモ、インゲン、切りコンブなどを煮しめ、それを重箱に入れて伍長がもって来て全員で食べた。念仏のあと村人のほとんどが集まって、語り合いそして食べ合うのは、楽しみであったという。

この念仏は相当古くから太郎部落で行なっていたようである。明治三十三年に大日堂の改築のとき、すでに念仏はやっていたという。その頃はこの大日堂に宮守りがおって、なにかと世話をしてくれた。

なおこの念仏は、部落に死人がでると部落の者が集って行なう。このときは大きな念仏鉦を用いる。

川場村湯原太郎念仏講中伝誦唄

第一、十三仏

南無不動明王　南無釈迦如来　南無文珠菩薩　南無普賢菩薩　南無地蔵菩薩　南無弥勒菩薩　南無薬師如来　南無大慈大悲観音菩薩（南無大慈大悲観世音菩薩）南無勢至菩薩　南無阿弥陀如来　南無阿閦如来　南無大日如来　南無虚空蔵菩薩

第二、善光寺仏

南無一光三尊善光寺如来

第三、念仏講中伝誦唄

(一) 身は此処に、身は此処に心は信濃の善光寺、お助け給えや、信濃の如来。なむあみだぶつ、なむあみだ。

(二) 六観音に六地蔵、称え申して、お威徳に、十六関を逃れ申して、直ぐに浄土になむあみだ。

(三) 道の端の六地蔵、称え申してお威徳に、南無十王に、十三仏、三世の諸菩薩、なむあみだ。

(四) 融通念仏一遍申せば、極楽の浄土の池の蓮華の花、蕾開き、光浄土の来光（来迎）は、宵に明星、夜中に法華経、暁明星のなむあみだ。

(五) 差上げ念仏

今晩申したお念仏、此処にたんと。
改めて、黄金のお盆に積み上げて、大日様へと差上げて、おいとま申していざさらば、なむあみだんぶつ、たむあみだ。

昭和四十三年春彼岸　（以上）

湯原太郡念仏賛仰会
田中喜宗太
入沢善次
金子傳太
金子利雄

右念仏講伝誦唄保存発願者

（念物賛仰会発行の資料より）

ヤツサ祭

所在地　利根郡月夜野町
管理者　月夜野町小川島部落

四百年程の歴史があるといわれているが、起源は明確でない。諸説あるが、小川島部落は赤谷川と、利根川の合流地点にあるので、水難は常に絶えなかったという。かつて水害の折、村の鎮守様に祈願すると共に、村人が裸で水害を防いだのがはじまりという。又一説には天正七年名胡桃城の戦いの折り、大木新重郎景夏が村民をひきつれ、逃難した時に神の加護により無事に難をのがれた。その後この祭にそのときの型が残されたという。

九月二十九日夜七時頃より、氏子の若者が裸で練る珍しい祭りである。太鼓の合図で区長、氏子総代、村の役員が拝殿の前で、神主の祝詞と酒をいただく。二番太鼓により島居前で叩印きを先頭に、ヤツサ新重郎と怒号しながら社前に向って練り歩く。勇壮な裸の若者の練り歩く様は異様な迫力を持つ。機をみて石段を登り終ると覆屋と社殿の間を廻り覆屋を中宮の高さまで、はい上るが総崩れとなって社外へ出る。これで第一回は終る。これを七回反復する。疲れ果てて境内に寝ころびもする。最後に社前の鈴の縄を切るが、すばやく切れる年もあれば、なかなか切れない年もある。この鈴の縄がはやく切れた年ほど吉運の年といわ

れる。

明治四十一年神社仏閣が合併となり、若宮八幡宮と上津村主八幡神社が合併となった。その後約四十七年間この行事は中止となっていたが、昭和二十一年より村民の希望により復活し現在に至る。明治初年頃のヤツサ祭とは、少々崩れていると考えられるむきもある。

浦安の舞

所在地　月夜野町上津

管理者

月夜野町上津村主神社奉納浦安の舞

皇紀二千六百年の祝典が昭和十五年（一九四〇年）に行われた折その奉祝会が制定したのが神前神楽舞である。同奉祝会の委嘱によって当時の宮内省楽部の多忠朝楽長が作曲作舞したもので同年十一月十日の奉祝会当日全国の神社で一斉に奉奏されたのがはじめであった。それ以来この神楽舞はすぐろ八幡神社の祭典に奉納されて神慮をお慰め奉っている。

浦安の舞（鈴の舞）

鈴をもって舞う浦安とは心の安らかという意味で平和を祈る心の舞である。陛下の御製を歌っている。

毎年四月三日神社の祭典に奉奏されている。人員構成は楽人四名（歌、太鼓、横笛、ヒチリキ、各一）舞人四人（何れも十三、四才の女子）にして皆神社の氏子の人達で成っている。

（月夜野町民俗資料より）

古馬牧人形芝居

所在地　月夜野町下牧

管理者　月夜野町下牧部落

県指定重要文化財古馬牧人形の由来　略記

現今の牧野神社境内、大字下牧地内の舞殿が落成した当時はよくここで奉納された。この建物の棟木に筆太に元治元年（一八六四年）上棟とあるから、人形のできたのはこれより前であることはたしかである。然し明治四十一年阿部善三郎氏宅公開実演のみぎり、当時人形関係の諸道具保存場所であった木村政蔵氏宅が火災にかかり一切の記録が烏有に帰して歴史を語る資料が一物もなくなってしまった。人形や衣裳道具は実演中であったため幸に焼失をまぬかれた。

以下古老の言い伝えを土台にその由来を調査し改めて記録とすることとした。

元禄年間に当時の古老弥兵衛、九右衛門、源右衛門の三氏が伊勢参宮の道中で人形芝居をはじめて見て村の若衆の遊び道具にもと、人形の頭を五箇買って帰ったのがもとであった。その後一つ二つずつ買い求め、同志七、八人の所有物として遊芸を楽しんだのがそもそも下牧人形の始め

月夜野町古馬牧人形芝居の頭

であった。

明治八年上方の人形師吉田勘蔵の子勘十は、父の勘当にあい旅芸人となって人形を使いながら諸国遍歴に出た。たまたま当地にさしかかった際彼の人形の振り方の並々ならぬのを見て宿を提供し辞を卑うして教を乞うたので腰をすえて技を教えることとなった。昼は農事にはげみ、夜は教えを受けることを若衆は楽しみにしていたが、雨の日は昼夜の別なく稽古したので一名雨降り人形と呼ばれる様になった。勘十は人形の振り方ばかりでなく、人形を刻んだり、大道具、小道具を作ったりすることにも長じていたので若衆は喜んでいろいろの指導を受け、或は人形を新に作り、或はふすまをはり、或は背景幕作りなどまでするようになった。主なる面々は、高橋熊太郎、木村福太郎、小林政次郎、池田作次、高橋国吉、高橋藤蔵氏等でその作品は今も残っているものもある。かくて彼は追々「ヒキヌキ」早変り等吉田流の極意まで伝受するに至った。その後勘十は許されて実家へ帰ったがこの間の事情を父に打ちあけて語ったところ父は極意を授けたことを快しとせず再び勘当した。

月夜野町古馬牧人形芝居

古馬牧人形の頭

彼は止むなく再度下牧に立戻り村人に事情を告げたところ村人は大いに気の毒に思い、お礼を兼ねてむこ入道具一式を調え実家まで送り込み、父勘蔵氏に面会の上詫口上をもって謝罪に及んだ。勘蔵氏もその誠意と熱心とに感動して怒を解き勘当を許した。しかし、極意を伝えたことは必ず他言あるまじきよう堅く約束するところがあった。

その翌年勘蔵氏は村人の熱心さにほだされてか、人形数種を取揃え自ら下牧へ下向し秘伝公開の奥行を星野氏宅で行った。その時の記念として人形頭二つを買い受けた。未だに大切に保存されている。その後益々盛んになり、鎮守の祭典にも、豊年祭にも公開する様になり、連中も年々増加するに至ったのである。

以上が由来の概略である。（月夜野町民俗資料より）

ヤーヤーどり

所在地　白沢村尾合

所有者　白沢村尾合部落

この祭はひつじ祭りといっている。春四月末の「ひつじの日」と秋九月末の「ひつじの日」に行なう。

明治三十三年生れのこの地の山田鉄之助氏にきくと、子供の頃すでにヤーヤーどりは行なっていた。

伍長が赤飯をオヒツに入れ、参加者の村の人は煮しめ、つけものを用意して尾合神社（訪諏神社）へもっていく。春は赤飯だけだが秋は赤飯とあんの入っていないまんじゅう。神前で神主が祝詞をあげ、ご神酒を参加者は戴く。

白沢村尾合のヤーヤーどり

その後ヤーヤーどりとなる。力のあるものはおひつごと持って逃げ回る者もいるが、村中の者が競争でオヒツの赤飯をとり合う。おひつを奪いとった者でも、境内より持ち出してはいけない。

ヤーヤーどりでとった赤飯を家に持ち帰ると、家内安全だと言われる。明治四十年頃一年ヤーヤーどりを中止したことがあるが、その年に疫病が大流行した。村人は神様の怒りだと言い、翌年より現在まで続けている。

村人の持ちよった煮しめ物や、茶菓子を集った子供らに与える。かつては境内に沢山の出店が出た。

今は二つのオヒツに赤飯が出るだけであるが、昔は十班の部落から十のオヒツが神社にきた。村の役員の人は拝殿に、普通参加者は下にいる。現在は村の役員と女衆や子供だけ参加するので、ヤーヤーどりをするとキケンなのでわけて赤飯を与える。

古くは米や小豆を各戸で集めても、米が出せずヒキワリなどが出た年もあったという。

かつぎ万燈（つっかけ万燈）

所在地　昭和村森下

所有者　昭和村部落

雄壮な子供の行事である。三メートル程の万燈、花を飾り頂上には人形をあげる、戦後は武将を飾る。かつては人形もすべて子供の手で作った。九月二十六・二十七日に行なった。現在は十月一日に行なう。祭りの一か月前より万燈作りを子供がする。

このかつぎ万燈には小学校一年生より入る。万燈組には位がある。子若連と世話人。世話人は旧世話人（現在は中学三年）と新世話人（中学二年生）とがある。

万燈作りは、栃久保、新橋などに行き、無断で材料の竹を切ってくる。竹切りに行く時は、旧世話人が四・五人の子若連をつれて行く。夕方から夜にかけて人目のつかない時間に行く。森下には竹藪がないので大変であった。昼間他地域の竹藪に行って、良い竹を見ておいて、夜取りに行った。夜だと見ておいた竹が分らなくなるので、半紙を目印にしておいたという。

昭和村森下の「つっかけ万燈」

万燈は激突しても壊れないようにと、丈夫なものに作った。大正三年に、森下が上宿、中宿、下宿と三本万燈を上座に飾り、一方栃久保が下座に二本飾らされた。森下が地元の栃久保にきて上座に立てるのはと子供同志ケンカになり、その後分れてしまった。今は森下だけで行なっている。古くは仁義があって「おたの申します」と世話に出る者にいった。当日は万燈三本揃えて奉納する。子供は祭りの前日の夜は楽しみで眠らないという。鉦と万燈は先頭に立つ。昔は村内を万燈をもって廻った。「そろって出きました」と披露する意味。それがすむと宵と同じ形で神社に行き、諏訪神社のまわりを七回めぐり、相手の万燈とぶつけ合い、こわし倒す。倒れると花飾りなどむしる。男子だけの雄壮な仕事である。

つっかけ万燈が終ると又村内を廻り、万燈を作った家に万燈を納める。この時の万燈は、つっかけ合った後なので骨だけの万燈と化す。この雄壮なかつぎ万燈は、この地の土着の武士が始めたものであり、古くからこのように雄壮な遊びであったのであるという。

万燈を納め終ると、提灯を持って、上宿、中宿、下宿組が一か所に集って、上宿から一か所に丸く輪になって、手打ちをする。旧世話人が出て、シャンシャンのリードをとって終る。

現在は万燈はかつぐが、つっかけ合いはしない。子供の祭りの行事で県下に、これ程雄壮なそして男性的な祭りは例がない。子供たちは、現在も万燈をつっかけたがる。

百万遍

所在地　昭和村永井
管理者　昭和村永井部落

結願最終日より一週間前に行なう。永井部落に諸田を名乗る家が二十軒あるが、この諸田家を念仏して廻る。念仏は中学三年生が最上で、小学一年生が一番下で、四十人程の男女で行なう。一週間程かけて、夕食後一晩三戸位ずつ廻る。前の坂の家から始める。鉦と太鼓を叩いて集り、各家の縁側より家に入り、仏壇の前へ集り燈明をたいて念仏を始める。太鼓は大きいので、棒にさして持っていく。念仏がすむと、終った家で砂糖湯や茶菓子を出してくれた。

どの家に入っても正座し、ひざを崩したりすると先輩格に叱られた。

念仏は「なむあみだぶつ」と六回がひとくぎりの単位で五十回やる。百万遍の役がらは、①じゅずくり（じゅずかぞえ）、②タイコ、③鉦百万遍やらなくても、ある程度唱えると数珠くり役が、太鼓役に向って合図して止めさせる。子供だからごまかすこともある。最後の晩は一軒か二軒の宿を残して念仏をする。これは十三念仏から行なう。

十三念仏「じゅさんねんぶつなみあみだ」（五十回）
「十五じったいなむあみだ」（五十回）（仏の名前を五十回）

このときは成人も加わって念仏する。重箱に女衆が、ゆでまんじゅうを作って持ってくる。宿の家でそれを仏壇の前に供える。子供の念仏が終ると、その供物を開けて年長者が平等に分けて与える。女衆もオショウバンにあずかる。この行事が終ると秋栗ひろいの季節になるという。この百万遍は現在も続けられている。

お天気祭り

所在地　川場村萩室
管理者　川場村萩室部落

六月から七月の梅雨期に、三十日以上の長雨になると萩室部落でお天気祭りを萩室神社で行なう。村中の者が集まる。雨が続くと麦などが芽ばえてしまう。近くの村でお天気祭りが始まると、まねてやる。区長に天気祭りを行なうよう、村の人が連絡すると、区長はホラ貝を吹いて、村人を集める。

神社で大太鼓と合わせて、天気祭り雨乞の呪文を、一万回唱える。

乾馬首天父健　坤牛腹地母順　震龍足男長男動　巽雞股女長男入　坎豕耳男中男陥　離雉目女中女麗　艮狗手男少男止　兌羊口女少女説

これは八封の書の冬の各連の頭字である。

「払い給え清め給う遠神笑み給え乾坤震巽離艮兌坎」（一万回唱える）

太鼓の打ち方が速くなると唱え文句も速くなる。この天気祭りは昼間行ない、神社に酒一斗奉納する。一万回唱え終るとその酒を飲んで別れる。

この呪文は、病人がでて、神にお願いするときに、天気祭りと同じような方法で行なう。山深く医者に恵まれなかっただけに、この呪文を一万回唱えれば、病気も快復するとしてきた。唱える村人と「おまんじゅうをあげる」といって病人の話し合い手となる役目がいる。病人のときも太鼓を打つ。一万回唱えるとき太鼓を打ち続けると、太鼓叩きの手に豆ができるという。一万回唱えるには教を忘れるので、「数取り」の役目ができ、勘定棒で数とりをする。狭い村のため集まる人数が少ないので、一万回唱えるのは大変である。

太鼓をよく叩かないと、天気にならないという伝えがある。太鼓打ちは魂を入れて打たないと、ご利益がないと言われる。このお天気祭りは山伏が伝えたという。

猿追い祭り

所在地　片品村花咲

管理者　片品村花咲部落

この祭りは、旧暦九月の中の申と、二月の中の申の日に行なう。この祭りの役には、「しつばん」と「酒ばん」とあり五人一組になって隣保班を廻りもち、昔は米を集めて「しつばん」の家で赤飯をたく。「酒ばん」の家では各戸からコウジを集めて酒づくり、古くは甘酒を作ったという。特に酒づくりは、一晩づくりのものがうまいとされていた。

昔川場村から祭りに参加して、酒の上でケンカとなり、花咲部落が負けた。今も「ワニ口」にそのケンカの時の刀の傷が残っている。

その時は川場村から千貫峠を越え酒一升持ってきてのケンカであった。それがためその後は、甘酒にしたという。

片品村花咲の「さる追い」

この祭りの始まりは、猿が出て作物や娘を食って困り、その後神社に敷石をしいてから娘を食わなくなったという。また猿の主が神社に住んでいたといい、猿追いは、この猿を追う意味から始まった。猿は御幣をくわえて飛び出し、村人が後を追う。猿になるのはその年の「酒ばん」、後を追うのが「しつばん」。追う者は猿より先に出てはいけない。逃げる猿の後を追うことになる。猿より先に追う者が出るとその年は、陽気が悪いとされる。

また花咲部落では、作物の八つ頭イモとゴマを作らない、かつて猿追いの時、八つ頭の茎で足をすべらし、氏子が目をゴマガラでつき片目になったことからという。

その後それを破って、八つ頭やゴマを栽培したところ村に疫病が入って来たので、又作るのをやめたという。

猿追いのときは拝殿から出て神社の廻りを三回廻る。後を追う者は十二人で追う。

拝殿の中では東に、山崎、鍛治屋、栗生部落の者、西には栃久保、針

山、登戸の部落の者が坐り謡いを行なう。謡いは高砂、四海波、千秋楽の三曲を謡う。猿が飛び出すとき千秋楽をうたう。

昔はこの拝殿に坐る席が決っていた。他の村から移転などして来た人は坐れなかったし、この祭りの「酒ばん」や「しつばん」などの役をすることは許されなかった。

猿が飛び出す前にしつばんが、神社の前で二手にわかれ、東にひつばんが「一ちょう」と言うと西のしつばんが「もつちょう」と掛け合いながら、おひつをもって赤飯をまき合う。しつばんは風呂敷をかぶり、しゃもじでかけ合う。

この赤飯をまくのは

①武尊さんのおかげでこんなにとれた。

②猿に沢山赤飯をくれて、これ以上農作物を荒さないでほしい。

という二つの理由があるという。

この神社のご神体は、二十五センチ程の金の御幣。今も本殿より奥へ女性は入れない。また家族に死者などがあった年は、この祭りに参加できない。自分の家の庭に栗の枝で小屋を作り、それに入って出ないでいる。これをカゲ見舞と呼ぶ。

昭和二十三年頃、神社の前に小学校を作るので大杉を切ってしまい、今はその後植えた小杉があるのみ。昔はこの部落も猿が出没した。特に武尊山には多かったという。現在（昭和四十七年八月）も、この部落の近くに猿は出没するという。

春　駒

所在地　川場村門前

管理者　川場村門前青年団

この春駒は、二月の初午に門前部落の青年男子（長男）によって行なわれる。それもほとんどこの部落の長男が行なった。大正始め頃青年会のできる前は「壮建会」があって、その人たちによって行なわれた。

この門前部落に、白沢村岩室の春駒を行なう親子（父、母、娘）三人が来て、娘が馬振り、母親が歌い手、父親は荷しょいであった。この人々は大正の始めまで、門前部落に来たが、歌い手であった母親の死亡で来なくなってしまった。門前部落では、当時養蚕業が盛んであり、少しでも養蚕のできがよくなるようにと、白沢の春駒の中止をみて、門前の青年が、習い覚えて来てはじまったという。青年が習い覚えて来たというのには二つの説があり、沼田の滝坂の春駒に教ったというのと、白沢村岩室の常に川場に来た春駒のところに行って習ったという。いずれにせよ大正五年青年によって始められたのが現在のものである。

練習は二月初午の十日程前から、青年会場（現在の児童館）に集ってやった。ほとんど夜であった。歌詞など書いたものを先輩にみせてもらい、それを自分で写して覚えた。しかし個人が写し書きするので、誤りが多く年がたつにつれて誤ったものが伝えられるようになる。

春駒役

馬振り（ふりこ）　四　おっかあ（うちわ太鼓をもつ）二　おとう（バ

川場村門前の「春駒」

ンタと呼ぶ）　二

馬振りは木製の長さ十センチ程の小さな馬を持つ。馬振りとおっかあ役が交互に歌う。おとうは家に入って荷物しょい。

桑の枝で太鼓を叩く。馬には布を付けておき、その布の先に五色の紙をつけておき、その五色の紙を、桑の枝のバチにつけて、各戸訪ずれて家に置いてくる。各戸では桑のバチを神棚にあげておき、蚕をはきたてるときこのバチで叩いてはきたてると、その年養蚕のできがいいという。

二月初午の日は、朝五時頃より春駒振りがはじまる。お寺の金甲稲荷を参拝してから各戸を振り廻る。二組に分れて行なうが夕方までかかる。各戸を訪ずれると昔は米一升に金を包んでくれた。今は二百円か三百円をくれる。

貰った金は化粧道具購入の資金にする。村の役員の家は、二組に分れていた春駒が一組になって歌い舞う。馬振りは座敷に上がって馬振りをしながら舞う。おっかあ役は軒下で歌う。おとうは台所で酒を載く。おとうは相当酒の強い者でないと、夕方までつとまらない。

門前部落の明田フク（八九才）がかつては、春駒の髪結い、仕度などをしてくれた。

春駒の唄

前唄
サアサのりこめはねこめ蚕飼の三吉
のつたらはなすなしつかとかいこめ
本唄
春の始めの春駒なんぞ
夢に見てさえよいとや申す
　申してうつつは良女が駒よ
　年もよし世もよし蚕飼もあたる
蚕飼にとりては美濃の国の
桑名の郡や小野山里で
　とりたる種子はさてよい種子よ
　結城蚕たねか茨城たねか
たやで豊原筑前こだね
みとこのたねを寄せ集め
　かいめ女郡衆にお渡し申す
　かいめ女郡衆は受け喜んで
はかまはくなるあつはたなんぞ
手にかえきりりとしたためこんで
左の袂に三日三夜
　右の袂に三日三夜
両方合せて六日六夜
六日六夜のその間にて
　暖め申せばぬくとめ申す
三日に見初めて四日に青む
五日にさらりとおいでのお蚕は
お出がよけれどはくべき種は
　これより南は吉祥天の
　大日如来のお山がござる
お山のふもとに小池がござる
小池の中の弁財天の
　ひともとすすきふたもとすすき
　三本すすきにすんだる鳥は
かもの雄鳥大とや申す
きじの雌鳥小とや申す
　大と小との風切り羽よ
　ふた羽はけば三なる羽よ
ひと羽はけば一千万蚕
ふた羽はけば二千万蚕
　三羽四羽とはきましよならば
　紙にもあまれば籠にもあまる
あまり候やひろまり候
さればこの蚕なにがな進上
　桑のめぐみが良いとや申す
　これより南は八反畑
八反畑はみな桑原よ
このや娘に足駄をはかせ
　しまの前掛紅染たすき
　髪も島田にこりゃんとゆうて
七九目竹の小ざるをさげて
桑の若葉をお手やわらかに
　しんなとたゆめてさらりとこいて
　ひとこきこいては小ざるに入れる
ふたこきこいてはお宿へかえる
お宿へかえれば手でおしもんで
　あの蚕にちらりこの蚕にぱらり
　ちらりぱらりと進んぜて廻る
あの蚕この蚕は楽めす様な
物によくよくたとへて見れば
　昔源氏の馬屋に住みて
　名馬の馬を牧場に上げる
朝日に向いては元そよそよと
夕日に向いてはうらそよそよと
　食気に似たり葉音もにたり
　さらばこの蚕休みにかかる
しじの休はしんぢつ蚕
竹に起きてはたかごにまさる
　舟の休はふんだん蚕
　庭に起きてははかに育つ
四度のおきふしなんくせのうて
まぶしがやとて七十五駄
　まぶしも小高く折上げこんで
　まぶしに上りて作りし繭は
利根の河原や片品川の
瀬に住む小石にさもよくにたり
　かたさもかたいしおもさもおもし

はかりてみよとてはかりて見れば　昔たゆまの中将姫は
糸まゆ千石におりまゆ千石　あやが上手で錦が上手
種まゆ共に三千石よ　雲にかけはしかすみに千鳥
上州の国では糸引上手　梅にうぐいす織りこむ時は
尾張の国ではまゆむき上手　一反織りたる元三尺を
上手上手が寄り集りて　伊勢の天照大神様へ
三日三晩にまゆむき上げて　おみすにかけてうら三尺を
六日六晩に糸くり上げて　所ろ神社のおいなり様へ
七日七夜に綿かけ上げる　おみすに上がり残りし絹は
はた織り上手にお渡し申す　阪東つづらにしたためこんで

荷物につもれば七十五駄　七福神のおてうちかけて
所ではやるが大八車　これを館に引込む時は
大八車にゆりとつんで　いぬいの方に銭倉七つ
京へやらうか大阪やらうか　たつみの方に金倉七つ
大阪本町ほて屋が店で　合せて十四の蔵立てならべ
荷物渡して金受けとれば　あやの長者に錦の長者
大判千両に小判が千両　お蚕繁昌とお祝申す
白金共に三千両を　（青年団の資料より）
大八車にゆりとつんで
あやの手づなに錦のたづな

あめうり唄

所在地　白沢村高平
伝承者　白沢村高平　小幡兼吉（昭和四十七年秋死去）

沼田市では、林浅吉もやっていた、片品村にもあめうりがいた。途中あめうり同志に出合うと、先に太鼓を聞きつけた者が、呼び太鼓を打つ。あめうり同志あうと仁義をきる。自分のあめうり一家の者だと仲良く話し合うが、一家の者でないときは、先輩に道をゆずる。

自分の一家の者だと、金まわりのよい村を教えてやる。あめうりは頭に乗せているハンダイのあめがなくなると、途中水あめを買い煮つめてあめを作る。

あめの形
①おがらにからむ→ひきあめ
②旗の先にまく→ひきあめ
③棒にからむ→ひきあめ
（以上夏季に作って売るあめである。）
④棒あめ（十五センチ程ののばしたもの）
⑤ぶっかきあめブリキの容器に入れておき、カンナの刃でかいてうる。
（以上が冬季に作って売るあめである。冬あめ夏あめと、につめ方がちがう。）

夏は木陰、冬は日向であめを売る。流し太鼓を打ちながら、流し唄を歌いながら子供を寄せ集める。あめを売るとそのあと歌のサービスをする。一週間程同じ場所を歩く。宿泊する宿は、弁当つきで一日七十銭くらい（昭和のはじめ）。宿では竹の棒や旗作りをする。

金のないときは、自分の名入れの手ぬぐいを、のし紙に入れ、宿屋に行って「お願いします」と出すと、相手がその手ぬぐいを受けとれば五十銭はくれる。手ぬぐいを返せば二十銭くらいつけてかえすしきたりになっていた（昭和のはじめ頃）。だからあめ売りの者は金や宿に困ることはなかった。

鑑札は板に焼き判のものを持った。あめうりの小幡兼吉さんは、群馬、新潟、長野県等を広範囲に歩いた人である。夜になると農家などで雇われ、座敷に上って様々な歌や芸を披露した。あめうりは多芸でなければつとまらなかった。座敷唄では段物が多く、大人の好む物語り的なものが多かった。特に葛の葉の子別れなどはよく注文された曲だったという。

「民俗芸能」１２５頁は

個人情報が含まれるため非公開

古文書

はじめに

今次調査は利根郡を主とする九市町村を対象とした。しかし近世文書は周知のように旧村（大学）ごとに名主文書が残されており、その数は一旧村だけでも厖大な量に上る。一行政村区には十以上の旧村が含まれているので、地区調査員の予備調査自身容易ならぬ仕事であるが、さらに本調査に用意された日程では到底その全貌を精査することは不可能であった。また地区によっては相互の連絡不十分や所蔵者の都合によって調査ができなかった所もあり、全体としてみれば文書所在の半ばを確認し得たにすぎない。こうした状態で報告書をまとめることは本意ではないが、調査し得た地区、所在については主要文書の撮影、日録作成を終了しているので、それらをもとに一応報告の責を果すこととした。他日改めて精査する機会を期待するとともに、本報告書がいささかでも地方文化の開発や学問研究に寄与し、併せて近世文書類をも貴重な文化財として認識を深め、散逸を防ぐ機縁となることを希んで止まない。

一、調査地域の概要

利根郡は、群馬県の北部山岳地帯に位置し、県境は谷川岳など二千メートル級の山で囲まれている。郡域は利根川を境として、東入り、西入りに大別され、中央の沼田盆地東崖に発達した沼田を首邑とする。東入りは薄根川、片品川の段丘にそって集落が連なり、三平峠、桧枝岐峠をこえて会津に通ずる。一部は赤城東麓を廻って大間々に至る。西入りは赤谷川にそって三国街道が通り、三国峠をこえて佐渡奉行や北越三侯の参勤交代路であった。沼田は中世以来沼田氏の城塞で、戦国末期には厩橋とともに上杉・北条両氏の攻防の焦点となり、天正八年以降に西入りを制した真田昌幸が領した。同十七年には豊臣秀吉の調停によって沼田を含む東入りは北条氏、名胡桃城以西は真田氏と地域協定が成立したが、翌年北条氏の沼田城代がこれを破って名胡桃城を奪取したため、小田原北条氏は討伐され、同年八月、徳川家康の関東入国という新役階を迎えた。沼田城は真田氏の故地と認められて、信幸（之）が二万七千石に封ぜられ、以後真田氏五代約百年の間、利根郡下はその大半が真田領であった。真田氏は城下町の育成とともに、寛永期につづいて寛文二年（一六六二）領内の総検地を行ったが、これがいわゆる伊賀検地で、一挙に十四万六千石余にうち出した苛酷な検地であった。これに抗して天和元年（一六八一）市兵衛・茂左衛門の直訴事件が起こり、伊真守信利（信直）は改易され、沼田は廃城となった。その後は代官支配となり、貞享元年（一六八四）幕命によって前橋藩が利根郡下の再検地を行った結果、六万五千石と半減、これが石高の基準となった。世にお助け検地といわれる。ついで元禄十六年（一七〇三）本多伯耆守正永が入封して三万石を領し（三代）、享保十五年（一七三〇）転出したあとまた代官支配となったが、十七年黒田豊前守直邦が代って入城（二代）、さらに寛保二年（一七四二）土岐丹後守頼稔が代わって以後幕末まで土岐氏十二代の支配が続いた。真田氏以後、沼田城主の所領高は二万―四万四千石余と一定しなかったが、それらの所領高がすべて利根郡下にあったわけではなく、例えば土岐氏の場合、入封時の所領は利根郡下四六ヵ村二万石、群馬郡下二十ヵ村、河内国志記郡六ヵ村、若江郡下七ヵ村、美作国英田郡下五十一ヵ村、勝南、勝北郡下各二ヵ村と、利根郡外に八六ヵ村一万五千石

が分散していた。他の城主もほぼ同様である。従って利根郡下のうち約三分の一の二万石前後は沼田城付領であるが、他は天領、旗本領が錯雑していた。一般に東入りは旗本領、西入り三国街道ぞいは天領が多い。

これらの支配関係がどのように推移したかそれが農民生活に与えた影響などまだ十分に検討されていないが、その中で最も大きな事件は前述した真田氏改易一件と、土岐氏治政に起った見取騒動である。これは財政補塡のため土岐藩政が見取新田畑を高に組み入れようとした事に対して、天明元年（一七八一）沼田領内の村々が反対運動に立ち上り、ついに中止させた事件である。時あたかも上武両国には絹糸貫目改会所設置に反対する絹騒動が起った半年後のことで、ともに農民側の勝利に終ったことが注目される。

利根郡ではその大半が山村で、気候も寒冷であったから、用材、炭焼きなど林業の外は零細な畑作、駄賃稼ぎが主業であった。しかし近世中期以降には養蚕・煙草などが盛んとなり、養蚕は赤城南麓の製糸地帯に対する繭供給源として、煙草は桃野・月夜野地区を主産地として沼田煙草の名が江戸に知られるに至った。大豆その他の豆類も重要な商品であった。これらの生産と流通をめぐっていわゆる在郷商人の抬頭が典型的に見られる。麻の自給織物歳（才）美もこの地方の特産である。

東入りの会津街道は建築材料や食料などの物々交換ルートが主であったが、西入りの三国街道は冬季雪にとざされながらも北越三大名の参勤交代路であるばかりでなく、越後米を主とする商品流通路としても重要な役割を果した。沼田・中之条などの酒造業も注目に値する。

幕末維新期の利根郡下は沼田藩主土岐頼之が佐幕派の桑名藩主の六男という縁から、その動向が注目され、さらに戊辰の年には東北諸藩同盟に境を接して三回、会津戦争の舞台となった。

二、文書の保存状況

当地方は山村地帯であるだけに、旧家の移動転出が少なく、県下の平野部に比べると保存状況は一般に良好である。他郡下に比べて村誌の編纂が進んでいるのも、関係史料が残されていたという便宜の一因であろう。前言したように調査洩れも少なくないので一概にいえないが、一般的傾向として東入りは旧名主公文書が区有の形で役箪笥等に保管されている村が多い。その場合は旧村内で蔵をもつ家が一年交代で輪番保管するものが大半で、その他個人保管、公民館等の公共施設に保管するもの等があるが、概して文書の散逸は少ないようである。ただし同じ区有でも文書の整理状況は様々で、一部に厳重封印、開封の場合は関係者立合いという村や整理の行届いた村もあるが、大部分は未整理で、文書目録が整っている村は皆無に近い。甚しきは木箱に釘付けのまま機械的に引継ぐので、湿気による腐蝕、鼠害等が心配されるものもある。また村誌の編纂時に却って文書が散逸している傾向も見える。

西入りは東入りに比べると川田地区などを除いて区有の形での保管は少ない。とくに三国街道ぞいは一部の旧家を除いて明治以降盛衰があったためか散逸したものが少くない。沼田の城下なども同様の傾向がある。しかし猿ガ京関所や月夜野町後閑家、笛木家、須川梅沢家など豊富な史料を愛蔵する家もあって、他郡に比べればなお良好といえよう。ただし個人の家に伝えられた文書は当主の関心度によって整理保存の良いものと、なかには処分されたという噂さなど両極端である。区有の場合でも前述したように整備保管に種々問題点があるので、せめて一部の地域で実施しているように、自治体から文書保管者全員に金属製の保管箱を支給して、保管を厳にするとともにこれ以上の散逸を防ぐ処置が緊急であろう。なお社寺関係では川場村吉祥寺などは未調査であるが一般に文書・記録類の保存はよくない。

三、文書の特色

調査不十分の段階で当地方に残されている文書の特色をあげることはむずかしいが、一項に関連して以下要点と思われるものを箇条書とする。

1　沼田氏の興亡につづく真田氏をめぐって、上杉、北条の角逐場であっただけに、沼田記、沼田根元記、同盛衰記など、地侍層の動向に関する記録類が多い。関連して北条氏邦、真田昌幸関係の戦国文書も散見する。記録では加沢平治左衛門の加沢記や沼田領品々覚書が貴重である。

2　真田氏の領主の領主側史料は信州松代、上田に移されたものが多いが、土岐藩政に関する史料が沼田市内に秘蔵されている。見取騒動も土岐時代の主要事件で関係史料が多い。

3　旧名主文書では一般に後期のものが多いが、真田氏関係の検地帳、年貢割付状など寛文期前後のものが比較的よく残されている。なかでも貞享検地帳はお助け検地だけに桐箱などにいれて大半の村に残されている。寛文検地帳もかなり目につく。また明細帳なども東入りでは大半が残されている。

4　沼田は上州切支丹の拠点であったので、その関係文書が川場村・猿ケ京にある。

5　交通史関係では猿ケ京関所文書、戸倉関所文書、及び永井、須川などの本陣文書がある。会津、大間々との商品流通も越本、大原等の名主文書に散見する。

6　寛文―元禄ごろの入会紛争、用水紛争に関する文書も絵図とともに残されている。

7　山村の産業として繭、煙草、才美、豆類の生産流通に関する文書が各名主文書中に含まれ、また白沢の小野家、利南の倉品家、追貝の星野家、沼田の堀江家等在郷商人の史料が豊富である

8　維新期三国、会津戦争に関する史料が永井本陣文書や東入りの各村の名主文書中に多い。

9　明治初年の県政文書、とくに地租改正に関する文書が東入地区の区有文書にそろっている。

利根郡下の郡村誌は次の如くである。

利根郡誌（昭5）　沼田町史（昭27）　わが赤城根村（昭29）　利南村誌（昭31）　新治村史料集一―五（昭31―48）　糸之瀬村誌（昭33）　薄根村誌（昭34）　川田村誌・同追録（昭36・37）　川場村の歴史と文化（昭36）　村誌久呂保（勢多郡）（昭36）　桃野村誌（昭39）　片品村誌（昭38）　町誌みなかみ（昭39）　池田村誌（昭39）　白沢村誌（昭39）　古馬牧村史（昭47）　沼田風土記（昭35）藤原風土記（昭38）　利根村史（昭48）　桃野村誌（昭36）　（山田武麿）

調査員および調査担当の当地区は次のとおりである。

山田武麿、長谷川清、淡路博和（片品村、利根村、川場村、沼田市池田地区）

中島明、唐沢定市、田島国明（白沢村、利根村旧赤城根地区、昭和村、沼田市川田地区、利南地区）

井上定幸、渋谷浩、駒形義夫（水上町、新治村、月夜野町）

なお、沼田市内は今回は調査できなかった。

調査報告

沼田市川田村概況

明治二十二年四月に発足した川田村は、上川田、下川田、屋形原、岩本、今井の五ケ村で構成されている。近世初期においてこれらの地域は、沼田藩真田氏の統治に服していたが、天和元年の伊賀守改易によって岩本、上川田、屋形原の三ケ村は、本多、黒田、土岐氏と領主の交代をみているが、下川田、今井の両村は幕府の直轄領となっている。

本地区で所蔵されている文書のうち注目すべきは、先ず上川田の深津家の所蔵する中世文書をあげねばならない（資料篇参照）。また岩本区有文書中の岩本村名主の「覚帳」にも注目したい。これは岩本村代々の名主が書き記したものであり、時代の変遷を知る恰好な史料である。すなわちそれは享和元（一八〇一）年九月にはじまり、明治維新にいたる幕

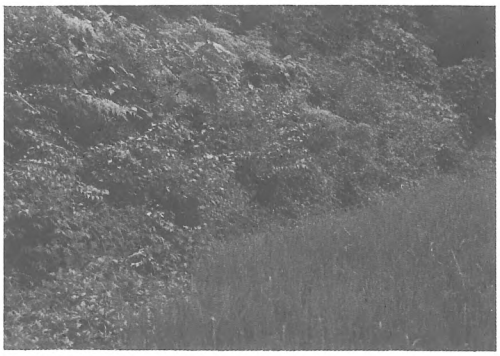
「古文書」１２９－２００頁は

個人情報が含まれるため非公開

「植物」２０１－２０８頁は

個人情報が含まれるため非公開

8. 水上町阿能川日影平
モリアオガエル繁殖地



9. 水上町阿能川日影平
モリアオガエル繁殖地

10. 水上町日影平
モリアオガエル繁殖地

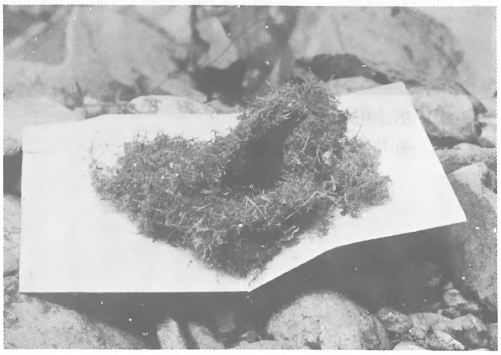
1. 月夜野町大峰山開拓地
モリアオガエル繁殖地

2. 月夜野町大峰山開拓地
モリアオガエル繁殖地

3. 月夜野町大峰沼西岸
キセルガイ類生息地

4. 月夜野町大沼
モリアオガエル繁殖地

5. 新治村須川川右岸
コウモリ穴



6. 新治村須川川右岸
コウモリ穴の蘚類をあつめた巣

7. 新治村東山峰須川小池
モリアオガエル繁殖地

と思う。何れにせよ今回は個体もみず生息数の様子も不明であり場所の状態を一見したにとどまる。

(2) 第一次調査カードにミクニベニヒカゲ（三国山中段草原）の記録がある。ベニヒカゲは日本の高山蝶の代表的なもので生息域は1500ｍ以上の高山草原に限られている。群馬県には三つの亜種が分布し至仏山を中心とした地域のシブツベニヒカゲと谷川岳から三国山一帯にかけての地域のミクニベニヒカゲの二亜種が今回の調査区内に産する。今回は調査期間の関係から有効な調査が期待できないので現地調査を省略した。なお本種については布施英明氏の詳しい調査がすでにある。乱獲採集から守りたい種である。

(3) 第一次調査カードに水上町阿能川上流の岩場トウホクサンショウウオ南限地としての記載がある。場所は吾妻耶山北側直下にある仏岩を水上方面に下り阿能川上流に出る地点で水上町管内である。産卵時のみ水域に出現するので今回の調査時期では不適当のため現地調査を省略した。種の確認もなく、カードの記載も「生息のもよう」とききこみ段階であるがもし確実にトウホクサンショウウオであるならば従来調査の分布南限境界線上に一点を加えることができる。ちなみに県内での最も南に位置する本種の産卵地は沼田市迦葉山白樺湿原地域である。（飯塚正幸氏の調査）

(4) 日本猿群棲地（大源太山クロガネ岩）についても今回は現地調査を省略した。なおこの地域のニホンザルについては従来小林二三雄氏の詳しい調査がすでにある。

後　記

(1) 調査時について、報告文中の
1.2.3.4項は47年8月24日
5.6項は　同　8月25日
7項は　同　8月26日

(2) 今回の調査は第一次調査のカードの出そろった段階でそれに基づいて第二次調査を行うと云う方法を示されそれに従った。文化財関係の他の領域とことなり動物分野は生活行動の季節性と云う点から適時をのがしてほとんどの地域で対象動物の実体の確認はできず、その環境調査にとどまった。幸に従前の調査のあったものは多少それでカバーをした程度である。本来かかる調査は各季節にわたり、数年をかけて行ってはじめて地域の真の実態が把握できるものであることを確認しておきたい。

(3) 本報告は利根郡の西部地域にかたよった結果になっている。その他の地域に貴重な動物の生息地、繁殖地がないのではなく第一次調査カードが筆者の手もとにこなかったため第二次調査まで進められなかった結果である。

(4) 沼田市をふくむ利根郡一円はこの報告以外の貴重な動物生息域、繁殖地がたくさんある。たとえばニホンザルの生息域、タゴガエル分布地、イヌワシ、クマタカなど鳥類の生息地、トワダカワゲラやムカシトンボの生息地など、またモリアオガエル繁殖地やサンショウウオ類の産卵地は本報告にのせた以外の地域がたくさんある。これらは何れも県内のいく人かの熱心な研究者たちの年数をかけての調査で判明したものである。（五味礼夫）

どから種構成は一種類でおそらくウサギコウモリであろう。一刻も静止せずはげしく飛び交うため個体の採集は不可能であった。したがって種の同定は推定にとどまる。

蘚類をあつめた巣が二個地上に落下していたがおそらく育児のために営巣したのではなかろうか。(写真6)

穴の入口から内部へ50cmと1mの距離に二ケ所厚さ1.5cmほどの糞の堆積があった。おそらく成体が穴の天井に小群をなして懸垂した個体群から落下堆積したものであろう。糞の量(堆積の厚さ)から見て相当の期間定住しているものと思う。

ただこの穴が入口が大きく外部(川の方向)にむかって開き奥ゆきがあまりないことから光をさえぎるものは川岸に繁る落葉樹のみである故秋末落葉期から冬期はもちろん初夏の頃までは明るすぎることが察せられる。さらに大きく外にひらいてしゃへい物のない秋—冬—春の期間は気温の変動がはげしいだろう。この二項目から冬眠期間は安住に不適なところと思われる。念のために48年3月再調査をした時は一個体もみとめられず、冬眠の場所を求めて他に移動したものと思う。

6　モリアオガエル繁殖地(写真7)

利根郡新治村東峰須川字小池の小池

環境状況　沼とそれをかこむ湿原、その外周に雑木林がみられ、またところにより沼岸近く灌木(低木)が点在する。沼中の植物は豊富でヒルムシロ、ヒツジグサ、タヌキモ、コタヌキモ、フラスコモ、カタシャジクモ、センニンソウ、フサモなどが密生しミツガシワも多い。また湿原にはエゾシロネ、サワギキョウ、ミヅギボシ、ヤマドリゼンマイそしてヨシの群落をみる。近接する水田の溝にはヒナフラスコモが多く、ヌカエビのかなりの個体みられた。

モリアオガエル繁殖地としての所見　周囲の環境条件としては良好であるが調査時期が適切でないため卵塊も成体もみられなかった。

沼は自然状態をよく保っているが沼辺に
東京都練馬区、奥平温泉開発株式会社
許可、群馬県指令第十号

と墨書した立札が立ち余人の立入りを禁じる姿勢を示している。現地の人にきくとコイを養殖しているらしいとの話である。実状は給餌をしているようすもなく、その施設もみられなかった。放流放置なら餌は当然天然餌料にたよる外なくオタマジャクシも相当くわれてしまうだろうと察せられるが実状の詳細は不明であり、指令第十号とは何か、漁業権関係ではないことは明らかである。

7　モリアオガエル繁殖地(写真8. 9. 10)

利根郡水上町字阿能川小字日影平

環境状況　小さな沢の流れのゆきどまり左岸側にある階段状の水田の周辺が産卵場所であり、各所で水田の縁におおいかぶさるように雑木の枝がのびている。また沢をおおうように雑木や雑草がしげっている。道路からは50mほどはなれて山にかこまれたところである。周辺の植生はスギ、アカマツ、カラマツなどの針葉樹のほかクリ、ホオノキ、ナラ、ヤナギ、ヌルデ、ノリウツギなど落葉広葉樹が繁る。

モリアオガエル繁殖地としての所見　周囲環境は絶好の場所で成体が移動安住する場所もゆたかである。ただ幼生成育期間中沢水と水田水が安定に充分であるかどうか。また保存のためには産卵期から幼生成育期間中水田へのつよい農薬の散布はさし控えねばなるまい。この地点の産卵は6月である。

附記

(1)　第一次調査のカードに記載されたホンシウジネズミについて8月25日報告者笛木弥一郎氏の案内で同氏所有の杉林を一見した。新治村大字永井字保戸野の植林された杉林で約10町歩。本来夜行性で自然生態の観察は困難である。林内にある管理小屋に冬季一個体現れた由で同氏の記載では体長3cm尾長2cmくらいとあるが成体としては小さすぎるのでこの目げき個体は未成熟の若獣であったものと思う。

本種は日本の本州特有の亜種であり各地から広く採集記録がある。食性は昆虫、くも、みみずなどであり観察した杉林の状態からみて食物は安定して求められる

が適していること、また多雨の季節にとくに活発であることなど調査時が季節も時間帯も適切でなかった結果であろう。

何れにせよ一ケ所に多種類のキセルガイ類が生息する場所は県内にそう多くないと思われ貴重な場所である。

附記

(1) 今回日程の関係から現地調査のできなかったものにウサギコウモリ生息地がある。大峰沼から鳥居平をすぎて大峰山登山口にかかる附近だと云う。日大農獣医学部学生の総合調査の際確認し、一個体液漬標本として保存されている。筆者もこの標本を観察したがまちがいなくウサギコウモリである。尾瀬地方および丸沼・菅沼地方での生息は筆者も確認している。県内の生息地はそう多くないと思われる。

(2) 大峰山を中心とする一帯の諸水域にはハコネサンショウオ、クロサンショウウオ、トワダカワゲラ、ムカシトンボ、タゴガエルなどの生息を従来の調査で確認している。クロサンショウウオは北方系の寒地性の種でありトワダカワゲラは日本固有種で冷水性の代表種、ムカシトンボは地質時代の遺存種いわゆる生きた化石であり日本にとくに現生種として多くのこっているもの、タゴガエルは日本固有の種でアカガエルにごく近縁のものである。また日本最小のトンボであるハッチョウトンボは尾瀬ケ原で衰退の傾向が著しい点から、ここ大峰沼の浮島湿原は貴重な本県の主産地であろう。

(3) 本地域は植生もゆたかで安定していることから各種野鳥の繁殖地、渡来地としてもまた各種昆虫の生息地としてもこの一帯は貴重である。

(4) 総括して大峰山一帯の環境は調和のとれたすばらしい自然状態を保持しており貴重な数々の動物の生息地、繁殖地である。すでに指定してある大峰沼浮島湿原、古沼のモリアオガエル産卵地と合せてこの環境一帯の現状を、たとえば県の特別天然記念物地域として保存することがのぞましい。

4 モリアオガエル繁殖地（写真4）

利根郡月夜野町大沼

環境状況　大沼部落より北に約1㎞、標高870 mの地点で、大沼の周囲の樹枝、沼中に多いミツガシワ、旧水田へりの草茎などに産卵、水田は現在耕作していない部分が多く浅い沢地状の荒れ地化している。沼のほとんど全面にミツガシワ群生し、西端近くの水域にはヒルムシロ、ヒツジグサがみられる。沼の径は東西約100 m余、南北およそ40～50 mである。沼をかこむ湿地帯にヨシ、サワギキョウ、ニッコウキスゲ、ヒメシダがみられ周辺の林相はスギ、アカマツ、オノエヤナギ、クリ、ダケカンバなどである。

モリアオガエル繁殖地としての所見　調査時期がすでに産卵期をはるかに過ぎているため卵塊数、産卵状況などの調査は不能であったがこの点は金井賢一郎・広瀬文男氏らによってすでに確認されている。環境状況はまことに良好であり人里からはなれてまだ観光的な開発もなく訪れる人も少ない故自然状態がよく保たれている。水域の生物を克明に調査すればいろいろ興味深い種が多産するのではないか。今後沼の生物の精査を行った上で総合的に良好な自然環境として保存したいものである。

5 コウモリ穴（写真5、6）

利根郡新治村川手山、須川川右岸

環境状況　須川川を直下に見おろす右岸近くの岩壁の一部が崩れ落ちてできたと思われる穴である。奥深く入りこんだほらあなというよりも岩の庇（岩庇）の下の凹所とも云うべきところであり、高さ7 m、奥ゆき5～6 m、穴の入口の巾10 mの規模である。川岸に繁る落葉広葉樹によって直射光をさえぎられている。附近にはダイモンジソウ、エンレイソウ、オシダなどが点在しまた穴の地上にはジャゴケが多い。これら植生から相当湿度の高い場所であることを思わせる。（写真5）

コウモリ生息場所としての所見　調査中この穴を中心に15～16個体のコウモリがおどろき飛び交いにぎやかであった。

その翼のようす、体の大きさ、飛びかたな

動　　物

1　モリアオガエル繁殖地（写真1、2）

利根郡月夜野町大峰山開拓地しょうぶ沼（仮称）

環境状況　古沼より直線距離で約1㎞南、新治村との境界近くにある沼で大きさは径約50ｍ、沼内の水草はヒツジグサ、コバノヒルムシロ、タヌキモなどで、岸近い水深の浅いところおよび湿潤地にサンカクイ、サハギキョウ、ショウブが多い。沼をかこむ林相は沼近くアカマツ、杉林（7～8年生）ヤマグワなどでその外周をカラマツの林がとりかこむ。

モリアオガエル産卵地としての所見　調査時が8月下旬のため卵塊数は確認できなかったが沼内にモリアオガエルのおたまじゃくしを多数認め得たことからかなりの産卵がおこなわれたものと推定される。繁殖環境としての条件は良好である。47年度は古沼の水が激減して産卵数も減少したことから本地点に産卵の場所を求めて若干の移動がおこなわれたろうという。（現地第一次調査者の意見）

今後の経過をみて定着して繁殖が続けられるようなら指定保護の価値は充分あると思う。この場合沼の周囲の林を中心とする植生の保護が必須の条件である。またもし定着がなかったにしても天然記念物指定地となっている古沼の水が年により減少し不安定の実状からみて古沼のモリアオガエルの一時的逃避地としてここの自然環境を保護することも良策かと思う。

2　ヤマネ生息地

利根郡月夜野町大峰山

環境状況　古沼より大峰沼に至る山林内で月夜野営林署管内の国有林である。林の状況は上層はヒノキ、マツ、スギ、カラマツなどの針葉樹とクルミ、ミヅナラ、サクラ、ミヅキ、ホオノキ、クリなどの落葉広葉樹の混生林である。下層はクマザサが中心で極相の姿を示す。

ヤマネ生息地としての所見　ヤマネは1属1種日本固有の種であり、山地の常緑針葉樹と広葉樹の混生する森林を好む。世界的珍獣であり冬期冬眠中の体温変動は特有である。本県内では片品村地域の森林、吾妻郡内の森林にその生息が知られている。夜行性であるため深夜の調査を行うか冬眠中の巣をみつけないと生体の確認は困難である。今回の調査でも確認はできなかったが日大農獣医学部の学生による総合調査で確認がなされている。本獣の生息地は食物と営巣場所を提供する高地の安定した針葉・広葉混生林であり、各地の森林の開発にともない不安定を増し本獣の生息地をせばめている昨今ではこの地域のような安定した林相を保つ地域はぜひ保存したいものである。

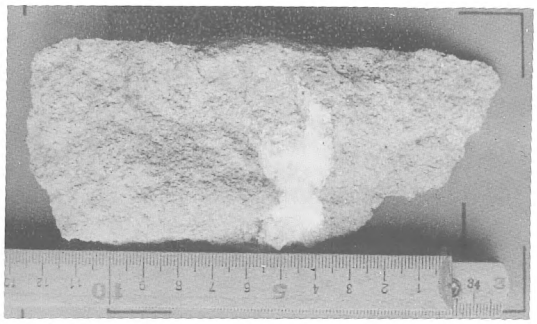
3　キセルガイ類生息地（写真3）

利根郡月夜野町大峰山大峰沼西岸の林

環境状況　沼をとりまく西岸斜面のブナ、ミズナラ、ナラの大木やズミ、アサノハカエデ、イタヤカエデ、ホオノキ、トチノキ、ノリウツギ、オオバクロモジなどの深く繁る広葉樹林の林床は岩塊の重なりに落葉の厚く積った湿度の高い場所である。

キセルガイ類生息地としての所見　陸産の貝類は針葉樹林よりも広葉樹林の林床を好み湿度の高い陰地を求める。沼からの湿気の供給も多く、広葉樹がしげり、林床の基盤は不規則な岩塊の重なりであるため大小さまざまな岩塊間のすきまをつくり腐葉がつもりたまっていること、老木も多くそれぞれに小樹洞がある。このような条件をそなえた本地域は陸産貝類の生息には最好適な環境である。

この地域内でキセルガイ類の種類が数多く認められており日大農獣医学部の総合調査でもヒカリギセル、ツムガタモドキギセル、ヒメギセル、オクガタギセルなどを記載している。今回の調査ではナミギセル一種を確認したにとどまるが本来夜行性であり早朝の調査



⑪新治村月瀬産ワイラケ沸石

灰岩は埋積変質作用をうけ、その中に各種の沸石鉱物が自生している。月瀬沢より東方では、斜プチロル沸石ができているが、月瀬沢では、主に濁沸石が産し、その一部からは、ワイラケ沸石が産出する。しかも、時には岩石の割れ目に自形結晶をなしていることがある。これらの沸石の産状から、西部地域ほど温度の高い埋積変質作用をうけたことを示している。しかもワイラケ沸石が産出する部分は特に温度勾配が著しかったものと推定される。

ワイラケ沸石はカルシウムを含む方沸石類似鉱物で、ニュージランドのワイラケ地熱帯のボーリング・コアから最初に発見された。その後、日本でも数か所から発見され、群馬県でも甘楽郡下仁田町元宿付近から発見された。しかし、当地域から出るワイラケ沸石のように脈状をなし自形結晶で産出するのは比較的少い。写真図版第11図の白色の部分がワイラケ沸石である。

参考文献

上越南部グリーンタフ団研グループ：同団研機関紙、第3号、11—13、1972（謄写印刷）。

（木崎喜雄）

ている。この洞窟はヒカリゴケの生息地になっている。

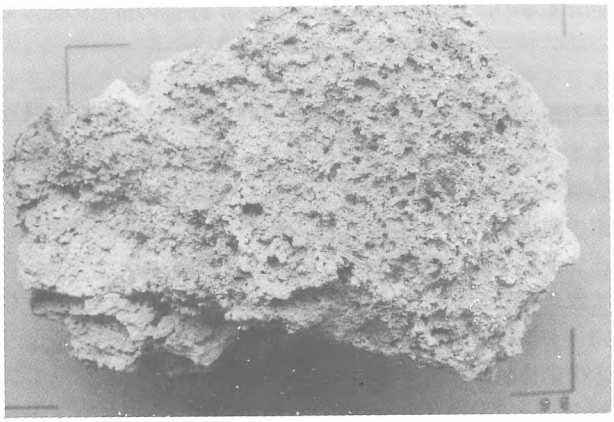
変質岩中には変質鉱物としてズニ石ができている。ズニ石は弗素および塩素を含んでいるアルミニユウの珪酸塩鉱物で、等軸晶系の四面体の結晶である。川手山産のズニ石は径1～2㎜あるが、結晶の形は余り明瞭ではない。群馬県では産出の稀な鉱物で、吾妻郡六合村入山の岩菅山中腹で発見されたものに次いで、2番目の産出である。岩菅山産のものについては、小川雨田雄が記載している。調査後、県指定天然記念物となっている。

参考文献

小川雨田雄：ズニ石（ *Zunyite* ）の新産、岩石鉱物鉱床学会誌、第21巻、285—288、1939

川手山付近の変質の状態とズニ石を含む変質岩の写真を右に示した。

⑨川手山ズニ石産地



⑩川手山産ズニ石を含んだ変質岩

ワイラケ沸石

所在地　新治村月瀬

管理者　月夜野営林署

猿ケ京から月瀬部落をとおりその南方に入る林道が台倉林道月瀬線である。この林道付近には、上越南部グリーンタフ第三系の最上部にあたる赤谷黒色頁岩層、原酸性火砕岩層および合瀬各種火砕岩層が分布する。これらの堆積岩は、関谷沢（月瀬沢の西側の沢）では四万火成岩体に貫入されており、月瀬沢では安山岩の岩脈等に貫入されている。合瀬各種火砕岩層中の凝

⑧新治村永井付近有孔虫化石産地

新井房夫・木崎喜雄はこの新第三系を研究し、下位の水上層群と上位の猿ケ京層群に2分した。両者の関係は不整合である。水上層群は下部より、大倉変質玄武岩層、粟沢礫岩層、湯原変質安山岩・玄武岩層、下部奈女沢砂岩・頁岩層および上部奈女沢酸性火砕岩層に区分され、猿ケ京層群は下部より、後閑各種火砕岩層、赤谷黒色頁岩層および原酸性凝灰岩層に区分される。

赤谷黒色頁岩層以外の各層からも動物又は植物の化石が少数産出するが、それらの地層の地質時代の決定には役立たない。一方、赤谷黒色頁岩原の中層準から各種の有孔虫化石および貝化石が産出する。主な有孔虫化石は *Cyclaminnaincisa* STACHE, *C. japonica* ASANO, C ancellata BRADY等であり、貝化石は *Palliolum (Delect peeten)* aff, *pekhami*(GABB) 等で、これらの化石から、赤谷黒色頁岩層の地質時代は中期中新世と考えられる。従って、猿ケ京層群は中新中新統であり、また水上層群は下部中新統となる。*Cyclaminna* は、*Lituolinae* に属する有孔虫で、平面巻の1㎜内外の有孔虫である。これらの化石の産出は上越南部グリーンタフ第三系の対比に有効な資料となった。永井付近の産地の写真を上に示したが、これ以外の場所からも産出する。

参考文献

新井房夫・木崎喜雄：上越地方谷川岳南部のグリンタフ第三系について（その1）、藤本治義教授還暦記念論文集、213—219、1958。

ズ　ニ　石

所在地　新治村入須川川手山（山林）

管理者　月夜野営林署

吾妻郡中之条町四万を中心に、第三紀の石英閃緑岩や玲岩がかなり広い範囲に分布していて、その一部は新治村の入須川上流部にも分布している。この火成岩類は、奥平西方でグリーンタフ第三系中に貫入している。川手山一帯は玲岩が広く分布していて、所々で熱水変質作用をうけ非常に多孔質な岩石に変っている。このため軟質部が浸食されて石門や多数の洞窟が形成され

中生代貝化石

所在地　水上町奥利根井戸沢中流部

管理者　未　　詳

地質調査所発行の20万分の1地質図等によると、利根川水源地域には花崗岩が広く分布しているものとされていた。昭和29年木崎喜雄・新井房夫はこの地域の一部の地質と鉱床を調査し、この地域に時代未詳の中生層が広く分布していることを発見し、奥利根中生層と命名した。また同じ頃、群馬県利根水源探検隊がこの地域に入り、地質担当隊員の小林二三雄が利根川本流に沿う地域の地質を調査し、この中生層からエントモノチス貝の化石を発見した。

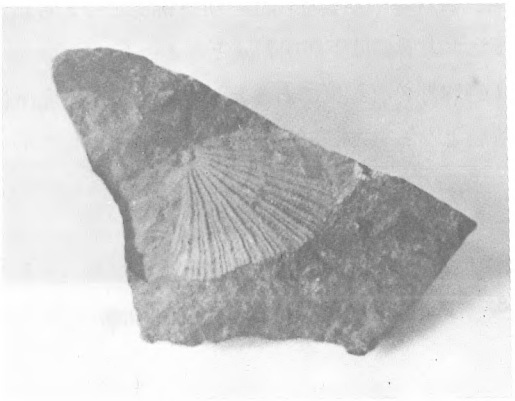
奥利根中生層は下部より、水長沢層、井戸沢層、剣ケ倉沢層および東俣沢層に岩相区分され、貝化石は東俣沢層および井戸沢層の頁岩中より産出する。最も多産するのは井戸沢中流部の井戸沢層の黒色頁岩である。貝化石は藤本治義・矢部之男の研究により、*Entomonotis* cfr. *ochtica* (KEYSERLING)とその変種および*Entomonotis Tenuicostata* KOBAYASHI et ICHIKAWA の変種と同定され、奥利根中生層の地質時代は後期三畳紀と推定された。化石は大きいもので径約10㎝あり、放射肋がよく発達している。井戸沢産の貝化石の写真を下に示した。関東地方における同時代の地層は東京都西多摩郡に分布しているが、奥利根中生層の発見によって、後期三畳紀の外帯の海が群馬県北端まで達していたことが明らかになった。

参考文献

木崎喜雄・新井房夫：奥利根根地域鉱床調査報告、群馬県、1955

小林二三雄　利根川水源地域の地質、地学雑誌、第64巻、92—102、1955、

藤本治義・矢部之男：利根川水源地域東俣沢層産*Entomonotis* について、地学雑誌、第64巻、103—104、1955。



⑦*Entomonotis* cfr. *ochotica*
(KEYSERLING)

新第三紀有孔虫化石

所在地　利根郡新治村永井（河川敷）

管理者　未　　詳

谷川岳の南側の山地にはグリーンタフ第三系が広く分布し、中之条町北部まで広がっている。

象 歯 化 石

産　地　川場村富士山桜川河床（河川敷）

所在地　群馬大学教育学部地学教室

管理者　同　　上

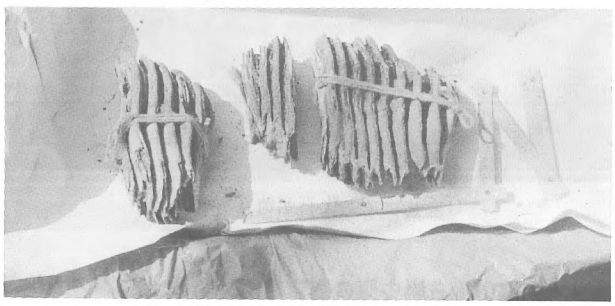
中期洪積世に武尊火山噴出の溶岩流の堰止により、川場付近に古川場湖ができ、粘土層、砂層および砂礫層等の湖成層が堆積した。1954年富士山部落南方の桜川護岸工事中、川場湖成層中より2個の象歯化石が発見された。新井房夫・鹿間時夫の研究によると、これらの象歯化石は上顎左右の第3臼歯で、右歯は最大長203㎜、最大巾75㎜、14稜が残っていた。左歯は6稜だけが残っていて、形は小さい。全般的形態から、*Palaeoloxodon namaclicus yabei* (MATSUMOTO) の歯と同定された。東日本のナウマン象の歯の化石としては一般的なものである。

ナウマン象の歯の化石は、全国的にはかなりの数のものが発見されている。しかし、群馬県では、今までに唯一の象歯化石であり、また、洪積世の火山活動にともなって形成された古沼田湖や古川場湖等の地史を明らかにする有力な資料である。

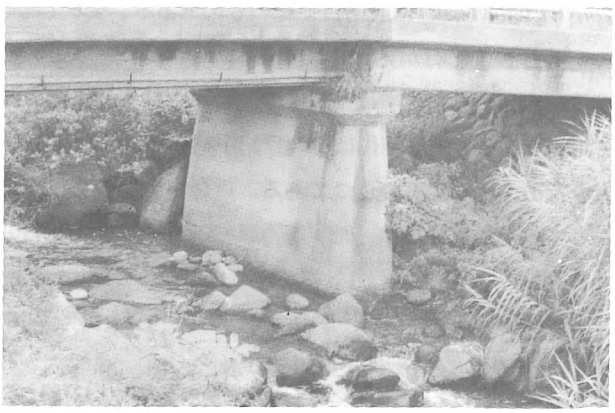
参考文献

新井房夫・鹿間時夫：群馬県利根郡川場村産象歯化石について、地質学雑誌、第61巻、506—507、1955

象歯化石および産地の写真を下に示した。



⑤川場村富士山産 *Palaeoloxodon namaclicus yabei* (MATSUMOTO)



⑥象歯化石産地川場村富士山桜川

③片品村戸倉　ウルシ沢産　*Corbicula tetoriensis*

④*Corbicula* 化石産地（六郎沢）

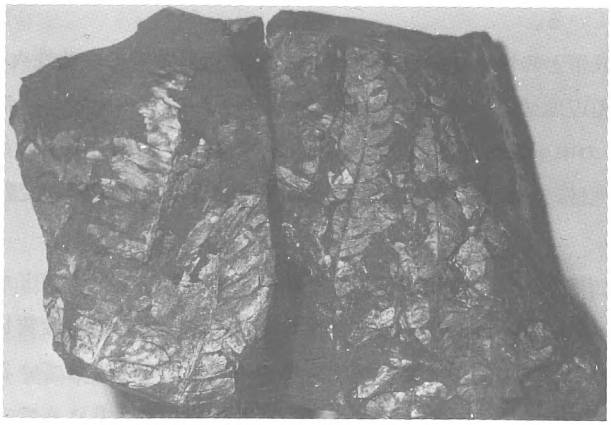
産する。主な産地はウルシ沢中流右岸中腹の露岩と六郎沢中流右岸の稜線付近の露岩である。貝化石は2㎝前後の円味のある三角形ないし卵形三角形を示し、殻は大部分溶脱している。*Corbicula*はヤマトシジミ科の一属で、淡水ないし汽水性の二枚貝で、白亜紀なしい現世に生息している。*Corbicula tetoriensis* は前期白亜紀のものである。なお下部砂岩、泥岩互層からは*Belemnite* sp。(やいし類) の化石が見出されている。§

これらの化石と岩質から、戸倉中生層は手取層群に対比される。手取層群は中部地方の飛弾山地周辺に発達する地層で、その地質時代はジユラ紀中期ないし白亜紀前期である。*Corbicula tetoriensis* は手取層を特徴づける化石の1つである。戸倉中生層の存在は手取層群堆積の水域がこの地域まで広がっていたことを裏づけた。

参考文献

林信悟、神沢憲治、木崎喜雄、大竹忍、武井晃朔、戸谷啓一郎、山下昇：片品川上流地域で発見した〝手取統〟、地質学雑志、第71巻、76—77、1965

§　*Corbicula tetoriensis*　の化石および六郎沢の化石産地露頭の写真を上に示した。



①白沢村岩室室産 *Cladophlebis*

②岩室片品川岸岩室中生層露頭

Podozamites lanceolatus L・et H（球果類）等である。これらの化石は、岩室発電所上流約 500 mの片品川岸の数か所の崖の黒色頁岩層から産出し、保存は良好である。しばしば淡水貝の化石をともなう。また、上部をとおる県道傍の崖からも産出する。*Cladophlebis* の化石の写真と河床の露頭の写真を写真図版に示した。

参考文献

木村達明：岩室累層の地質学的研究(1)、地質字雑誌、第 58 巻、457—468、1952。

中生代貝化石

所在地　片品村戸倉ウルシ沢および六郎沢（山林）

所有者　尾瀬林業株式会社

利根郡片品村戸倉と同大清水の中間に、荷鞍山より流下するウルシ沢と六郎沢がある。これらの沢の中流部および下流部に、かなり広い範囲に互って砂岩と泥岩の累層が分布する。この戸倉中生層は下部砂岩・泥岩互層、中部砂岩層および上部砂岩・泥岩互層よりなる。上部砂岩・泥岩層の泥岩中から、5 層準に互って *Corbicula tetoriensis* KOBAYASHI et SUZUKI が密集して多

の分布が狭くなっている。

足尾帯と上越変成帯との境をなす片品構造帯には、構造帯特有の塩基性火成岩類が広く貫入しており、またその周辺地域には奥利根中生層（三畳系）戸倉沢中生層（白亜系）および岩室中生層（ジユラ系）等の中生界が点々と分布している。これらの地層から各種の化石が産出する。また、片品川沿岸地域にかなり広く分布する花崗岩類は中生代末の地殻変動にともなう迸入岩である。

信越房豆帯に属する赤谷川の南岸地域は、新第三紀の海成堆積岩が広く分布し、この累層には、海底火山噴出の凝灰岩類が多量にはさまれている。凝灰岩類は変質して緑色岩化されているので、この累層を一括してグリーンタフ（緑色凝灰岩）と呼ばれている。グリーンタフを堆積した海は赤谷川南岸地域だけでなく、上越変成帯の中にも入り込んで、利根川上流部一帯にもグリーンタフを広く堆積させた。新第三紀の中頃から末期にかけて、石英閃緑岩等の深成岩が谷川岳付近等でグリーンタフの中に貫入した。

第三紀の末になって、上越変成帯の一部や信越房豆帯が陸化し、三峯山や大峯山等の石英安山岩とその火砕岩が広範に活動した。それに続いて、安山岩とその火砕岩の活動があり、現在の火山が第四紀を通じて成長していった。また、この火山の噴出物によって、当時の河川が堰き止められ、古沼田湖や古川場湖等が形成され、湖底堆積物中には当時生息していた生物の化石が保存されている。河川沿岸地域では、陸地の間欠的上昇によって段丘が形成され、段丘面上には段丘堆積物や関東ロームがのっている。

上にのべたように、利根、沼田地区は足尾帯、上越変成帯および信越房豆帯の３地質区にまたがっていて、地質の非常に複雑な地域であるばかりでなく、古期岩層から新期岩層まで各時代の地層や岩石が分布している。従って、この地域の地質、古生物、鉱物等の文化財は多岐に亙っている。　（木崎喜雄）

中生代植物化石

所在地　利根郡白沢村岩室片品川河床（河川敷）

管理者　建設省

片品川と根利川の合流点付近、即ち岩室発電所付近より薗原付近と柿平付近にかけて、中生層が広く分布する。この累層は従来時代未詳古生層とされていた。木村達明はこの地域の中生層を研究し、下部礫岩層・中部砂岩・黒色頁岩互層および上部黒色頁岩層に層序区分した。中部砂岩・黒色頁岩層から*Cladophlebis, Thaumatopteris, Hausmannia, Nilssonia* および *Podozamites* の化石が発見され、当地域の中生層が前期ジユラ紀の来馬層群相当層であることが明らかにされた。来馬層群は富山・新潟県境付近に広く分布する瀕海成ないし海成の下部ジユラ系である。岩室付近の化石植物群が来馬植物群に対比されたことにより、来馬層群堆積の海域が岩室付近まで広がっていたことが裏づけられた。

多産する植物化石は *Cladophlebis denticulata* (BRONGNIART)（シダ類）、*Thaumatopteris Schenki* NATHORST（やぶれがさうらぼし科）、*Nilsonia cfr orientalis* HEER （ソテツ類）および

地　質　鉱　物

利根・沼田地区の地質鉱物の概要

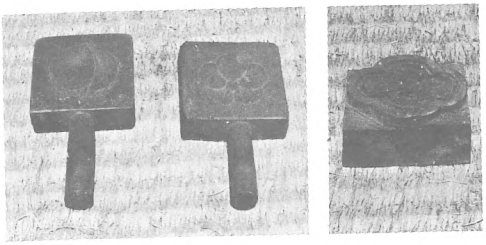
日本列島は地質的に東北日本と西南日本に分けられる。両者はそれぞれ地質的に異なった特徴をもっている。従来、東北日本と西南日本の境界として、フォッサマグナが考えられていた。フォッサマグナは、新潟県西部から、長野県中央部、山梨県西部をとおって静岡県東部にいたる、南北の帯状の陥没地帯である。

フォッサマグナの西の境界は、新潟県の糸魚川から松本平の西縁、赤石山地の東縁をとおって、静岡に達する断層で、この断層を糸魚川―静岡線と呼ぶ。東の境界は余りはっきりしないが、関東山地の西縁を限る岩村田―若神子線の断層を東縁と考えていた。

上述の両断層ではさまれるフォッサマグナ地帯には、新第三系より古い地層は殆ど分布していない。それに反し、フォッサマグナの両側の地域には、古生層や中生層が広く分布している。このような区分によると、関東山地はもとより、群馬県全体が東北日本の一部となる。しかし、多野の山地を除いて、群馬県の南西の半部にも新第三系より古い地層の分布していない地域がある。このようなことを重視して、実際に露出する古生層や中生層の分布の南西端を東北日本の南の境界とする考え方が最近出された。この境界に柏崎―銚子線という断層が想定され、また関東平野とフォッサマグナを一括して１つの地質区とし、これに信越房豆帯という名称を与えた（山下昇、1970)。関東山地は、信越房豆帯の真中に、古い地層からなる山地が浮び上ったような部分である。

本県内の柏崎―銚子線は、三国峠付近より沼田南西方、前橋東北方をとおって館林付近に至るものと推定される。柏崎―銚子線は時代の若い地層におおわれているので直接見ることはできない。柏崎―銚子線の北東側には足尾山地や上越山地があって、古生代および中生代の地層や火成岩が広く分布しているが、南西側の信越房豆帯に属する地域では、新第三系およびそれ以後の地層が広く分布し、古期岩層は地表に露出していない。ただし、関東山地は例外であることは前に記した。

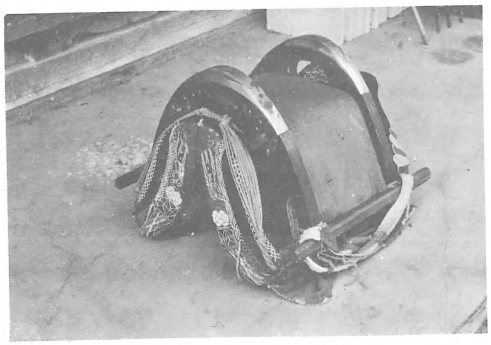
以上のことから、利根・沼田地区の大部分は東北日本の南西端にあたり、大略赤谷川の南西側の地域が信越房豆帯に属する。さらに東北日本の南部はほぼ南北方向の断層によって、いくつかの地質区に分割される。利根・沼田地区においても、尾瀬―鎌田―追貝―根利をとおる断層、即ち片品構造帯によって、その東側の足尾帯と西側の上越変成帯に二分される。足尾帯は足尾山地、日光山地および帝釈山地等を含む地域で、広域変成作用をうけていない秩父古生層や中生代末ないし古第三紀の火砕流堆積物が広く分布しているのが特徴である。片品構造帯と柏崎―銚子線にはさまれる上越変成帯は、広域変成作用をうけた古生層と蛇紋岩の分布で特徴づけられる。ただし、広域変成岩は長い地質時代にわたる削剝と新第三紀層の被覆によって、そ



Ⅶ—8　ニ グ ラ

昭和村　林　貞治所有

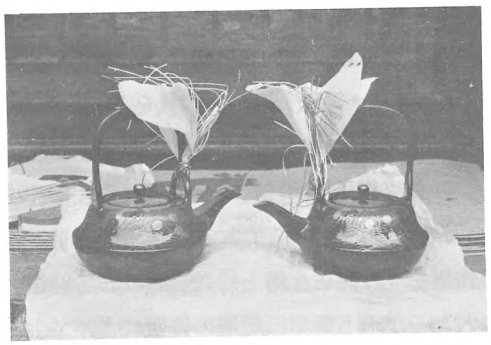
嫁入りのとき馬に乗ってくる習俗が一般であった頃は、馬の背中に座布団を二、三枚敷いてこれに坐り、背の両側にタンスをつけて乗ってきた。馬は前にヨダレカケ、後にソメヌキの布をかけていた。これは八十才の祖父の祖母が嫁入りのとき用いたという。



Ⅶ—9　銚　　子

片品村土出　星野辰二所有

結婚式の三三九度に用いる銚子は、かなり各地に保存されている。鉄製で蓋は木製のが多く、赤ウルシ塗りのもある。これが保存されている箱には「明治二十三年購入、上野国利根郡土出村新井組」と墨書されていて、組の共有物として用いられている。

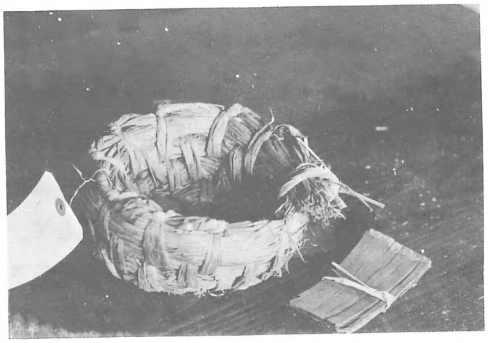


Ⅷ　年　中　行　事

Ⅷ—1　わらわん

川場村谷地　川場小学校蔵

川場村門前の桑原イッケでは、正月七草までは、普通の家で用いる神の鉢を使わない。家例のソバをこのワラワンに盛って神に供えていた。（以上、池田秀夫）

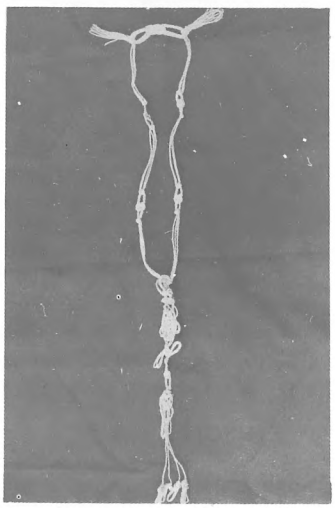


地元の神として信仰されている。山の神と安産神との関係を示す例である。この神のお札と共に塩釜様のお札が見受けられる。こちらから塩釜にお詣りに行ったときもらってきておいて、臨月になりお産が始まったとき、妊婦にこれをのませると安産するという。

Ⅶ—4　力　　綱

水上町粟沢　阿部国之輔所有

お産のとき産婦が力綱を用いるのが普通であるが、これは麻縄をかためて作ったもので、塩釜様から受けてきたものである。安産間違いなく、150年程前から用いているが、村の人々もよく借りにくるという。

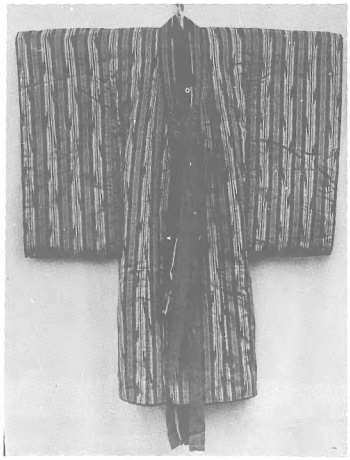


Ⅶ—5　ひっかけ着物

月夜野町後閑　増田清三所有

初着は普通里親が贈るものとされている。水上では背守に豆を入れた着物を着て宮詣りするし、またヤマンマユの入った紐をつけることになっている。このひっかけ着物も生後二十一日の宮詣りのとき掛けるもので、絹布製二枚重ねであるので、重ね着ともいう。

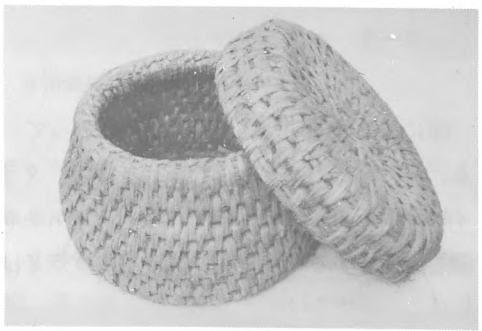
（以上、池田秀夫）



Ⅶ—6　イジメ

月夜野町後閑　増田清三所有

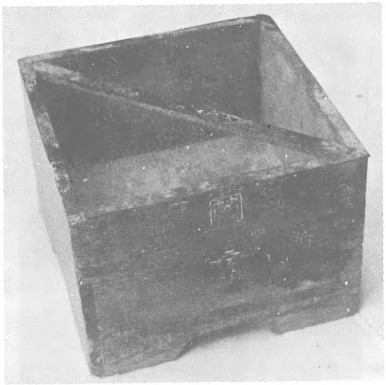
現在ではほとんど飯などの保温、餅、野菜などの保存に用いられている。その関係で蓋がつき、取手のついているものもみられるが、かつては、蓋のない、育児用のものが普通であったようである。なお利根郡地方のイジメは、写真のように、下方がふくらんでいる形が多かったようである。（都丸十九一）

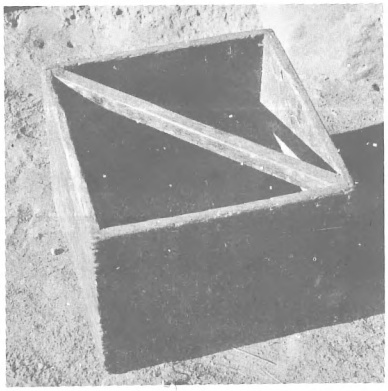


Ⅶ—7　ハナモチ型

昭和村川額　藤井誠之助所有

3月の節供の贈答、初節供のお返しに、粉餅をついて型に入れ、色をつけたハナカタ餅をつけ、菱餅の上にのせて配った。こうしたハナカタ餅を作る型は、家々にあった。





Ⅶ 人 の 一 生

Ⅶ—1 ウブユダライ

川場村立岩　戸部織衛所有

嫁に来るとき持ってくることになっている。今でもこのことは行なわれている。タライは洗濯用のものであって、最近は電気洗濯器を用いているなかでも、産湯用のタライは欠かせないものである。嫁入道具の少ない村内婚、多種多量の遠方婚姻でも同様であった。（以上、池田秀夫）

Ⅶ—2 ウブギ（産着）

月夜野町後閑　増田清三所有

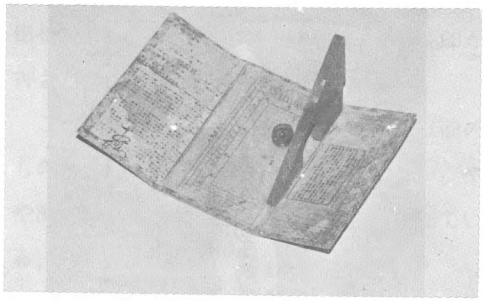
生児の晴れ着としてその子の母親の実家より贈られる。これには背守りといって、襟に小袋をつけ、これに大豆を入れたものをつける場合がある（水上町の民俗）。21日のウブアケには、これを着て鎮守様にお詣りするのである。（都丸十九一）

Ⅶ—3 安産守り

阿部国之輔所有　水上町粟沢

安産祈願としては、新治村赤谷の十二様が

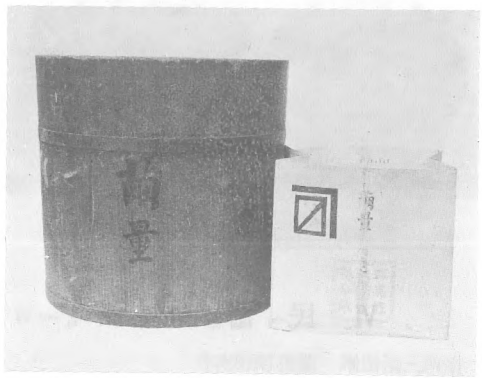
の柄に仕込んだものと同様に、一般的なものでないのであろう。



Ⅵ—2　繭　　桝

月夜野町後閑　増田清三所有

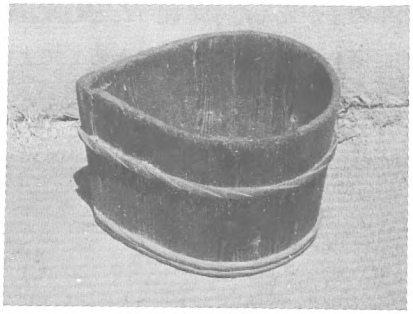
繭桝は繭の量を計る時にのみ用いる。いわば使用目的の限定されたものである。これは江戸時代から繭買いのとき用いたという。繭桝には写真右の如く和紙製のものもかなり保存されている。これには「群馬県紙製繭量組合章」とあって、県内で統一していたとみられるが、ほかに同じく和紙で作って自家用に用いたカミマスもある。



Ⅵ—3　ト マ ス

昭和村川額　藤井誠之助所有

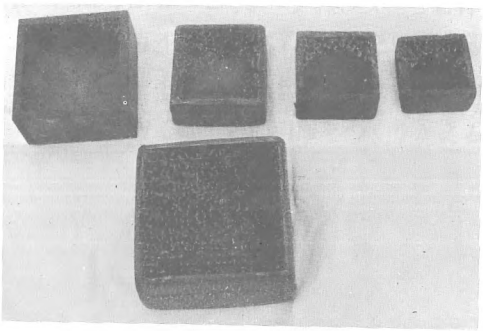
卵型をした一斗桝で、中味は正しく一斗、型としては異型の珍しいものである。
（以上、池田秀夫）



Ⅵ—4　マ　ス（桝）

水上町藤原　林　義明所有

同地の主として手製の桝である。小さい方より1合、2合、2.5合、5合、1升。そのうち、合桝だけが市販の購入品。また2.5合桝を同地ではイッパイといい、1人1回分の米の基準量として用いていた。（都丸十九一）



Ⅵ—5　1斗マス

川場村立岩　戸部織衛所有

1斗桝（トマス）は概ね明治末までは四角形、その後丸型のものが用いられた。これは立岩持ちであったものが、大正初めに払い下げたといい、他に1升、5合、1合の桝もあった。底裏に「口壱尺五分、深五寸八分八厘」横に「囘壱斗入」四方に焼印がある。こうした四角い桝の対角に鉄の棒がついているが、これは穀物などの計量にトカキ（斗掻き）を用いると同じ意味のものと考えられる。

その牛の子が死んだので祀ったという。これは他に例をみない特殊なものと考えてよいであろう。

V—3　天神様

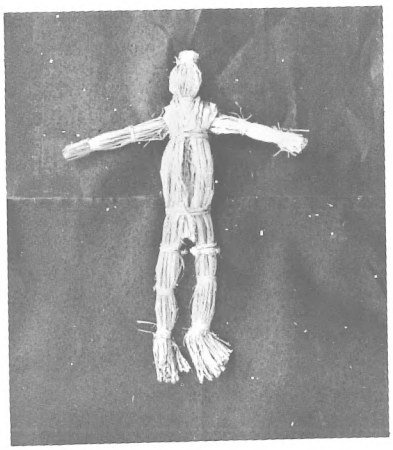
水上町粟沢　阿部国之輔所有

天神様は学問の神様であると共に、子供の神様と考えられている。この場合、個人の家の神棚に祀っているのは珍しいといえよう。

V—4　藁人形

月夜野町後閑　増田清三所有

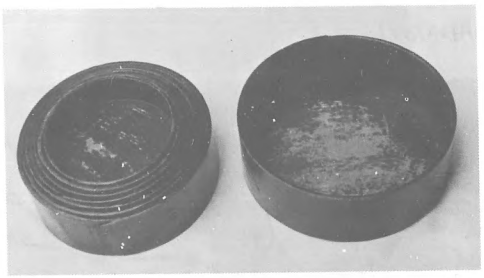
「祈り釘」といって、生の立木に釘を打ちつけながら祈りをこめた。目的によって紙に書いた絵や人形が使われることもある。そして祈る相手に不幸をもたらすことを期待しての行為であるだけに、真夜中に他人に見られないようにするとより効果があるといわれた。昭和20年代になってもなお行なわれていたという。(以上、池田秀夫)



V—5　カミノハチ（神の鉢）

新治村羽場　原沢宣也所有

神供用の曲物の鉢。七つ組と単独のものとある。沼田等で購入してくる。これを転用して、弁当入れにする場合もある。(都丸十九一)



VI　民俗知識

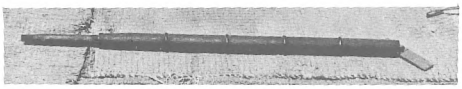
VI—1　日時計

月夜野町下津　内海文之助所有

大型の日時計は固定されたものである。こうした小型のものは携帯用で、やはり太陽の移動によって生じる影によって時間を測定する。これは折り畳式のようであるが、矢立・刀

られるのは角筒型のものが多く、片品村でみられたのは「此竜越　持主平左衛門　火之要心　龍越　請合」と書かれ、また「御免　神田松田町　龍吐水師　塚越松五郎」の焼印が押されている。これは市販品である。

ここにあげたのは、市販品の竜吐水以前のものとみられ、理論的には同じであるが、やや簡単で、150年以上前のものといわれている。　（池田秀夫）



Ⅳ—2　ホカイ（行器）

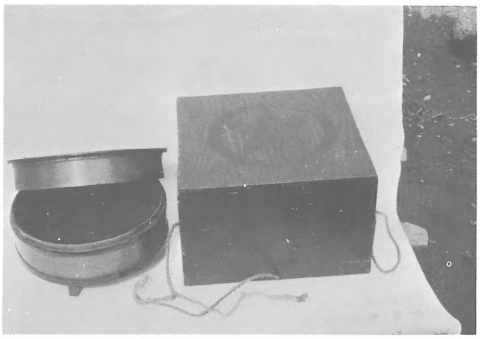
川場村立岩　戸部織衛所有

婚礼の際の赤飯、葬送の際の赤飯、建築の上棟式の投げ餅等、近親者はこの行器に入れて持参する。（都丸十九一）

Ⅳ—3　ホケイと容器

月夜野町後閑　増田清三所有

幸、不幸のとき赤飯、餅など入れて他家に贈り物をするとき用いる。ホケイには多くの形式がある。何れもウルシ塗りで外側に段をつけたもの、丸型で蓋がカブセ式のもの、オワンを大きくした型、即ち底部にくるに従って口経より短くなる形、これらは普段は専用の箱に収められている。



Ⅴ　信　　仰

Ⅴ—1　稲荷様

新治村東峯須川　河合三郎所有

稲荷様は普通屋敷神として祀られている。この大きい方の板宮が本家で、小さい方が新宅という。新宅だから小さいというのではなく、この地方では、お稲荷様をつくりかえるとき、一廻りずつ大きくするので、本家のものは自然大きくなるのである。

Ⅴ—2　ウシッコサマ

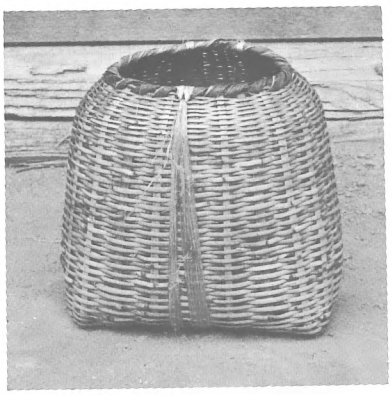
新治村東峯須川　河合三郎所有

ウシッコサマは、かつて牛を飼っていたが、

III—8　ハ ケ ゴ

片品村土出　星野辰二所有

竹で編んだカゴ類も多種多様で、ハケゴは腰につけ、草刈りのときなど草が一杯になると道に捨て、栗拾いのときは一杯になるとイワシバ製のビクに入れる。



III—19　ニナイ（カツギ）

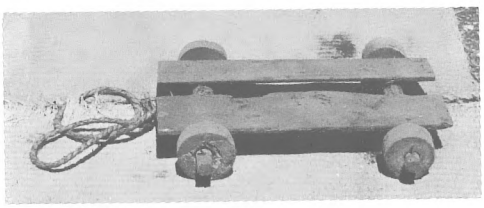
川場村立岩　戸部織衛所有

穀類を乾燥したときあるいはホトバシモノ（赤飯の米など）もいれる。同形同質のものの桶は用途が広い。肥料を入れるのをタメオケという。(下肥を馬で運ぶときはヨツヅケという蓋のある細長い桶を用い、蓋のないのはネリ肥を入れて運んだ。)サゲというのは天秤用の深い桶で、竹の長いツルがついて、水肥料等を運ぶのに使った。

III—10　ジ ゴ ロ

昭和村川額　藤井誠之助所有

小さい車を四つつけてあり、人間が引くのであるが、山村では山出し専門に用いている。木材運搬にはこのほかドビキ、ソリヒキ、キンマヒキなどの方法がある。(以上、池田秀夫)



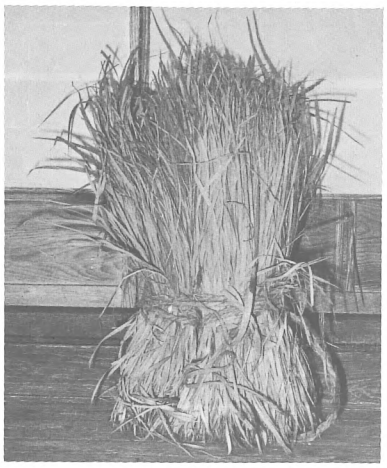
Ⅳ 社 会 生 活

Ⅳ—1　竜 吐 水

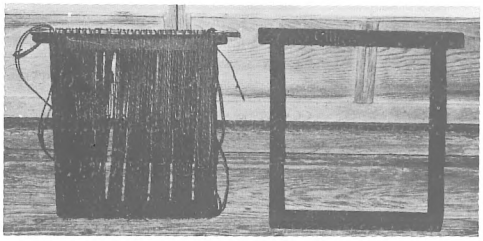
昭和村川額　藤井誠之助所有

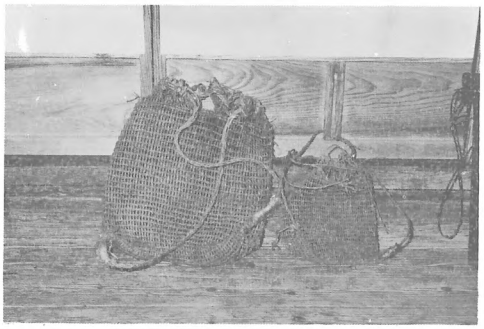
昔は一度火事がおきると村全体に拡がる。従って若者組を主体に村で防火組織をつくり、消火用具を備えていたが、それは主としてトビグチ、槌、マサカリ、火消梯子、マトイなど破壊消火法をとっていた。これに対し今の動力ポンプ以前の手押ポンプのその前には、竜吐水が唯一の放水具であった。現在み

ウワゴイビク（堆肥の荒い大きいのを入れて運ぶ）というのもある。



イワシバ





III—5　柳行李・竹行李

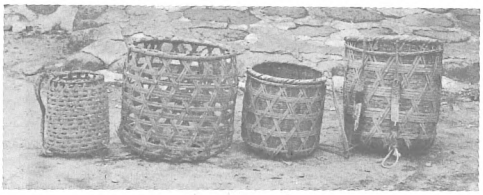
川場村立岩　戸部織衛所有

旅行のときあるいは日常衣類の整理収納に用いる。コリヤナギで作ったのが柳行李、スズタケ・メダケで作ったのが竹行李である。柳行李は柳の枝を丸いまま一本ずつ並べて麻糸で編み、角は布や皮を縫いかぶせて補強してあり、竹行李の縁竹はマダケ、孟宗竹を用いる。竹行李は見た目は悪いが安価で多く用いられた。

III—6　ザマカゴ

片品村腰本　入沢傑治所有

二重になっていて、各種のものを入れる用途の広いものである。肩にかけたり背中にかついで運搬する。ショイカゴは同様に大型であるが目が荒いので大きいものを入れ、ザマカゴ同様の用途をもっている。材料は真竹、孟宗竹、女竹などで、ザルと同様である。

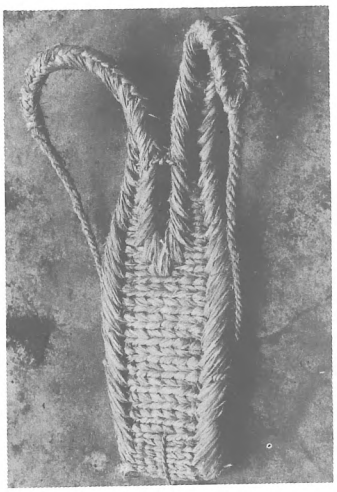


コシカゴ　ショイカゴ　ザマカゴ小　ザマカゴ大

III—7　メケイ・ザル

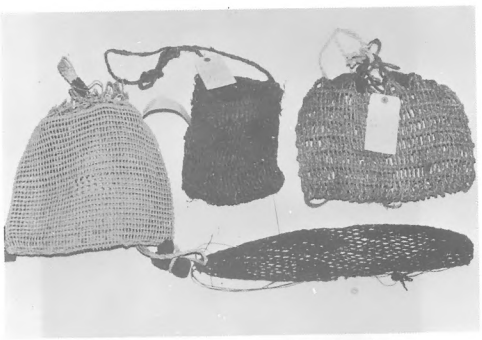
片品村腰本　入沢傑治所有

これらには主に桑の葉を入れる。利根郡の山村には、平担地と違って桑の大木が多く、この桑の木に登って桑の葉をつむとき腰メケエを用いる。このほかイモホリメケエというのがあり、これは目が大きいので、いもを掘取って入れると、土砂が落ちて具合がよい。



(ロ)　セナカアテ

に行くとき弁当箱や他の小物を入れ、背負ったり、肩にひもをかけて持っていく。ショイビクと同様に用いられる。大字月夜野ではタスといい、後閑ではフゴという。



(イ)　フゴと腰ゴ　増田清三所有

(ロ)　タス　桑原悦次所有

III—2　タ ガ ラ

月夜野町月夜野　斎藤増男所有

木製のショイコに円錐形のカゴをつけたもので、堆肥など運ぶのに用いる。これは上が大きく開いているので、背負ったまま横にして、畑に堆肥をまけることができる。

III—3　フ　ゴ（タス）

(イ)　月夜野町後閑　増田清三所有
月夜野町月夜野　桑原悦次所有

材料はイワシバ。ちょっとした山稼ぎや畑

III—4　ショイビク

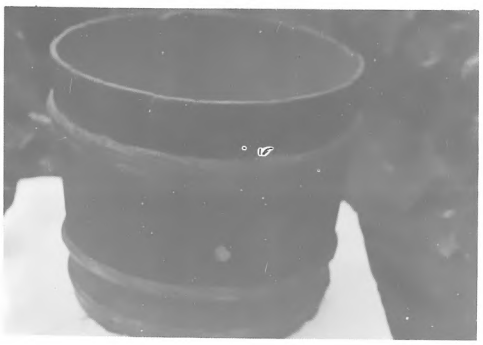
利根村砂川　根津庄治郎所有

ナップザックのようなもので、イワスゲ、イワシバ、山ブドウの皮などで編む。自家製で背中にしょって山に行くとき弁当等を入れたり、畑に行くとき種物を入れたりする。イワシバの新芽を土用の時期に抜き、煮え湯をかけて干し、細い縄にして編む。そのとき中にシマを入れたり文様を入れたりする。またネリゴイビク（一タライ分の堆肥を馬で運ぶ）

II—32　ワラビコ沈澱桶

水上町平出　林　義明所有

藤原地方はワラビ粉の生産が盛んであった。飢饉時の食物としてだけでなく普段も食し、またこのデンプンは機械の糊に使われるので桐生、足利などに高く売れ、貴重な収入源でもあった。従って各戸に備えてあった。桶の中央下に穴があるがこれは沈澱後の水を抜くためのものである。ワラビの根は洗って大きな臼に入れ、杵でつき砕いて布袋でこす。桶に水を入れて粉を沈ませ、サワグルミの皮で作った箱に入れ、天日乾燥して粉にしておく。一臼から約一升とれる。（以上、池田秀夫）



III　交通・運輸・通信

III—1　背負梯子と背中あて

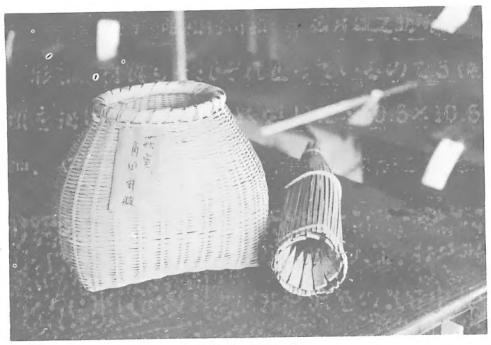
(イ)　月夜野町後閑　月夜野町資料館蔵
(ロ)　新治村東峯須川　河井洪太郎所有

背中あては、藁や草で編んだもので、カッチン縄（カチナワ—シナッカワ（シナの木の皮のせんい）をなって作る）で荷物をしばって背負うときに用いる。また荷を直接に背負ったり籠を背負う時に背中にあてる。縦は三六寸（ミロクスン）といって、手の指を拡げて三回はかった長さにし、肩にかける部分も三六寸に作る。幅は別に決っておらず荷にかくれる位でよい。編むときミョウガのカラを干して入れた布のボロを入れたのもある。

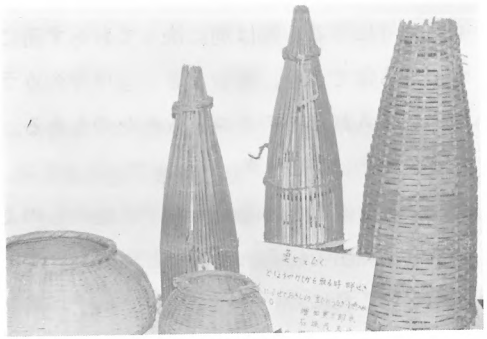
背負梯子は、セータ、ショッコ、ショイコ、ショイハシゴなどともいう。平坦地のものより上に高く出ている。炭俵など何俵も一度に運べる。これについている縄をカッチニ縄という。普通背中に当る部分を藁縄で痛くないようにできているが、板にしたのもあり、また石油かんの大きさのものがそっくり入るような構造になっているのもある。

(イ)　背負梯子

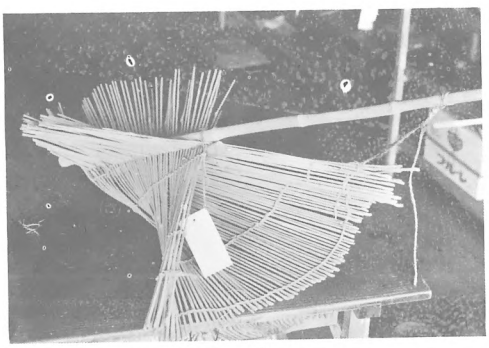
基本的には同じ用具である。ブッテイはアゼや小川で魚をここに追い込んでとる。



(イ)　川場小学校蔵



(ロ)　郷土資料館保管

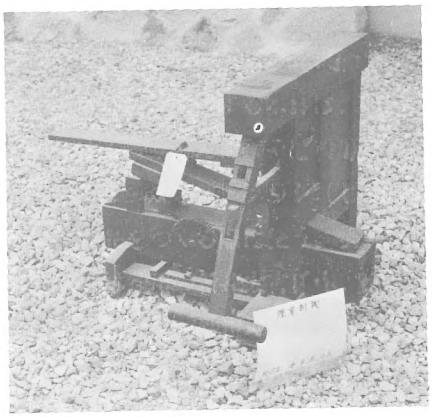


(イ)　川場小学校蔵

II—29　煙草刻機

月夜野町　本木庄治所有

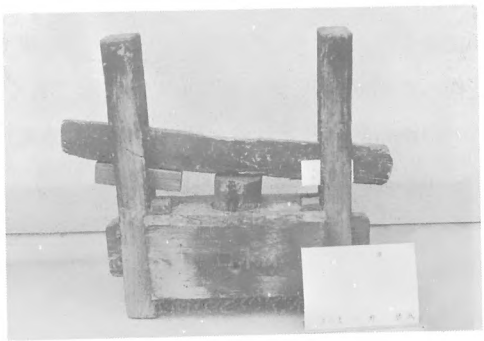
月夜野町一帯は専売約200年前から煙草の栽培が盛んであった。従ってこの地域にはこうした機械が各家にあった。月夜野町旧桃野村では重要な農家の収入源である。



II—30　油 搾 機

月夜野町　小野　勝所有

昭和村川額でも同様のものが保存されていたが、自家製油をつくるのに使われた。太い二本の縦わくに横木をさし込み、「や」でしめる。菜種はふかして袋に入れ、上からしめ木を入れてしめる方法でとる。

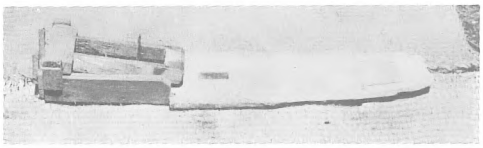


II—31　コクビツ

新治村羽場　原沢宣也所有

今では自家製にしてもブリキ製のような市販品にしても、移動出来るものである。これは土蔵の奥壁につくりつけになっている珍しい例である。

各地にみられるマブシ織機は市販されているものであるが、それ以前は織機も自家製であった。ここにあげたものはその自家製のもので、川場村でみる「荒高式」は両者の過渡的なもののようである。昭和村のものは台はエグワの台を利用したもので、廃物利用更生した面白い例である。

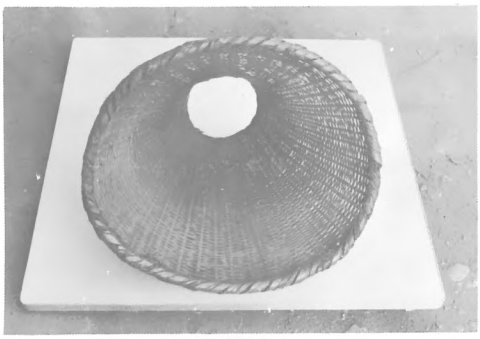


(イ)　藤井誠之助所有

II—26　ヒョウグチ

(イ)　月夜野町後閑　増田　茂友所有
(ロ)　昭和村川額　　藤井誠之助所有

俵に米、麦などの穀物を収納するときに用



(イ)　増田茂友所有

(ロ)　藤井誠之助所有

いる。竹製のものとそれに厚紙をはったものとある。昭和初期から用いたという。

II—27　コナウス・トウフウス・石臼

昭和村川額　　藤井誠之助所有
月夜野町後閑　増田　清三所有

脱穀したものを細かく製粉する場合は石造りのウスを用いる。粉にするコナウス。石臼は製麦用、引割用のもの。トウフウスは大豆をつぶすのに用い、大豆を入れる穴が中央にある。

(イ)　藤井誠之助所有

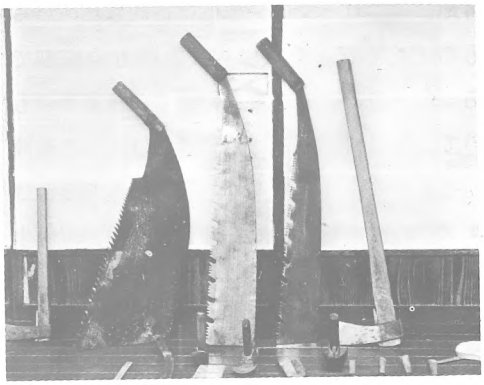
(ロ)　増田清三所有

II—28　コシゴ・ド・ビク・ブッテイ

(イ)　川場村谷地　　川場小学校蔵
(ロ)　月夜野町後閑　月夜野町資料館蔵

川魚をとる道具類である。フナ、ウナギ、ドジョウ、カジカなど小魚をとるときアゼに伏せておく。とった魚を入れるビク、コシゴなど地域によって多少の型の相違はあるが、

③　カンナ　ソトゼン　テングバナ　ナタ



(ロ)　梅沢千代松所有

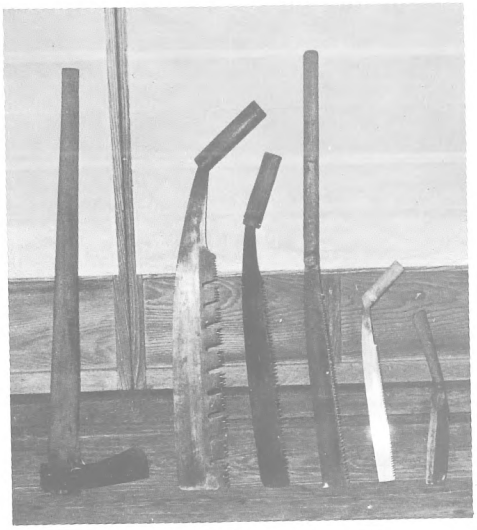
II—24　キコリ道具

(イ)　利根村砂川　根津庄治郎所有

(ロ)　片品村土出　梅沢千代松所有

山で木を倒しこれを切って製材したキコリの道具一式がよく保存されている。一部は現在でも使用しているが、同じ作業に用いるにしても夫々の過程で各種のユキ、ノコギリ等がありその実態をよくあらわしている。

利根村のは左からネギリヨキ、カイリョウノコ、テマガリ、エナガ、コシノコ、コシナタという。片品村のは左からテユキ、マエビキ、改良ノコギリ、ネギリユキという。



(イ)　根津庄治郎所有

II—25　まぶし織り機

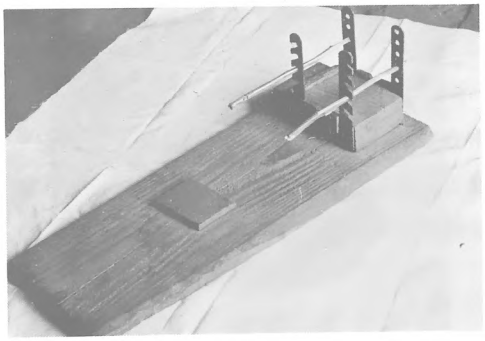
(イ)　川場村谷地　　川場小学校蔵

(ロ)　月夜野町月夜野　桑原　悦次所有

(ハ)　昭和村川額　　藤井誠之助所有

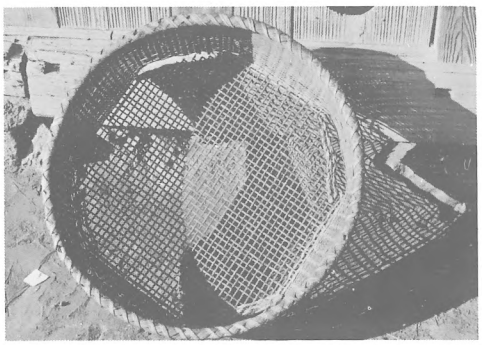
養蚕に不可欠なマブシは古来自家製であった。この地域では昭和初期までマブシは萱を刈って作った。萱も柔らかいのがよかった。いま

(イ)　川場小学校蔵

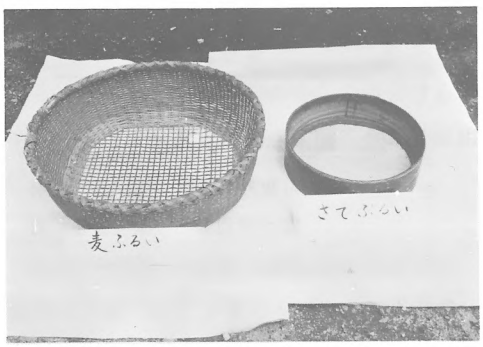


(ロ)　桑原悦次所有

る。サデブルイは一つ目も細かくなり、麦・ヒキワリをふるうもので、更に目の細かい粉フルイにも幾つものものが用途によって使われた。



原沢宣也所有

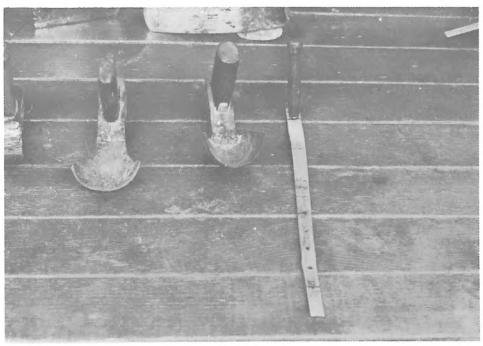


星野泰宏所有

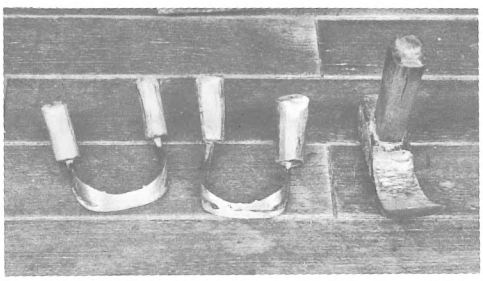
II—23　木鉢製作具一式

片品村土出　梅沢千代松所有

小麦の生産地である本県は、小麦粉によるウドンが主食同様に食され、また小麦粉によるヤキモチも常食とされていた。その小麦粉をこねるコネバチとしての木鉢は、どの家庭でも常備されている。また養蚕県である本県の各農家では、熟蚕を拾って入れる小型の浅い木鉢も用いられている。木鉢はトチを材料として、本来は木地師系統の漂泊民によって作られたようであるが、次第に山村の人々によっても作られるようになった。前者は上野村で調査されたほか明確な記録はない。(この道具一式は県立博物館に所蔵されている) すなわち吾妻・利根地方における製作は、恐らく木鉢製作を業とした人から教わってのものであって、漂泊民の土着したものではないであろう。片品村と同様のものは利根村砂川でも調査された。上野村・片品村・利根村・六合村のはそれぞれ製作方法・道具に若干の相違がみられる。技術者の間で少しずつの工夫がなされての変化であろう。吾妻・利根地方のものには、シャモジ製作技術・道具が応用されているようにみられる。写真①右からブンマワシ、オオテゴロ、写真②コテゴロ、ナカゼン、ナタ、写真③テングバナ、ソトゼン、カンナである。ユキでアラッポリをして、テユキでブンマワシの印のついたそばを切る。テゴロで内部をえぐり更にナカゼンでえぐり、テングバナを腹にあててソトゼンで外側の仕上げをする。

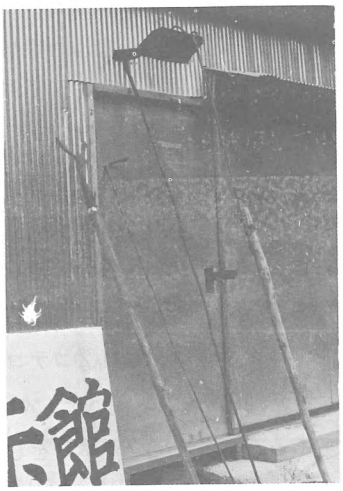


①　オオテゴロ　同　ブンマワシ



②　ナカゼン　同　コテゴロ

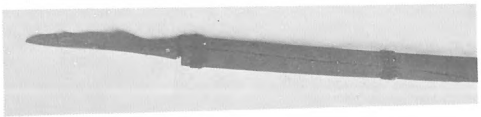
まの中に木を立てる）カツキリ（炭になったものをくずして砕く。）カキダシ（炭をかまからにわにかき出す）ニワカキ（かまから庭に出したものに灰をかける）である。



II—20　熊とり槍

水上町平出　林　義明所有

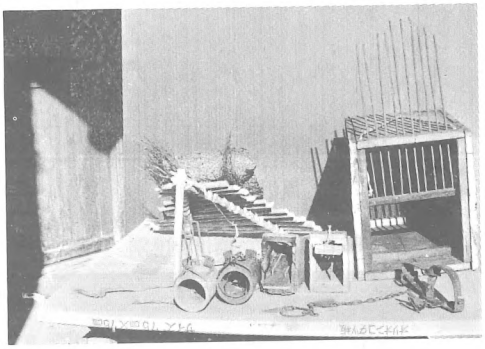
利根郡一帯に山中では熊とりをする。利根村砂川にも同様なものが保存されている。狩猟用の槍には2種類あり、一つは穂先17㎝程の柳刃状のもの、一つは熊とり用のもので穂先は19㎝、これは三角槍である。



II—21　わ　　な

月夜野町後閑　増田清三所有

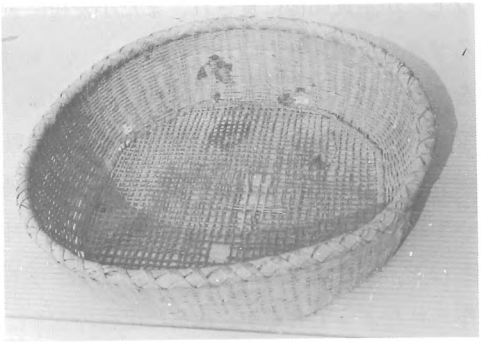
狩猟用のもの。オスは、小さいのは小鳥から大きいのは熊などの野獣をとるものまである。餌をひくと仕掛けが外れて動物が圧殺されるもので、熊をとるにはトオリジにソダを組んで上に200貫位の石をおき、そこに熊が入って蹴ると石が落ちて押えつけるオス（オトシ）を用いる。ハコオトシ（蓋が落ちて出られなくなる）、小物は戸板のオトシなど使った。オスを仕掛けた所をオトシバ或いは某さんのオスバといった。餌に誘われた狐、狸などの手足をはさむトラバサミ、これより小さいジヤップも用いた。その他ブッチメ、獣の通り道に針金などの輪を仕掛けて、兎・鹿をとる方法もある。



II—22　籾ぶるい・フルイ

月夜野町後閑　増田清三所有
新治村羽場　原沢宣也所有
利根村追貝　星野泰宏所有

穀物をフルイにかけることは、収穫物を食料とする第一の過程で行なわれる。従ってメは荒いものから始まるわけだが、籾フルイ（モミトオシ）、豆トオシ、麦フルイ、テフルイなどといって、地域によって多少の相違はあるものの何れもその実用性から名付けられてい



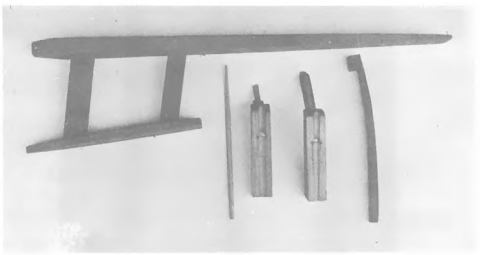
増田清三所有

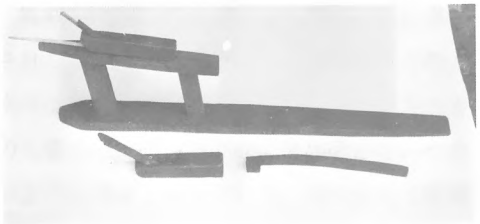
もある(白沢村)。普通ワラで編まれた厚いもので、竹で編んだのもある。形は円形と角形とある。これは猫の子をこの中で生ませるものである。

II—16　箸けずり

月夜野町月夜野　桑原悦二所有

箸を作る道具で自家製であるが、自家製から市販品へと移った需要の変化を裏付ける資料といえよう。大正末期から、近年まで使用したものである。

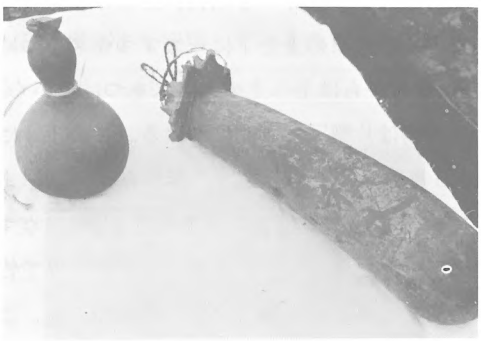




II—17　種子入れ

水上町平出　林　義明所有

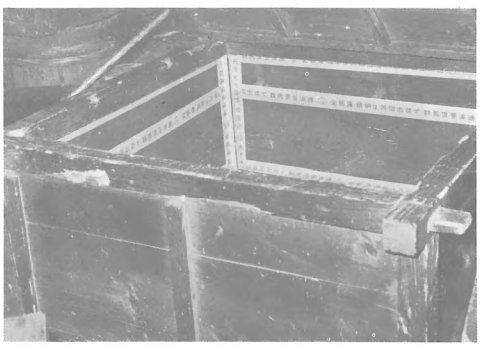
一つには「御種入」とある。蓋にクルミ(来る実)を用いるのも縁起のよいものとの意である。ヒヨウタン、トウガンの中味をくり抜いたもの等に野菜の種子を入れるのに便利なものを利用したり、適度の大きさのものを自家で製造して用いる。翌年蒔く種子を保存するには湿気、過度の乾燥、虫鼠害を防ぐことが必要で、且簡便性を求められるので、それらの条件を満さねばならず、生活の知恵をよく働かせている。



II—18　コキバコ

新治村羽場　原沢宣也所有

千歯をこちら側において、こいた稲の穂が向うの箱におちるようになる。



II—19 炭焼き用具

水上町平出　林　義明所有

炭焼きは山村の現金収入としては最大の生業であった。これらの道具は自家製又はカジヤに作らせたものである。左からタテマタ(か

II—14　漆 か き

月夜野町月夜野　桑原悦次所有

漆カキは6月頃から7～8年生の木を選び、朝早く4～5時頃から作業を始める。4日に一ぺん従って作業場は4カ所に分れる。15年生以上のはアラカワトリで荒皮をはぎ、ウルシガンナをかける。初めは7分位の小さいキズを下から5～7寸位の位置につける。これをハツガマという。二番ガマは、ハツガマの上だけに二つ目の切り口を入れ、三番ガマはこれまでのキズロの上と下に一つずつキズをつける。それからは上へ上へとキズをつけていく。木の傷は片側又は両側につける。このように4日目に一度キズをつけ、春から秋の彼岸まで約80日間、20回カンナを入れる。ハツガマの樹液はとらないで、次のから汁をヘラで竹の筒でできた入れ物（ゴウ）にはねこむ。こうして大きい木は5回位とれる。本県には他所からは主として越前から漆カキが来て働き、その稼ぎ場ともいわれた。彼等は5月頃から漆の木の山を買い始めた。上野村で調査されたのも越前の人の住みついた人であった。道具については、

(1)　カマ、太い木の荒皮をとるもの、

(2)　アラカワトリ（スジムキ）—写真欠—荒皮をむいてウルシガンナが通りやすいようにする。

(3)　ウルシガンナ　刃が二つに分れ一方の尖った方をカンナのアヤといい、木の心までカンナが通らぬときこれで肉にスジをつける。もう一方はアラカワトリより刃先が鋭角になっていて、1回目は少し軽く2回目から少しずつ強くする。最後は大きく横にカク。これまでの道具の柄はヒノキを用いる。

(4)　トリベラ—欠—汁をかきとってゴウに入れる。先はうすいブリキ、柄も軽い木がよく、普通は椎の木である。

(5)　ゴウ—欠—自分で作る。5月頃に1年たった若竹をとって節をとる。湯の中で煮て干す。底はヒノキ板で、空いた部分はウドン粉とウルシをこねて作る。

(6)　クリベラ—欠—ウルシをゴウから桶に移すときこれを用いる。薄い金属板に柄をつけたもの。

(7)　ツルベ—欠—桶のことでヒノキの曲物。上下にタガをして側板をまき、サクラの皮でとめる。これは1升入1貫目、2升入、3升入とある。

(8)　サシベラ—欠—マワシボーチョーで出た汁をサシベラでとってゴウに入れる。

(9)　マワシボーチョー—欠—枝廻しに使う。

(10)　ナタ、枝を落すもので越前ナタともいう。

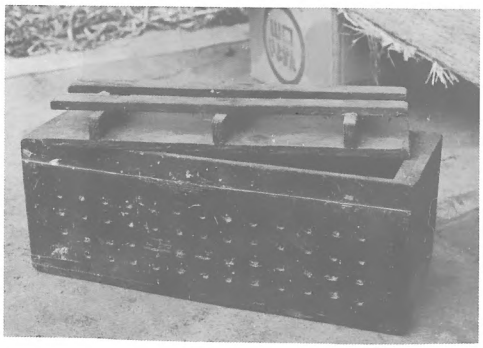
ウルシガキ　ナタ　カマ

II—15　ネコのイジメ

新治村東峯須川　河合三郎所有

育児用具として赤ん坊を入れるイジメは各地で用いられた。これを食物保温に転用しているのも多い。渋紙を張って補強されているの

それをオシブタで押え上に石をオモシにして水切りをする。一度に 12 コの豆腐ができた。



豆　腐　箱

豆腐製造器一式

II—13　す る す

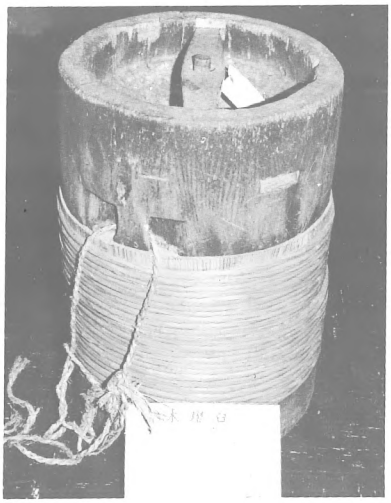
(イ)　利根村追貝　　星　野　泰　宏所有

(ロ)　月夜野町後閑　月夜野町資料館所蔵

脱穀用の摺臼であるが、これらの次に考案されたのが土を入れたドウスである。この木摺臼は自家製で、基本的には何れの地方のものも変りないが、部分的には作者が使いやすいように考案改良している。米や大麦は脱穀しただけでは籾がついているので、これを取るために用いるのであって、普通松の木を輪切りにして作る。上玉（上臼）の中央に円錐形の穴がとおり、下玉の上部がこれにはまるようになっている。上下の接触部に凸凹の刻みがあり、これが臼の目の役割をする。この刻みも作者の独自性と時代をあらわしている。古式のは木の年輪を臼の歯に利用している。

下臼を固定し、上臼に繩を通して向い合った二人が交互に廻すのであるが、上臼の穴に籾を落すと、この目によって精白されて実と皮が分れる仕組みになっている。県立博物館にも数組のスルスが収納されているが、赤城村からのものは、天明年間の銘入りのものがある。現在まだ使用しているのをまれには見る。

(イ)



(ロ)

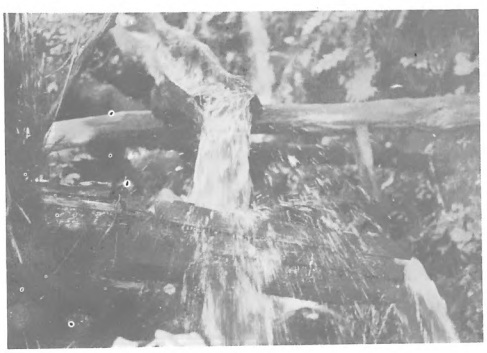
(1分間に5~6回転する) この水受箱の数が多くなり、回転が連続的になるのが普通の水車である。

以前は非常に沢山あったが、今ではようやく発見した程度で、それも既に使用されていなかった。

II—11 ウサギッチリ

水上町藤原

一本の木の一端に杵、その反対の端に水受が一つあり、そこへ樋で水が運ばれ、水受が一杯になって杵が上り水が落ちると杵が落ちる。米の精白に用いる地唐臼 (踏臼) の人力による部分を水にかえた、最も簡単な構造のもので、バッタリ同様に水量の少ない場所でも利用でき、建設費も少なくてすむ。回転が非連続的で仕事の能率は極めて低い。最近は使われなくなった。



II—12 豆腐製造用具

新治村東峯須川　河合三郎所有

前日から水につけておいた大豆をヒキウスでひき、出来た液体をハッキリに集め、オオガマで煮る。それに菜種油と石灰を混ぜて入れアワケシ棒で廻して泡を消す。煮えた液体はタホブクロに入れ、それをスノコの上において押棒でしぼる。しぼった液体の中にニガスを入れて攪はんする。10分おきに静かにかき廻し、30分程で水と豆腐が分れると、それを汲み出し豆腐箱に入れる。ここで凝固する。

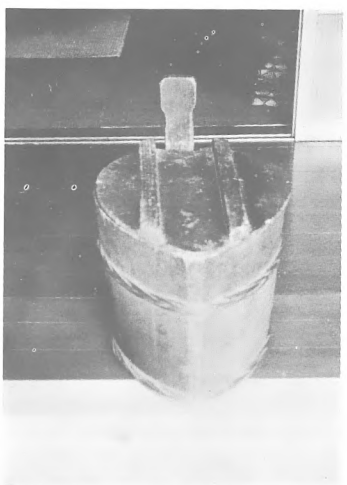
コオケ　石臼　　ハッキリ

別製などと銘が入っているのもある）竹製のものは自家製で貴重なものといえる。動力による脱穀機でとった種籾は、発芽率が低いので、自然センバコギによるものが多い。特に竹製のものは最良とされている。

II—7　桶（付看板）

新治村　林　盛重所有

江戸時代焔硝屋の資料で、「陸軍御用硝石製造大塚出張所」の看板もある。幕府の天領に硝石製造所がおかれていたといわれ、今でも焔硝屋といっている。製造に用いた桶、ザルその他多くの資料が保存されているが、家庭で家事に使用し、今ではこれだけになったという。古文書もあり元治頃から製造していたといわれる。



II—8　トズカリ

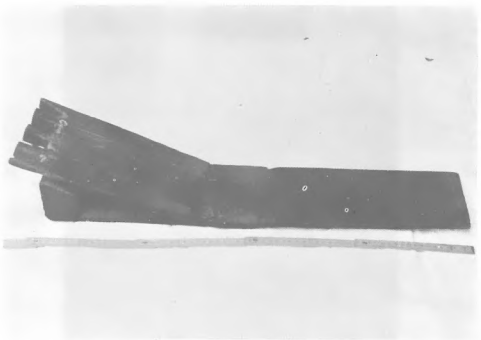
月夜野町月夜野　桑原悦次所有

麻縄製とわら製とある。主に砥石を入れる袋で、弁当入れに用いることもある。

II—9　ノ メ シ

川場村立岩　戸部織衛所有

ワラジ、草履を編むとき用いる。普通足の親指に縄をひっかけて編むが、これに代って用いる。「ノメシ」そのものの意味はモノグサ、怠け者の意味である。



II—10　バッタリ

新治村羽場

軸木の一端又は中央に直角に腕木をとりつけ、その両端に一つずつの浅い箱を固定し、これに水が入るような位置においている。そして軸の他の端に精米の杵を仕掛けてある。水受箱は縦２尺５寸、横１尺３寸、深さ１尺程、両箱の距離は５尺内外のものが多く、箱に水が一杯になると、その重みで回転するようになっているが、軸は半回転するだけなので、その度に杵が一回上下するわけである。

用いられていないようである。この道具は唐竿ともいうように、大陸でも用いられているものである。

II—3　田　　舟

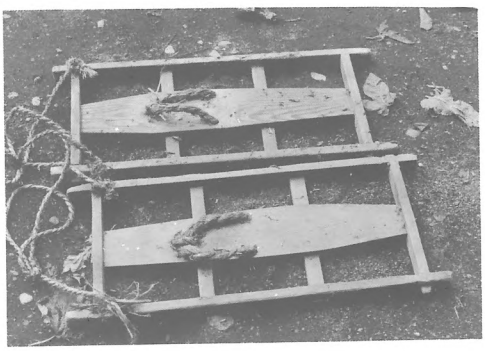
水上町藤原　雲越修蔵所有

新治村のオオアシと同様に注目される。藤原の一畝田の田はヒドロッタなので、田植や肥料、苗運びなどの作業をするのに田舟を用いた。邑楽郡板倉町地方の田舟と共に本県では貴重なものといえよう。これに関連して田植のとき水田の表面をならすイブリ棒もある。

II—4　オオアシ

新治村峯須川　河井洪太郎所有

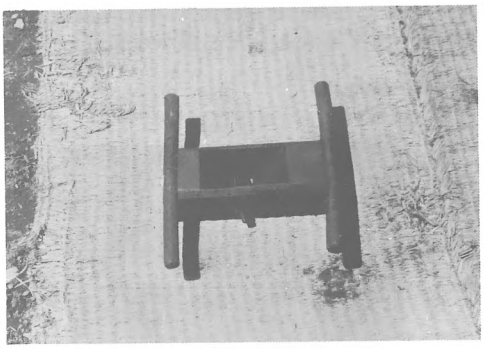
田下駄のことでカンジキの一種である。泥湿地の歩行や水田の作業のとき履く。すなわち深田での田植や稲刈りのとき足が泥中にはまらぬように使う。また田圃の代かきや肥料の踏み込み、代直し、代ごしらえのときにも履く。平坦地ではみかけるが、この山村でもみられるのは貴重である。



II—5　ズカスカンナ（豆粕カンナ）

昭和村川額　藤井誠之助所有

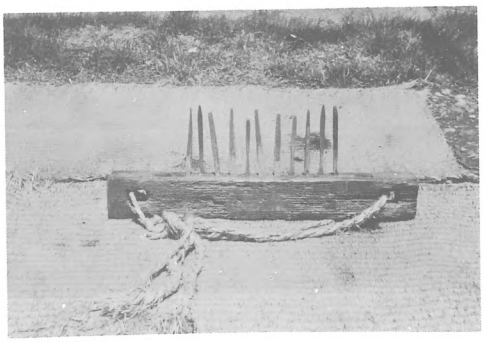
固体の大豆油粕を削り、これを肥料に用いるときに使用した。荒削りのカンナである。



II—6　センバコキ（カナコギ）

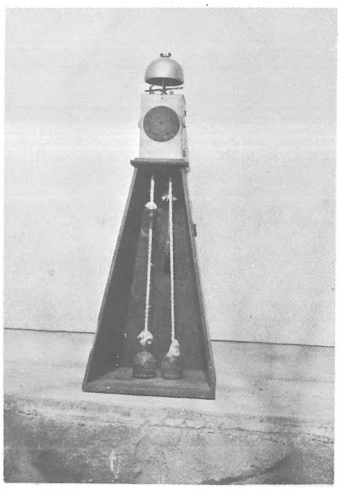
昭和村川額　藤井誠之助所有

金属（鉄歯）のセンバコキは市販品で、これを購入したものはまだ随所で保存され、一部では使用している。（若狭銘産富井助左衛門



こうした時計は本県でも都市、農山村を問わず用いられていた。ただ現在判明しているほとんどは地主層、寺院の所有で、こうした階層の人々が使用していたと思われる。価格は六両位で購入したという。

周りに十二支の文字が刻まれている。文字板が回転して中央の固定した指針により時刻が示され、円板は昼夜に一回転する。台箱の中の重錘は動力用で、一つは時刻表示、一つは時鐘用の動力を供給する。歯車は全部で四つ、重錘の動力によって順次連繋されつつ回転する。その運動を制御し等速運動を与えるのが整時器（テンプ）である。テンプの運動の周期はその両端にかけた小分銅の位置の移動によって調整される。原理的には今の柱時計と同様である。　（池田秀夫）

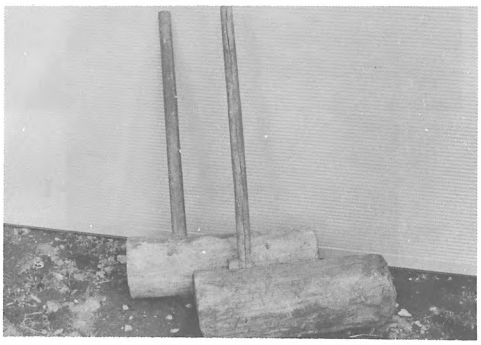


II　生　産　生　業

II—1　脱穀用杵

月夜野町後閑　増田清三所有

餅つき用の杵は普通ケヤキ、山桑などで作るが、脱穀用の麦つき杵は軽くて大きいのがよいとされ、松などの育ちのよいものを使用した。麦は落した穂を大臼に入れて軽くついて１ゲ押しをする。白沢村ではオシッコトウスといい、臼の下に麦束を二つ入れ、スプリングの役をさせていた。

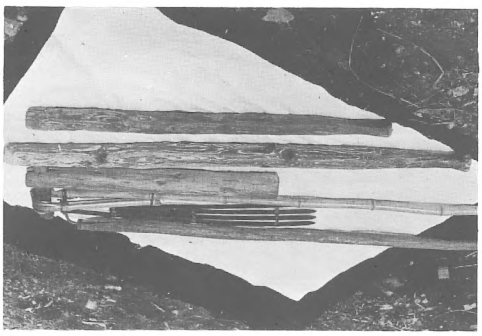


II—2　ボウチボウ・クルリ

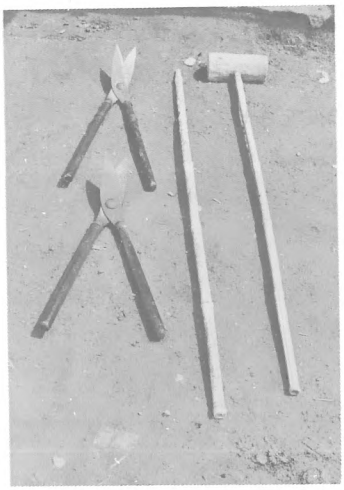
水上町平出　林　義明所有

脱穀のとき棒打ちをする。ソバの実をとるにはソバコナシという棒を用いる。また麦の穂をネコの上に拡げて打って実を落すとき、麦打ち杵を用いる。

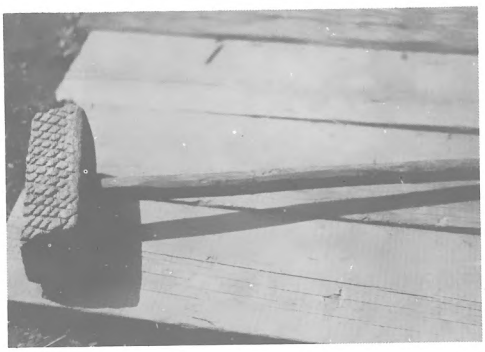
竹や木の竿の先に丸木または割竹をあんだクルリをつけ、竿を動かす反動でクルリが回転して、麦の穂、大豆を打って脱穀する。これは自家製のものである。金属（鉄）製のものは市販品で、購入して用いた。今でも各地で保存されているのはほとんどが鉄製のもので、それも大豆を落す以外には実際はあまり



網目の溝が入っている。



a

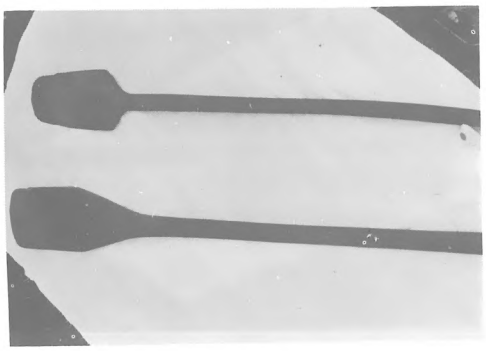


b

I—C—11　コザレイ

水上町平出　林　義明所有

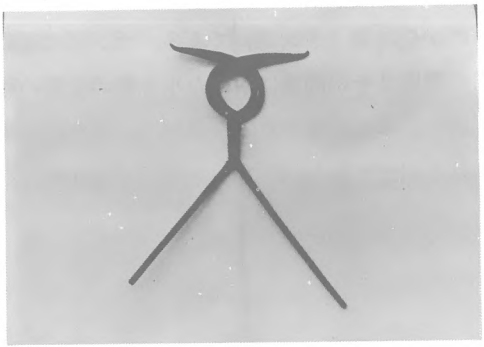
コザレイは雪かき。長い柄の先が板状になっていて、この部分で雪を除く。柄の部分には、尺ごとに印がついていて、これを立てて雪の深さを測ることもできる。長さ大きい方125.5㎝。小110.0㎝



I—C—12　篩鋏み

月夜野町月夜野　桑原悦次所有

草篩・座敷篩・竹篩等々は、以前はほとんどみな自家製であった。これ等をつくる際、材料をしめつけて結える。そのしめつける時に用いる鋏み。（以上都丸十九一）



I—C—13　やぐら時計

月夜野町後閑　増田清三所有

日本では17世紀の初めから作られ、長崎を初め殆ど全国で、近くは江戸、前橋、長野、新潟で製作していた。欠頭方錐形の台箱に乗っていて、高さ70～100㎝、後には次第に小型のものも作られた。台箱の上に金属製の薄板で四方を囲まれた機械箱があり、その中に歯車類がある。その上に時鐘がつき、機械箱正面の円盤は時刻を表示した文字板と同じである。一日を十二刻に分けているので昼夜の時間の歩みの速さと季節の変動による差があり、昼夜毎に季節毎に調整する。そのために後に二挺テンプを備え自動的に切換えられるようになった。

Ⅰ—C—7　ひで鉢

新治村羽場　原沢宣也所有

灯火にひで（松の根——油分が多い）を用いていた時代に、それを灯した鉢。ひでを細かくさいて、この上でもすのである。その明りで、夜業等も行なった。掲出のものは、上方の径26.0㎝、高さ27.5㎝、ひでを入れる部分の中央に突起があり工夫を凝している。利根郡各地に同様の形をもつものがある。水上町藤原ではこれをヒデアカシという。

Ⅰ—C—8　トウガイ（燈蓋）

新治村羽場　原沢宣也所有

いろいろの種類がみられるので掲出した。左上は油を入れる部分が区切られて広くとってあり、左下は油を入れる部分が深い。右下は燈芯をさしこむ部分がつけてあり、右上には、それ等の細かい構造がいっさいない。

Ⅰ—C—9　ショクダイ（燭台）

川場村　川場小学校所保管

燭台またはトウダイ（燈台）という。いずれも蠟燭を燈したところのものである。土地の材料を巧みに生かした手製で、頑丈にできている。

Ⅰ—C—10　屋根葺用具

月夜野町月夜野　桑原悦次所有

利根郡地方は茅屋根の最も多く見られる地域である。屋根は、その土地の人々の協力によって葺かれた。写真ａ左より、茅を切りそろえるための鋏、中央縄を通す竹棒、右は切られた茅をそろえるための槌。ｂは、同じ槌。水上町藤原阿部亀伝氏方所蔵のもので、槌に

み方にもさまざまな形があるが、これはごく単純に直角に組んである。

フキダケ（火吹き竹）は、竹の２節を切りとって、先端の火に近づける方の節に小穴を、竹中央の節は大穴をあけてつくる。

Ⅰ—C—3　ハネツルベ（撥釣瓶）

新治村東峯須川　河井三郎所有

撥釣瓶としてとくに珍しいこともないが、しだいに影をひそめてしまったので、掲出した。

Ⅰ—C—4　勝手の棚

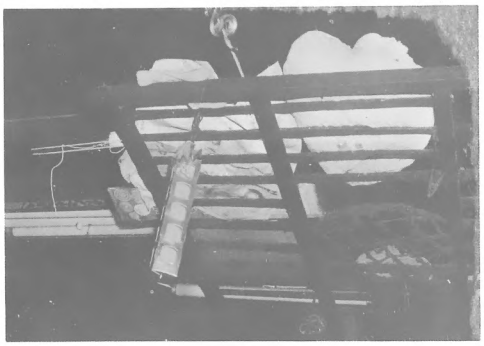
新治村羽場　原沢宣也所有

多くの家庭の勝手にはこのような棚があった。昔はここに箱膳を入れておいたので、「膳棚」といっているところもある。

Ⅰ—C—5　ヒダナ（火棚）

水上町藤原　雲越修蔵所有

炉の上にしつらえられた火棚。この上にぬれたものなどを載せて乾かす。とくに藤原地方は、豪雪地帯なので、その必要があった。



Ⅰ—C—6　ヒウチバコ（燧箱）

利根村追貝　星野泰宏所有

発火用具を入れておく箱。中が仕切られており、片方に艾（もぐさ）・桐の炭等が入り、他方に燧石・燧金等を入れておく。この写真では、手前に燧金が二丁ある。これは２～３年前に作ったという。また写真には付け木（つけぎ）もついている。現在星野家では元旦だけに使用するという。他の土地でも、正月の火だけは切火でするというところがかなりある。

で、それが年輪を巧みに生かすことになるので、かえって丈夫であるという。粉などをこねる際に用いる。

I—B—10　ニガストリ（苦汁取り）

月夜野町月夜野　桑原悦次所有

ニガスとはにがり（苦汁）のこと。戦前までの塩にはニガスが入っていた。叺に入って来た塩をこの器に入れておくと、苦汁の部分は早くとけて下にたれる。これを器に受けてとっておくと、豆腐屋が買いに来たという。竹製。村内の籠屋に作ってもらった。

I—B—11　味噌ふみハッキリとしゃもじ

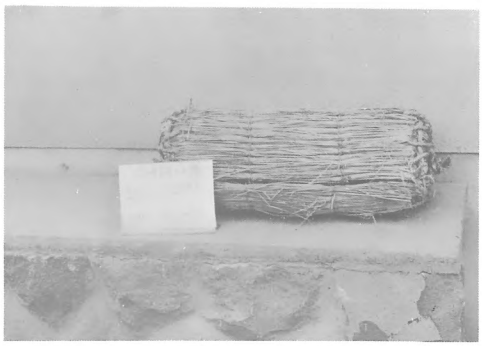
新治村東峯須川　河井三郎所有

ハッキリとは桶のこと。この桶の径は83.5cm、高さ44.0cm。この中によく煮た大豆を入れ、別掲ミソフミグツでふんでつぶす。つぶれたのを味噌にするのである。しゃもじは長さ96.0cm。これでふんだ味噌をかきまぜ、またかえすのである。

I—C　住

I—C—1　上棟餅入俵

月夜野町後閑　月夜野町民俗資料館蔵



I—C—2　炉端と火吹き竹

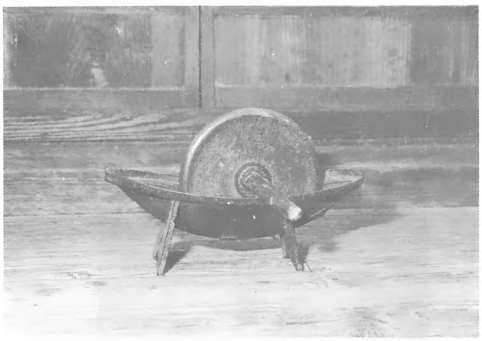
新治村東峯須川　河井三郎所有

炉端の枠をマッコという。マッコぶちの組

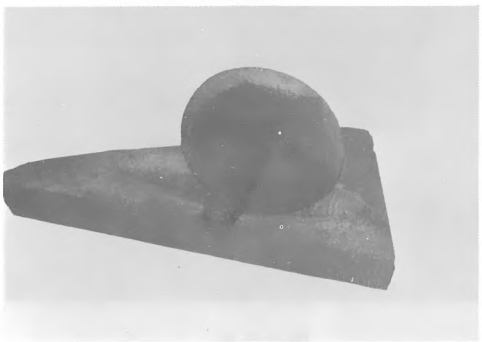
Ⅰ—B—7　ヤゲン（薬研）

(イ)　利根村青木　　角田　　一所有
(ロ)　月夜野町後閑　増田　清三所有
(ハ)　昭和村川額　　藤井誠之助所有

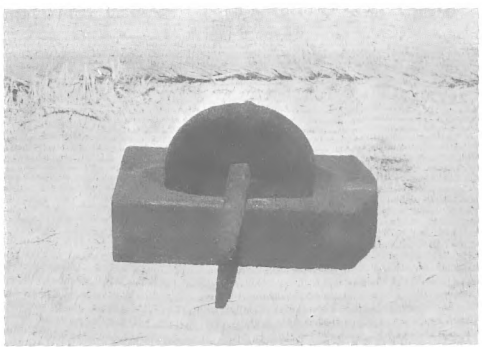
形も、材質もそれぞれ変っているので3種類を掲げておく。(イ)鉄製 11.2×30.5×10.5 cm、(ロ)・(ハ)木製。



(イ)



(ロ)



(ハ)

Ⅰ—B—8　キバチ（木鉢）

利根村砂川　根津庄治郎所有

現今のボールに相当する木鉢は、郡内どこでも見受ける。うどん粉、そば粉等をこねてうどん・そば・焼き餅・タラシ（じりやき）その他の食品をつくる際に使う。栃の木製。これは利根村砂川の新井太吉氏作。38.5㎝×11.5㎝、厚さ2.5㎝。砂川地方ではかつて赤城山のオオバンノキという所に職人が来て小屋をつくり、木鉢製作をしたという。

Ⅰ—B—9　クチキバチ（口木鉢）
コブキバチ（瘤木鉢）

水上町藤原　阿部まき所有

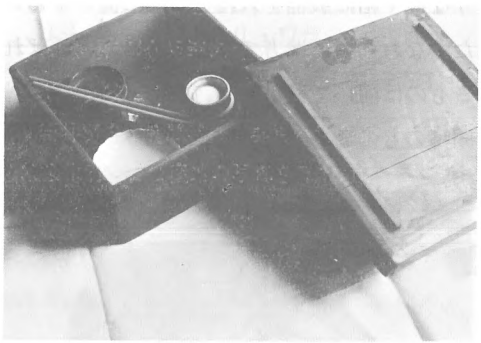
藤原地域では今も使用されている注口式の木鉢。2種類あり、口木鉢（54.5㎝×34.5×13.0㎝）の方は栃などの樹木をほったものであるが、瘤木鉢の方は、樹木の瘤のある部分を選び、その瘤の部分を上手にくりぬいたもの

つき桶は上・中・下三段にたががかけてある。蓋は鍋の蓋に似ている。利根郡地方には、この形のものが普通のようである。

I—B—3　箱膳

月夜野町月夜野　桑原悦次所有

利根郡地方の箱膳は、ほとんど同じ形。中には、飯茶椀・汁茶椀・オテシヨウ・箸等が入れてあり、家族一人一人、自分のものがきめられていた。食事の都度これを膳棚から出して来て用意したのである。



I—B—4　ハンギリ

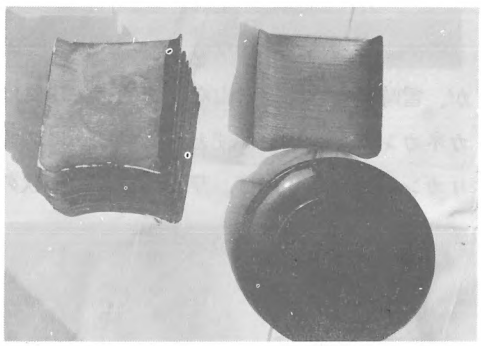
川場村立岩　戸部織衛所有

ハンギリは桶のこと。形や大きさは盥に似ているが、盥と区別してハンギリと呼ぶのは使用目的によってであろう。即ちハンギリは、米をほとばし、ふかした赤飯をあける等食物を入れるのに用いる。それも大量の場合である。一家のふだん用というよりは人寄せ等に多く用いられる。現在も使われる。径45.2㎝×高21.8㎝。

I—B—5　銘銘皿

水上町藤原　阿部まき所有

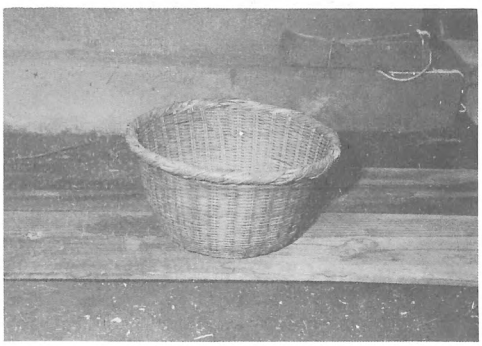
経木製のごとくごく薄く軽く、近代的な美しさもある。購入品であるが、そういう意味でとり上げた。箱書に「安永四乙未正月　明川中島松之助　此代七拾五文」とある。右下の丸い銘々皿は別のもの。

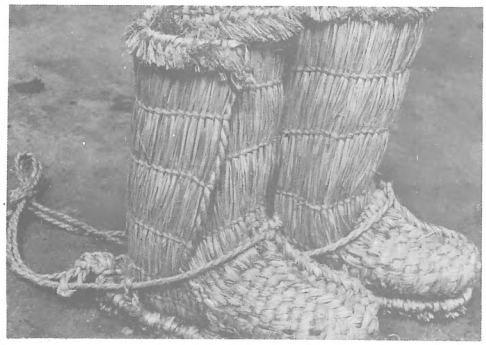


I—B—6 ミソコシザル（味噌漉笊）

根利村追貝　星野泰宏所有

もともと味噌漉笊は一定の形があるわけではない。家ごとに手ごろのものを使ったであろう。星野氏方では奉公人が常時10人くらい、養蚕時は30人も来たというので、その笊も必然的に大形のものとなった。



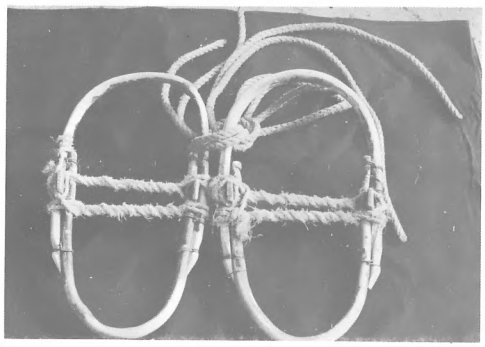


Ⅰ—A—12　カンジキ二種

イ　水上町粟沢　阿部国之輔所有

ロ　利根村砂川　根津庄治郎所有

雪の多い奥利根にはワカンジキ(イ)が多いが、雪時でない時、岩山などを通行するにはカネカンジキ（ロ）が使われる。ほかにスカリカンジキというのは、ワカンジキに網状の



イ　カンジキ

ロ　鉄材（ブタの皮の靴をはき、その上にこれをつける）

ものが張ってあり、大きい。雪中になれぬ人がはく。またこの小形のものは十二様に、山仕事の安全を祈願して供える。（水上町）

Ⅰ—B　　食

Ⅰ—B—1　ケシネビツ（褻稲櫃）

水上町平出　林　義明所有

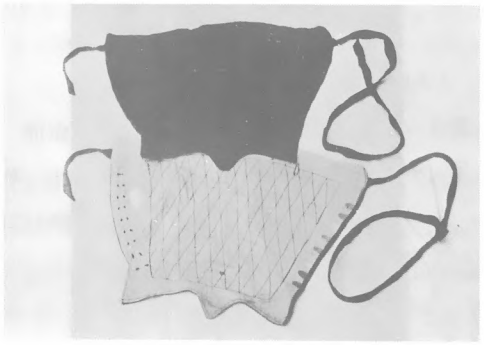
褻は晴に対するふだんを意味する。即ちふだん用の米を入れておく櫃で、林氏方で先年まで使用していたもの。長径46㎝、短径33㎝、高さ17.5㎝ある。藤原地方では、このような櫃や箱に褻稲を入れて炉端に置いておいた。なお利根郡地方ではヒツ（櫃）と呼ばれるものは同形で蓋があり、食物を入れておく。同種のものであろう。

Ⅰ—B—2　ミソオケ（味噌桶）

月夜野町後閑　増田清三所有

大きな味噌桶から小出しにして勝手元におき、日常的に使う味噌を入れておく。把手が

たが、これも、始めのころは紐で結んだ。コハゼ（小鉤）でとめるようになったのは、余程進んだ形のものである。

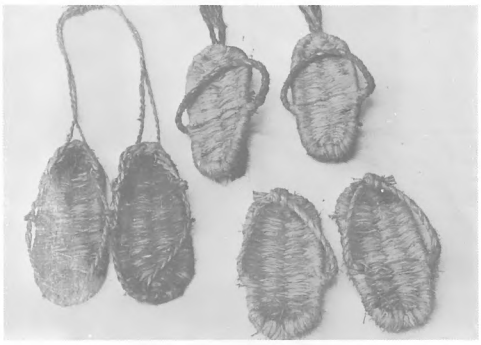


Ⅰ—A—9　ゾウリ・ワラジ

川場村立岩　戸部織衛所有

利根郡地方のゾウリは二種類。ふつうのゾウリのほか、アシナカ（またはハナムスビ）がある。いずれもわら製が多いが、ゾウリの方は竹の皮、トウモロコシの皮、その他の雑繊維を用いる場合がある。これ等の原形をとるためにノメシという道具を用いる。

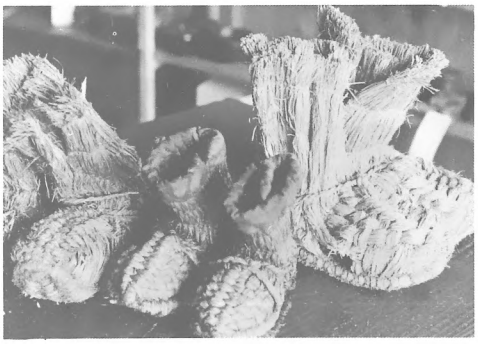
わらじには甲州わらじと越後わらじがあるという。



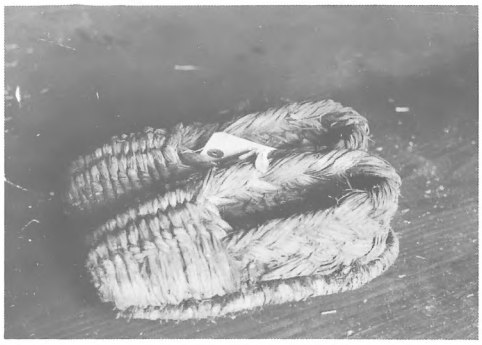
Ⅰ—A—10　ウソ・ウソグツ

川場村　川場小学校保管

ウソグツというのはホングツに対していうのであろうか。短靴と同じ形である。またこれに山沓という名称も用いられていて、岩山などを歩くには、ショックが柔かく適していた。ウソにはち（乳）がついている。乳のないものを土地によってジョウリグツ（月夜野町、水上町）ツッカケ（川場村）などと呼んでいる。



わらぐつ（各種）



ウソ（山ぐつまたウソグツ）

Ⅰ—A—11　ナガグツ（長沓）

新治村東峯須川　河井洪太郎所有

利根郡地方のわら沓には数種ある。そのうち長沓は、もちろん雪道用であるが、これを味噌ふみにも使用するのでミソフミグツともいい、またフンゴミというところ（月夜野町真沢）もある。これより脛の部分の短いホングツ（新治村）アミアゲ（水上町藤原）などがある。

Ⅰ—A—5　ミノ（蓑）

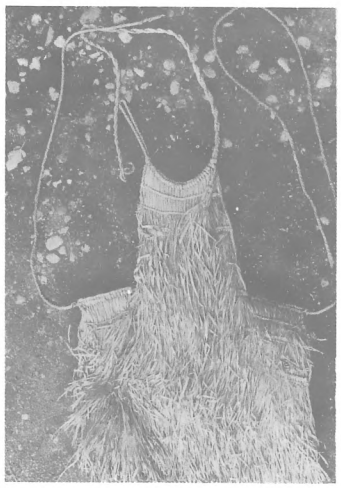
川場村立岩　戸部織衛所有

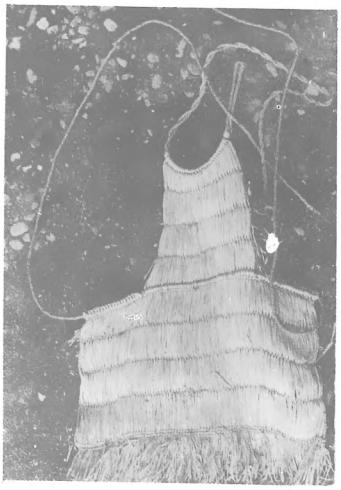
蓑はどこの町村においても着用した。とくに変ったものもない。多くは手編みか、土地の器用な人に頼んでも編んでもらった。材料は、土地によってシナ（科）ヒロロ（菅の一種）等もあるが、それ等の得にくい多くの土地ではわらのミゴの部分を使用して編んだ。

Ⅰ—A—6　メーミノ（前蓑）

新治村東峯須川　河井洪太郎所有

新治村地方では使用されたらしいが、他の町村で使われたかどうか不明。手編み。材料はヒロロと呼ぶ菅の一種。文字通り、体の前面である胸や腹の方につける。





Ⅰ—A—7　コシミノ（腰蓑）

水上町平出　林　義明所有

雪の多い水上町においてかつて使用された。シナ（科）の樹皮を使用してある。表は3段に編んであるが、裏面は5段に編んである。

Ⅰ—A—8　ハバキ（脛衣・脚絆）

川場村立岩　戸部織衛所有

古くは、わらのミゴで編んだものもあったが、現存していない。木綿で作るようになっ

I 衣　食　住

I—A　衣

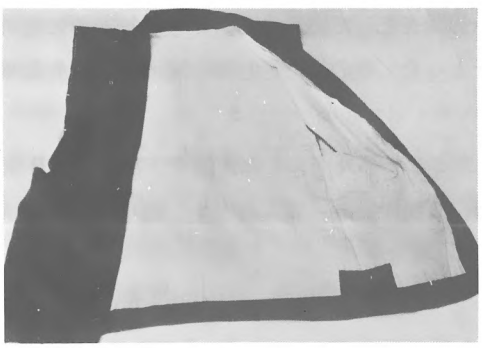
I—A—1　婦人の労働着

新治村羽場　原沢宣也夫人

同地方の通常の労働着で、頭に手拭いを被り、上衣はヤマデッポウ、下はモモヒキ、足には地下足袋をはいた。

I—A—2　ソデナシ（袖無）

川場村立岩　戸部織衛所有



I—A—3　ユキバカマ（雪袴）

水上町平出　林　　義明所有

モンペ・モモヒキ以前から現代まで奥利根地方に用いられて来た下衣。モンペのように上衣を中に入れて紐を結ぶ。その寸法・裁ち方等については「水上町の民俗」に出ている。前紐・後紐それぞれ2本の紐があって前・後において結ぶ。男女ともに用い、雪のある季節だけでなく、外出用、労働用ともに用いられる。

I—A—4　モモヒキ（股引）

川場村立岩　戸部織衛所有

股引は上部に長短2本の紐がついている。長い方を、腰をぐるっと一まわりさせて側方において短い方と結ぶ。雪袴が上衣を中に入れて結ぶのに対して、股引は上衣の内部において結ぶのが特徴である。また前者が外出にも用いられるに対して、股引はもっぱら労働用である。

かしこれとても、結果として十分とはいえない。

一例を月夜野町真沢（さなざわ）附近において竹でつくられたものには、ショウギ・ウドンアゲ・トオシカゴ・チャワンカゴ・草刈りカゴ・ザマ・ボテー（ざる）・メケイ（目籠）・キノハカゴ・繭籠・コイショイカゴ・タガラ・蚕籠等がある。これ等すべてを集中的に調査してもよかったが、実際に集まったのは、ほんの少数にすぎない。これは木製・わら製等についても、その他についても同様なことが言える。

ともかくも、自家製あるいは村内製に中心を置いた。

3） 利根郡の著しい特徴は、前記のように、積雪地帯であることである。大きな家屋構造を持つことから始まってさまざまな生活資材がそれにふさわしい形をとる。が、中でも身にまとうものは、直接に身体を雪から護るためにいろいろ工夫された。雪中を頭に被って歩くわらの帽子はすでに絶滅していて見ることができなかった。が、蓑はわらのほか岩芝・ヒロロ・シナ・藤つる等を用いた各種のものがあり、普通形の蓑のほかに腰蓑・前蓑等が確認された。わら沓に至っては、本郡の特色といってもよい。各種のものが近年まで使用されていたので、これを採録することができたのである。かんじきも、日常的に使用している。

4） 山村的特色もとくにとり上げようと努めた。生業において狩猟用具・製材用具・製炭用具等を重点としたつもりであったが、結果としては、ほとんど目的を果さなかった。かってはきじ笛・鹿笛など比較的多く見うけたのであるが、今回の調査では、一点も提出されなかった。

5） 東北・北陸地方への接点という点からいえば、運搬用具のタガラなどは新潟からの伝播であろう。またイッパイという２合５勺の枡、ケシネビツ（ケシネバコ）などは、東北と共通するものをもっている。

6） 最後に調査方法について一言しておく。1市町村の中で、有形民俗資料を豊富に所蔵している家をあげていただき、その１軒を重点的に悉皆調査をして実施する。そして補充的に他の2、3の家々の調査をする、というような方法をとった。その結果として上記のような失敗や不足があったのである。

調査は都丸十九一、池田秀夫で実施し、原稿は主として都丸が、Ⅰ衣食住を、池田が、Ⅱ生産生業、Ⅲ交通・運輸通信、Ⅳ社会生活、Ⅴ信仰、Ⅵ民族知識、Ⅶ人の一生、Ⅷ年中行事を執筆した。

今回の調査は日数が限られ、同一市町村における悉皆調査ではなかった。そのために、貴重な資料で未採録のものが多いはずである。その欠を補うものとして下記を参照していただければ幸いである。

片品村の民俗　群馬県民俗調査報告書　第１集　　白沢村の民俗　群馬県民俗調査報告書　第11集
水上町の民俗　群馬県民俗調査報告書　第13集　　各市町村誌　（都丸十九一）

有形民俗資料

はじめに

1 地域概説

利根郡・沼田市は、群馬県内においてもよく地域的に纏ったところである。総面積からいえば1,630㎢。県内第一の大郡である。水上町（528㎢）片品村（391㎢）等一村でさえ、平野部の合併前の旧郡をしのぐほどの面積をもっている。それ等町村が、利根川及びその支流の川々の流域に分れて散在するとはいえ、それ等大小の河川は、沼田盆地に注ぎ集められる。南は赤城・子持等の火山の熔岩流によって形成された綾戸の峡谷によって境される。従ってこの地域は、沼田盆地を中心として、その四周に広がる村々である。

それ等の河川の上流は、北方に聳えて上越の境に障壁をなす2,000 m前後の山脈に発する。これ等の山々は季節風をさえぎって大量の雪を落とさせる。その雪は、当然南に行くにつれて少量となるが、しかも利根郡全体――綾戸に至るまで、本県における積雪地帯とみることができる。それは本県中南部の空っ風地帯とは、その様相をよほど異にしているように観察される。

そしてまた、沼田市を除いた郡部の人口密度が35人/㎢、沼田市を加えても39人/㎢であることは、いかに人口が稀薄であるかをもの語る。そのうちでも水上町17人/㎢、片品村17人/㎢である。ということは、裏をかえせばこの地方が、大部分森林で覆われていることである。本県の森林資源の供給地であり、従って製材業や木工業、製炭業等が発達し、またかつては狩猟も盛んであって、東北のマタギの来猟もあった。農耕においても、古くカンノと呼ばれる焼畑耕作の痕跡が残り、また雑穀中心であった。が、渓流沿いのところでは、明治以降豊富な沢水をひいて、水田の開発が急速に進んだ。

利根の山懐は、深くまた広い。人々は上記のような土地に祖先以来住みついて、そこに伝承的な、自給自足に近い生活をくり広げてきた。利根の有形民俗資料が他の地域と異なり、注目すべき特色を持っているのは、上記のような風土、土地がらによるものである。が、今やその生活も大きな転換期を迎え、ほとんど一変してしまった感がある。ほとんど無限ともいえる多様な有形民俗資料は片隅に追いやられ、代って新式な近代生活資材が導入されている。

2. 観　　点

1) 民俗資料と民芸とは区別しなければならない。ここでは民芸は割愛した。同様に生活の中に入りこんで来ている工芸（刀剣・陶磁器・仏具等）などもこれを避けた。

2) 反対に人々がよりよい生活をするために工夫改善し、自作してきたものがある。その中には、他愛ないような簡単なものでも、その土地ごとの資材を十分に活用し、庶民の生活の知恵が十分うかがえるものがある。そこでその土地で製作されたものを中心にとり上げた。し

利根・沼田の文化財

昭和50年5月10日　印刷
昭和50年5月15日　発行(二版)

編集　群馬県教育委員会　文化財保護課

印刷　朝日印刷工業株式会社

発行　群馬県文化財保護協会
〒371 前橋市大手町一丁目1－1
群馬県教育委員会文化財保護課内
電話　0272－23－1111(代表)